鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）

農業開発総合センター遺跡群Ⅲ
尾ヶ原遺跡

二〇〇六年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）

── 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ ──

農業開発総合センター遺跡群Ⅲ

O G A H A R A

尾ヶ原遺跡

2006年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

尾ヶ原遺跡北から

尾ヶ原遺跡西から

尾ヶ原遺跡（古墳時代住居跡群）

小児用合口壺棺検出状況

合口壺棺（下壺920）

合口壺棺（上壺919）

序　　文

この報告書は，鹿児島県農業開発総合センター建設に伴って，平成８年度から平成15年度にかけて実施した南さつま市金峰町に所在する尾ヶ原遺跡の調査の記録です。

尾ヶ原遺跡の調査では，縄文時代早期・中期・晩期，弥生時代，古墳時代，平安時代の各時代の遺構・遺物が発見されました。

特に，縄文時代早期では，集石遺構８基，縄文時代晩期では，土掘り具と思われる打製石斧や石錘がまとまって出土する集積遺構，弥生時代中期では，須玖式土器と黒髪式土器を合わせた小児用壺棺，古墳時代では，8軒の竪穴住居跡が発見されるなど貴重な資料を得ることができました。

本報告書は，農業開発総合センター建設予定地内の遺跡の一端ではありますが，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たりご協力いただいた県農政部農業開発総合センター整備事務局，南さつま市金峰町，日置市吹上町の関係部局並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　上　今　常　雄

報　告　書　抄　録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたーいせきぐんⅢ（おがはらいせき）
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅲ（尾ヶ原遺跡）
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	8
編集者名	中村耕治・日髙正人
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL0995－48－5811
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査 期間	調査 面積 ㎡	調査 原因
尾ヶ原遺跡（おがはら）	鹿児島県（かごしまけん） 日置市（ひおきし） 金峰町（きんぽうちょう）	46－220	98	31°28′56″	130°20′51″	2001.06 ～ 2001.10	24,500㎡	農業開発総合センター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記
尾ヶ原遺跡		縄文時代 （早期） （前期） （中期） （晩期） 弥生時代 古墳時代 平安時代	 集石遺構 集積遺構・埋設土器 小児用合口壺棺 竪穴住居跡	 前平式土器・石坂式土器 深浦式土器 春日式土器 黒川式土器 須玖式土器・黒髪式土器 山之口式土器 成川式土器・須恵器 土師器	

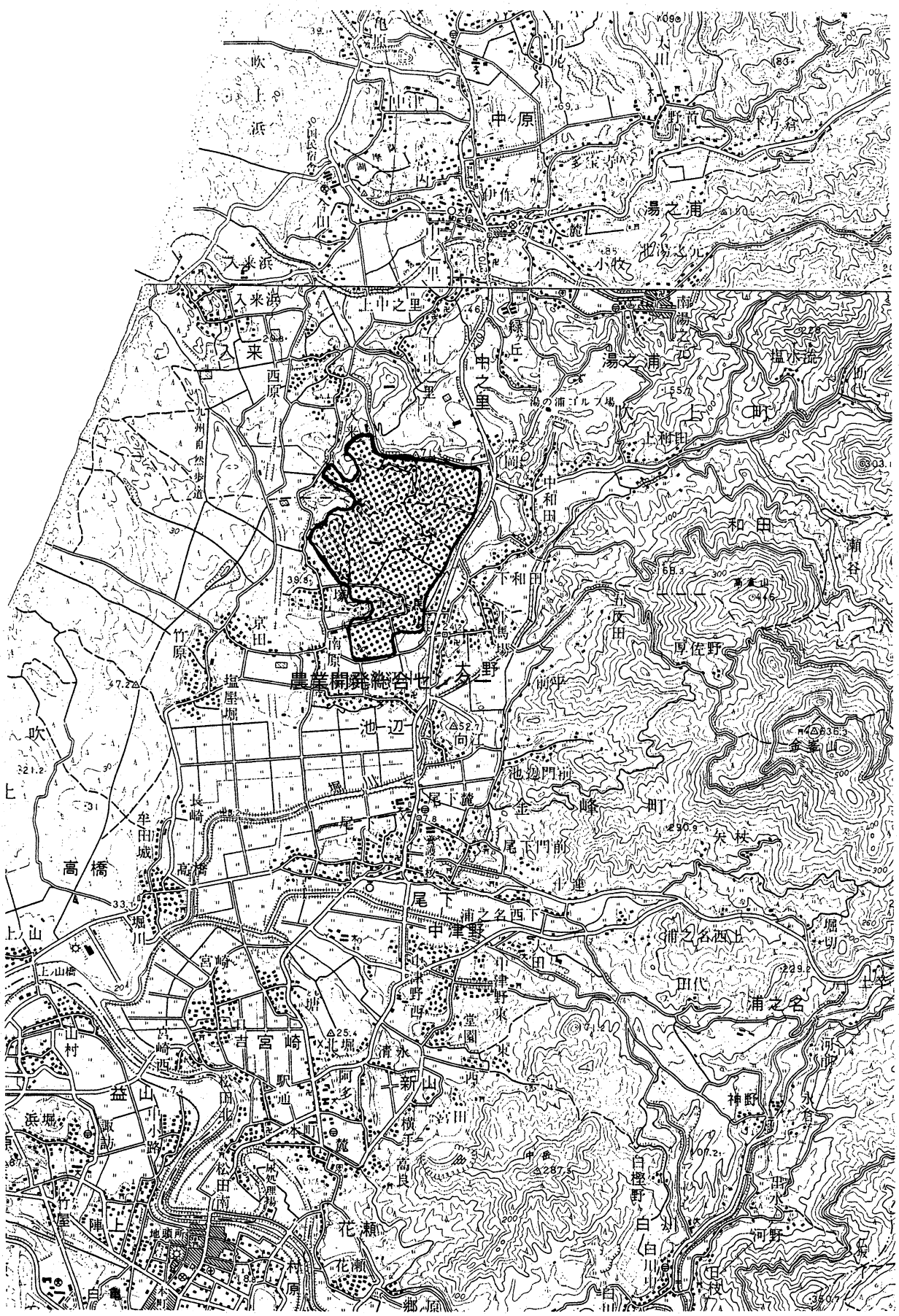
要約

尾ヶ原遺跡では，縄文時代の各時期，弥生時代，古墳時代，古代の長期にわたる遺構や遺物が発見されている。その中でも遺構や遺物の多かったのが，縄文時代早期・晩期，弥生時代，古墳時代である。

縄文時代早期では集石遺構８基が検出され，早期中葉の石坂式土器が数多く出土し，中心となっている。また，格子目押型文土器と呼ばれる独特の土器も出土している。縄文時代晩期では，埋設土器２基と打製石斧や石錘の集中区が３箇所検出されていると共に，扁平打製石斧が多いという特徴がある。

弥生時代では，遺物の出土量は少ないが，遺跡の中の高い位置において黒髪式土器と須玖式土器の小児用合口壺棺が検出され，北部九州や中九州との密接な交流があったことをうかがい知ることができる。

古墳時代では，竪穴住居跡が８軒検出された。その中には須恵器と成川式土器が共伴している住居があり，南九州に広く分布する成川式土器の年代観を考察する手掛りとなるものである。



農業開発センター遺跡群位置図（１／50,000）

例　　言

1　本報告書は，鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，平成10年度・12年度に確認調査，13年度に鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受けて，鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査主体となって本調査を実施した。

3　報告書作成事業は，平成16年度・17年度に実施した。

4　挿図番号・表番号・遺物番号については，通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。

5　遺物の縮尺は，基本的に土器は３分の１，大型石器は３分の１，小型石器は原寸とするが，縄文時代晩期と古墳時代の大型完形土器については４分の１とした。

　また，各挿図毎に縮尺を示している。

6　報告書中のレベル数値はすべて海抜高である。

7　遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが，一部は実測委託も行なった。

8　遺物復元・実測・製図等の整理作業は整理担当者及び鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また，一部の石器の実測・製図については実測委託をした。

9　本報告書の編集は，中村耕治・日髙正人が行い，藤﨑光洋・湯之前尚・山崎克之・川元禎久の協力を得た。執筆分担は以下のとおりである。また，写真撮影については西園勝彦の協力を得た。

第Ⅰ章	発掘調査の経緯	中村耕治
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	中村耕治
第Ⅲ章	層位	中村耕治
第Ⅳ章	発掘調査の概要	中村耕治
第Ⅴ章	発掘調査の成果	中村耕治・日髙正人
第１節	縄文時代の調査	日髙正人
第２節	弥生時代の調査	中村耕治
第３節	古墳時代の調査	中村耕治
第４節	古代・中世の調査	中村耕治・日髙正人
第Ⅵ章	まとめにかえて	中村耕治・日髙正人

10　遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用する計画である。

凡　　例

：　土器に付着したススの範囲

：　丹塗りの範囲

目　　次

序　　文
例　　言
凡　　例
報告書抄録
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置 …… 2
　第２節　周辺遺跡 …… 2
第Ⅲ章　層位 …… 5
第Ⅳ章　発掘調査の概要 …… 8
　第１節　発掘調査の方法及び概要 …… 8
第Ⅴ章　発掘調査の成果 …… 8
　第１節　縄文時代の調査 …… 8
　　１　縄文時代早期の調査 …… 8
　　⑴　遺構 …… 8
　　⑵　遺物（土器）…… 10
　　⑶　遺物（石器）…… 30
　　２　縄文時代前期の調査 …… 34
　　⑴　遺物（土器）…… 35
　　３　縄文時代中期・後期の調査 …… 38
　　⑴　遺物（土器）…… 38
　　４　縄文時代晩期の調査 …… 39
　　⑴　遺構 …… 39
　　⑵　遺物（土器）…… 41
　　⑶　遺物（石器）…… 57
　第２節　弥生時代の調査 …… 92
　　１　遺構 …… 92
　　２　遺物 …… 94
　第３節　古墳時代の調査 …… 98
　　１　遺構 …… 98
　　２　古墳時代の土器 …… 124
　第４節　古代・中世の調査 …… 130
　　１　遺構 …… 130
　　２　遺物…… 130
第Ⅵ章　まとめにかえて …… 138
写真図版
あとがき

挿　図　目　次

第１図　農業開発総合センター内遺跡群位置… 3
第２図　遺跡位置図（１／25,000）…… 3
第３図　周辺遺跡位置…… 4
第４図　模式柱状図…… 5
第５図　土層図…… 6
第６図　地形図及びグリッド配置図…… 7
第７図　集石遺構１号～６号…… 9
第８図　集石遺構７号・８号……10
第９図　縄文時代早期遺物出土状況……10
第10図　Ⅰ類土器……12
第11図　Ⅱ類土器……13
第12図　Ⅲ類土器……14
第13図　Ⅳ類土器１……15
第14図　Ⅳ類土器２……16
第15図　Ⅳ類土器３……17
第16図　Ⅳ類土器４……18
第17図　Ⅳ類土器５……19
第18図　Ⅳ類土器６…… 20
第19図　Ⅳ類土器７……21
第20図　Ⅳ類土器８……22
第21図　Ⅴ類土器・Ⅵ類土器……24
第22図　Ⅶ類土器……25
第23図　Ⅷ類土器１……27
第24図　Ⅷ類土器２……28
第25図　Ⅸ類土器・Ⅹ類土器……29
第26図　縄文時代早期石器１……30
第27図　縄文時代早期石器２……32
第28図　縄文時代早期石器３……33
第29図　縄文時代早期石器４……34
第30図　Ⅺ類土器……35
第31図　Ⅻ類土器……37
第32図　ⅩⅢ類土器・ⅩⅣ類土器……38
第33図　ⅩⅤ類土器……39
第34図　縄文時代晩期集石遺構……39
第35図　ⅩⅥ類土器埋設土器……40
第36図　縄文時代晩期遺物出土状況……40
第37図　ⅩⅥa類土器（深鉢形土器）…… 42
第38図　ⅩⅥb類土器（深鉢形土器）…… 43
第39図　ⅩⅥc類土器（深鉢形土器）１…… 44
第40図　ⅩⅥc類土器（深鉢形土器）２…… 45
第41図　ⅩⅥ類土器（深鉢形土器）胴部……46
第42図　ⅩⅥ類土器（中鉢形土器）……47
第43図　ⅩⅥ類土器（深鉢形土器）底部……48
第44図　ⅩⅥa類土器（浅鉢形土器）１…… 51
第45図　ⅩⅥa類土器（浅鉢形土器）２…… 52
第46図　ⅩⅥb類土器（浅鉢形土器）１…… 53
第47図　ⅩⅥc類土器（浅鉢形土器）１…… 54
第48図　ⅩⅥ類土器（浅鉢形土器）１……55
第49図　ⅩⅥ類土器（浅鉢形土器）２……56
第50図　縄文時代晩期石器１（石鏃）……58
第51図　縄文時代晩期石器２（石鏃）……59
第52図　縄文時代晩期石器３（石鏃）……60
第53図　縄文時代晩期石器４
（石匕・スクレイパー）……62
第54図　縄文時代晩期石器５
（スクレイパー）……63
第55図　縄文時代晩期石器出土状況１……64
第56図　縄文時代晩期石器出土状況２……65
第57図　縄文時代晩期石器出土状況３……66
第58図　縄文時代晩期石器出土状況４……67
第59図　縄文時代晩期石器出土状況５……68
第60図　縄文時代晩期石器６（石錘）……69
第61図　縄文時代晩期石器７（石斧）……70
第62図　縄文時代晩期石器８（石斧）……71
第63図　縄文時代晩期石器９（石斧）……72
第64図　縄文時代晩期石器10（石斧）……73
第65図　縄文時代晩期石器11（石斧）……74
第66図　縄文時代晩期石器12（石斧）……75
第67図　縄文時代晩期石器13（礫器）……77
第68図　縄文時代晩期石製錘飾・土製勾玉……78
第69図　縄文時代晩期石器14（磨石）……79
第70図　縄文時代晩期石器15（磨石）……80
第71図　縄文時代晩期石器16（磨石）……81
第72図　縄文時代晩期石器17（磨石）……82
第73図　縄文時代晩期石器18（磨石）……83
第74図　縄文時代晩期石器19（磨石）……84
第75図　縄文時代晩期石器20（磨石）……85
第76図　縄文時代晩期石器21（磨石）……86
第77図　縄文時代晩期石器22（磨石）……87
第78図　縄文時代晩期石器23（石皿）１……88

第79図　縄文時代晩期石器24（石皿）２……89
第80図　縄文時代晩期石器25（軽石製品）……90
第81図　弥生時代遺物出土状況……92
第82図　弥生時代合口壺棺……93
第83図　弥生時代土器１……95
第84図　弥生時代土器２……96
第85図　弥生時代土器３……97
第86図　弥生時代石器……98
第87図　古墳時代住居跡配置図……99
第88図　１号竪穴住居跡 ……100
第89図　１号竪穴住居跡内遺物１ ……101
第90図　１号竪穴住居跡内遺物２ ……102
第91図　１号竪穴住居跡内遺物３ ……102
第92図　２号竪穴住居跡 ……103
第93図　２号竪穴住居跡内遺物１ ……104
第94図　２号竪穴住居跡内遺物２ ……105
第95図　２号竪穴住居跡内遺物３ ……106
第96図　３号竪穴住居跡 ……106
第97図　３号竪穴住居跡 ……107
第98図　３号竪穴住居跡内遺物１ ……108
第99図　３号竪穴住居跡内遺物２ ……109
第100図　３号竪穴住居跡内遺物３ ……110
第101図　３号竪穴住居跡内遺物４ ……111
第102図　３号竪穴住居跡内遺物５ ……111
第103図　４号竪穴住居跡 ……112
第104図　４号竪穴住居跡 ……113
第105図　４号竪穴住居跡内遺物１ ……114
第106図　４号竪穴住居跡内遺物２ ……114
第107図　４号竪穴住居跡内遺物３ ……116
第108図　４号竪穴住居跡内遺物４ ……117
第109図　４号竪穴住居跡内遺物５ ……118
第110図　４号竪穴住居跡内遺物６ ……119
第111図　５号竪穴住居跡 ……120
第112図　５号竪穴住居跡内遺物１ ……121
第113図　６号竪穴住居跡 ……122
第114図　６号竪穴住居跡内遺物１ ……122
第115図　７号竪穴住居跡 ……123
第116図　８号竪穴住居跡 ……124
第117図　８号竪穴住居跡内遺物 ……125
第118図　古墳時代土器１ ……126
第119図　古墳時代土器２ ……127
第120図　古墳時代土器３ ……128
第121図　古墳時代土器４・須恵器 ……129
第122図　古代土師器１ ……131
第123図　古代土師器２ ……132
第124図　古代須恵器１ ……133
第125図　古代須恵器２ ……134
第126図　古代須恵器３ ……135
第127図　中世陶磁器 ……136

図　版　目　次

図版１－①　遺跡近景（東から）　……143
②　遺跡近景（南から）　……143
③　１号集石遺構　……143
④　２号集石遺構　……143
⑤　３号集石遺構　……143
図版２－①　４号集石遺構　……144
②　５号集石遺構　……144
③　６号集石遺構　……144
④　７号集石遺構　……144
⑤　縄文晩期集石遺構　……144
⑥　１号埋設土器　……144
⑦・⑧２号埋設土器（半裁）　……144
図版３－①・②縄文晩期土器出土状況　……145
③・④縄文晩期土器出土状況　……145
⑤　縄文晩期勾玉出土状況　……145
⑥　縄文晩期石斧出土状況　……145
⑦　縄文晩期石斧出土状況　……145
⑧　縄文晩期石錘出土状況　……145
図版４－①・②縄文晩期遺物出土状況　……146
③　弥生土器出土状況（939）……146
④　小児用壺棺検出状況……　146
⑤　小児用壺棺検出状況（上壺）　146
⑥　小児用壺棺検出状況（下壺）　146
⑦　弥生土器出土状況（946，961）
……146
⑧　古墳蓋形土器出土状況　……146
図版５－①　１号住居跡検出状況　……147
②　１号住居跡遺物出土状況　……147
③　１号住居跡土器出土状況　……147
④　１号住居跡完掘状況　……147
⑤　２号住居跡検出状況　……147
⑥　２号住居跡遺物出土状況　……147
⑦　２号住居跡完掘状況　……147
⑧　３号・４号住居跡検出状況　…147
図版６－①　３号・４号住居跡遺物出土状況
……148
②　３号・４号住居跡完掘状況　…148
③　３号住居跡土器出土状況　……148
④　３号住居跡完掘状況　……148
⑤　４号住居跡土器出土状況　……148
⑥　４号住居跡完掘状況　……148
⑦　５号住居跡土器出土状況　……148
⑧　５号住居跡完掘状況　……148
図版７－①　６号住居跡検出状況　……149
②　６号住居跡遺物出土状況　……149
③　６号住居跡完掘状況　……149
④　７号住居跡検出状況　……149
⑤　７号住居跡土器出土状況　……149
⑥　７号住居跡完掘状況　……149
⑦　８号住居跡土器出土状況　……149
⑧　８号住居跡完掘状況　……149
図版８　Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類土器　……150
図版９　Ⅳ類土器①　……151
図版10　Ⅳ類土器②　……152
図版11　Ⅶ類土器　……153
図版12　Ⅷ類土器　……154
図版13　Ⅷ類・Ⅴ類・Ⅵ類・Ⅸ類・Ⅹ類土器
……155
図版14　Ⅺ類土器表　……156
図版15　Ⅺ類土器裏　……157
図版16　Ⅻ類土器表　……158
図版17　Ⅻ類土器裏　……159
図版18　ⅩⅢ類・ⅩⅣ類・ⅩⅤ類土器　……160
図版19　ⅩⅥ類土器①　……161
図版20　ⅩⅥ類土器②　……162
図版21　ⅩⅥ類土器③　……163
図版22　縄文晩期石器①　……164
図版23　縄文晩期石器②　……165
図版24　縄文晩期石器③　……166
図版25　縄文晩期石器④　……167
図版26　縄文晩期石器⑤　……168
図版27　縄文晩期石器⑥　……169
図版28　弥生土器①　……170
図版29　弥生土器②・石器　……171
図版30　古墳住居内出土土器　……172
図版31　古墳住居内出土土器　……173
図版32　古墳住居内出土土器　……174
図版33　古代土師器　……175
図版34　古代須恵器　……176

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は，「鹿児島県総合基本計画」（平成６年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として，鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置市（吹上町大字入来・中之里・湯之浦・和田）及び南さつま市（金峰町大字大野・代表地番金峰町大野諏訪前2935－１番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は，本事業に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成８年から文化財課以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成６年11月に分布調査を実施した。その結果，事業区域内の対象面積1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて，県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果，対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし，調査は埋文センターが担当した。

確認調査は，平成８年度・９年度に実施した。確認調査の結果，24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり，建築物予定地及び圃場整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を平成15年度まで実施した。

報告書作成のための整理作業は，平成15年度からはじめて，平成16年度に日置市（旧吹上町）に所在する７遺跡の報告書を刊行した。

第２節　調査の組織

平成17年度

事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備事務局		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　長	上今　常雄
調査企画	〃	次長兼総務課長	有川　昭人
	〃	次長兼調査第一課長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼調査第一課	
	〃	第一調査係長	池畑　耕一
	〃	主任文化財主事	中村　耕治
事務担当	〃	主幹兼総務係長	平野　浩二
	〃	主　事	田之畑美幸
整理担当	〃	主任文化財主事	中村　耕治
	〃	文化財主事	藤﨑　光洋
	〃	文化財主事	湯之前　尚
	〃	文化財主事	日髙　正人
	〃	文化財主事	山崎　克之
	〃	文化財研究員	川元　禎久
整理指導	鹿児島大学	助教授	橋本　達也
	鹿児島大学	助教授	中村　直子
	鹿児島国際大学	教　授	中園　　聡

第３節　調査の経過

尾ヶ原遺跡は平成６年度の分布調査により確認されたもので，平成10年度・12年度に確認調査を実施し，縄文時代早期から古代までの遺物が出土することが判明した。

本調査は，農業大学校の飼料畑予定地の内，削平される範囲について平成13年６月～10月に実施した。

尾ヶ原遺跡では，縄文時代早期の集石遺構，晩期の埋設土器，弥生時代中期の小児用合口壺棺，古墳時代の竪穴住居跡８軒など豊富な資料が得られた。

平成13年度尾ヶ原遺跡調査経過

６月　調査区の抜根・表土剥ぎ。環境整備。

７月　Ⅲ層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡検出。縄文時代晩期遺物出土。

８月　Ⅲ層・Ⅳ層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡検出・掘下げ。縄文時代晩期埋設土器検出。

９月　Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層掘下げ。古墳時代竪穴住居跡掘下げ。弥生時代小児用合口壺棺検出・実測・掘下げ。縄文時代早期集石遺構検出。

10月　古墳時代竪穴住居跡実測。縄文時代早期集石遺構検出・実測。

11月　古墳時代竪穴住居跡実測。縄文時代早期集石遺構実測。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は，南さつま市金峰町大野と日置市吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され，敷地面積180㌶と広範囲におよぶものである。

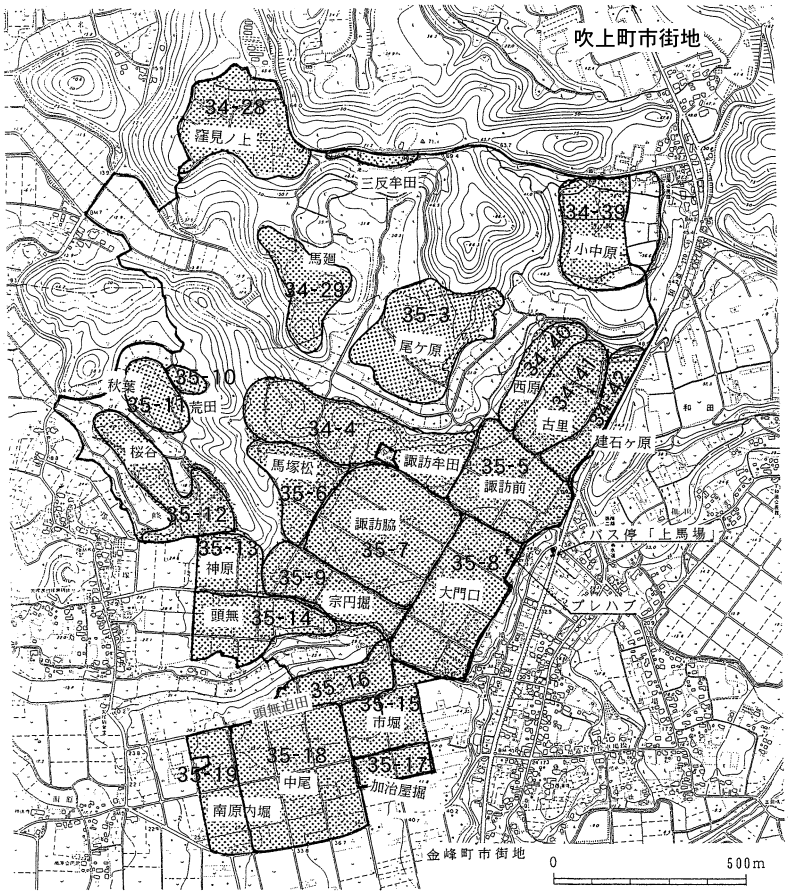
金峰町は旧日置郡の最南部を占め，北側は吹上町，東から東南部にかけては川辺町・鹿児島市，南側は万之瀬川を隔てて旧加世田市と接している。また，西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ，東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また，万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し，谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては，縄文時代の阿多貝塚，弥生時代の高橋貝塚・松木薗遺跡，古墳時代の中津野遺跡が知られているが，近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で，持躰松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

尾ヶ原遺跡は南さつま市金峰町の北端に位置し，日置市吹上町と接している。北側の標高約80mの独立丘陵から南側へと傾斜し，南側は標高約30mの平坦面が広がる。東・南・西側は谷が入り込み一種の舌状台地となっている。平坦面と谷との比高差は約５mである。谷を挟んで東側には吹上小中原遺跡，南側には諏訪牟田遺跡，西側には馬廻遺跡が存在する。

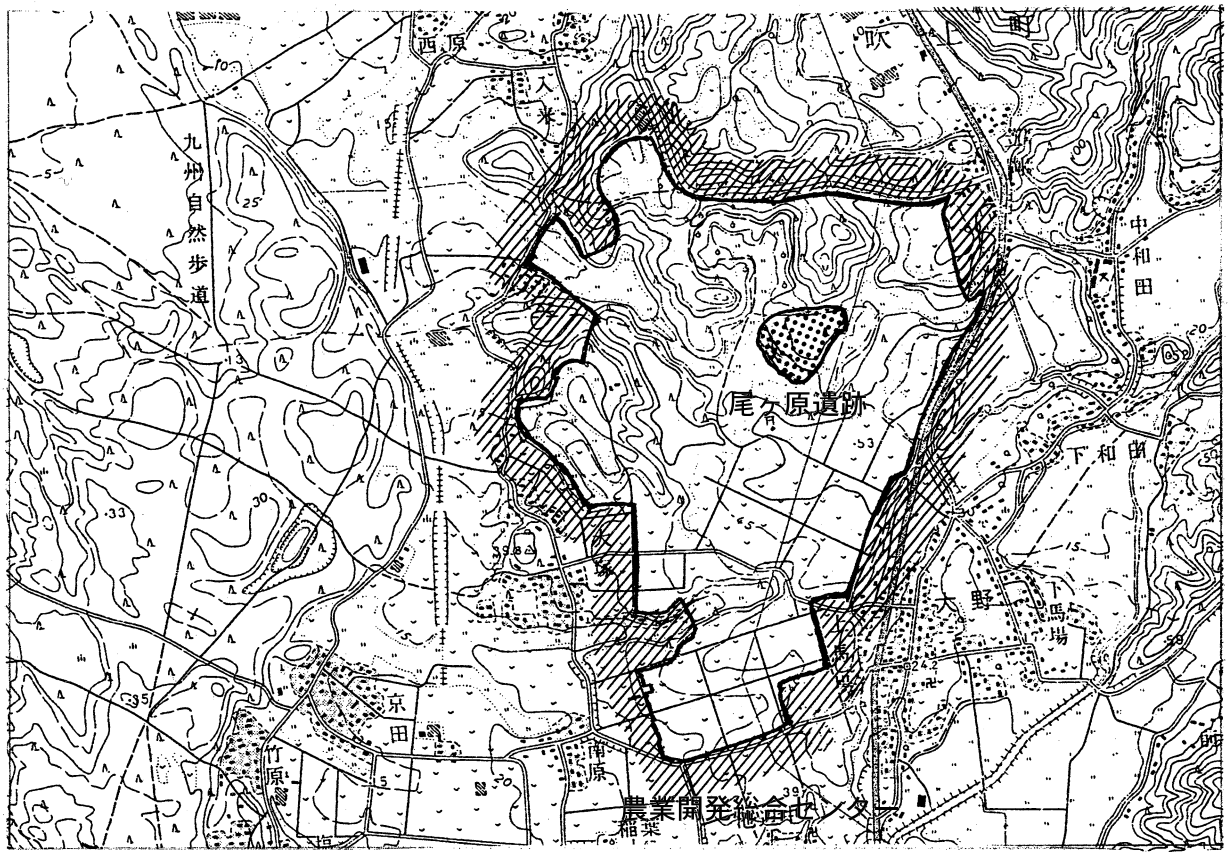
第２節　周辺遺跡

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが，大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。遺跡は大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪牟田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市堀遺跡・中尾遺跡・南原内堀遺跡・加冶屋堀遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在し，旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町は古くより発掘調査が行なわれ，県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で，人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが，現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では，縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には，南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で，籾痕の認められる土器片が出土し，早くから稲作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが，弥生時代前期の土器（高橋式）と共に籾痕のある土器片・柱状抉入石器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鎌・石包丁等が共に出土しており，稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また，貝塚を形成することや南海産のゴホウラ貝が出土することから，海洋性に富んでおり，南島と北部九州などとの中継地としての位置付けも重要視されている。下小路遺跡では，鹿児島県では数少ない合口甕棺が発見され，弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木薗遺跡は，限られた範囲の調査であるが，弥生時代後期の大溝（幅４～５m・深さ３mのＶ字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また，溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。中津野遺跡からは，弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では，持躰松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており，南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。平成16年・17年の調査では，縄文時代後期の足形土製品が



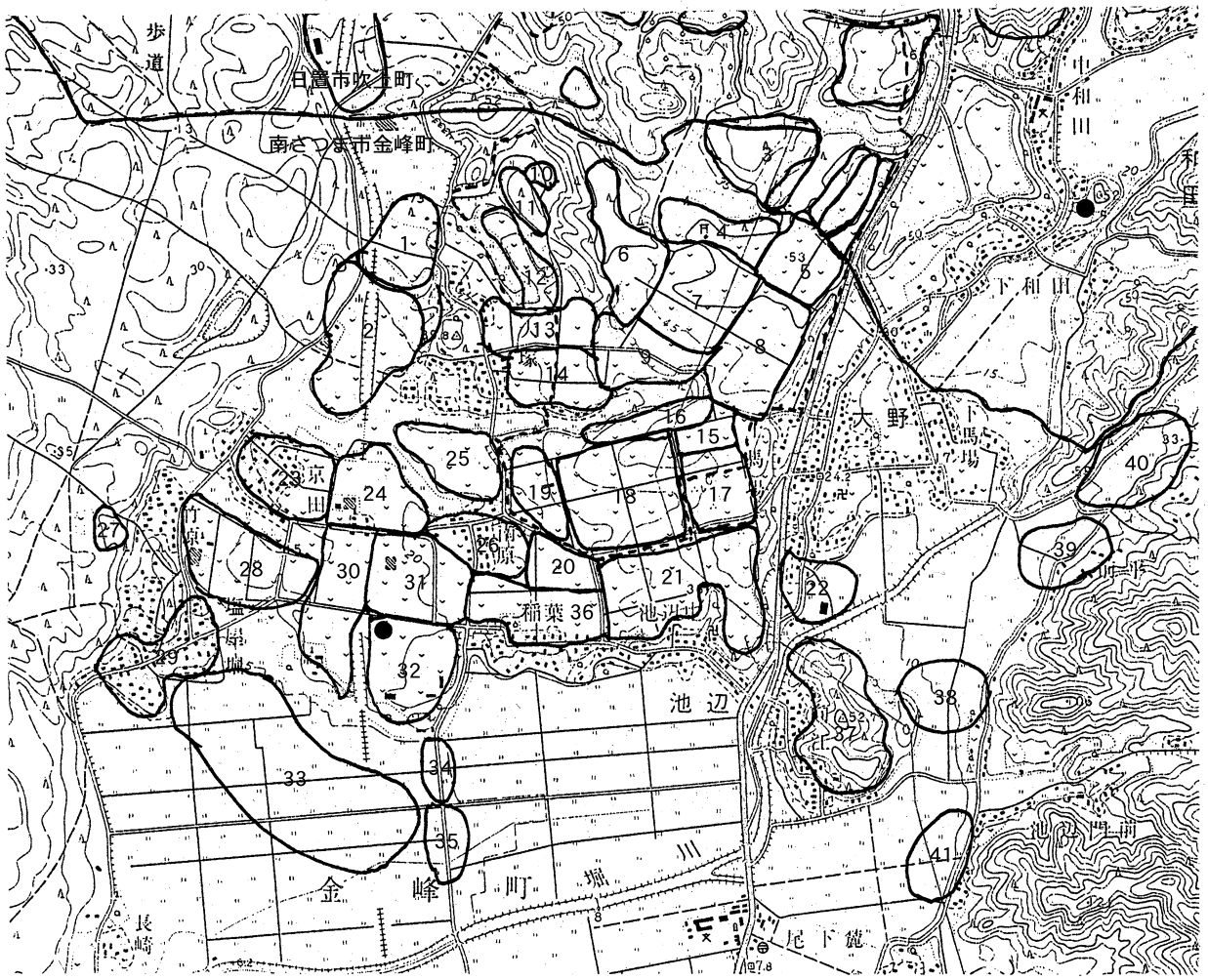
第１図　農業開発総合センター内遺跡群位置



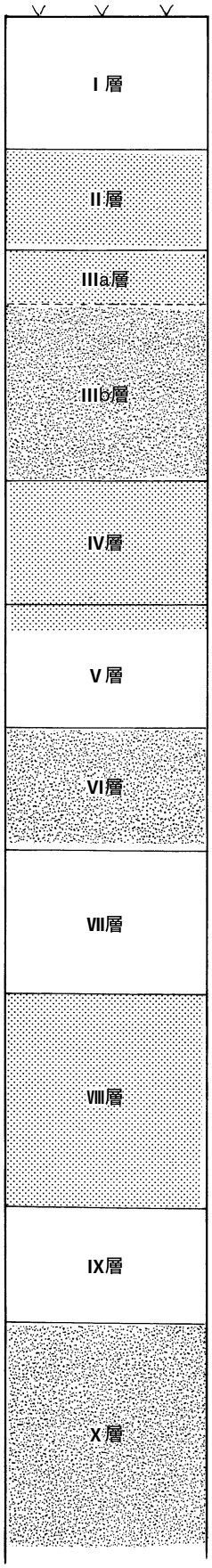
第２図　遺跡位置図（１／25,000）

遺跡地名表（金峰町）

番号	遺跡名	所在地	時　　代	番号	遺　跡　名	所在地	時　　代
1	塚山	大　野	古墳	22	寺下	大　野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原Ａ	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世	27	砂漠	池　辺	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小堀	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭堀	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塩屋堀	〃	古墳
11	秋場	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市堀	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
17	加冶屋堀	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第３図　周辺遺跡位置



第４図　模式柱状図

渡畑遺跡と芝原遺跡から出土し接合している。

第Ⅲ章　層位

農業開発総合センター予定地は，南さつま市金峰町と日置市吹上町にまたがる南北２㎞，東西1.5㎞の広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり，山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために，それぞれの地点で層位が異なっている。第４図は台地部分の標準的な地層の模式図である。また，以下の各層の説明も標準的なものである。

Ⅰ層　灰黒色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってⅡ層との区別が可能である。地点によってはａ・ｂ・ｃの３層に細分できる。Ⅰｃ層は黒色に近い色調であるが，３㎜大の白色軽石が混在している。中世末から近世初めの層である。Ⅰ層の平均的な厚さは20㎝程度であるが，圃場整備により削除されたり，盛り土されたりしており一定ではない。

Ⅱ層　黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが，谷の部分などを中心に良好に残存している。層厚10～30㎝。

Ⅲ層　黄橙色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（ＢＰ6400年）とその腐植土である。上位（Ⅲａ層）はⅡ層との漸位層であり，やや黒色を帯びる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位（Ⅲｂ層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（Ⅲｃ層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く，Ⅳ層との境目が明瞭ではない。層厚30～40㎝。

Ⅳ層　黄褐色土

Ⅲ層と類似するが，より褐色味を帯び粘質である。縄文時代早期の遺物包含層で層厚20～30㎝。

Ⅴ層　黒褐色土

硬質でよくしまる。２～３㎝大の黄橙色のパミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層で層厚30㎝。

Ⅵ層　暗黄橙色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（ＢＰ11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15㎝程度堆積している。

Ⅶ層　明茶褐色土

粘質土であるが火山灰の混入によるザラついた感触をもつ。縄文時代草創期の遺物包含層で層厚10㎝。

Ⅷ層　茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10㎝。

Ⅸ層　暗茶褐色粘質土

Ⅷ層とほとんど同じ土質であるが，Ⅷ層に比べてやや褐色土味を帯び，シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30㎝。

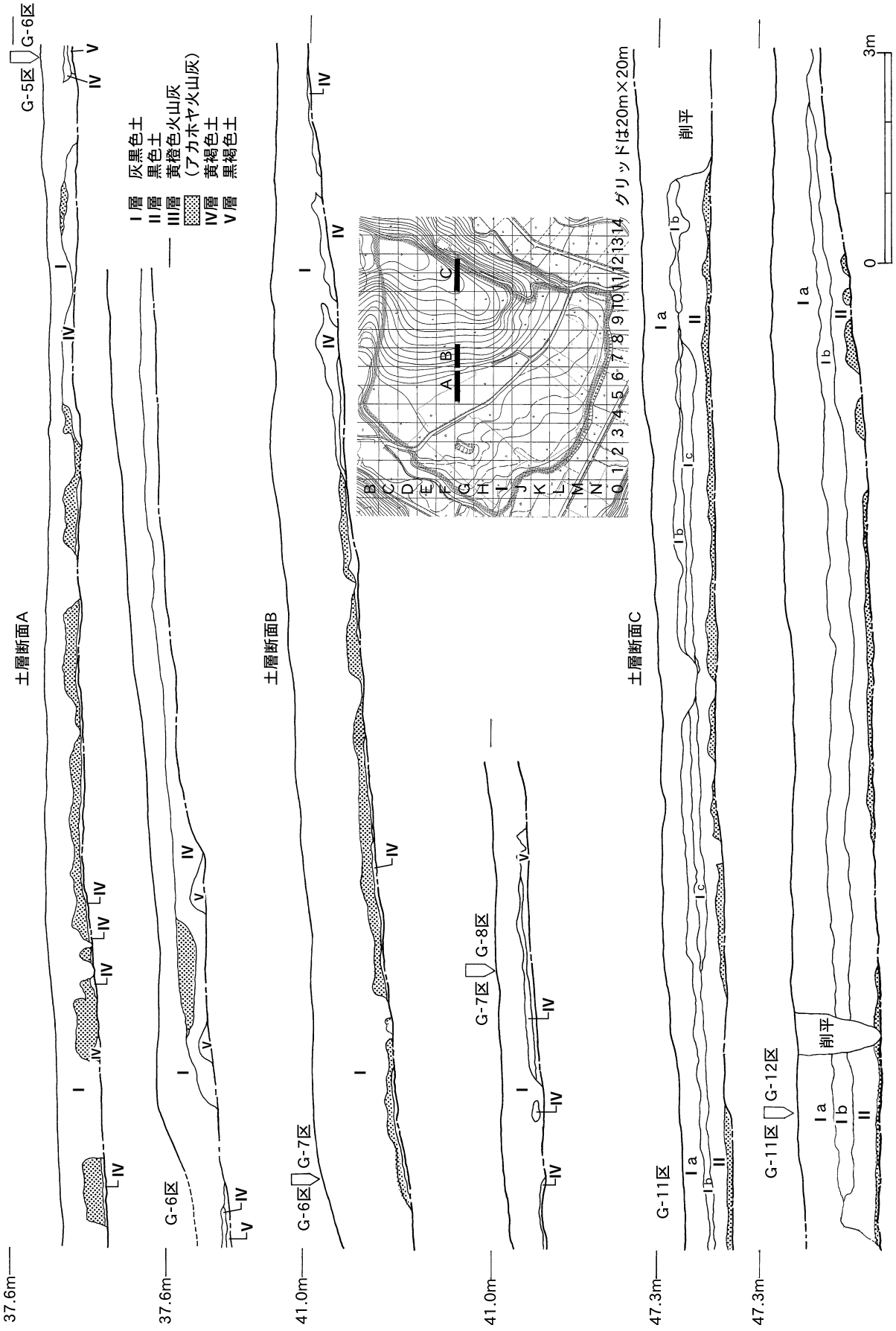
Ⅹ層　黄橙色シルト（シラス質）

シラスの腐食したもので，５㎝大の黄色軽石を含む。上位は旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80㎝。

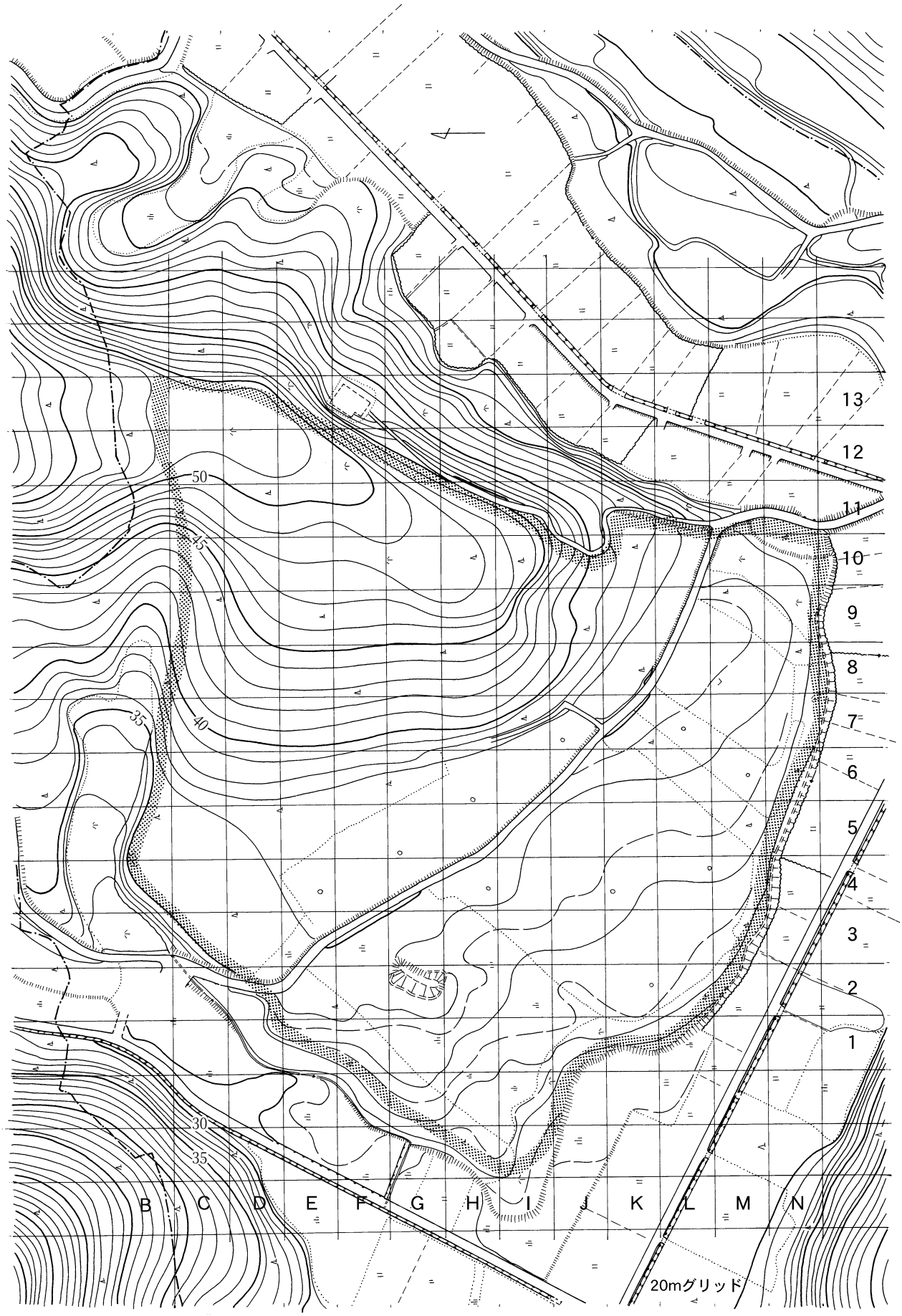
Ⅺ層　白色シラス

姶良カルデラ起源のシラス（ＢＰ24,500年）である。近辺の露頭では十数mの堆積が見られる。

尾ヶ原遺跡も標準的な地層であるが，傾斜地及び丘陵の裾部においてはⅡ層・Ⅲ層等の上層部が消失しており，表土を剥ぐと縄文時代早期の遺物包含層になる傾向がみられた。下方の平坦面においては上層からよく残り古代・古墳時代・縄文時代晩期の遺


土層断面A
土層断面B
土層断面C
G-5区
G-6区
G-7区
G-8区
G-11区
G-12区
Ⅰ層 灰黒色土
Ⅱ層 黒色土
Ⅲ層 黄橙色火山灰
（アカホヤ火山灰）
Ⅳ層 黄褐色土
Ⅴ層 黒褐色土
グリッドは20m×20m
削平
37.6m
41.0m
47.3m
0
3m

第５図　土層図



第６図　地形図及びグリッド配置図

第Ⅳ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査の方法及び概要

尾ヶ原遺跡では平成10年，12年に確認調査を実施し，縄文時代早期・晩期，弥生時代，古墳時代，古代の遺物が出土することが判明した。農業大学校の研究飼料畑の予定地であり，大がかりな整地が必要となっている所である。ただ，南側の低い平坦面においては，削平をせず現状で保存することとなった。北側の丘陵・傾斜地については削平して畑地とせざるを得ない状況で，本調査の対象となった。

調査は国土座標にあわせた20m×20mの調査範囲（グリッド）を設定して実施し，遺跡地内の北側からＡ・Ｂ・Ｃ…，西側から１・２・３…とした。

北側は山林であったため，抜根をしてから表土剥ぎを行なった。調査は，南側から北側へと進めた。

縄文時代は早期から晩期までの各時期の遺物が出土しているが，早期と晩期が主である。早期は丘陵の裾にあたる遺跡内では高い位置から出土している。遺構は集石遺構が８基検出された。土器は石坂式が主であるが，前平式・吉田式・桑ノ丸式・下剥峯式・塞ノ神式・押型文土器等豊富である。前期は曽畑式・深浦式，中期は春日式，後期は指宿式がそれぞれ出土している。晩期は黒川式土器が出土し，埋設土器２基が検出された。また，扁平打製石斧と石錘の出土量が多い点も注目される。

弥生時代は中期を中心に出土しているが出土量は多くはない。遺構は遺跡内の高い位置に黒髪式土器と須玖式土器を合わせた小児用合口壺棺が検出された。黒髪式土器など中九州（熊本県）に広く分布する土器が多く出土する特徴もみられた。

古墳時代は低い平坦面から多く出土し，竪穴住居跡も８軒検出された。２・３・４号住居からは須恵器と成川式土器が共伴して出土しており成川式土器の年代観を考える良好な資料である。

古代の遺構は柱穴らしきピットが検出されたが建物としてはとらえられなかった。遺物は土師器の甕・坏および須恵器が出土している。

第Ⅴ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代の調査

縄文時代は，早期から晩期まで各時期の遺物が出土しているが，早期と晩期が主である。

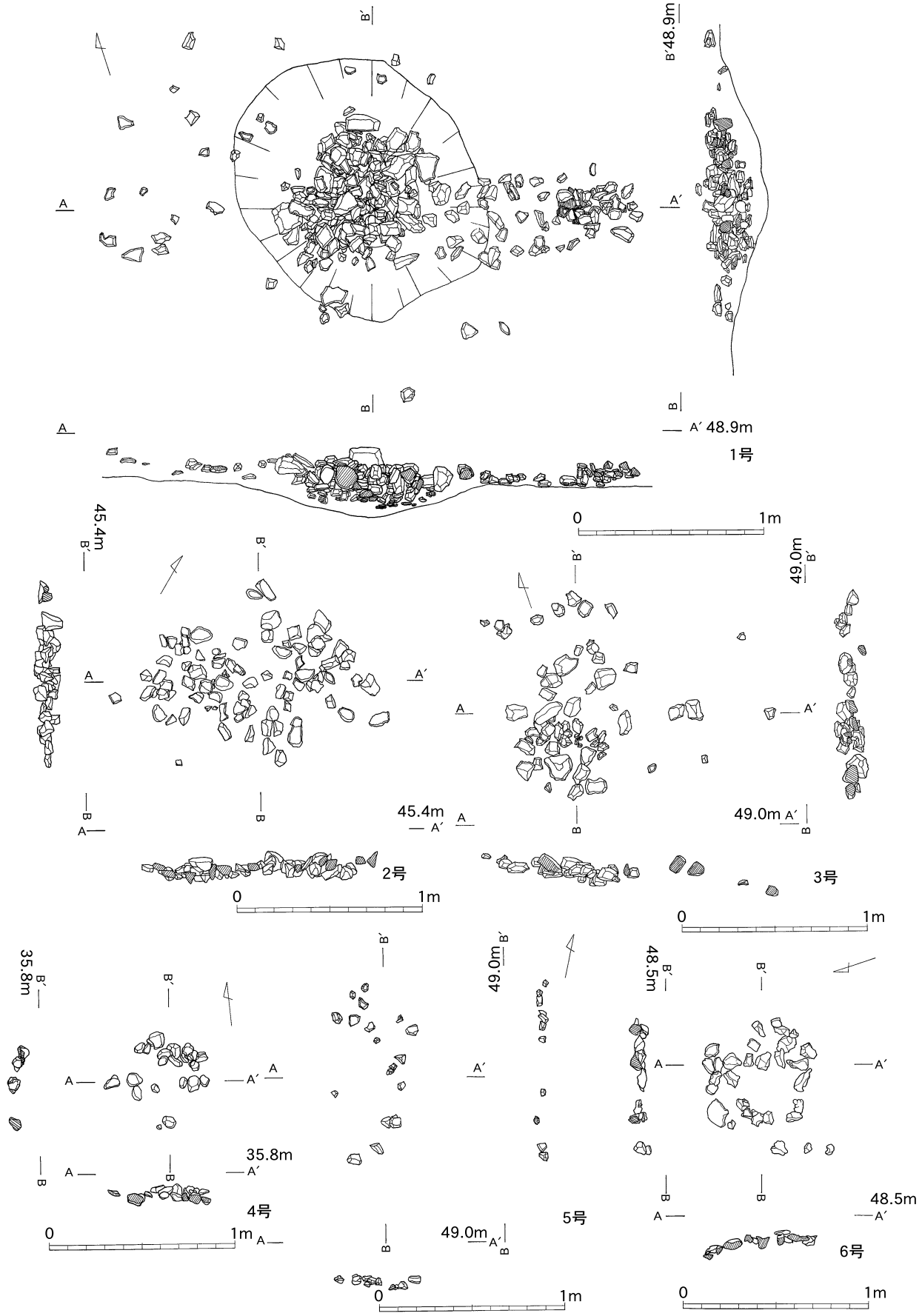
１　縄文時代早期の調査

縄文時代早期は遺跡の高い位置（Ｄ・Ｅ－５・６・７区）を中心に分布し，集石遺構も集中する。

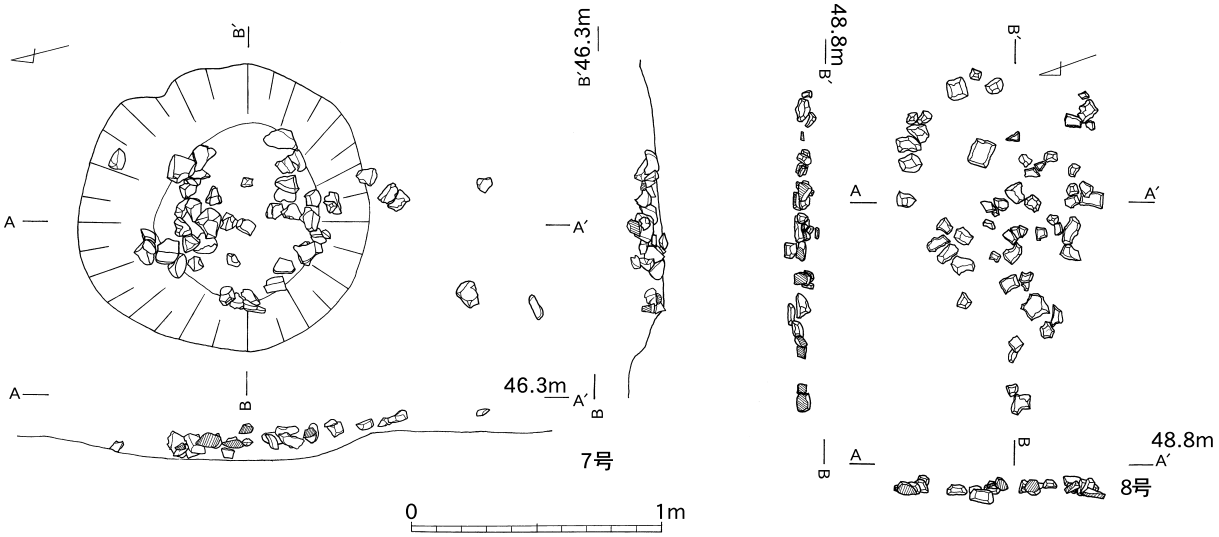
⑴　遺構（第７図～第９図）

集石遺構８基が検出されている。そのほとんどはＣ・Ｄ－12区の北側の傾斜地，南側のＧ・Ｈ－10区において検出されている。１号集石は石坂式土器を伴うが，その他は土器を伴うものはなかった。周辺からは石坂式土器や桑ノ丸式土器を中心に出土している。規模・石の大きさもまちまちである。また，掘り込みを有するものは２基である。

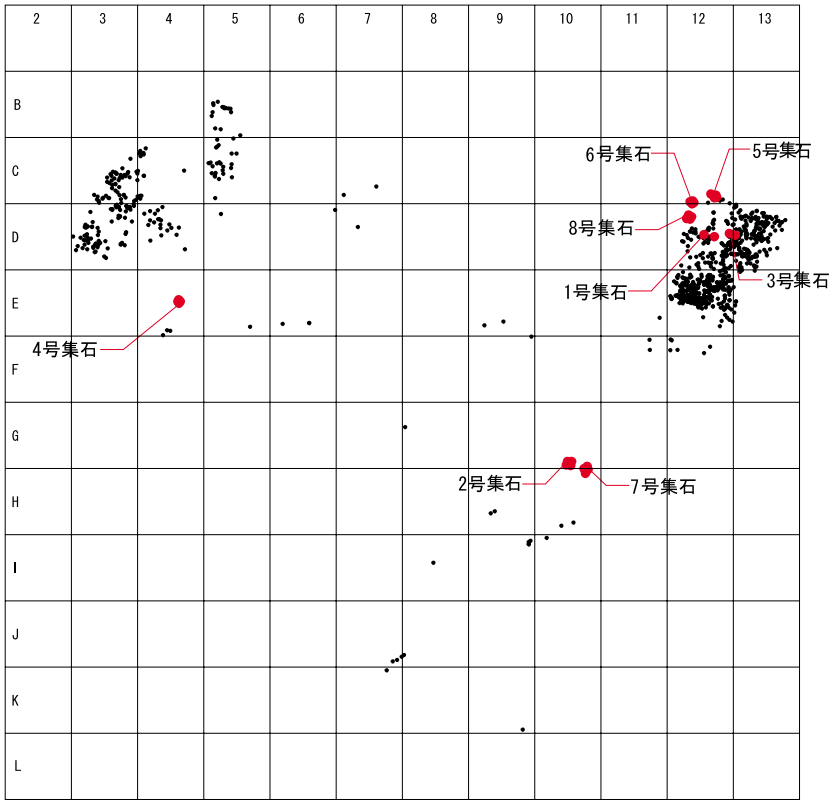
１号集石はＤ－12区で検出され，径1.3mの掘り込みを有する。東側90㎝の範囲に礫が散乱し，掻き出しの痕跡と思われる。角張った拳大の礫225個からなるが，安山岩と凝灰岩が主である。掘り込みはⅤ層まで達している。７号集石はＨ－10区で，遺跡の頂上部より一段下がった南面するテラス状の緩傾斜地において検出された。径1.2mの掘り込みを有し，南側へ数個の石を掻き出した痕跡が見られる。角張った拳大の礫51個からなるが，安山岩，凝灰岩が主である。２～６号集石は掘り込みを有しないものである。石材はいずれも安山岩と凝灰岩を主とするもので，２号集石はＧ－９・10区で検出され，91個の角礫からなる。３号集石はＤ－12区で検出され，61個の角礫からなる。４号集石はＥ－４区で検出され，24個の礫からなる。５号集石はＤ－12区で検出され，19個の礫からなる。６号集石はＤ－12区の遺跡の最頂部の北面する緩傾斜地において検出され，30個の角礫からなる。



第７図　集石遺構１号～６号



第８図　集石遺構７号・８号



第９図　縄文時代早期遺物出土状況

⑵　遺物（土器）

土器，石器とも多種多様に出土しているが，土器は，9類に分類される。また，石器は礫器，石斧，磨石など多様である。

Ⅰ類土器（第10図）

Ⅰ類土器は，口縁部は縦位ないし斜位の短い貝殻刺突文を施し，その下に貝殻刺突文を横位に廻らせ，胴部は，貝殻条痕文の上に沈線状の貝殻条痕文や刺突文などを重ねる土器である。器形は円筒形のもの

（１～13）と角筒（14～28）のものがある。１～５は，口唇部が平坦で，口縁部は直行する。口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し，胴部には，横位の条痕文に斜位や縦位の直線や流水状の条痕を施している。１と３は，口縁部の縦位の間隔のあいた貝殻押引文を施している。４は，斜位の条痕文に，貝殻の肋（ろく）を使用して1.5～1.8㎝間隔の貝殻刺突文を施している。６～13は胴部で，横位または斜位の条痕文に縦位の波状文，斜位の直線の条痕を施している。14～28は，角筒形の口縁部をもつ土器である。14～21は口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し，その下を１～２条の横位の貝殻刺突文で区画している。胴部は，横位の条痕文の上に縦位ないし斜位の波状もしくは直線の条痕を２重に施している。28は，縦位の条痕文のみで構成されている。

29は底部であるが，円形の形状からは，円筒，角筒のどちらの器形に属するかは不明である。

Ⅰ類土器

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内（A：長石　B：石英　C：角閃石）	色調 外	胎土	外面	内面	備考
10図	1	D-13	Ⅳ	黄褐	暗灰黄	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻押引文	ヘラケズリ	
	2	D-12	Ⅳ	褐	黒褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻押引文	ヘラケズリ	
	3	D-12	Ⅳ	にぶい黄	浅黄	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	4	E-12	Ⅳ	褐	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	5	E-12	Ⅳ	暗褐	黒褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	6	D-13	Ⅳ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	7	D-13	Ⅳ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	8	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	9	E-12	Ⅳ	にぶい褐	黒	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	10	E-12	Ⅳ	黒褐	浅黄	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	11	D-12	Ⅳ	黒褐	にぶい褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	12	D-13	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	13	D-13	Ⅳ	褐	にぶい褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	14	D-12	Ⅳ	黒褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	15	D-12	Ⅳ	黒褐	暗褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
10図	16	D-13	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	17	D-12	Ⅳ	黄灰	暗灰黄	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	18	D-13	Ⅳ	暗オリーブ褐	黒褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	19	L-9	Ⅳ	にぶい黄橙	灰黄褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	20	E-12	Ⅳ	灰褐	灰黄褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	21	D-13	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	22	D-13	Ⅳ	にぶい黄橙	灰黄褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	23	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	24	G-6	Ⅲ	橙	にぶい橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	25	E-12	Ⅳ	灰黄褐	明赤褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	26	K-8	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	27	E-12	Ⅳ	黒	橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	28	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	29	E-12	Ⅳ	黒褐	浅黄	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	

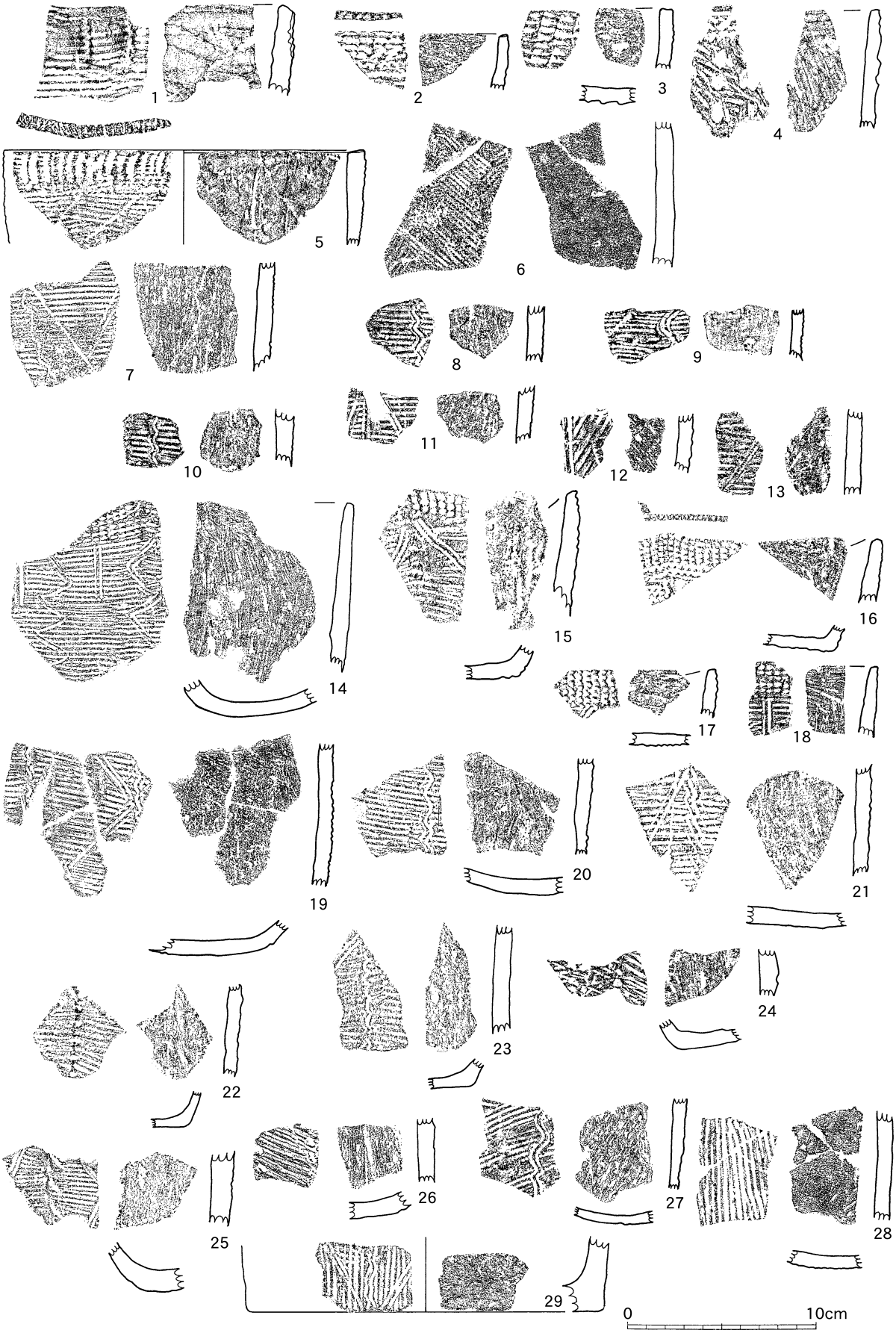
Ⅱ類土器（第11図）

Ⅱ類土器は，平坦な口唇部に刻目を有し，口縁部に貝殻刺突文を横位または斜位に施すものである。個体によって楔形の貼付文の有無がある。また，胴部は貝殻刺突による施文のある土器である。

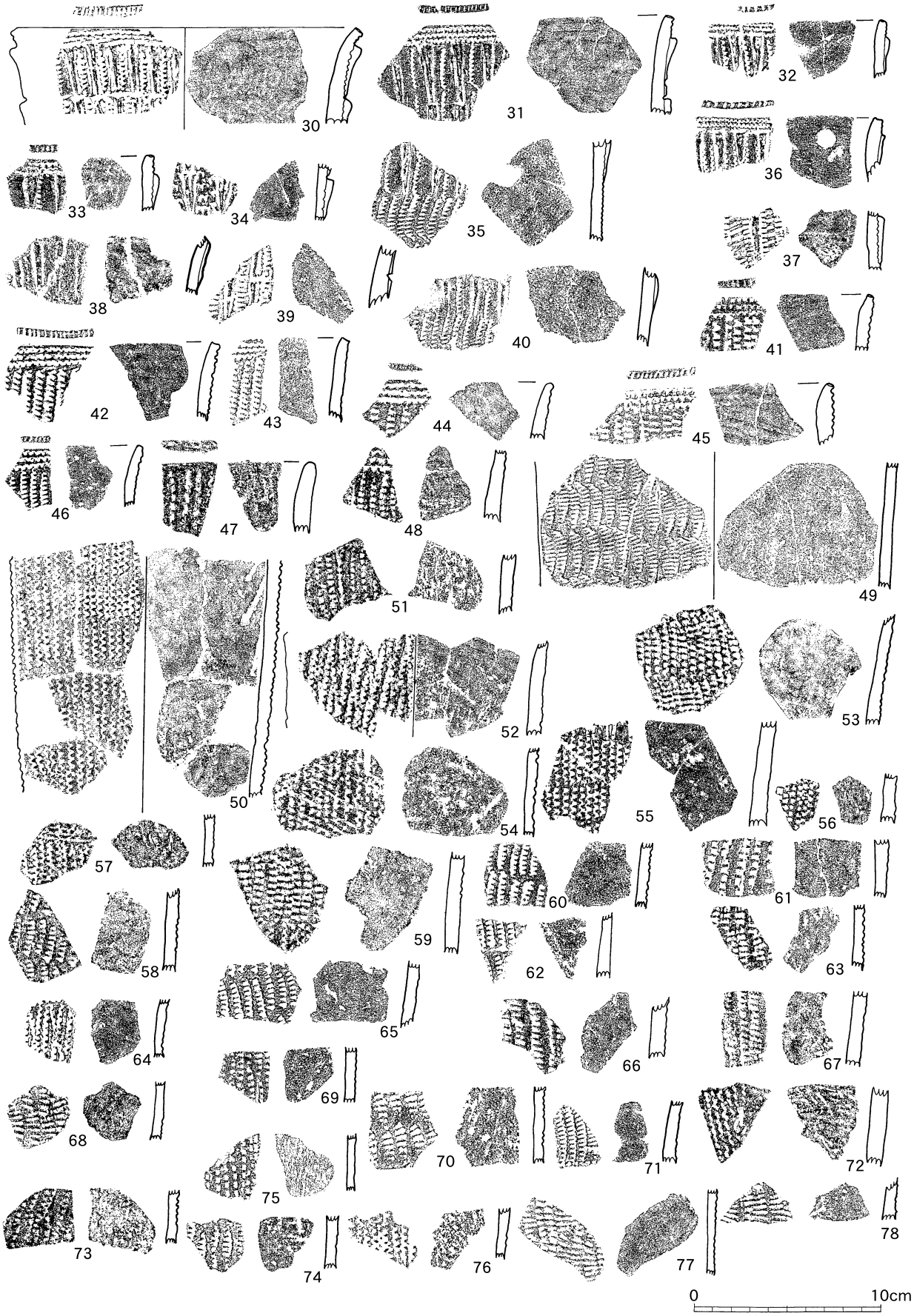
30～48は口縁部である。その内30～40は楔形の貼付文をもつ。口縁部に横位の貝殻刺突文を２～３条施し，下位に楔形の貼付文を施している。32は，内面に補修孔の穿孔途中のものがある。41～48は，楔形の貼付文のないもので，縦位の貝殻刺突文を施している。48～77は胴部である。主に，縦位の貝殻刺突文を施す。52・64・73は，縦位の施文に斜位の刺突文を重ねている。

Ⅱ類土器

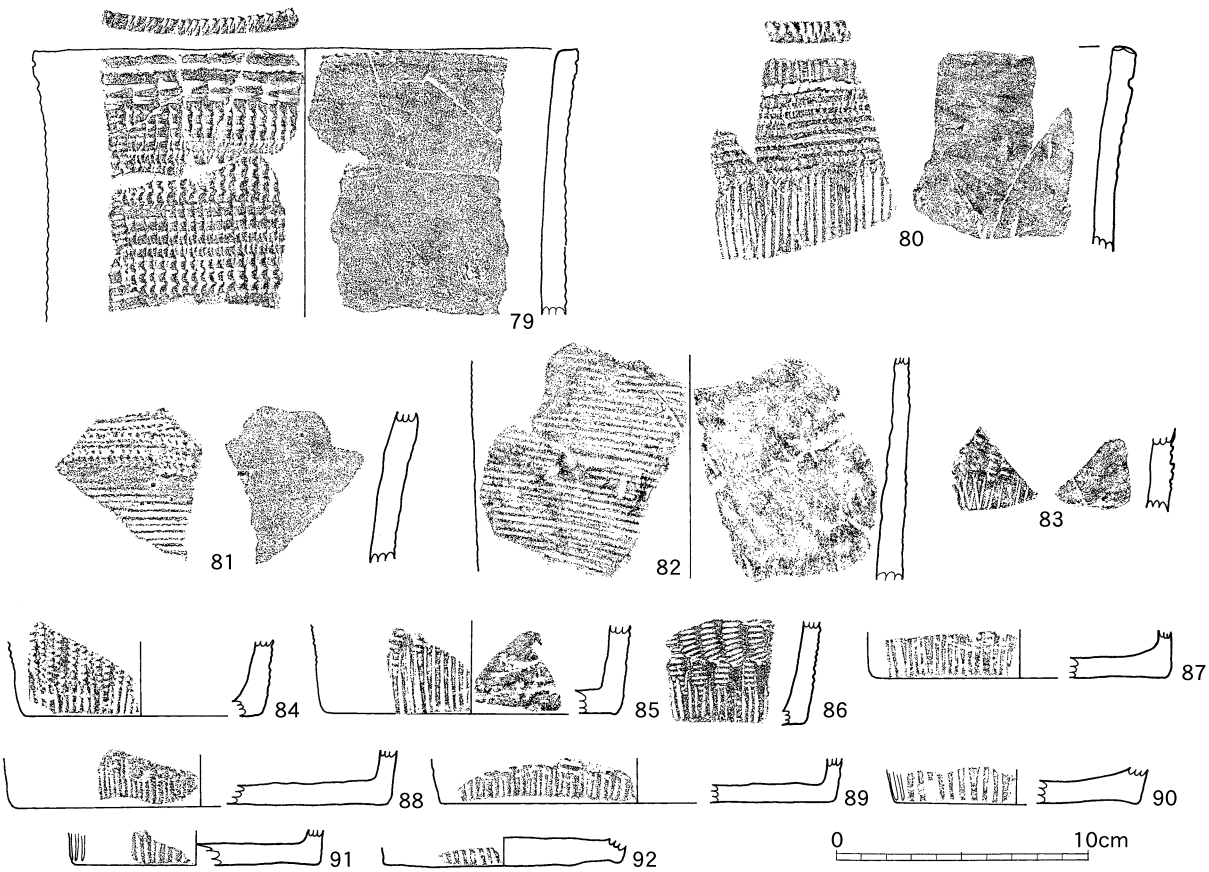
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内（A：長石　B：石英　C：角閃石）	色調 外	胎土	外面	内面	備考
11図	30	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラケズリ	
	31	C-12	Ⅳ	赤褐	赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	32	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	33	E-12	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	34	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	35	E-13	Ⅳ	橙	明赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	36	D-12	Ⅳ	にぶい黄褐	黒褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	補修孔
	37	D-13	Ⅳ	橙	橙	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラケズリ	
	38	D-12	Ⅳ	にぶい褐	褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラケズリ	
	39	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラミガキ	
	40	E-12	Ⅳ	明赤褐	赤褐	A.B	貝殻刺突文，くさび形文	ヘラケズリ	
	41	D-12	Ⅳ	橙	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	42	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	43	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	44	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	45	E-12	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ後ナデ	
	46	D-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	47	C-7	Ⅳ	橙	赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	48	E-12	Ⅳ	赤褐	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	49	E-12	Ⅳ	赤褐	赤褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	
	50	D-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	51	E-12	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	52	D-12	Ⅳ	褐灰	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	53	D-12	Ⅳ	にぶい褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	54	D-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
11図	55	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	56	D-12	Ⅳ	橙	明赤褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	57	D-12	Ⅳ	褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	58	E-12	Ⅳ	橙	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	59	D-12	Ⅳ	橙	橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	60	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	61	E-12	Ⅳ	褐	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	62	E-12	Ⅳ	暗赤褐	黒褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	63	C-4	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	
	64	D-12	Ⅳ	暗灰黄	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	65	E-11	Ⅳ	褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	66	E-12	Ⅳ	灰	にぶい黄	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	67	E-12	Ⅳ	にぶい橙	灰黄	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	
	68	D-12	Ⅳ	灰黄褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	
	69	D-13	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	70	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラケズリ	
	71	E-12	Ⅳ	にぶい褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	72	D-3	Ⅲ	灰黄褐	橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	73	D-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	74	D-12	Ⅳ	にぶい褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	75	E-12	Ⅳ	暗灰黄	浅黄	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	76	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	77	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	暗赤褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	
	78	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	灰褐	A.B	貝殻押圧文	ヘラミガキ	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

第10図　Ⅰ類土器


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
10cm

第11図　Ⅱ類土器



第12図　Ⅲ類土器

Ⅲ類土器（第12図）

Ⅲ類土器は，口縁部が円筒形で外反し，口唇部には平坦面を有する。口縁部には横位の貝殻刺突文が廻り，その下には楔形貼付文が密接に施されるものや緻密な貝殻刺突文を施すことで楔状を呈する。胴部には，横位の貝殻押引文を施している土器である。

79・80は口縁部で，80は口縁部に短い縦位の貝殻刺突文の下位に，深い貝殻刺突文を廻らせることで太い沈線文を施しているようになっている。

81～83は胴部である。83は底部に近い胴部で，下部に沈線を廻らせている。84～92は底部である。底部は縦の条痕文だけであることから，明確に判断のできないものもある。84～87は，縦位の貝殻刺突文や貝殻押圧文に縦の条痕を重ねていることからⅡ類・Ⅲ類の底部である。

Ⅲ類土器

				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
12図	79	B-5	Ⅳ	灰黄褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文，貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	80	D-12	Ⅳ	明赤褐	褐	A.B	貝殻刺突文，貝殻押引文，貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	81	D-12	Ⅳ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻押引文	ヘラケズリ	
	82	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	83	E-12	Ⅳ	灰黄褐	橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	84	E-12	Ⅳ	赤褐	赤褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	85	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	

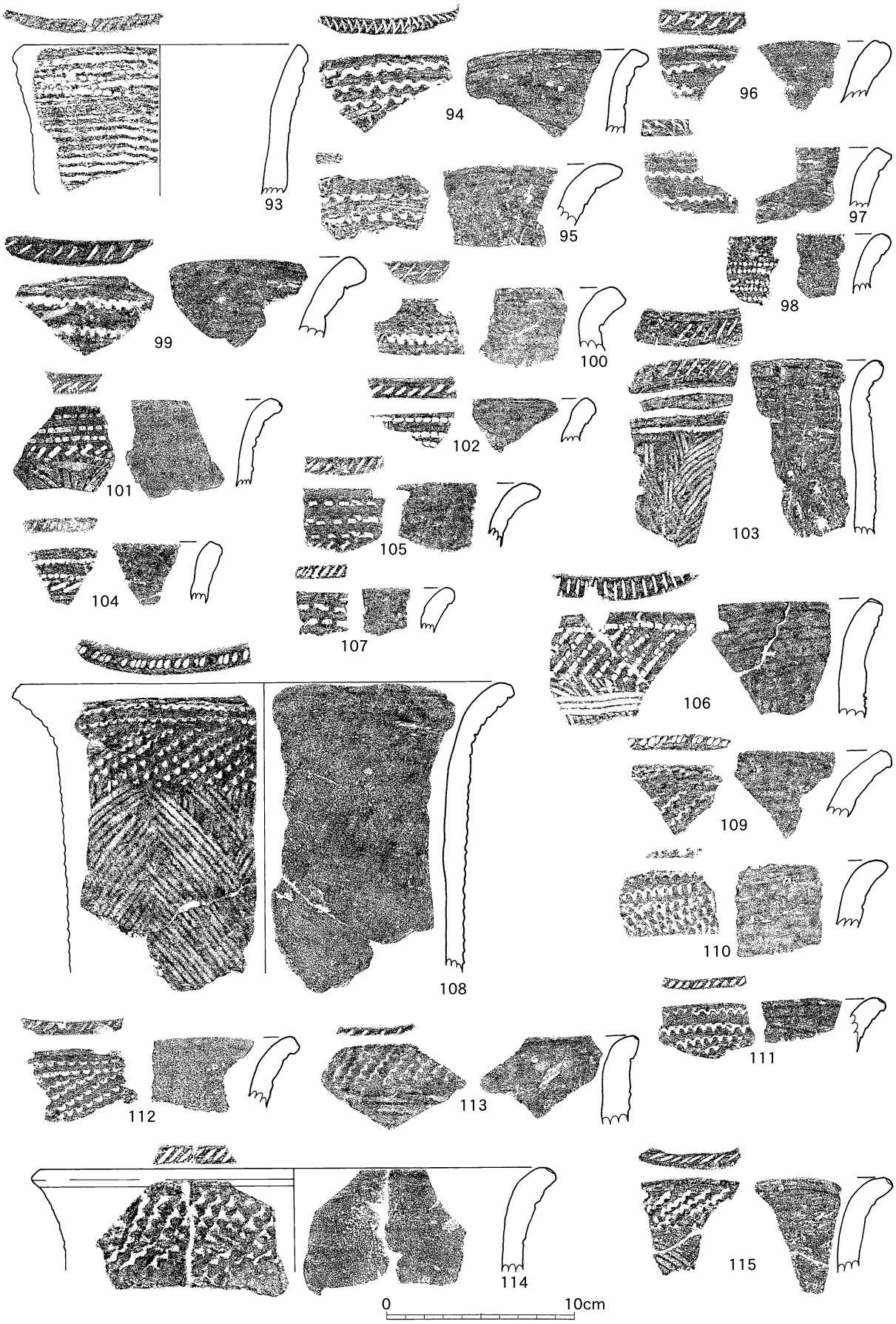
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
12図	86	E-12	Ⅳ	明赤褐	橙	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文，ナデ	ヘラケズリ	
	87	D-12	Ⅳ	橙	にぶい橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	88	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	89	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	90	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	91	D-12	Ⅳ	橙	橙	A.B	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	92	D-12	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	

Ⅳ類土器（第13図～21図）

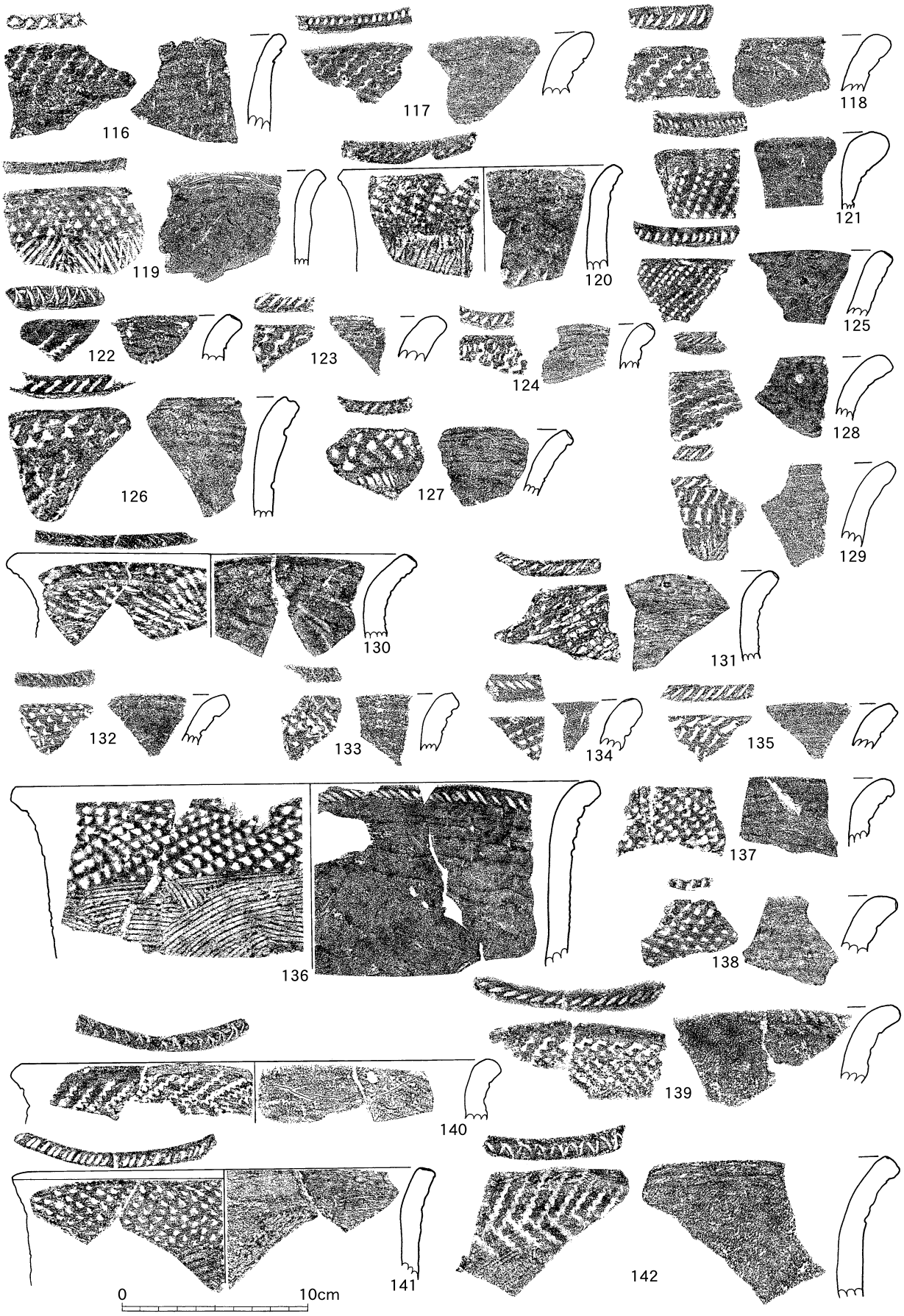
Ⅳ類土器は口縁部が外反し，口唇部に刻目を有する。口縁部に貝殻刺突文が廻り，胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施されている土器である。

93は胴部の調整が綾杉状の調整ではなく，貝殻条痕文を横位に廻らしている。また，口唇部の形状も内面に稜を有することから，Ⅳ類土器よりも古い時期の可能性が高い。

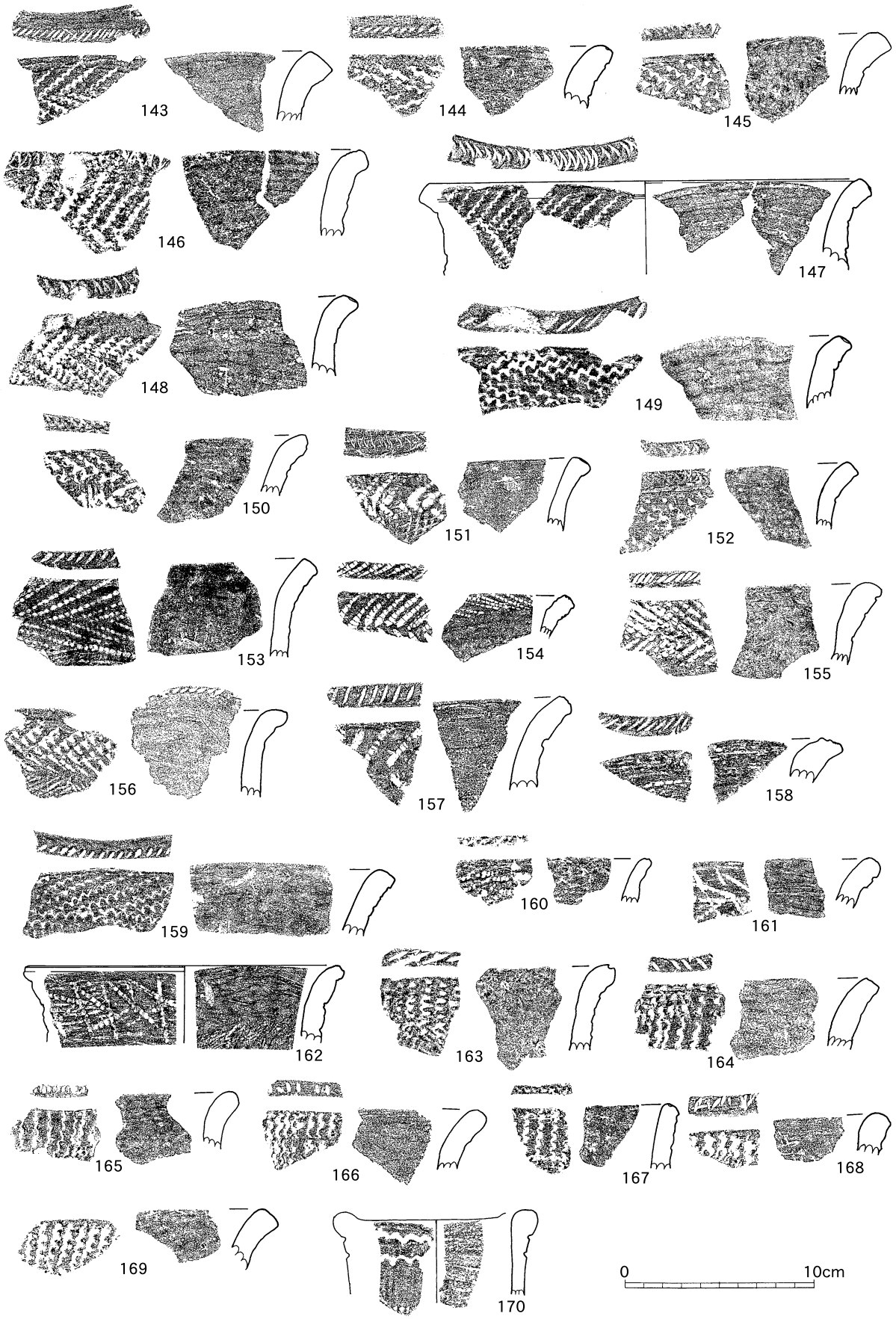
94～181は口縁部である。94～102は口縁部に横位の刺突文を廻らしている。口唇部は平坦で刻目がみられる。94の刻目は鋸歯状に施されている。98には刻目がみられない。胴部には綾杉状の条痕文が施されている。102～106は口縁部に横位の貝殻刺突文が施され，その直下に二枚貝の肋を用いて，貝殻刺突


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
10cm

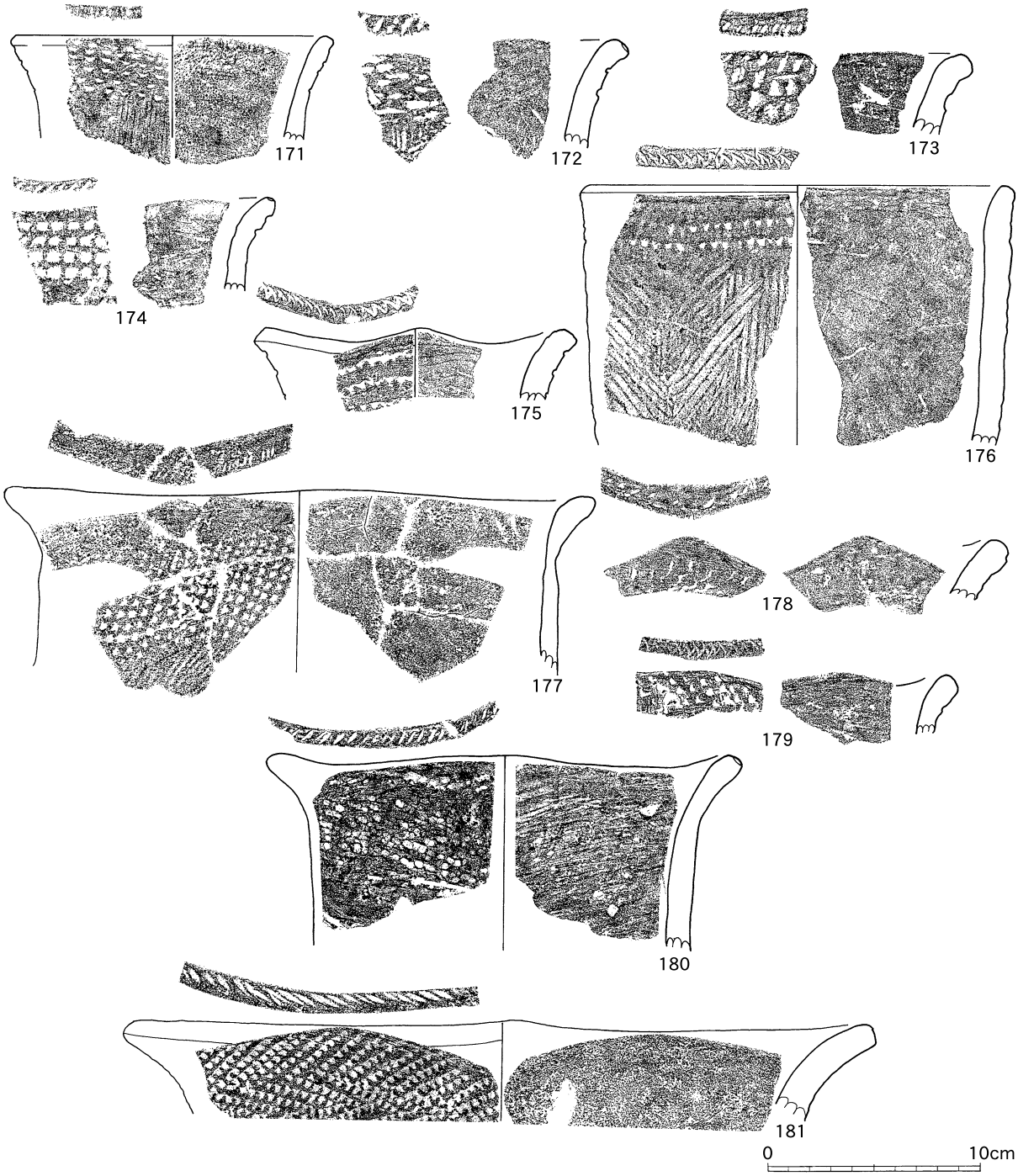
第13図　Ⅳ類土器１


116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
0
10cm

第14図　Ⅳ類土器２


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
0
10cm

第15図　Ⅳ類土器３

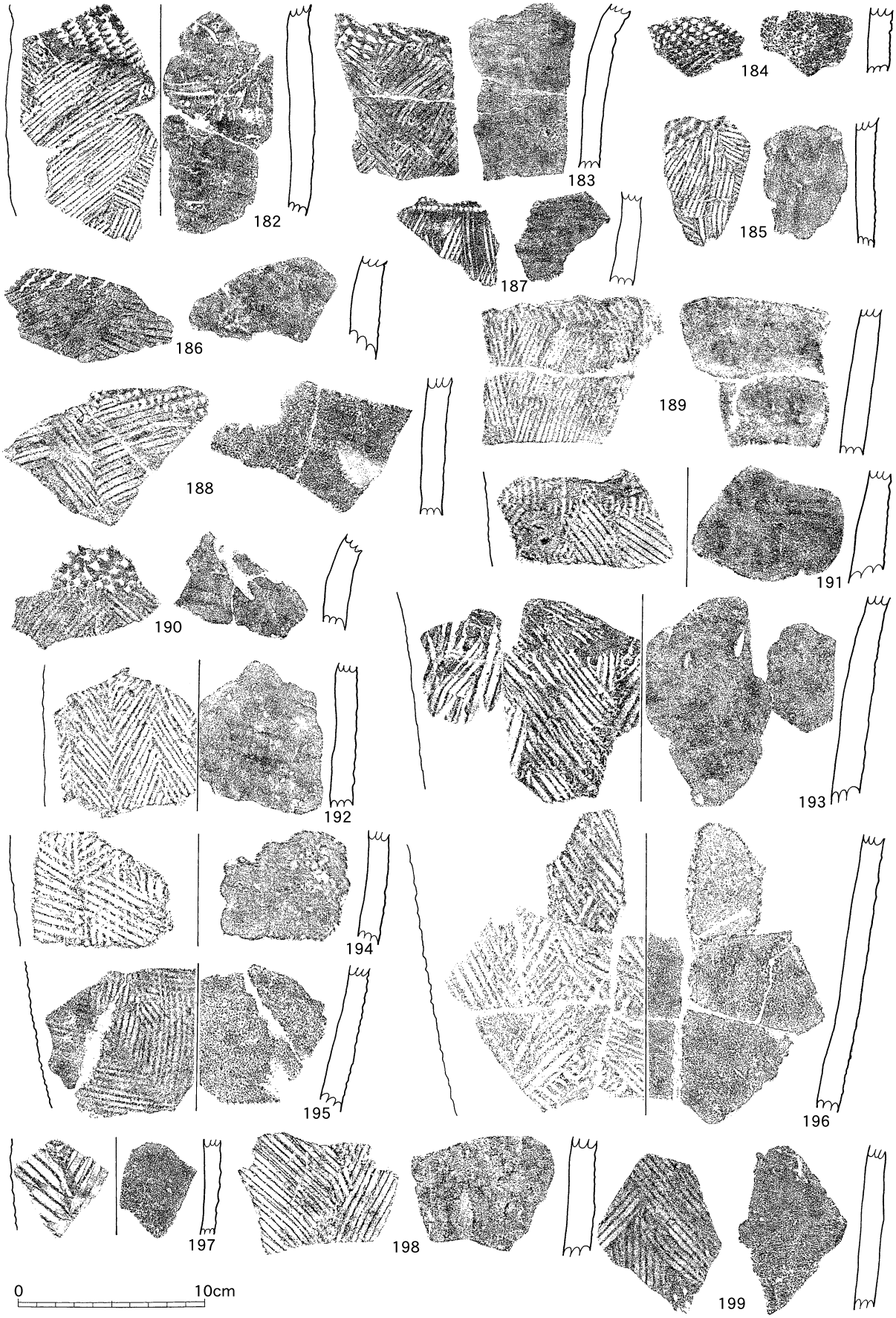


第16図　Ⅳ類土器４

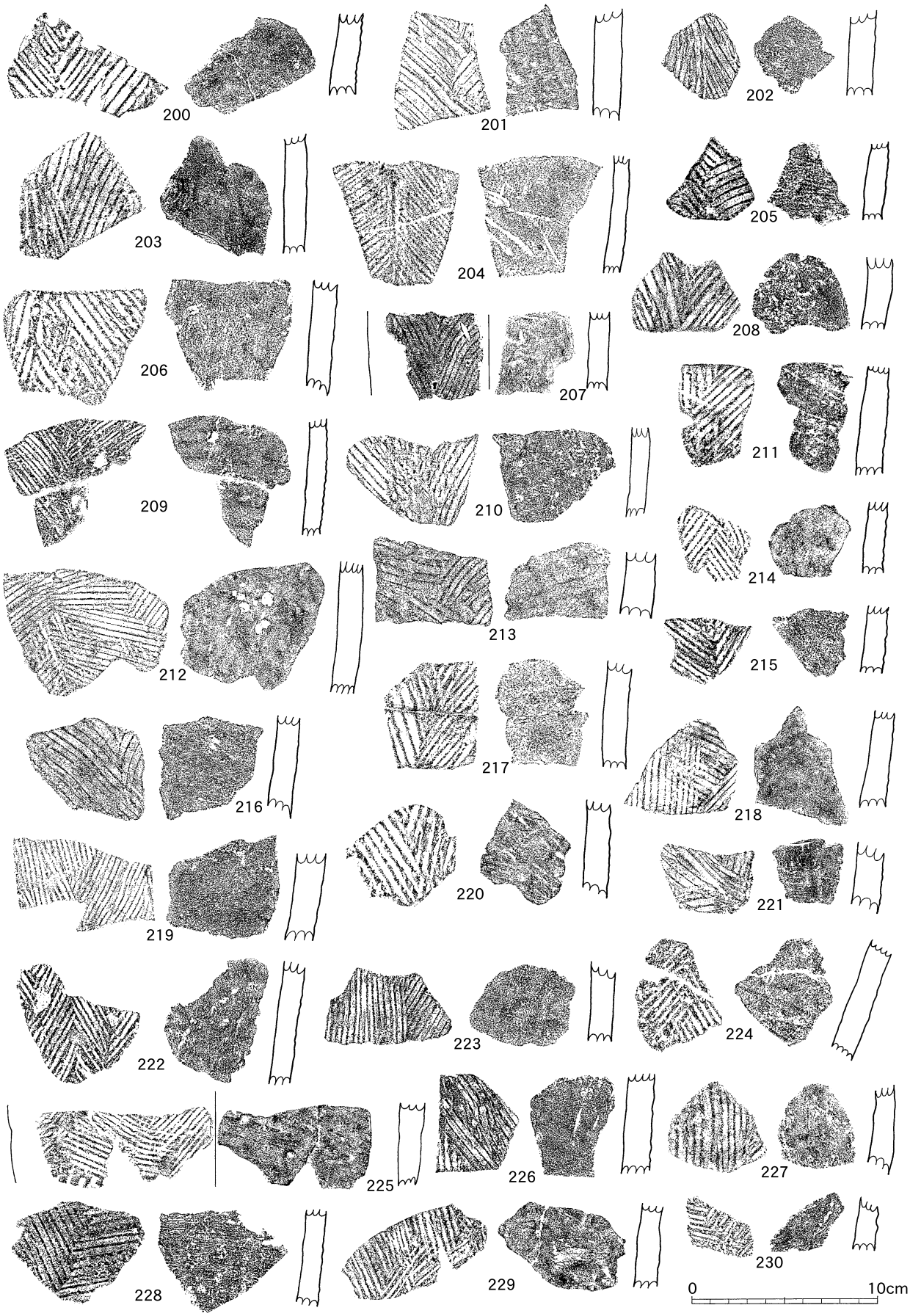
状の方形刺突文を施している。105は貝殻刺突文の下部の刻目がはっきりしないが，107と同一個体の可能性がある。

107～112は横位の貝殻刺突文の下に斜位の貝殻刺突文を施している。胴部が残存しているものは貝殻条痕文により器面調整している。113～135は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施している。132・133は口唇部に鋸歯状の刻目がみられる。

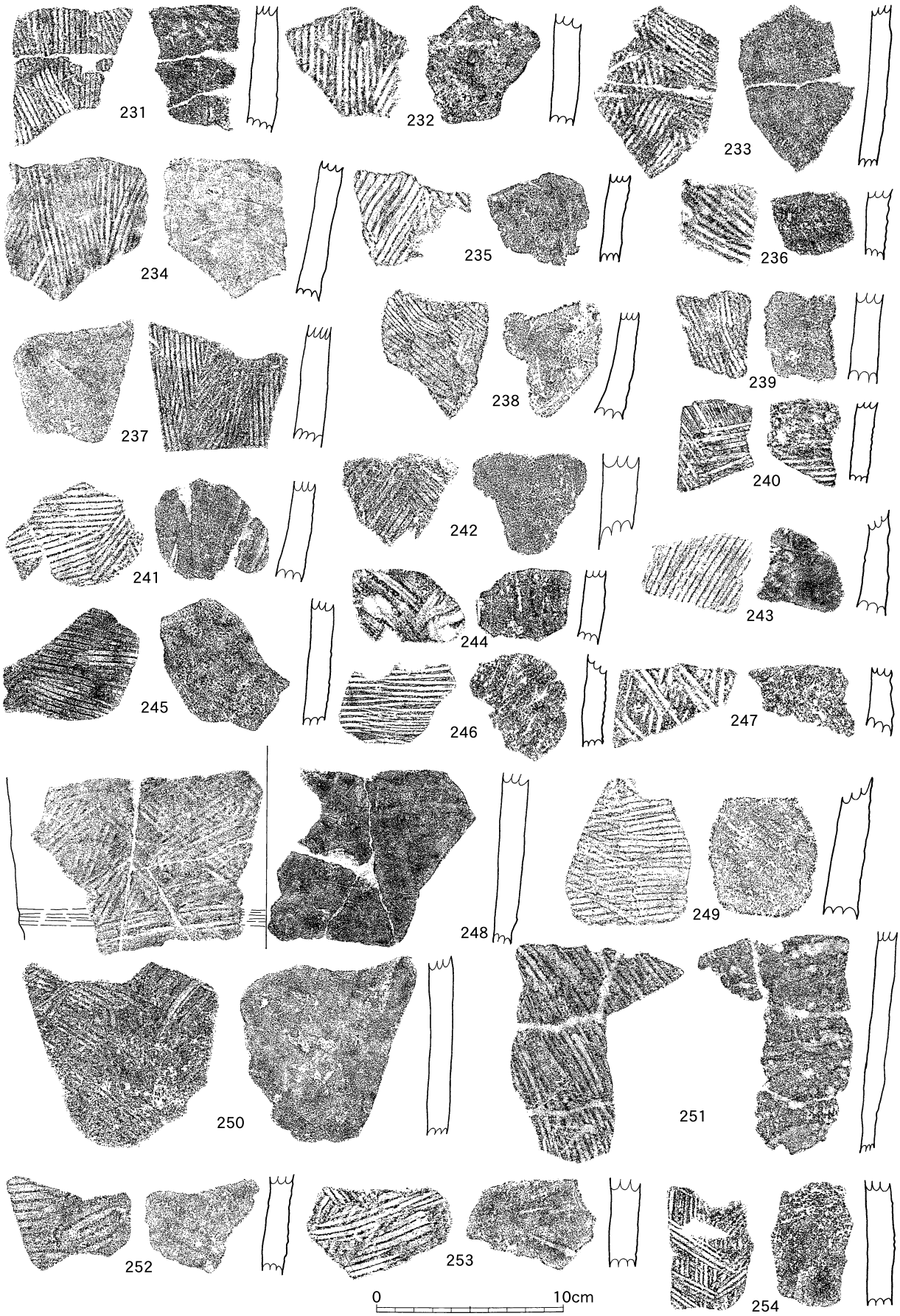
136～160は口縁部に羽状の貝殻刺突文を施している。146～148・151・152の口唇部は鋸歯状の刻目を


182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
0
10cm

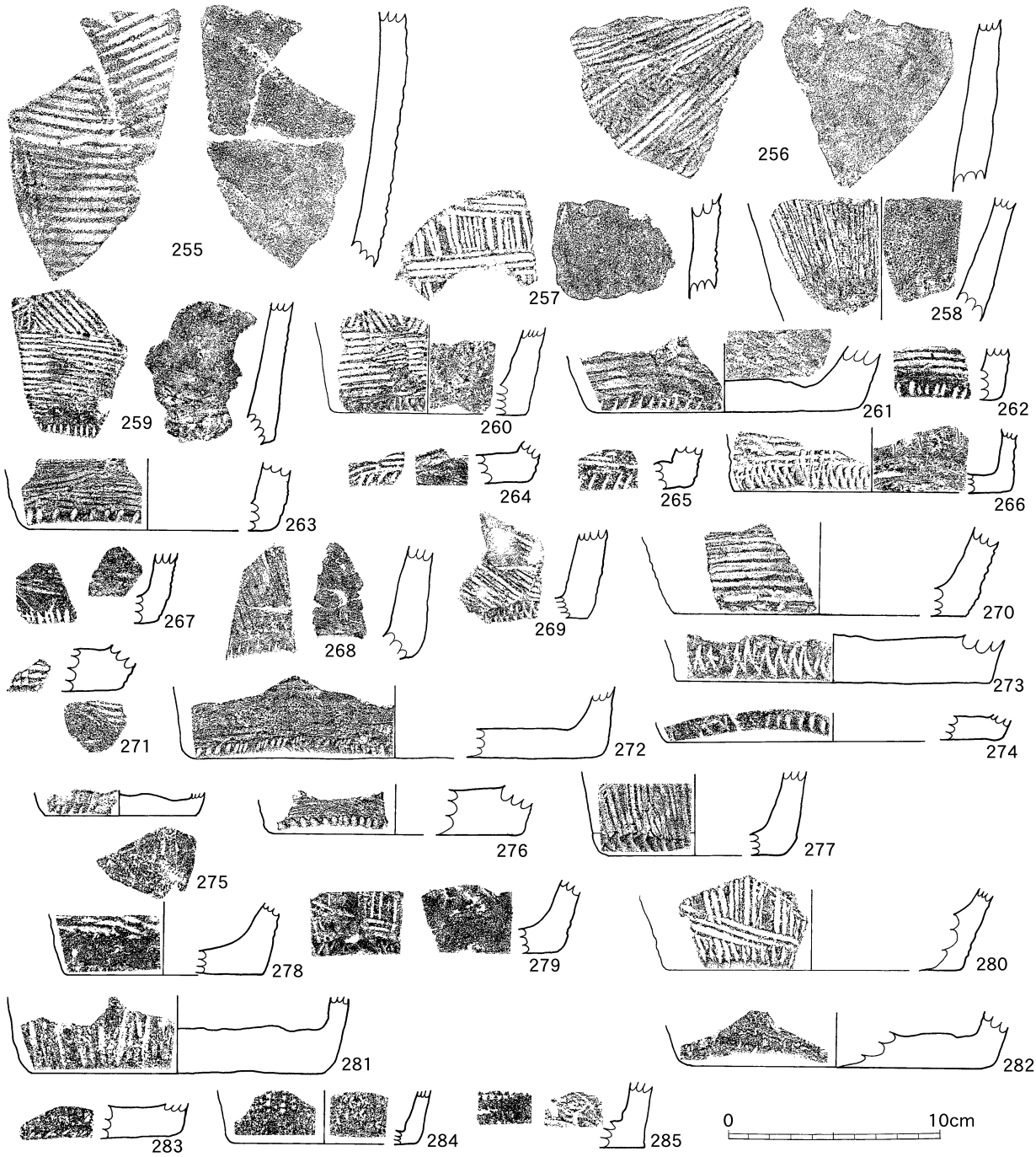
第17図　Ⅳ類土器５


200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
0
10cm

第18図　Ⅳ類土器６


231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
0
10cm

第19図　Ⅳ類土器７



第20図　Ⅳ類土器８

施している。154は，口縁部内側に貝殻刺突文を施している。161・162は斜位と縦位の貝殻刺突文を鋸歯状に施している。口縁部への施文はみられない。163～169は口縁部が縦位の貝殻刺突文を施している。167は口唇部に貝殻刺突文を廻らせている。170は横位の貝殻刺突文の下部に貝殻条痕文等の調整がみられない。171は貝殻刺突状の方形刺突文の下に縦位の条痕が施されている。172～174は貝殻刺突状の方形刺突文を施している。177～181は，口縁部が山形になる。176は横位の貝殻刺突文を施し，胴部は綾杉状の条痕文が施される。口縁は外反せず，ほぼ直行する。

182～258は胴部である。ほとんどが綾杉状の貝殻条痕文が施される。258は底部付近であるが，縦位の貝殻条痕文が施される。

259～285は底部である。259・260は綾杉状の貝殻

Ⅳ類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
13図	93	D-3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	94	C-7	Ⅲ	褐	黒褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	95	E-12	Ⅳ	赤褐	黒	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	96	D-3	Ⅳ	赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	97	B-4	Ⅳ	赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	98	F-4	Ⅲ	灰黄褐	橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	99	D-3	Ⅳ	明褐	明赤褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	100	C-3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	101	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	102	C-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	103	D-3	Ⅲ	にぶい赤褐	橙	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻刺突文，押圧文	ヘラケズリ	
	104	F-12	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	105	D-3	Ⅳ	明赤褐	赤褐	A.B	S状の方形刺突文	ヘラミガキ	
	106	E-12	Ⅳ	暗赤褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文，貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	107	D-3	Ⅲ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B	S状の方形刺突文	ヘラミガキ	
	108	D-12	Ⅳ	にぶい黄褐	明褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文，キザミ	ヘラケズリ後ナデ	
	109	E-12	Ⅳ	赤褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	砂粒多
	110	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	111	D-3	Ⅳ	黄褐	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	112	E-12	Ⅳ	明赤褐	橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	113	C-5	Ⅳ	暗赤褐	暗赤褐	A.B	貝殻条痕文（横），貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	114	E-12	Ⅳ	明褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	115	E-12	Ⅳ	橙	暗赤褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
14図	116	D-5	Ⅲ	褐	灰黄褐	A.B，金雲母	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	117	D-4	Ⅳ	褐	黒褐	A.B，金雲母	ヘラミガキ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	118	E-12	Ⅳ	灰褐	にぶい黄褐	A.B	ヘラミガキ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	119	D-12	Ⅳ	灰黄褐	灰褐	A.B，金雲母	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	120	D-12	Ⅳ	明黄褐	にぶい黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	121	D-12	Ⅳ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	122	D-3	Ⅳ	灰黄	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	123	E-12	Ⅳ	明褐	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	124	C-3	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	125	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	126	E-12	Ⅳ	明褐	にぶい褐	A.B.C	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	127	E-13	Ⅳ	灰褐	にぶい赤褐	A.B，金雲母	ヘラケズリ，貝殻刺突文，貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	128	F-5	Ⅲ	灰黄褐	灰褐	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	129	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	褐	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文，貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	130	D-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ヘラミガキ	
	131	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ヘラミガキ	
	132	D-3	Ⅲ	灰黄褐	灰褐	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	133	D-3	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B	ヘラケズリ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	134	D-3	Ⅲ	にぶい赤褐	橙	A.B	ヘラミガキ，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	135	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	136	D-12	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	137	D-12	Ⅳ	橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	138	E-7	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	139	D-13	Ⅳ	橙	明褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	140	B-5	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	141	E-12	Ⅳ	明褐	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	142	D-3	Ⅳ	明赤褐	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
15図	143	D-4	Ⅴ	にぶい赤褐	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	144	E-12	Ⅳ	明赤褐	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	145	D-3		褐	黒褐	A.B，金雲母	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	146	D-4	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	147	D-3	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	148	B-5	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	149	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	灰黄褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	150	D-3	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	151	D-3	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	152	D-4	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B，金雲母	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	153	E-12	Ⅳ	にぶい褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	154	G-5	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	155	D-12	Ⅳ	橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	156	C-5	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	口縁内，口唇貝殻刺突文
	157	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	158	D-3	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	159	E-12	Ⅳ	赤褐	明褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	160	F-12	Ⅳ	赤褐	赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	161	E-4	Ⅳ	灰黄褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	162	E-4	Ⅲ	灰褐	にぶい赤褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ヘラミガキ	
	163	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ヘラミガキ	

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
15図	164	C-3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	165	D-3	Ⅲ	にぶい褐	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ヘラミガキ	口唇部刻目後ナデ
	166	D-3	Ⅳ	灰褐	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	167	C-7	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	口唇部貝殻刺突文
	168	D-3	Ⅲ	にぶい橙	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	169	D-13	Ⅳ	にぶい褐	灰黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	170	D-13	Ⅲ	明赤褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
16図	171	E-12	Ⅳ	暗赤褐	暗赤褐	A.B	条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	172	E-4	Ⅲ	明褐	明褐	A.B.C	条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	173	E-12	Ⅳ	暗赤褐	暗赤褐	A.B	条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	174	D-3	Ⅲ	黄褐	黄褐	A.B.C	S状の方形刺突文	ヘラケズリ，ナデ	
	175	B-5	Ⅲ	明褐	明赤褐	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	176	C-5	Ⅳ	灰黄褐	褐	A.B.C	条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	177	D-13	Ⅳ	明褐	明褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	178	D-13	Ⅳ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	179	D-4	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	180	E-12	Ⅳ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	条痕文，貝殻刺突文後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	181	D-7	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
17図	182	B-5	Ⅳ	にぶい黄褐	赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	183	D-4	Ⅳ	にぶい橙	明黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	184	C-12	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	185	C-12	Ⅳ	褐	灰黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	186	C-4	Ⅳ	赤褐	暗赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	187	F-4	Ⅲ	灰褐色	黒褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	188	D-13	Ⅳ	橙	橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	189	E-12	Ⅳ	にぶい赤褐	明褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	190	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文，貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	191	E-12	Ⅳ	暗赤褐	黒褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	192	F-4	Ⅲ	明赤褐	赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	193	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	明黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	194	D-3	Ⅳ	黒褐	明褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	195	D-3	Ⅳ	褐	にぶい黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	196	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	197	D-13	Ⅳ	黄褐	にぶい黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	198	D-12	Ⅳ	黒褐	明褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	199	E-12	Ⅳ	灰黄褐	黒褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
18図	200	E-12	Ⅳ	明黄褐	にぶい赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	201	D-3	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	202	E-12	Ⅳ	褐	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	203	D-12	Ⅳ	褐灰	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	204	D-13	Ⅳ	浅黄	にぶい黄	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	205	D-13	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	206	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	207	E-12	Ⅳ	暗褐	橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	208	C-12	Ⅳ	灰黄褐	明赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	209	D-13	Ⅳ	褐	にぶい黄褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	210	C-4	Ⅳ	暗灰黄	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	211	E-12	Ⅳ	暗赤褐	黒褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	212	C-7	Ⅲ	褐	褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	213	D-3	Ⅳ	にぶい褐	褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	214	D-13	Ⅳ	褐	にぶい黄褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	215	C-12	Ⅲ	明褐	にぶい橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	216	D-3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	217	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	218	E-12	Ⅳ	褐	黒	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	219	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	220	E-12	Ⅳ	褐	橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	221	なし	Ⅳ	褐灰	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	222	E-4	Ⅲ	にぶい黄褐	赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	223	D-13	Ⅳ	黄褐	明黄褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	224	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	明褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	225	D-12	Ⅳ	にぶい黄褐	黒褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	226	D-12	Ⅳ	褐	赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	227	E-12	Ⅳ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	228	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	229	E-12	Ⅳ	黒褐	にぶい橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	230	D-12	Ⅳ	黄褐	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	

Ⅳ類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
19図	231	D-12	Ⅳ	褐灰	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	232	D-3	Ⅳ	にぶい褐	にぶい黄橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	233	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	234	L-9	Ⅱ	にぶい赤褐	灰褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	235	D-13	Ⅳ	灰黄褐	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	236	D-13	Ⅳ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	237	D-13	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	238	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	239	E-12	Ⅳ	浅黄橙	にぶい黄橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	240	G-11	Ⅱ	にぶい赤褐	橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	241	D-13	Ⅳ	黄褐	にぶい褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	242	D-13	Ⅳ	褐灰	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	243	E-12	Ⅳ	褐灰	にぶい赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	244	D-3	Ⅳ	黄灰	にぶい黄橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	245	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	246	E-12	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	247	D-3	Ⅳ	黄灰	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	248	D-3	Ⅳ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	249	D-13	Ⅳ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	250	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	251	H-5	Ⅲ	にぶい橙	にぶい褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	252	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	253	D-12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい橙	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	254	D-12	Ⅳ	にぶい黄橙	灰黄	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
20図	255	E-6	Ⅲ	黒褐	にぶい橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	256	C-4	Ⅴ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	257	E-12	Ⅴ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	258	C-4	Ⅳ	褐灰	明褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	259	D-12	Ⅳ	黒褐	明赤褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	260	G-5	Ⅲ	黒褐	黄灰	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	261	D-5	Ⅲ	赤褐	赤褐	A.B.C	貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	262	E-12	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	263	D-12	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ	

A：長石　B：石英　C：角閃石

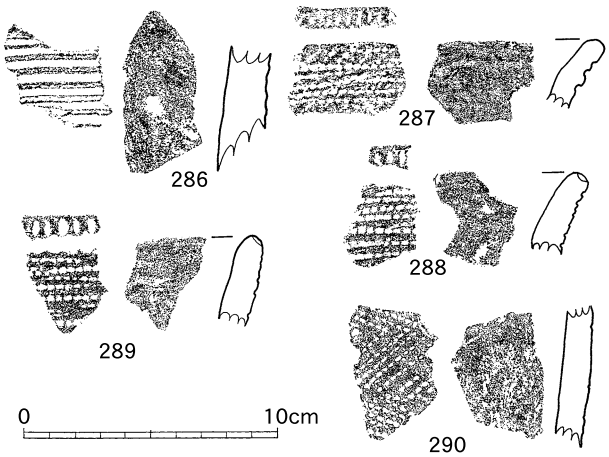
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
20図	264	D-3	Ⅲ	にぶい橙	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	265	D-3	Ⅲ	にぶい橙	にぶい褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	266	C-6	Ⅲ	褐灰	橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	267	E-12	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ	
	268	D-13	Ⅳ	褐灰	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ	
	269	E-12	Ⅳ	灰	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	270	D-3	Ⅲ	黒褐	にぶい褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	271	E-4	Ⅲ	にぶい橙	橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	272	C-3	Ⅲ	明赤褐	橙	A.B.C	貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	273	C-4	Ⅳ	褐灰	明褐	A.B.C	貝殻条痕文後ナデ	ヘラケズリ	
	274	D-13	Ⅳ	にぶい赤褐	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	275	C-6	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	羽状文，ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	276	D-3	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	277	E-12	Ⅳ	橙	灰	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	278	E-4	Ⅲ	橙	橙	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	279	E-12	Ⅳ	橙	明黄褐	A.B.C	貝殻条痕文，ナデ	ヘラケズリ	
	280	E-12	Ⅳ	黒褐	明褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	281	D-3	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	A.B.C	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	282	D-12	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラケズリ後ナデ	
	283	E-12	Ⅳ	にぶい黄橙	明黄褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	284	D-12	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	285	E-12	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	

Ⅴ・Ⅵ類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
21図	286	E-12	Ⅳ	にぶい黄褐	黄褐	A.B.C	条痕文	ヘラケズリ	
	287	E-12	Ⅳ	暗赤褐	暗褐	A.B	貝殻刺突文（横位）	ヘラミガキ	刻目（口唇）
	288	E-12	Ⅳ	明黄褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文（横位）	ヘラケズリ	刻目（口唇）
	289	E-12	Ⅳ	明黄褐	にぶい黄褐	A.B	貝殻刺突文（横位）	ヘラケズリ後ナデ	刻目（口唇）
	290	D-3	Ⅲ	灰黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	波状文	ヘラケズリ後ナデ	

条痕の調整の下位に横位の貝殻条痕文，その下部は刻目が施される。261～266は横位の貝殻条痕文で調整され，刻目が施される。266の刻目は鋸歯状である。267～269は斜位の貝殻条痕文に刻目が施されている。



第21図　Ⅴ類土器・Ⅵ類土器

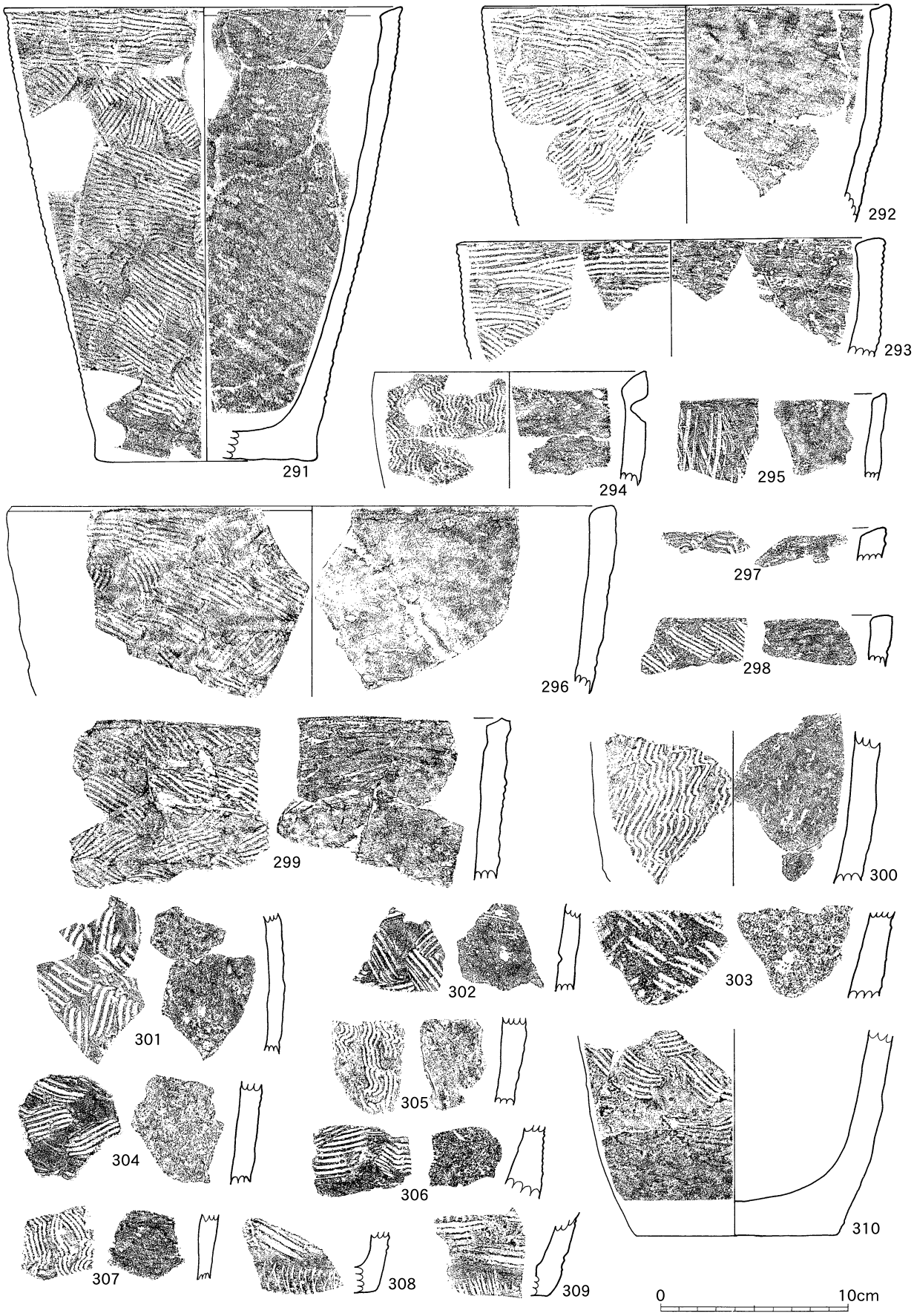
270・271は横位の貝殻条痕文のみの調整である。272～276は刻目のみが施されているものである。273は鋸歯状の刻目が施される。274は縦位の貝殻条痕文の下部に刻目がみられる。278は斜位の貝殻刺突文が施される。279～281は縦位と斜位の貝殻条痕文が施されている。282～285は剥落などにより調整がはっきりしない。

Ⅴ・Ⅵ類土器（第21図）

Ⅴ類土器は，286の１点のみの出土である。口縁部に沈線を廻らし，胴部への施文は特にない。Ⅵ類土器は，口縁部が外傾あるいは直行する器形をもち，器面に貝殻刺突文による施文をもつ土器である。

287～289は口縁部である。形状が小片のため細部が判明しないが，口縁部の外反が顕著でないため，Ⅳ類土器とは分類した。口唇部への刻目も観察される。

290は胴部である。貝殻刺突文が，羽状に施されている。


291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
0
10cm

第22図　Ⅶ類土器

Ⅶ類土器（第22図）

Ⅶ類土器はバケツ形の形状をなし，櫛状の工具により流水状・羽状に施文する土器である。

291は完形復元できた土器である。口縁部径21.2㎝，器高24.2㎝を測る。口縁部は横位の施文がされ，以下は羽状に近い施文が施される。

292～299は口縁部である。295は縦位の条痕文である。他の土器は羽状及び流水状の施文である。294は，穿孔途中の土器で補修の痕跡をもつ。

300～307は胴部である。流水状・羽状に篦状工具により施文が施されている。

308～310は底部である。308・309は斜位や横位の条痕文の下部に鋸歯状の刻目が施されているが，310には刻目はみられない。

Ⅶ類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
22図	291	E－12	Ⅳ	明赤褐	明赤褐	A.B	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	292	E－12	Ⅳ	にぶい赤褐	黒褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	293	D－12	Ⅳ	にぶい赤褐	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	294	D－13	Ⅳ	褐灰	にぶい黄橙	A.B	流水文	ヘラミガキ	補修孔
	295	D－3	Ⅳ	黄褐	にぶい褐	A.B.C	綾杉状貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	296	C－3	Ⅳ	黒	明褐	A.B.C	羽状文	ヘラミガキ	
	297	C－6	Ⅲ	にぶい赤褐	褐灰	A.B	貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	298	C－3	Ⅳ	にぶい赤褐	黒褐	A.B.C	羽状文	ヘラミガキ	
	299	C－3	Ⅳ	にぶい褐	褐灰	A.B.C	羽状文	ヘラケズリ	
	300	C－6	Ⅲ	黒褐	灰褐	A.B	流水文	ヘラケズリ	
	301	F－4	Ⅲ	黒褐	にぶい褐	A.B	羽状文	ヘラケズリ	
	302	C－3	Ⅳ	黒褐	にぶい赤褐	A.B	羽状文	ヘラミガキ	
	303	G－11	Ⅱ	黄褐	にぶい褐	A.B	羽状文	ヘラケズリ	
	304	C－3	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	A.B.C	羽状文	ヘラケズリ	
	305	D－13	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	流水文	ヘラケズリ	
	306	E－12	Ⅳ	黒褐	赤褐	A.B.C	羽状文	ヘラケズリ	
	307	D－12	Ⅳ	褐灰	にぶい黄橙	A.B.C	流水文	ヘラミガキ	
	308	D－3	Ⅳ	にぶい褐	明赤褐	A.B	羽状文，ヘラケズリ，貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	309	E－7	Ⅲ	黒褐	赤褐	A.B.C	貝殻条痕文，ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	310	C－3	Ⅳ	褐	赤褐	A.B	羽状文，ヘラケズリ	ヘラケズリ	

Ⅷ類土器（第23図・24図）

Ⅷ類土器は器面に山形・楕円・格子目の押型文を施文するものである。

311～321は山形の押型文土器である。311～314は口縁部である。311～313の口縁部は，内湾もしくは直行し器壁が厚い。314は口縁部が外反することからこれ以前の土器とは時間差があるものと考えられる。315～320は胴部である。縦方向の施文が多い。321は底部である。縦方向の施文が施してある。

322～332は細かい楕円の押型文土器である。323・324は口縁部で，緩やかに外反する。

325～329は胴部である。326は補修孔がある。

329～331は口縁部内面に櫛状の施文を施し，外面は内面部分の文様が施された部分で稜を作り，その下に細かい楕円の文様を施している。口縁部は緩やかに外反する。

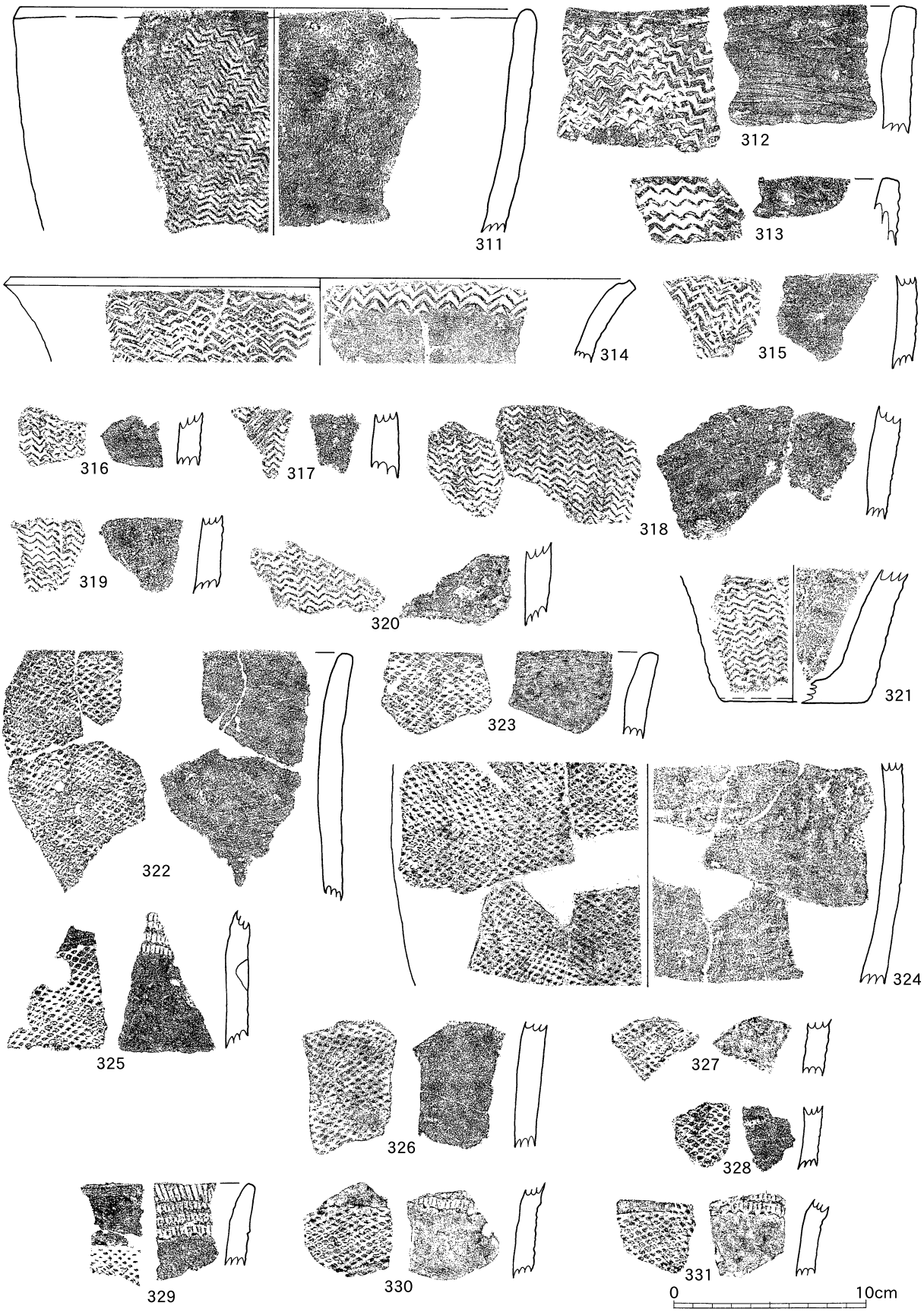
332～335は格子目押型文土器で，同一個体と思われる。332は口縁部で緩やかに外反する。333～335は胴部である。

Ⅸ・Ⅹ類土器（第25図）

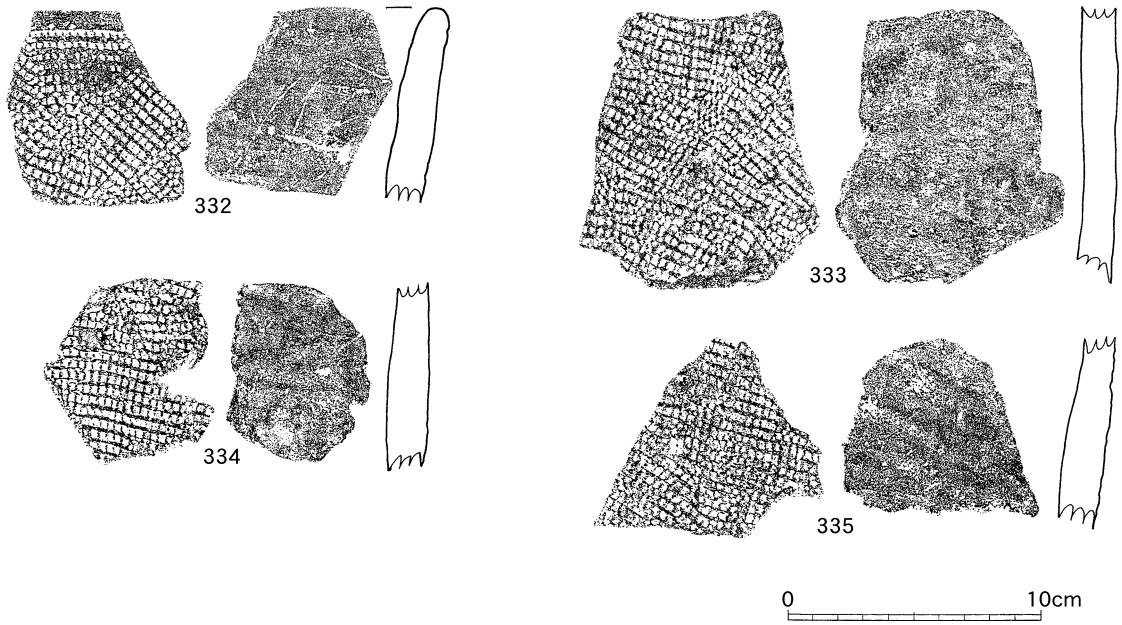
Ⅸ類土器は，口縁部が外反するもので，変形撚糸文を施す土器である。336～338は口縁部が緩やかに外に開き，下から上に撚糸文が施されている。339～342は胴部である。

Ⅹ類土器は，口縁がラッパ状に開き，胴部は垂直に伸びる形態をする。胴部に沈線で区画しその間を網目撚糸文を施す土器である。

343は屈曲する口縁部である。内外面を横ナデ調整後に，貝殻の肋による押引文を２条，貝殻腹縁部の刺突文を横位に施す。345は口縁部の屈曲部分である。隆帯部分に貝殻の肋による縦位の刺突文を施す。344・346は篦描き沈線により区画された範囲に網目撚糸文を回転押捺している。347は刺突連点文を廻らし，篦描き沈線文を施している。

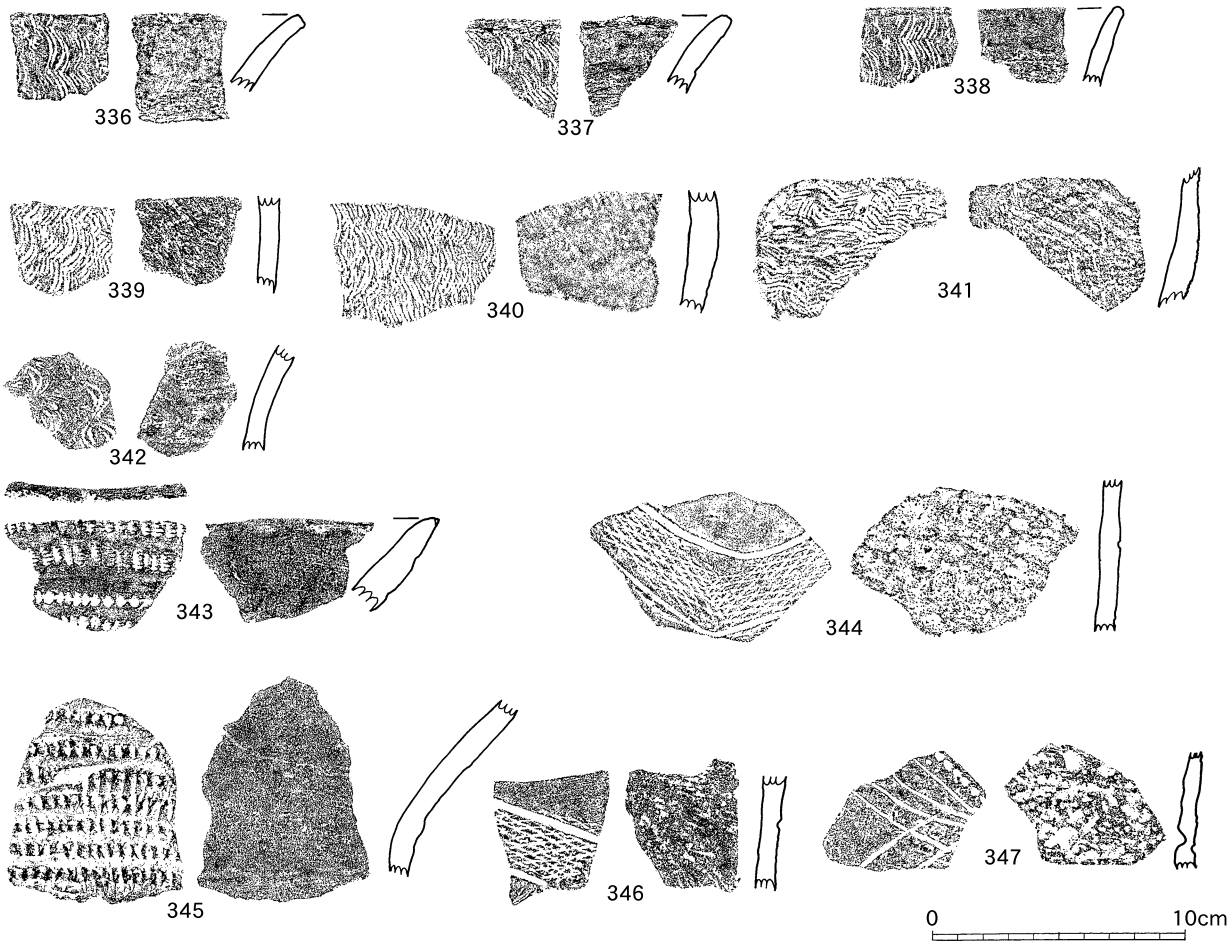

311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
0
10cm

第23図　Ⅷ類土器１



第24図　Ⅷ類土器２

Ⅷ類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
23図	311	G－11	Ⅱ	明黄褐	明褐	A.B	山形押型文	ヘラケズリ	
	312	G－11	Ⅱ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.金雲母	山形押型文	ヘラミガキ	
	313	G－11	Ⅱ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B	山形押型文	ヘラケズリ	
	314	L－10	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B	山形押型文	山形押型文，ヘラケズリ	
	315	L－10	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい橙	A.B	山形押型文	ヘラミガキ	
	316	C－4	Ⅳ	暗褐	橙	A.B	山形押型文	ヘラミガキ	
	317	C－4	Ⅳ	黒	橙	A.B	山形押型文	ヘラケズリ	
	318	C－4	Ⅳ	黄褐	明褐	A.B.C	山形押型文	ヘラケズリ	
	319	C－4	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	山形押型文	ヘラケズリ	
	320	C－3	Ⅳ	黒褐	橙	A.B.C	山形押型文	ヘラケズリ	
	321	C－3	Ⅳ	黒	橙	A.B.C	山形押型文	ヘラケズリ	
	322	C－3	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	楕円押型文	ヘラケズリ	
	323	C－3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	楕円押型文	ヘラミガキ	
	324	D－3	Ⅳ	黄褐	明黄褐	A.B.C	楕円押型文	ヘラケズリ	
	325	C－3	Ⅳ	灰黄褐	にぶい黄褐	A.B	楕円押型文	貝殻刺突文，ヘラケズリ	補修孔
	326	C－3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	楕円押型文	ヘラケズリ	
	327	C－3	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	楕円押型文	ヘラケズリ	
	328	D－3	Ⅳ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	楕円押型文	ヘラケズリ	
	329	C－3	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	楕円押型文	貝殻押引文，ヘラケズリ	
	330	C－3	Ⅳ	褐灰	灰黄褐	A.B.C	楕円押型文	連続貝殻刺突文	
	331	C－3	Ⅳ	黒褐	にぶい黄褐	A.B	楕円押型文	連続貝殻刺突文	
24図	332	D－4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B	格子目押型文	ヘラミガキ	
	333	D－4	Ⅱ	にぶい黄	明黄褐	A.B	格子目押型文	ヘラケズリ	
	334	D－4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B	格子目押型文	ヘラミガキ	
	335	D－4	Ⅱ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B	格子目押型文	ヘラミガキ	



第25図　Ⅸ類土器・Ⅹ類土器

Ⅸ・Ⅹ類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
25図	336	D－4	Ⅳ	にぶい橙	橙	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ，ナデ	
	337	B－4	Ⅲ	橙	黒褐	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ，ナデ	
	338	D－5	Ⅳ	橙	橙	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ，ナデ	
	339	D－5	Ⅳ	にぶい褐	にぶい橙	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ	
	340	D－5	Ⅳ	にぶい赤褐	橙	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ	
	341	D－4	Ⅳ	にぶい褐	にぶい褐	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ	
	342	E－4	Ⅲ	暗灰黄	にぶい黄橙	A.B.C	変形撚糸文	ヘラケズリ	
	343	C－5	Ⅳ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	貝殻押引文，貝殻刺突文	ヘラミガキ	
	344	B－5	Ⅲ	橙	にぶい褐	A.B.C	沈線文，撚糸文	ヘラケズリ	
	345	D－4	Ⅳ	明黄褐	黒褐	A.B.C	連続貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	346	C－5	Ⅳ	褐	にぶい褐	A.B.C	沈線文，撚糸文	ヘラケズリ	
	347	E－3	Ⅲ	赤褐	赤褐	A.B.C	貝殻刺突文，沈線文	ヘラケズリ	

⑶　遺物（石器）

叩石・打製石斧・磨製石斧・石錘（第26図）

348は，頁岩製の叩石である。大部分に自然面を残し，先端部が使用のため欠損している。

349と351は打製石斧である。351は刃部欠損し，表面に装着ずれと思われる摩滅痕が見られる。351は大型の剥片の下縁に表裏両面に簡易な二次加工を施しており，擦痕も観察できる。側縁部から上部にかけては表裏とも微細な二次加工が施されている。

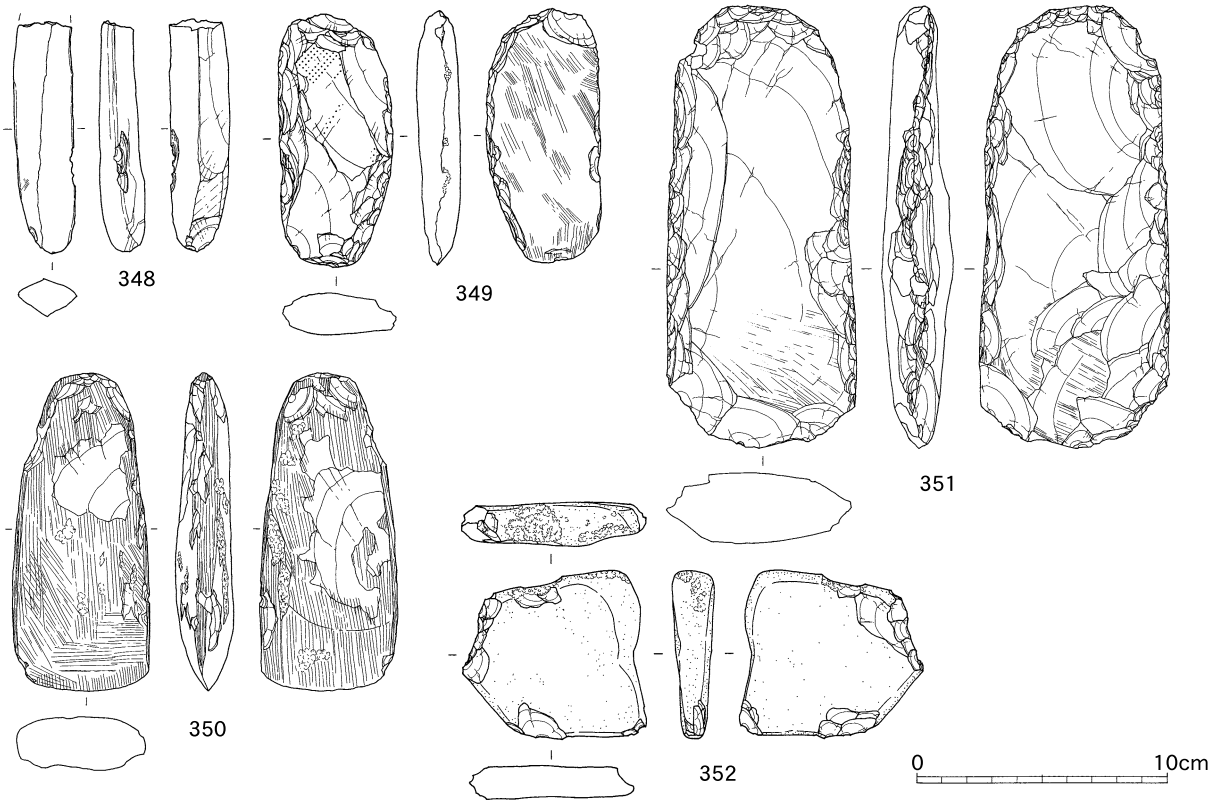
350は蛇紋岩製の磨製石斧である。短冊形で全体に研磨痕が見られ，側縁部・刃部ともに研磨による明瞭な稜の形成が見られる。刃部左側に顕著な使用痕（微小剥離痕）が観察でき，左側縁部にかけて欠損が見られる。

352は石錘である。右側縁部の自然面の抉りを利用し，左側縁部に剥離を施している。敲石としても使用しており，上部に敲打痕が観察できる。

礫器，石匕（第27図）

353は礫器である。最大長15.7㎝，最大幅21.3㎝，厚さ3.5㎝，重さ1.05㎏の大型の素材剥片の下縁に表裏両面への簡易な二次加工を施し，刃部を形成する。両側縁には裏面への二次加工が認められる。

354は頁岩製の石匕である。横形で素材剥片の剥離面を表裏面ともに残す。右側縁部の二次加工はつまみ部を形成する意図が見られる。刃部が下部に形成され，上部の一部は欠損している。



第26図　縄文時代早期石器１

磨石（第28図・29図　355～366）

縄文時代早期の磨石は，12点を図化した。６㎝未満を小型，６～11㎝を中型，11㎝以上を大型とした場合，縄文時代早期の特徴として同遺跡晩期に比べると中～大型の磨石が比較的多い点が注目できる。石材は安山岩，砂岩である。355と364は火熱を受けている。また，敲打痕や研磨痕から分類すると以下のような用途が考えられる。

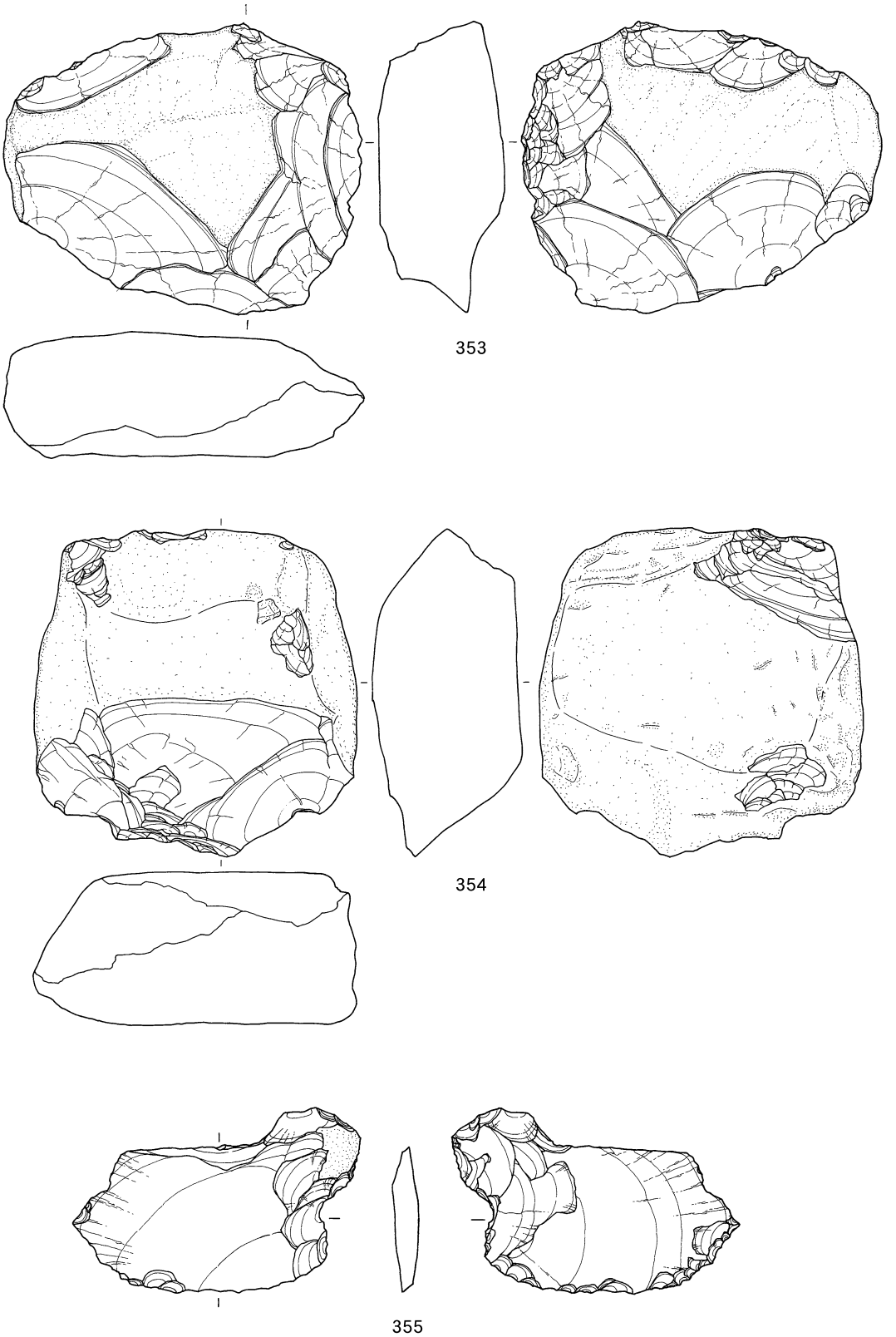
- 敲打痕が観察できないもの（355・357・363）
- 敲打痕が１～３カ所に集中したり（356・358・362・364）側縁部全体に敲打痕が分散したり（359・360・366）敲石としての用途が考えられるもの
- 表裏面及び側縁部全体に敲打痕が見られ（361・364・359），凹石としての用途が考えられるもの
- 全体的に研磨痕が明瞭（357・358・359・362）で磨石としての用途が主体であったもの

縄文時代早期石器１

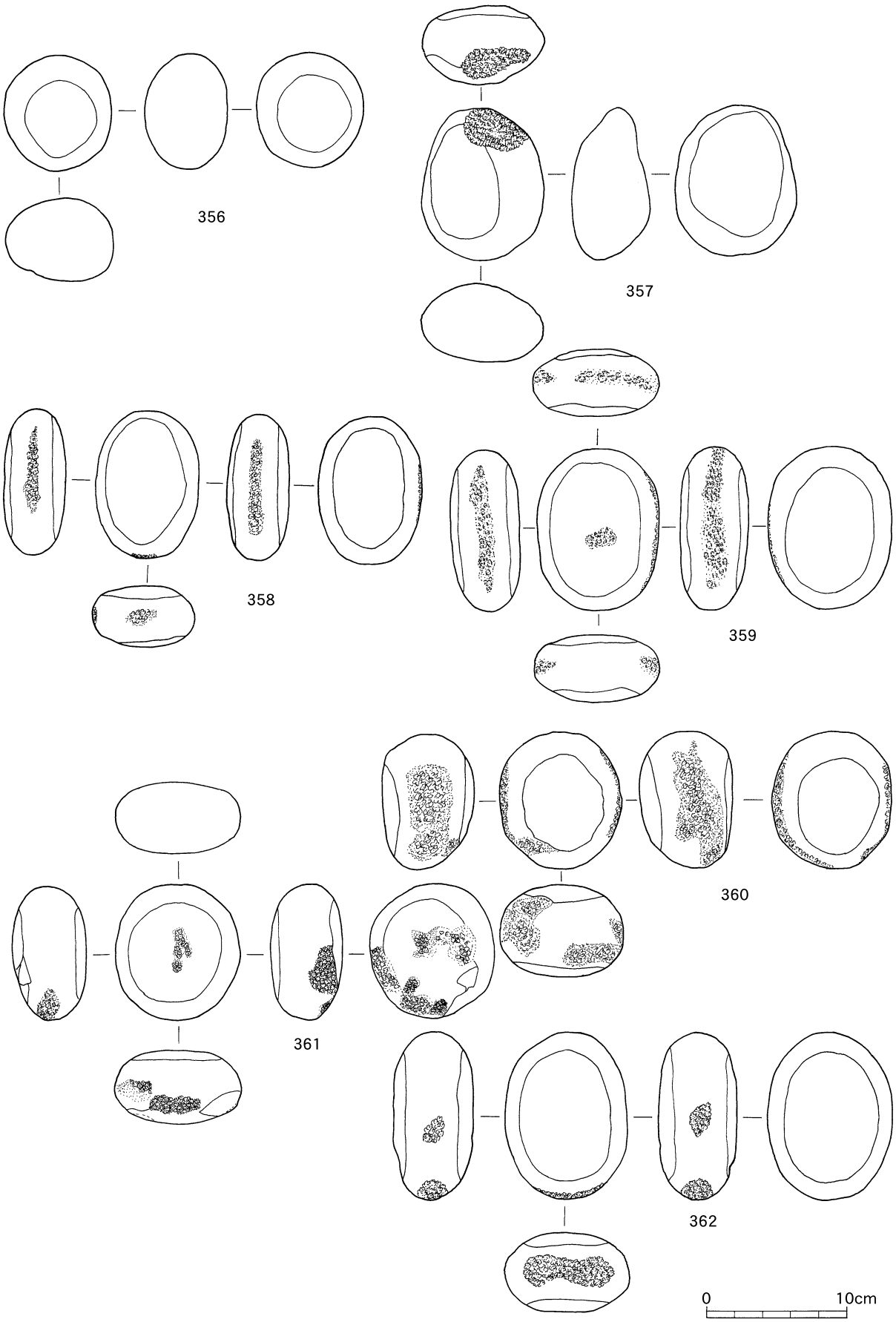
挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						㎝	㎝	㎝	g	
26図	348	Ⅳ	叩石	D-13	頁岩	9.3	2.4	1.8	49.63	
	349	Ⅳ	打製石斧	C-3	頁岩	10.2	4.5	1.6	115.58	
	350	Ⅳ	磨製石斧	F-11	蛇紋岩	12.7	5.5	2.3	700	
	351	Ⅳ	打製石斧	D-12	砂岩	17.7	7.7	2.9	510	
	352	Ⅳ	石錘	D-12	安山岩	6.8	7.1	1.7	80	

縄文時代早期石器２

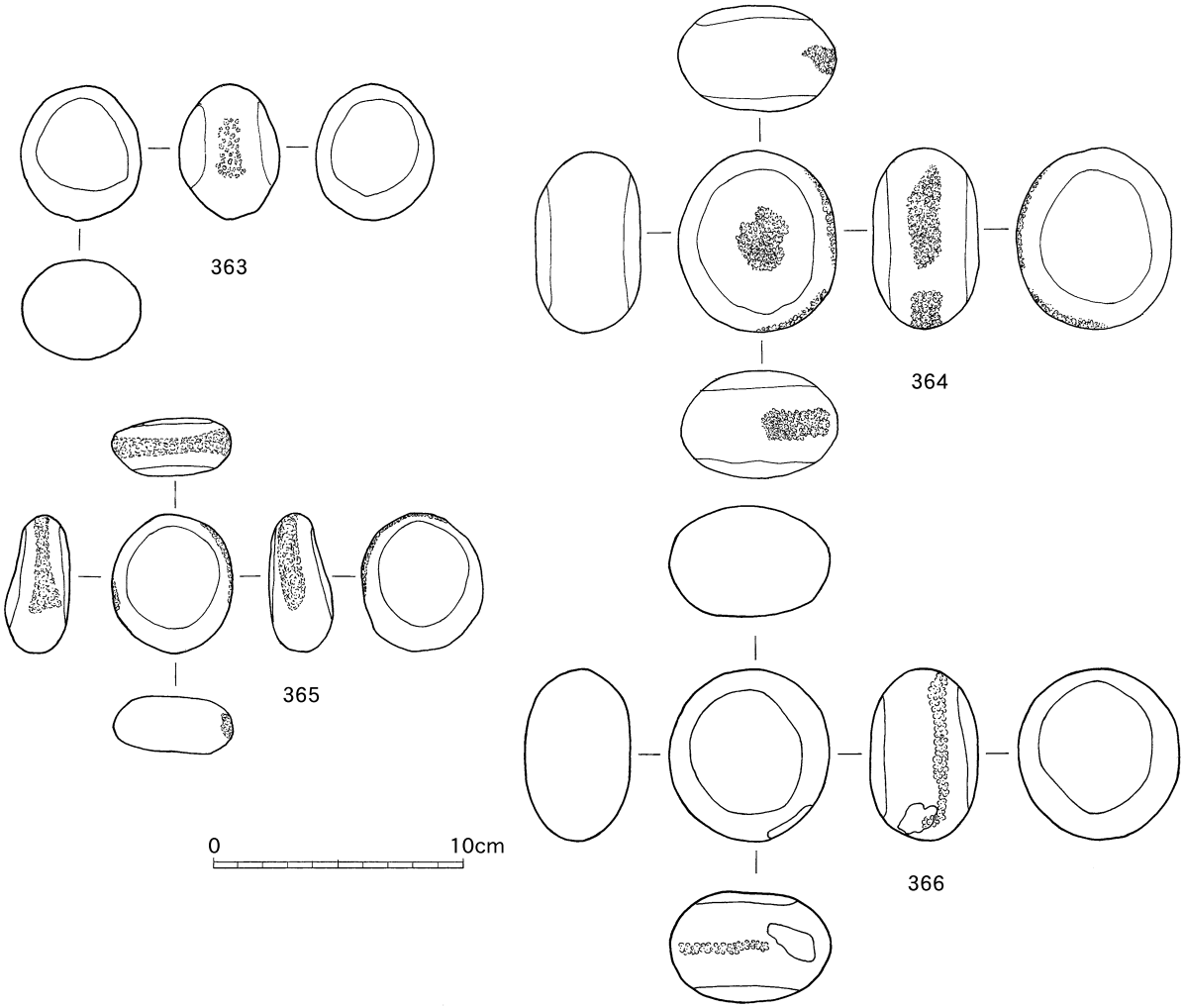
挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						㎝	㎝	㎝	g	
27図	353	Ⅳ	礫器	D-3	頁岩					
	354	Ⅳ	石匙	D-3	頁岩					
	355	Ⅳ	磨石	D-3	頁岩	5.4	8	1.2	500	
28図	356	Ⅳ	磨石	B-5	安山岩	8.3	7.6	5.9	500	
	357	Ⅳ	磨石	B-5	砂岩	10.9	8.5	5.5	665	
	358	Ⅳ	磨石	E-12	安山岩	10.5	7.3	4.4	500	
	359	Ⅳ	磨石	D-3	砂岩	11.6	8.8	4.8	510	
	360	Ⅳ	磨石	B-5	砂岩	9.8	8.5	6.8	770	
	361	Ⅳ	磨石	E-12	安山岩	9.7	8.8	5.2	650	
	362	Ⅳ	磨石	E-12	安山岩	12	8.9	5.7	870	
29図	363	Ⅳ	磨石	I-6	安山岩	4.8	4.8	4	150	
	364	Ⅳ	磨石	C-4	砂岩	7.3	6.2	4.2	270	
	365	Ⅳ	磨石	D-12	砂岩	5.6	4.8	2.5	83.76	
	366	Ⅳ	磨石	D-12	安山岩	6.9	6.4	4.3	280	



第27図　縄文時代早期石器 2



第28図　縄文時代早期石器 3



第29図　縄文時代早期石器４

２　縄文時代前期の調査

遺構は検出されなかった。

⑴　遺物（土器）

Ⅲ層の中位から出土するものである。土器は，Ⅺ，Ⅻ類に分類される。

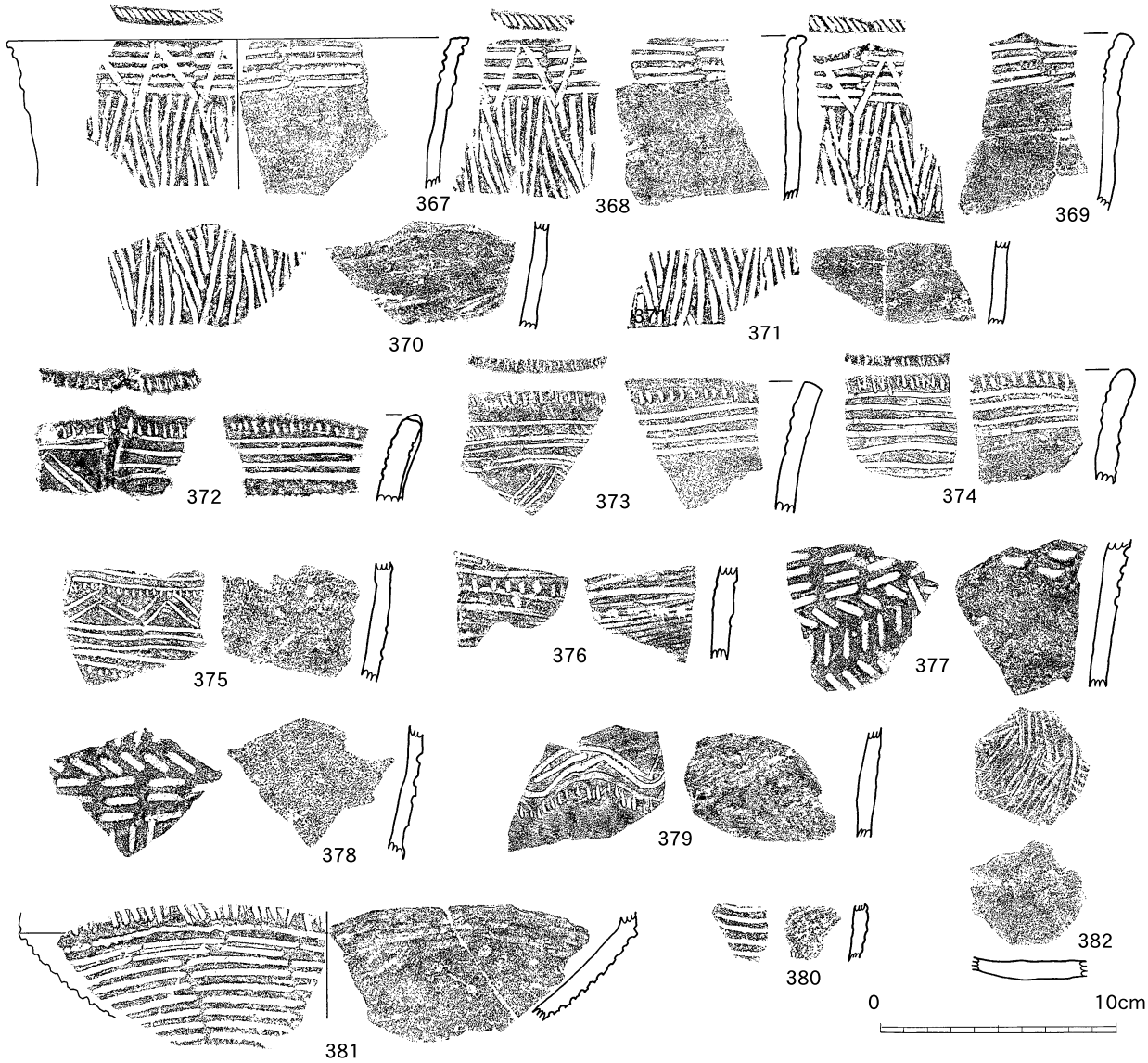
Ⅺ類土器（第30図）

Ⅺ類土器は，口縁部は直行または，外反し口縁部から底部にかけて，横位，斜位，縦位の短沈線文を棒状の工具を使用して施文する土器である。

367～369，372～374，381は口縁部である。369は波状を呈する。口唇部には，刻目を持つ。口縁部は篦状工具を用いて横位に縦列横線文を施した後に鋸歯文を施している。その下部には，数条をまとまりとする沈線を縦位に交互に施している。口縁部内面には横位に４条の縦列横線文を施している。器面は調整後に横撫でしている。373は４条の沈線文の下部に折帯文が施される。374は貝殻条痕による器面調整後に横撫でしている。内外面には篦状工具による刺突文を廻らし，下部内外面には４条の沈線を横位に施している。381は，屈曲部分の上部を篦状工具による縦位の沈線，屈曲部を刺突列点文，下部を縦列横線文で施している。

370・371・375～380は胴部である。370・371は数条をまとまりとする沈線を縦位に交互に施している。375は上部から順に，篦状工具による沈線文，刺突列点文１条，鋸歯文，沈線文５条，刺突列点文を施している。376は内面に貝殻条痕による器面調整後に刺突列点文を施している。377・378は，上部に篦状工具による短い縦列横線と端沈線を羽状に施している。379は篦状工具による沈線文と刺突列点文を波状に施している。

382は底部である。篦状工具により器面調整されている。



第30図　XI類土器

XI類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石			①左斜→右斜　②右斜→左斜		
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
30図	367	D－3	Ⅲ	褐灰	にぶい赤褐	A.B	縦列横線文，鋸歯文①，沈線文	ヘラケズリ，縦列横線文，横ナデ	
	368	D－3	Ⅲ	灰褐	にぶい橙	A.B.C	縦列横線文，鋸歯文①，沈線文	ヘラケズリ，縦列横線文，横ナデ	
	369	D－3	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	縦列横線文，鋸歯文②，沈線文	ヘラケズリ，縦列横線文，横ナデ	波状口縁
	370	D－3	Ⅲ	にぶい黄褐	褐	A.B.C	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	胴部
	371	D－3	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい褐	A.B	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	372	C－4	一括	暗褐	にぶい黄褐	A.B.C	刺突列点文，沈線文	刺突列点文，沈線文	貼付突帯
	373	E－4	Ⅲ	明赤褐	にぶい褐	A.B.C	条痕文，刺突文，鋸歯文	条痕文，刺突文，沈線文	
	374	E－4	Ⅲ	にぶい褐	にぶい褐	A.B.C	条痕文，刺突文，沈線文	条痕文，刺突文，沈線文	
	375	E－5	Ⅲ	灰褐	にぶい褐	A.B	刺突列点文，沈線文，鋸歯文	ヘラケズリ	
	376	E－4	Ⅲ	にぶい褐	にぶい橙	A.B	刺突列点文，沈線文	刺突列点文，沈線文，条痕文	
	377	C－5	Ⅲ	にぶい赤褐	暗赤褐	A.B	縦列横線文，沈線文	縦列横線文，ヘラケズリ	
	378	C－5	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	A.B.C	縦列横線文，沈線文	ヘラケズリ	
	379	E－4	Ⅲ	灰褐	灰黄褐	A.B.C	刺突列点文，沈線文（波状）	ヘラケズリ	
	380	D－3	Ⅳ	にぶい赤褐	赤褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	381	D－3	Ⅲ	にぶい赤褐	暗赤褐	A.B	刺突列点文，沈線文，縦列横線文	ヘラケズリ後ナデ	
	382	H－5	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	A.B.C	条痕文	ヘラケズリ	

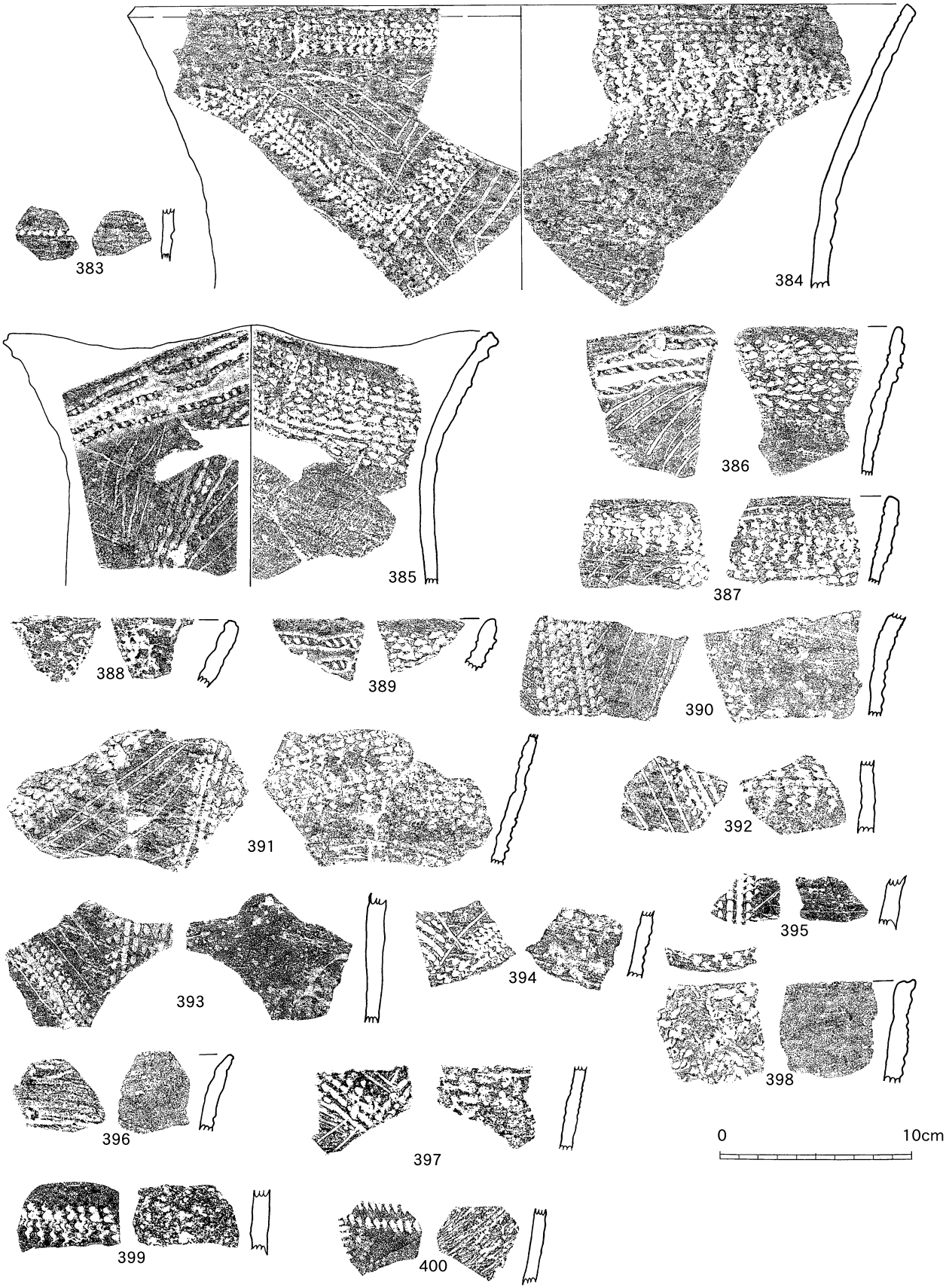
XII類土器（第31図）

XII類土器は，口縁部が直行ないし外反し，山形の器形を持つものもある。口縁部内面に貝殻刺突や貝殻連点文を施し，沈線，貝殻刺突文で横位または斜位の施文を施す土器である。

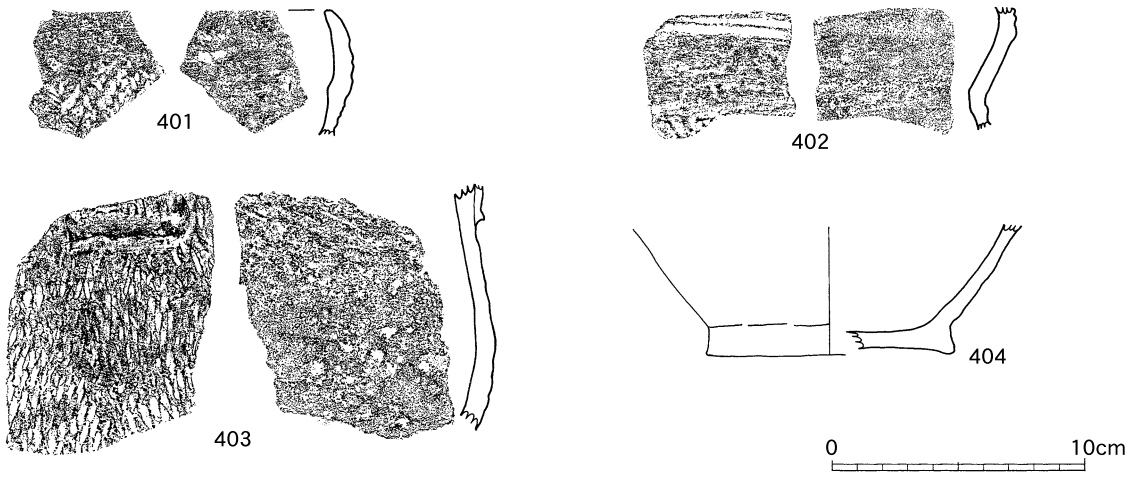
384～389，396～398は口縁部である。384は口縁部に縦位の貝殻刺突文を緻密に施している。その下部には，三角形に区画した中に折帯文を施し，内面は貝殻の肋をロッキングして施文しており端部内外面とも撫で消している。385は刻目突帯文を廻らせ，胴部には斜位と縦位に貝殻連点文で区画し，V字，斜位の沈線文を施している。口縁内面には口縁に沿って貝殻刺突文と貝殻連点文を施している。386は刻目突帯文を廻らし，下部に斜位の沈線文を施している。内面は貝殻連点文を施した後，撫でている。389は刻目突帯文を廻らし，内面に貝殻連点文を施している。387・388は内外面に貝殻刺突文を施している。388は384と同一個体の可能性がある。397は貝殻条痕文を施している。398は口唇部，口縁部に貝殻連点文を施している。397・396は貝殻条痕文が施され，内面は丁寧に横撫でされている。

384，390～395，399・400は胴部である。貝殻刺突文，貝殻連点文，沈線文を斜位あるいは縦位に施す。391・392は内面にも貝殻連点文を施している。400は箆状工具による刺突文を施している。

XII類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
31図	383	E－12	Ⅳ	褐灰	にぶい赤褐	A.B	刺突列点文	ヘラケズリ	
	384	E－4	Ⅲ	灰褐	黒褐	A.B.C	貝殻刺突文，折帯文，ナデ	貝殻刺突文，ヘラケズリ，ナデ	
	385	E－3	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	A.B.C	刻目突帯，貝殻連点文，沈線，ナデ	ヘラケズリ，貝殻連点文後ナデ	
	386	E－3	Ⅲ	黒褐	黒褐	A.B	刻目突帯，貝殻連点文，沈線	貝殻連点文後ナデ	
	387	E－3	Ⅲ	にぶい赤褐	黒褐	A.B.C	刻目突帯，貝殻連点文，ヘラケズリ	貝殻連点文後ナデ	
	388	F－4	Ⅲ	にぶい赤褐	黒褐	A.B	貝殻連点文後ナデ	貝殻連点文後ナデ	384と同体か
	389	E－3	Ⅲ	褐灰	黒褐	A.B.C	刻目突帯	貝殻連点文	386と同体か
	390	E－3	Ⅲ	にぶい赤褐	暗赤褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	ヘラケズリ	
	391	D－3	Ⅲ	にぶい赤褐	赤褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	貝殻連点文，ヘラケズリ後ナデ	
	392	E－3	Ⅲ	にぶい赤褐	黒褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	貝殻連点文後ナデ	
	393	E－3	Ⅲ	赤褐	黒褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	394	D－3	Ⅲ	灰褐	黒褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	ヘラケズリ後ナデ	
	395	D－3	Ⅲ	にぶい赤褐	黒褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	ヘラケズリ	
	396	I－8	Ⅲ	にぶい褐	赤褐	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	397	I－6	Ⅲ	黄褐	黒褐	A.B.C	貝殻連点文，沈線文	貝殻連点文，ナデ	
	398	C－10	一括	灰褐	明赤褐	A.B.C	粗い貝殻連点文	ヘラケズリ後ナデ	
	399	E－3	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	貝殻連点文	ヘラケズリ	
	400	B－5	Ⅳ	にぶい褐	にぶい赤褐	A.B.C	刺突列点文	ヘラケズリ後ナデ	


383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
0
10cm

第31図　Ⅻ類土器



第32図　XIII類土器・XIV類土器

3　縄文時代中期・後期の調査

縄文時代中期・後期は，III層下部において出土するものである。遺構は検出されず，遺物は出土量が少なく，小破片が多い。

⑴　遺物（土器）

XIII類，XIV類土器（第32図）

XIII類土器は，口縁部が内反し，キャリパー状の器形をしている。平底の底部からいったん垂直に立ち上がり，その後外側に開き胴部に至る。402は頸部から口縁部下部に当たり横位の沈線文がみられる。404は器壁が薄く，滑石を混ぜた胎土である。

XIV類土器は胴部に縄文を施文する土器である。401は内湾する口縁部，403は胴部で地紋に縄文（401はＲＬ，403はＬＲ）が施文される。403は胴部の頸部に貼付突帯文を有する。

XV類土器（第33図）

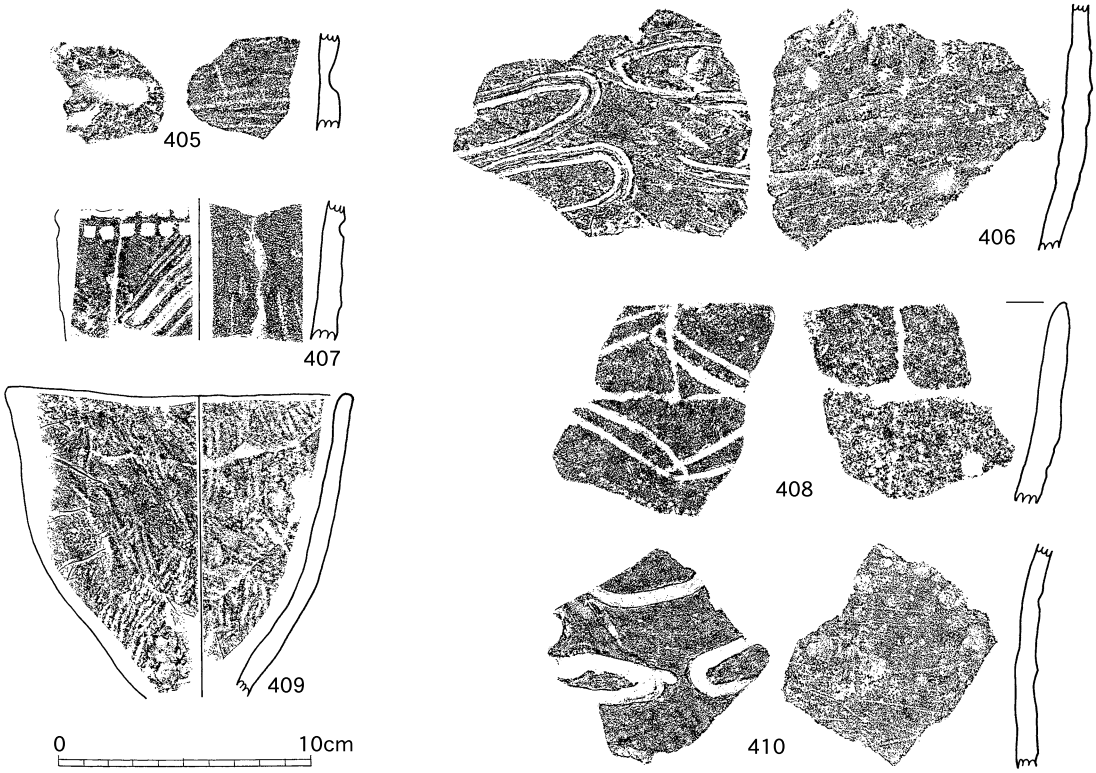
XV類土器は，胴部に２重沈線や太い凹線状の沈線を施文したり荒い条痕を施したりする土器である。

405は棒状施文具により凹線文を施している。２は，撫でによる器面調整後に，凹線文を曲線状に施文している。406は２重沈線で曲線文様を上下に並べて施文している。407は欠損した波状口縁を含む胴部である。撫でによる器面調整後に凹線文を曲線状に施文している。刺突による連点文を廻らし，下部に箆状工具による凹線を羽状に施文する。408は口縁部である。口唇部は丸く，平行沈線による菱形文を施文している。

410は胴部であり，凹線文による円形の文様を施している。

409は底部から外開きに立ち上がり，途中で内傾し，そのまま直行して口縁部に至る。器面は内外面共貝殻条痕により調整している。

XIII・XIV類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調		胎土	外面	内面	備考
				内	外				
32図	401	L－10	III	黄褐	黄褐	A.B	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	402	G－11	II	褐	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	403	H－0	III	橙	黄褐	A.B	短沈線	ヘラケズリ	砂粒
	404	D－4	III	にぶい黄	にぶい橙	A.B	ミガキ	ミガキ	底部



第33図　XV類土器

XV類土器									
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
33図	405	E－4	Ⅲ	黄褐	にぶい橙	A.B	沈線文	ヘラケズリ	
	406	L－9	Ⅲ	橙	にぶい黄橙	A.B	二重沈線	ナデ	
	407	D－3	Ⅳ	暗赤褐	黒褐	A.B	方形刺突，条痕文	ヘラミガキ	
	408	ナシ		明赤褐	橙	A.B	沈線文	ヘラケズリ	
	409	ナシ		灰黄褐	明赤褐	A.B.C	薄い貝殻条痕	ヘラケズリ	
	410	E－4	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	沈線文	ヘラケズリ後ナデ	

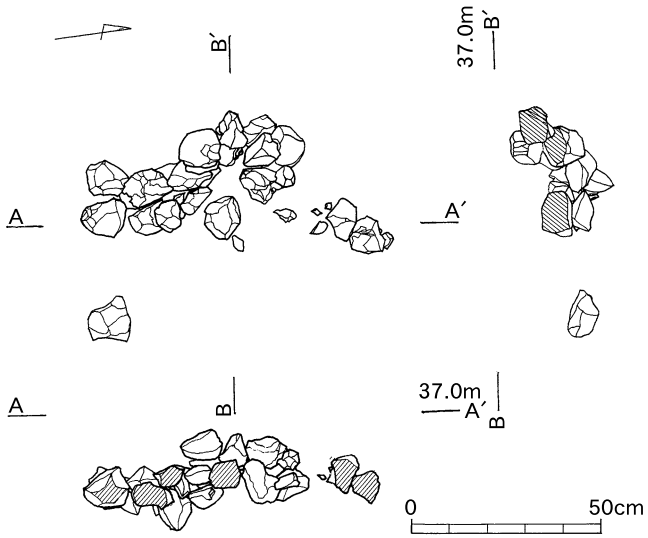
4　縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は，Ⅲ層上部において出土するものである。遺物・遺構は土器，石器ともに数多く出土している。

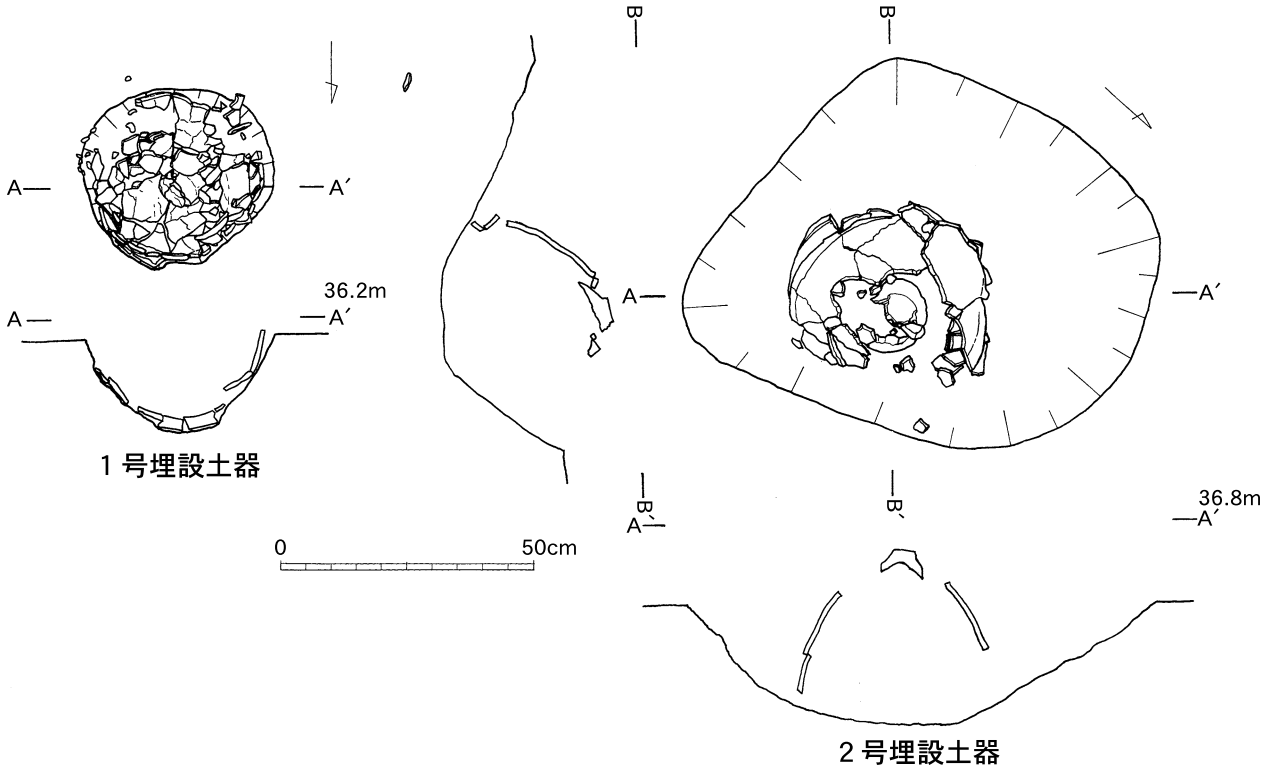
(1)　遺構

集石（第35図）

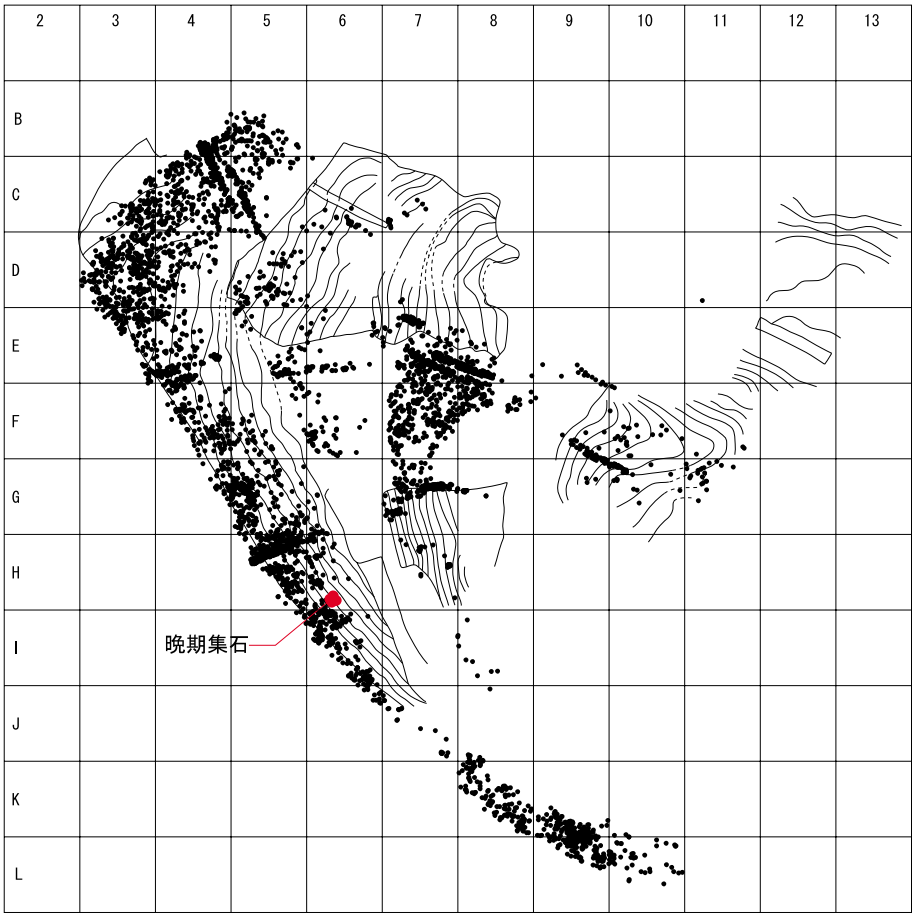
集石がH－10区から１基検出されている。拳大の約33個の石で構成され，傾斜に沿って石が数点積んである。赤色に変色した石が一点確認できたが，その他の石には，焼成の痕跡がみられず，掘込みや供伴する土器は検出されなかった。



第34図　縄文時代晩期集石遺構



第35図　Ⅻ類土器埋設土器



第36図　縄文時代晩期遺物出土状況

埋設土器（第34図）

縄文時代晩期の粗製深鉢形土器が，2基検出された。１号埋設土器は，Ｇ－６区から口縁部を上にして埋設されていたが，当時の掘込み面は確認できなかった。２号埋設土器は，直径約80㎝の円形の土坑に口縁部を下にして埋設されていた。いずれの土器も小破片で損傷が激しく，復元するまでに至らなかったが，残存部位から黒川式土器の新しい段階のものと思われる。

遺物出土状況（第35図）

遺跡の低地部分の西側に集中しているが，稜線部に集中しているのは，石鏃など狩猟具である。土器は，粗製深鉢形土器，精製浅鉢形土器などが出土し，石器は，石鏃，打製石斧，叩石などを主として多数出土している。

⑵　遺物（土器）

XVI類土器（第37図～48図）

深鉢形土器，浅鉢形土器など様々な器形の土器が出土している。そこで，深鉢形土器，浅鉢形土器，またそのどれにも当てはまらない小鉢形土器，そのほかの土器など，器形によって口縁部の外反，あるいは外への傾き，直行，内湾など口縁部の長短などによって分類を行った。

深鉢形土器

口縁部

ア　XVIa類土器（第37図）

414～426のXIVa類土器は，口縁部が直行もしくは外に開き，口縁部の幅は広く，数条の沈線や条痕を持つ粗製土器である。412～414は口縁部に丸い棒状工具を使って，３～４条の条痕を施している。415～424は口縁部に明瞭な横位の条痕を施している。425・426は条痕が不明瞭で横位に薄く施してある。口縁部は外への開きが大きくなってきている。

イ　XVIb類土器（第38・39図）

427～441のXIVb類土器は肩部を持ち，口縁部が緩やかに外反し，頸部に至る部分に段の付く器形がみられ，器壁もａ類に比べて薄い。口縁部の広い文様帯には沈線が消失し，貝殻条痕が施されるものもある粗製土器である。また，口縁部や頸部にリボン状の突起を持つものがある。

428と431は口縁部が狭いことからａ類からの移行期に相当すると考えられる。428～430は頸部と胴部を分ける段が付く。432は口縁部に段が付くが，頸部との境に付く段とは異なる。

436～441は口縁部にリボン状の突起を持つものである。

ウ　XVIc類土器（第39・40図）

442～451のXIVc類土器は，口縁部が厚く盛り上がり，器形も立ち気味になる。口縁部や頸部に無刻目の突帯が付くものもある粗製土器である。442は口縁部と頸部が肥厚し，口縁部にはリボン状の突起が付く。443は補修孔を穿ち，頸部が肥厚する。446は口縁部が緩やかに外に開き三角形に無刻目の突帯が付く。447は口縁部が直行し，肥厚した口縁部から頸部に細い突帯が付く。450は口縁部が内反し，器面全体に条痕が施される。451は肥厚した頸部から口縁部が内傾している。

胴部（第41図）

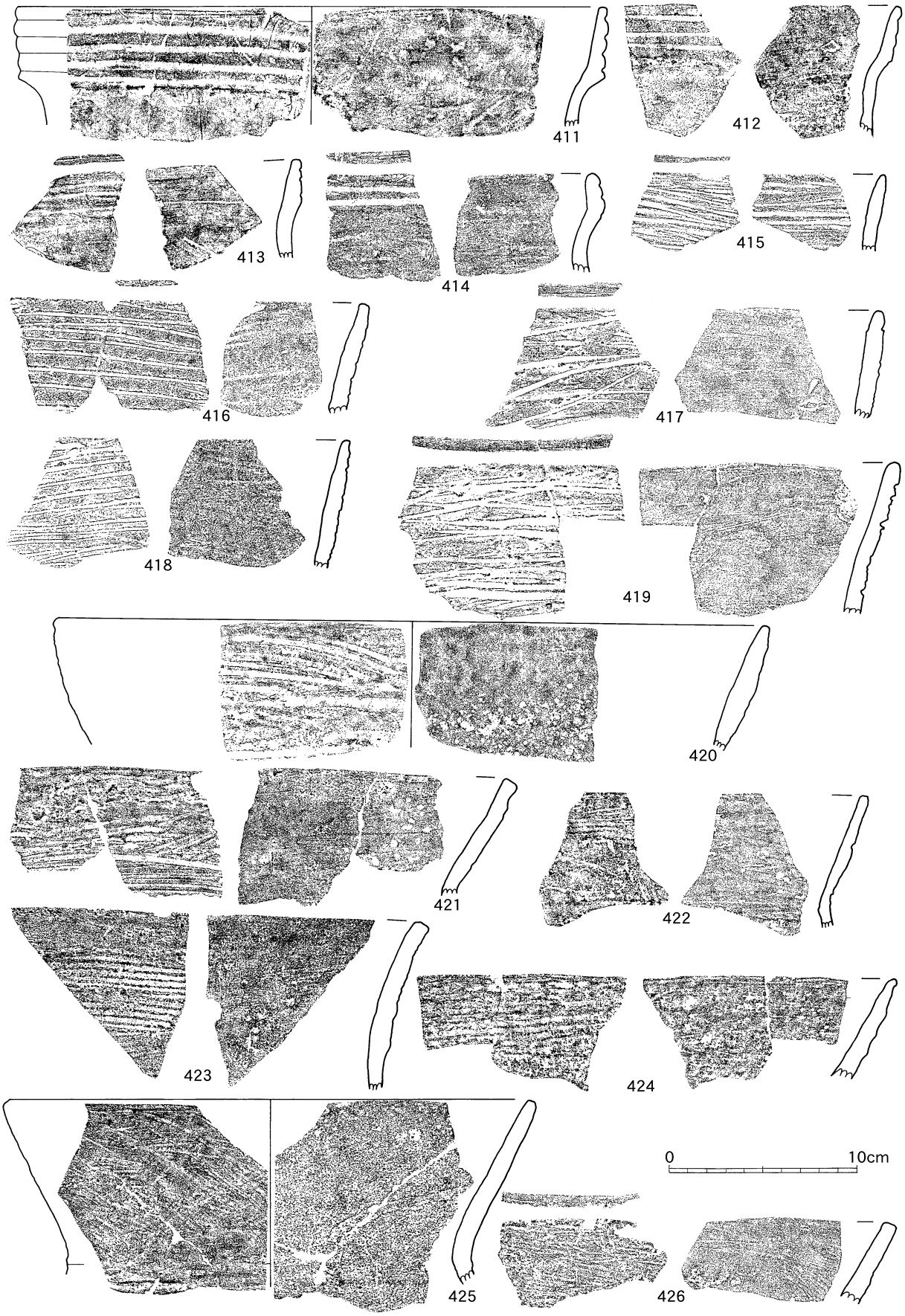
452～459は緩やかな「く」の字の屈曲やリボン状の突起をもつ胴部の破片である。454は頸部に大きなリボン状の突起が付く。459・460は胴部の屈曲部のやや上に，あまりはっきりしない形のリボン状の突起が付く。

中鉢形土器（第42図）

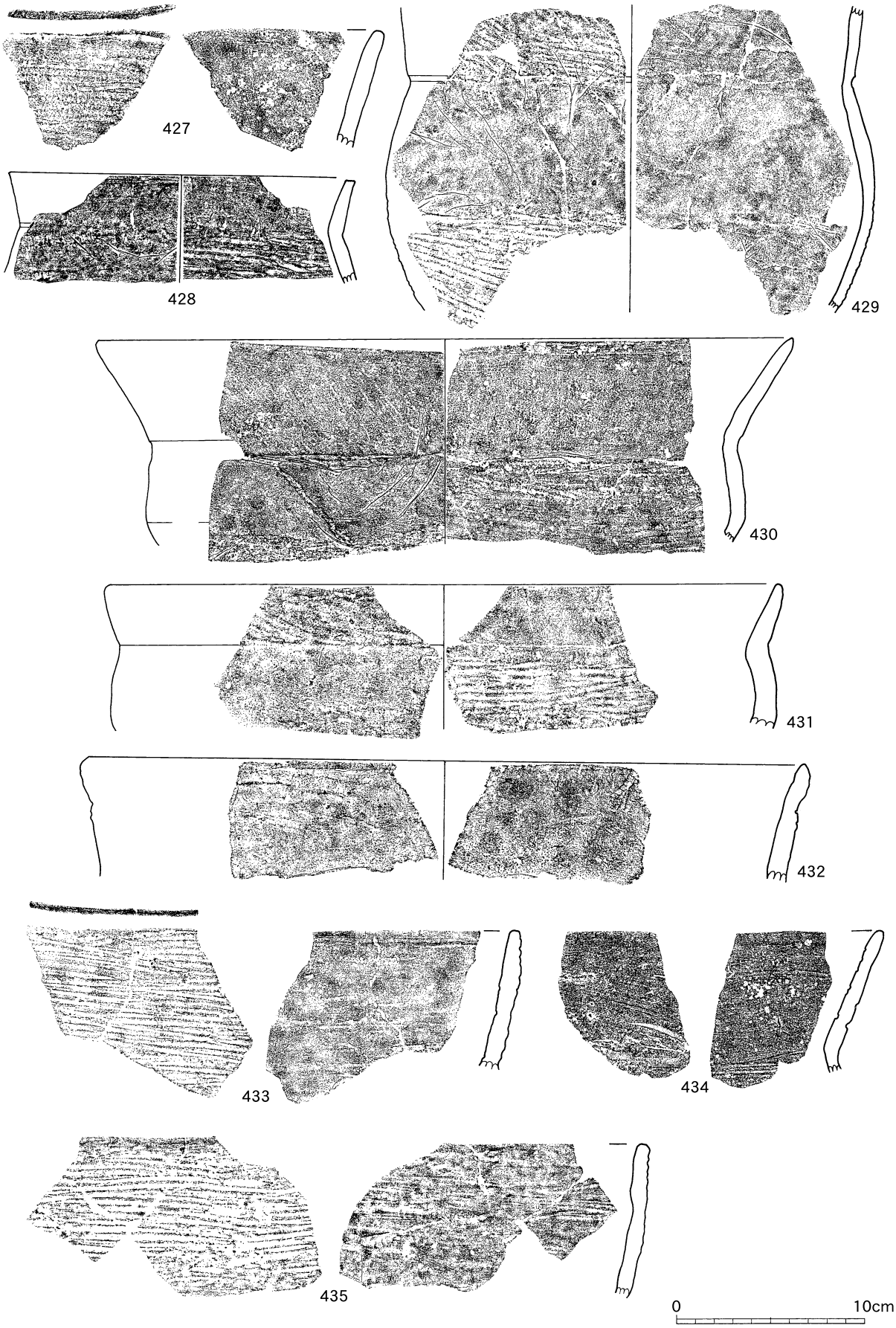
小径であったり器壁が薄かったり，精製土器であったりする土器の一群を深鉢形土器と浅鉢形土器のどちらにも当てはまらないものを中鉢形土器として分類した。

460～466は緩やかに外反し，外傾する精製土器である。460・463は口縁部が緩やかに外反し，内側に沈線が入る。467～472は口縁部に直交する。467は貝殻条痕を施された口縁部に穿孔された補修孔を持つ。472は穿孔途中の凹みを持つ。469～471は口縁部が肥厚する。

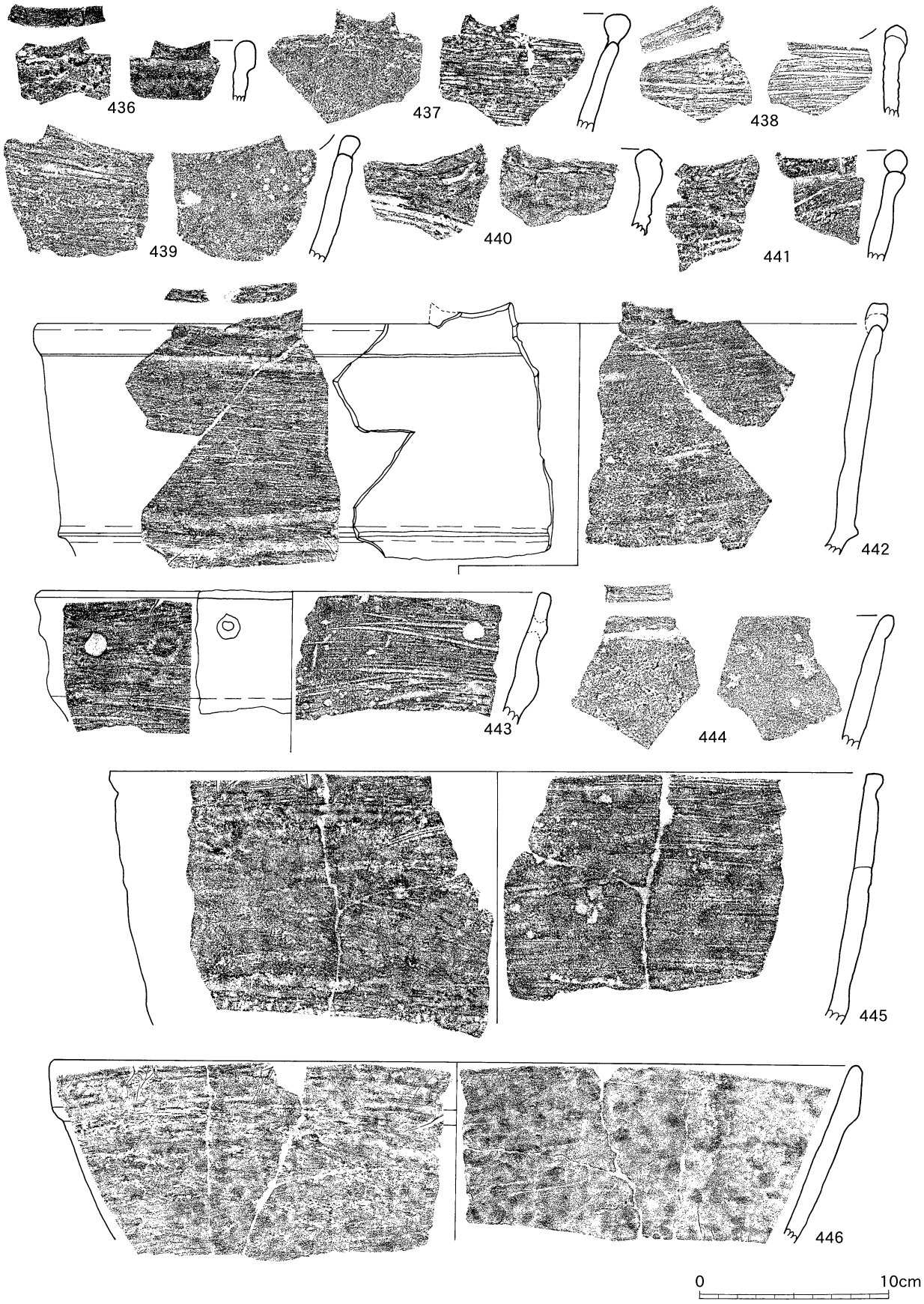
473・474は口縁部が内傾する。473は口縁部が肥厚し段を持つ。



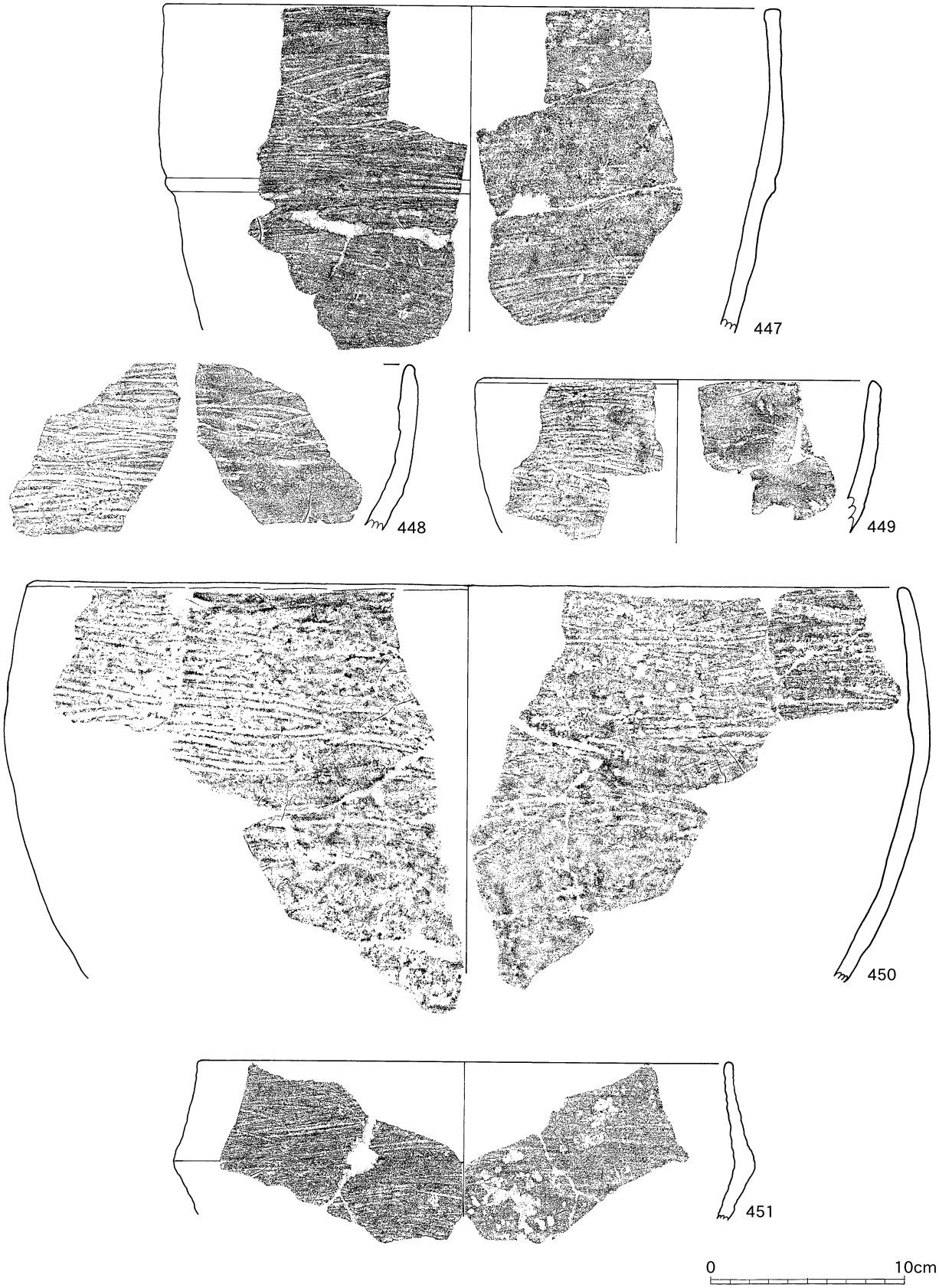
第37図　Ⅻa類土器（深鉢形土器）



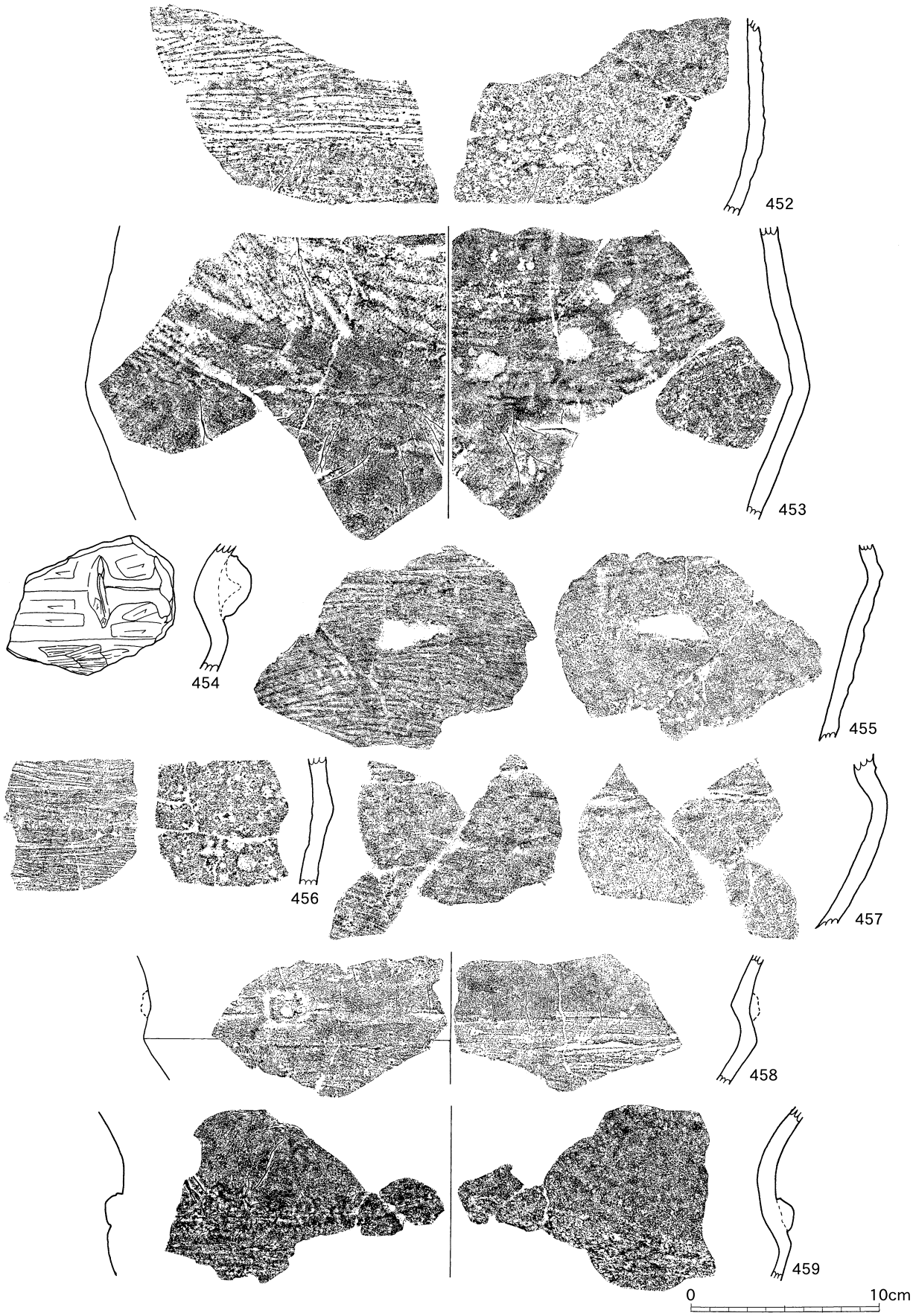
第38図　Ⅻb類土器（深鉢形土器）



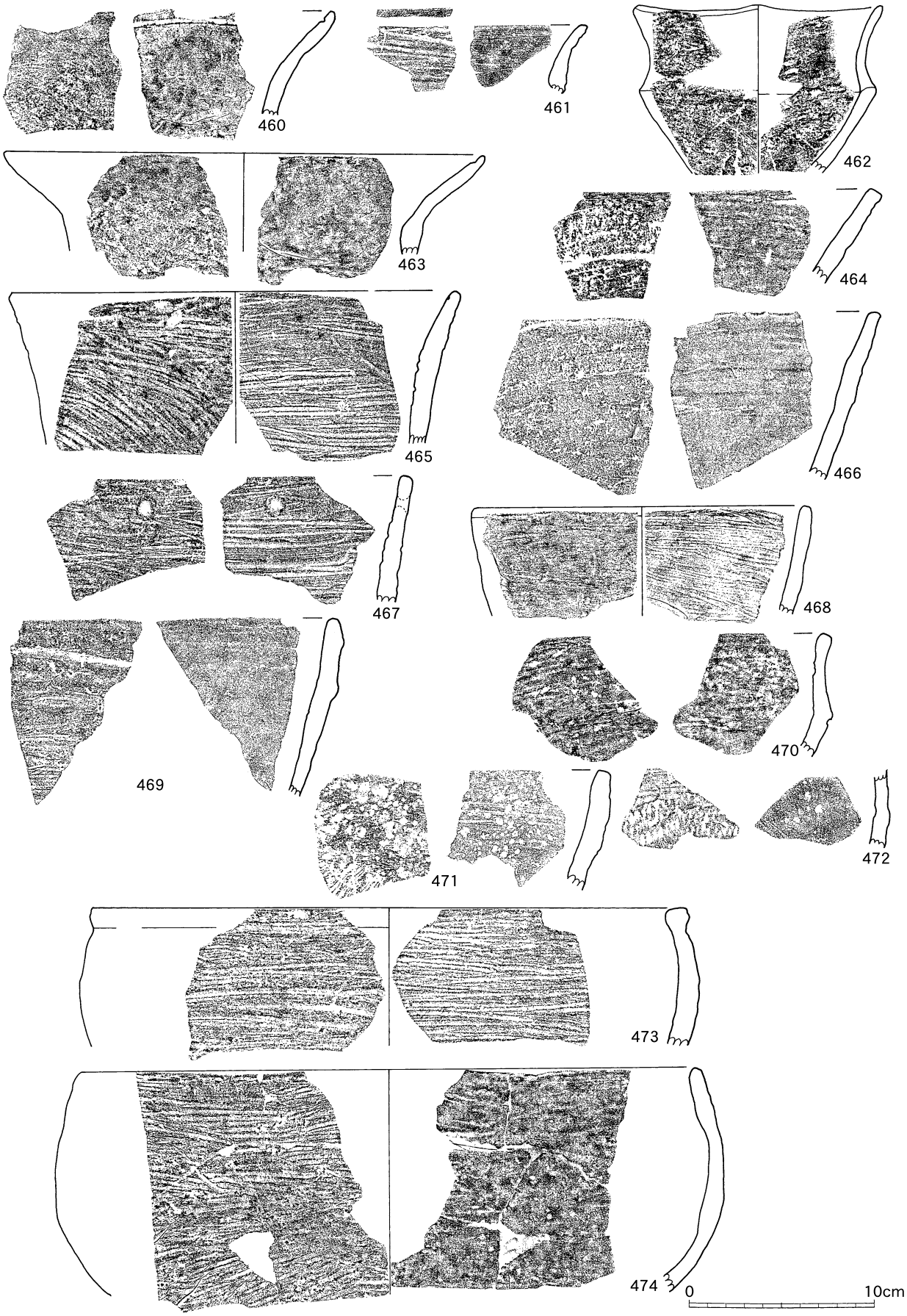
第39図　XVIc類土器（深鉢形土器）1



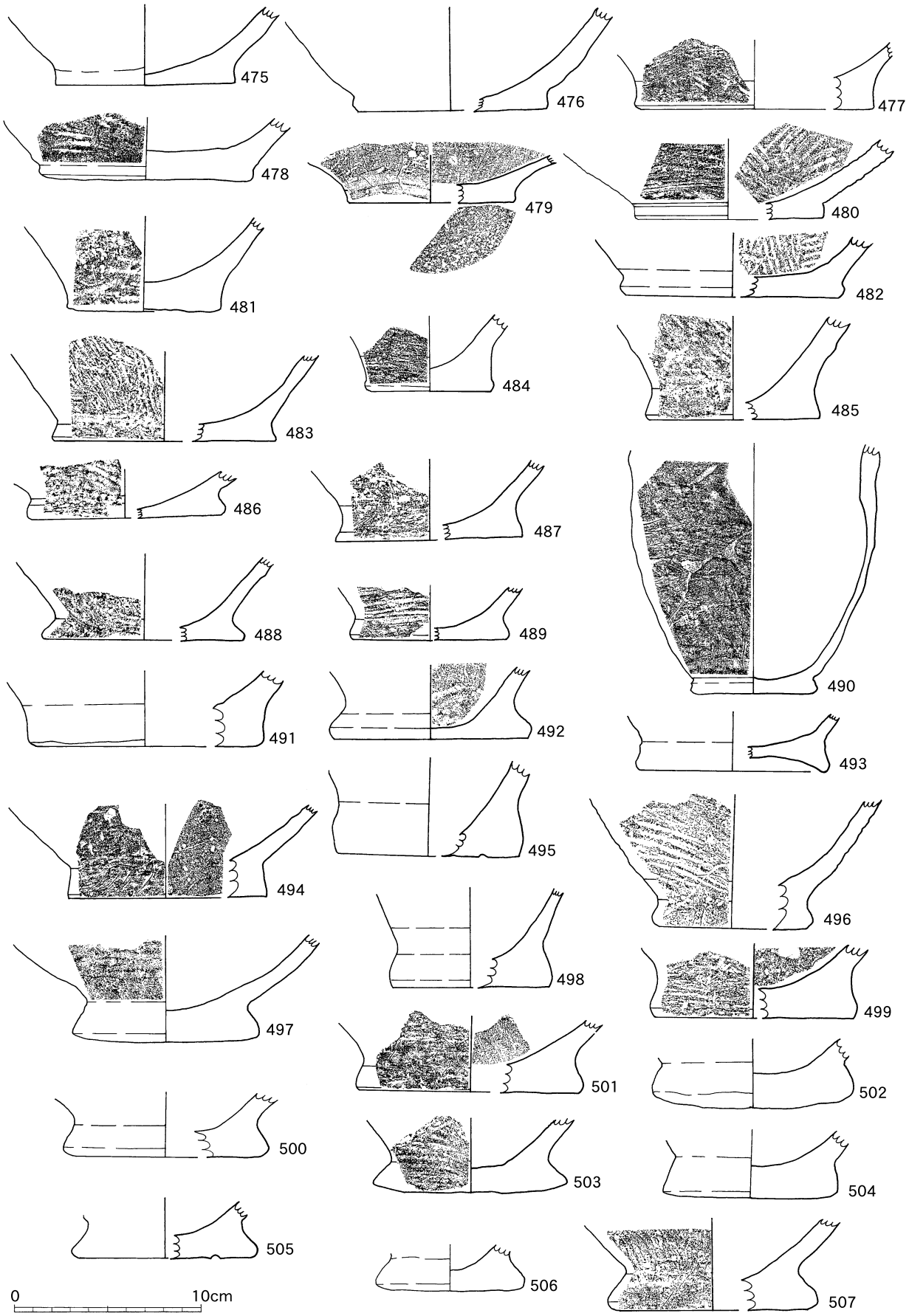
第40図　XVIc類土器（深鉢形土器）2



第41図　XVI類土器（深鉢形土器）胴部



第42図　XVI類土器（中鉢形土器）



第43図　Ⅻ類土器（深鉢形土器）底部

底部（第43図）

底部の破片と分かるものの中で，半分以上が残存しているもの33点を図化した。

475～485は器底が比較的薄く，内湾しながらすぼまり，器底の張り出しが小さいものである。

486～493は器底が比較的薄く，胴部と底部の境が明瞭で，器底の張り出しが大きいものである。

494～496は器底が比較的厚く，内湾しながらすぼまり，器底の張り出しが小さいものである。

497～507は器底が比較的厚く，胴部と底部の境が明瞭で，器底の張り出しが大きいものである。

XVIa類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
37図	411	B-5	Ⅲ	明黄褐	浅黄橙	A.B	沈線，ナデ	ヘラケズリ	
	412	B-5	Ⅲ	橙	明赤褐	A.B	沈線，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	413	B-5	Ⅲ	浅黄	灰黄	A.B	沈線，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	414	B-6	Ⅲ	淡黄	黄	A.B	沈線，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	415	G-7	Ⅲ	橙	橙	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	416	D-5	Ⅲ	黄橙	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	417	F-7	Ⅲ	明赤褐	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	418	B-4	Ⅲ	明黄褐	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	419	F-7	Ⅲ	黄橙	褐灰	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	420	D-5	Ⅲ	褐灰	にぶい橙	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	421	F-7	Ⅳ	褐灰	にぶい黄橙	A.B	条痕文後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	422	G-14	Ⅲ	灰黄褐	黒褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	423	ナシ	Ⅲ	赤	灰褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	424	E-7	Ⅲ	黒褐	黒褐	A.B	条痕文後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	425	E-7	Ⅲ	灰黄褐	黒褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	426	H-5	Ⅲ	明赤褐	黒	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラミガキ	

XVIb類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
38図	427	F-9	Ⅱ	橙	オリーブ黒	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	428	F-9	Ⅱ	暗灰黄	暗灰黄	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	429	G-7	Ⅲ	黄褐	黒褐	A.B.C	条痕文，ヘラミガキ	ヘラケズリ後ナデ	
	430	F-9	Ⅲ	にぶい黄	にぶい黄橙	A.B.C	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	431	G-7	Ⅲ	橙	明褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	432	E-7	Ⅲ	暗灰黄	褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	433	H-5	Ⅲ	明赤褐	赤褐	A.B.C	条痕文	ヘラミガキ	
	434	B-5	Ⅲ	にぶい褐	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	435	H-5	Ⅲ	明赤褐	赤褐	A.B.C	条痕文後ナデ	ヘラミガキ後ナデ	

XVIc類土器 1

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
39図	436	L-7	表	浅黄	にぶい黄	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
	437	L-9	Ⅲ	にぶい橙	黒	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	438	F-7	Ⅲ	灰黄褐	にぶい赤褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	439	D-4	Ⅲ	浅黄	にぶい黄	A.B，砂粒	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	440	D-13	Ⅳ	明褐	にぶい黄橙	A.B	条痕文，ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	441	E-7	Ⅲ	褐	暗灰黄	A.B，砂粒	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	442	G-4	Ⅲ	明黄褐	橙	A.B.C，砂粒	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	443	E-6	Ⅲ	にぶい黄橙	黒褐	A.B.C	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	補修孔
	444	L-9	Ⅲ	黄橙	黄橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	445	E-7	Ⅲ	にぶい黄橙	橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	446	L-9	Ⅲ	橙	黄灰	A.B.C	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
40図	447	E-7	Ⅲ	にぶい黄橙	褐	A.B.C	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	448	H-5	Ⅲ	褐	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	449	H-5	Ⅲ	褐	黒	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	450	H-5	Ⅲ	褐	黒褐	A.B.C	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	451	I-6	Ⅲ	褐灰	褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	

XVI類土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
41図	452	H-5	Ⅲ	にぶい黄褐	暗褐	A.B	条痕文，ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂粒
	453	B-5	Ⅲ	にぶい黄橙	浅黄	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	454	F-7	Ⅲ	浅黄	灰黄	A.B	ヘラケズリ，ナデ	ヘラケズリ	

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
41図	455	F-7	Ⅲ	オリーブ褐	暗褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	456	F-5	Ⅲ	褐	暗褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	砂粒
	457	J-8	Ⅲ	にぶい黄橙	黒褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	砂粒
	458	L-9	Ⅲ	橙	暗灰	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ヘラミガキ	
	459	J-8	Ⅲ	にぶい黄橙	褐	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
42図	460	G-5	Ⅲ	明褐灰	黄灰	A.B	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラケズリ	
	461	D-3	Ⅲ	褐灰	にぶい橙	A.B	条痕文	ヘラミガキ	
	462	J-8	Ⅲ	橙	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
	463	F-8	Ⅲ	浅黄	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	464	ナシ		にぶい橙	黒褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	465	G-5	Ⅲ	淡黄	にぶい黄橙	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	466	H-5	Ⅲ	灰	黒褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
	467	C-3	Ⅲ	灰	橙	A.B	条痕文	ヘラケズリ	補修孔
	468	E-7	Ⅲ	灰	明赤褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	469	L-9	Ⅱ	暗灰	黒	A.B	ヘラケズリ，突帯文	ヘラミガキ	
	470	K-9	Ⅲ	暗黄褐	暗黄褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
	471	D-3	Ⅲ	橙	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	472	H-6	Ⅲ	にぶい橙	灰	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	473	H-6	Ⅲ	にぶい黄橙	黒褐	A.B	条痕文	ヘラケズリ	
	474	C-5	Ⅲ	明赤褐	黒	A.B	条痕文	ヘラミガキ	
43図	475	D-5	Ⅲ	浅黄	黄橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	476	D-5	Ⅲ	灰オリーブ	浅黄	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	477	F-5	Ⅲ	浅黄	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	478	E-6	Ⅲ	浅黄	明黄褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	479	G-11	Ⅲ	淡黄	にぶい橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	
	480	D-3	Ⅲ	淡黄	にぶい黄橙	B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	481	E-7	Ⅲ	浅黄	灰黄	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	482	H-5	Ⅲ	にぶい黄橙	明赤褐	A.B，砂粒	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	483	E-7	Ⅲ	灰	灰	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	484	C-4	Ⅲ	明黄褐	橙	A.B.C	ヘラケズリ，ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	485	L-9	Ⅲ	にぶい黄	にぶい黄褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	486	G-11	Ⅲ	灰白	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	487	D-3	Ⅲ	灰白	にぶい黄橙	B.C	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	488	F-9	Ⅱ	淡黄	浅黄橙	A.B，砂粒	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	489	E-8	Ⅲ	浅黄橙	橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	490	G-10	Ⅲ	橙	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	491	E-7	Ⅲ	浅黄	橙	A.B，砂粒	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	492	C-4	Ⅲ	浅黄	黄橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	493	G-5	Ⅲ	にぶい黄橙	明黄褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	494	F-8	Ⅲ	灰白	浅黄	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	495	D-3	Ⅲ	淡黄	橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	496	I-6	Ⅲ	にぶい褐	橙	A.B，砂粒	条痕ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	497	I-6	Ⅲ	浅黄	黄橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	498	E-7	Ⅲ	浅黄	橙	B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ，ヘラミガキ	
	499	C-4	Ⅲ	浅黄	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	500	J-8	Ⅲ	橙	明黄褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	501	I-5	Ⅲ	浅黄	橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	502	L-9	Ⅲ	黒	橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	
	503	G-7	Ⅲ	浅黄	にぶい橙	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	504	E-7	Ⅲ	浅黄	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	505	D-5	Ⅰ	淡黄	橙	B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	506	L-10	Ⅱ	浅黄	橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	507	G-11	Ⅱ	淡黄	明黄褐	A.B	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	

浅鉢形土器（第44図～第48図）

口縁部から頸部の長さや沈線，玉縁の有無，口縁部の形状や全体の器形など長さや形状，形態を加味しながら分類を試みた。

508～544のⅩⅤa類土器は，肩部が「く」の字に内側へ屈曲する精製土器である。511は口縁部が短いながら，大きく外に外反する。531は補修孔を持つ。542～544は口縁部が広く，肩部の屈曲の短い精製土器である。543は補修孔を持つ。

545～563，580のⅩⅤb類土器は，肩部が丸みをおびる精製土器である。口縁部が，頸部から肩部までの長さより短く，沈線や玉縁，リボン状の突起を口縁部に持つものもある。553・554・556はリボン状の突起を口縁部に持つ。562は頸部と胴部に沈線を持つ。

564～577のⅩⅤc類土器は，口縁部が平坦，あるいは山形の器形を持ち，胴部に沈線あるいは丹塗りを伴う精製土器である。565・566・568は口縁部だが，小破片のため平坦な口縁として図化したが，山形口縁の可能性が高い。573～576は沈線の中に丹が残る。

579，581～595は椀型の浅鉢形土器である。581は口縁部に沈線を持つ。585は口縁部が内湾する。588・593は補修孔を持つ。

596～604はどの分類にも当てはめることのできなかった精製浅鉢である。596は棒状の工具で器面に縦横の細い沈線が刻まれている。598は口縁部に斜位の貼付刻目突帯文が施されている。597は長方形の小さな突帯が付くが，部位は不明である。

600はリボン状の突起を口縁部に，601は口縁部と頸部の間に持つ。599は玉縁の山形口縁で丸底の土器である。602は大きなラッパ状の突帯を口縁部に持つ。603は棒状の突帯を口縁部に持ち内湾する。604は大型の器形の胴部で，精製の鉢形土器である。

ⅩⅤa類土器 1

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
44図	508	F-9	Ⅱ	浅黄	明黄褐	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	玉縁
	509	G-7	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	510	C-3	Ⅲ	灰黄	にぶい黄橙	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	511	C-3	Ⅲ	浅黄	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	512	G-7	Ⅲ	灰	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	玉縁
	513	C-4	Ⅲ	浅黄	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ヘラケズリ	
	514	F-11	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ミガキ	
	515	I-6	Ⅲ	黄灰	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ	
	516	G-11	Ⅲ	灰	にぶい黄橙	A.B	沈線，ミガキ	沈線，ミガキ	
	517	F-7	Ⅲ	灰	灰	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	518	J-8	Ⅲ	浅黄	浅黄	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	519	G-7	Ⅲ	浅黄	浅黄	A.B	沈線，ミガキ	沈線，ミガキ	
	520	I-6	Ⅲ	黄灰	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ	沈線，ヘラケズリ	
	521	G-7	Ⅲ	黄灰	にぶい橙	A.B	沈線，ヘラケズリ	ヘラケズリ，ミガキ	
	522	H-5	Ⅲ	浅黄	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ミガキ	
	523	L-10	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	524	L-10	Ⅲ	黄灰	黒	A.B	ミガキ	ミガキ	
	525	D	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B.C	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	526	F-7	Ⅲ	黄灰	浅黄	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	527	I-6	Ⅲ	暗灰	浅黄	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	528	C-4	Ⅲ	黄灰	明黄褐	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	529	C-4	Ⅲ	にぶい黄橙	黄灰	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	530	G-10	Ⅱ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	531	D-5	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B	ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
45図	532	C-3	Ⅲ	浅黄橙	にぶい橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	533	I-6	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	534	D-4	Ⅲ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	535	C-4	Ⅲ	褐灰	褐灰	A.B	ミガキ	ミガキ	
	536	C-4	Ⅲ	にぶい黄橙	黄灰	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	
	537	F-8	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい褐	A.B	ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	538	E-3	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	539	H-7	Ⅲ	褐灰	褐灰	A.B	ミガキ，玉縁	ヘラケズリ，ミガキ	
	540	K-8	Ⅲ	灰黄褐	灰黄褐	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	
	541	E-8	Ⅲ	褐灰	灰黄褐	A.B	ヘラミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	542	C-5	Ⅲ	灰黄褐	にぶい黄橙	A.B	ヘラケズリ	ミガキ	
	543	E-8	Ⅲ	黒褐	黄灰	A.B	ヘラミガキ	ミガキ	補修孔
	544	F-8	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	

ⅩⅤb類土器 1

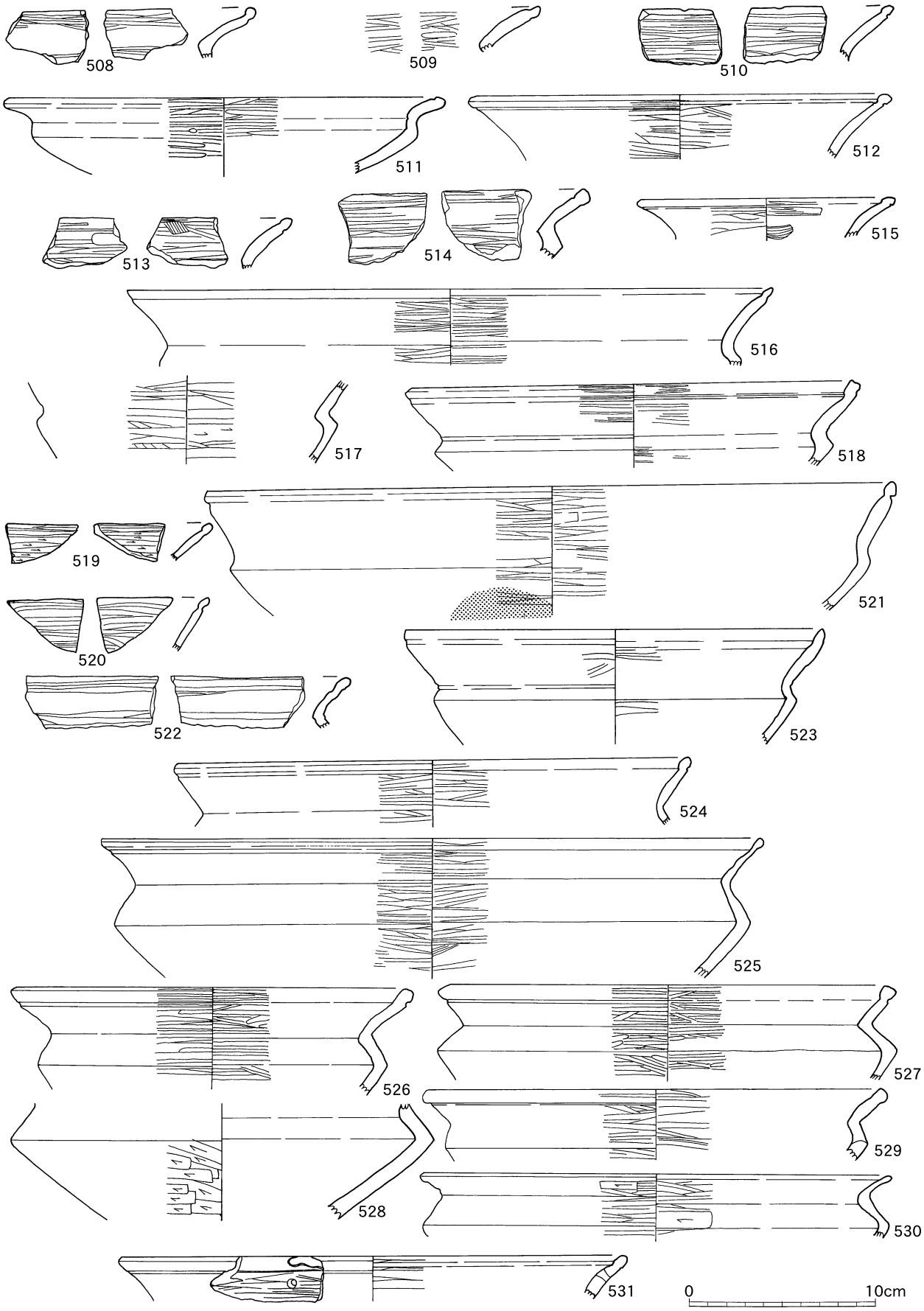
A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
46図	545	I-6	Ⅲ	褐灰	褐灰	A.B	ミガキ	ミガキ	
	546	G-11	Ⅱ	黒褐	黒褐	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	547	F-11	Ⅱ	にぶい褐	浅黄橙	A.B	沈線，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	548	K-9	Ⅲ	褐灰	褐灰	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	549	G-11	Ⅲ	褐灰	にぶい橙	A.B	沈線，ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	550	G-11	Ⅱ	にぶい褐	にぶい褐	A.B	沈線，ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	
	551	L-9	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	552	K-8	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B	沈線，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	553	E-6	Ⅲ	黄灰	にぶい黄	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	ラッパ状突帯
	554	E-7	Ⅲ	灰褐	黒褐	A.B	ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	ラッパ状突帯
	555	L-10	Ⅱ	灰黄	灰黄	A.B	ミガキ	沈線，ミガキ	
	556	F-7	Ⅲ	黒褐	黒褐	A.B	ミガキ	ミガキ	ラッパ状突帯
	557	F-8	Ⅲ	黒褐	黒	A.B	ミガキ	ヘラケズリ	
	558	E-7	Ⅲ	暗灰黄	黄灰	A.B	ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	559	H-5	Ⅱ	灰黄	黄灰	A.B	ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	560	C-5	Ⅲ	黄灰	黄灰	A.B	沈線，ミガキ	沈線，ミガキ	
	561	F-7	Ⅲ	にぶい褐	黒褐	A.B	ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	562	C-4	Ⅲ	にぶい橙	灰褐	A.B	ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ヘラケズリ	
	563	H-5	Ⅱ	褐灰	褐灰	A.B	ミガキ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	
	564	E-7	Ⅲ	浅黄	浅黄	A.B	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	沈線，ミガキ	ベンガラ

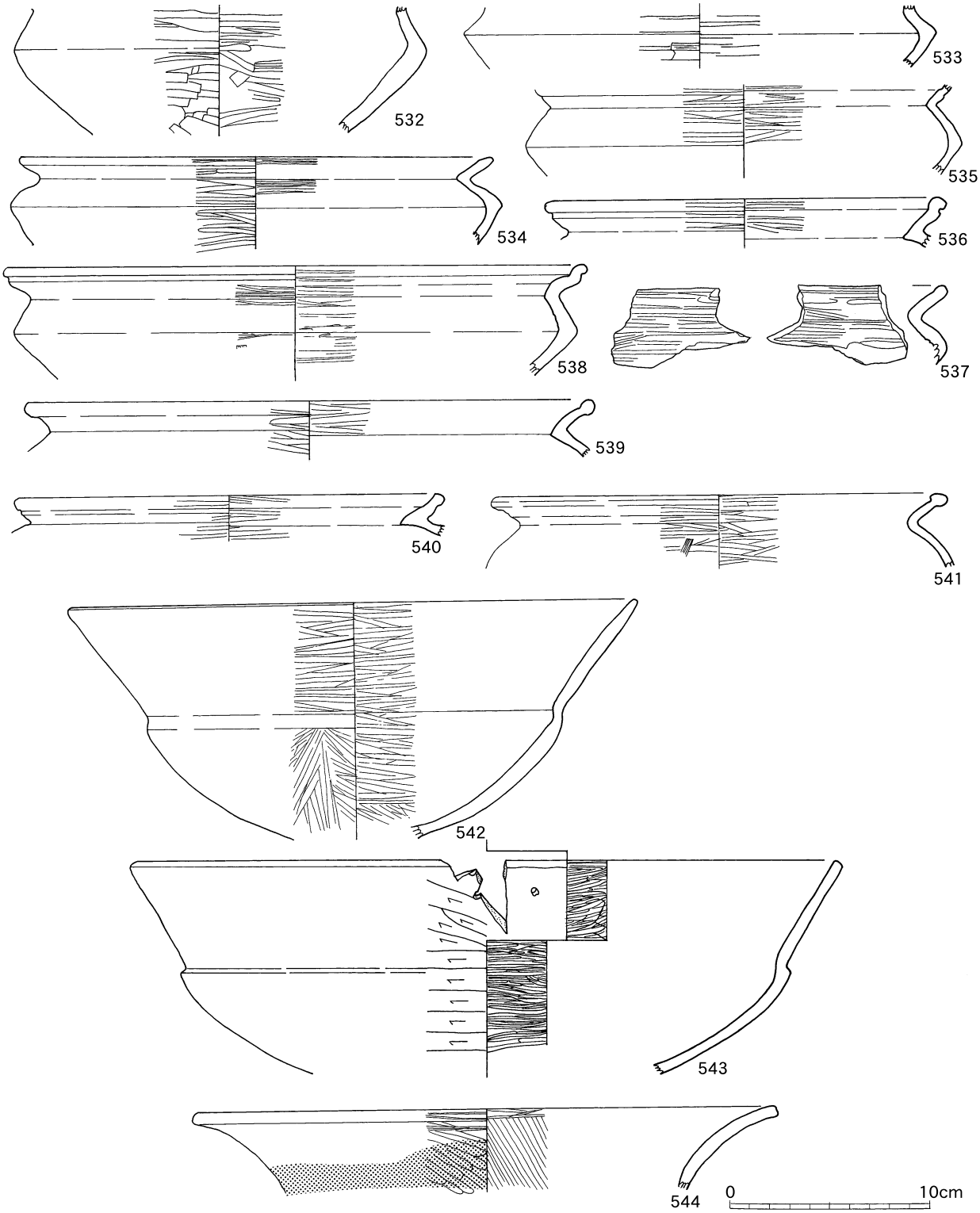
ⅩⅤc類土器 1

A：長石　B：石英　C：角閃石

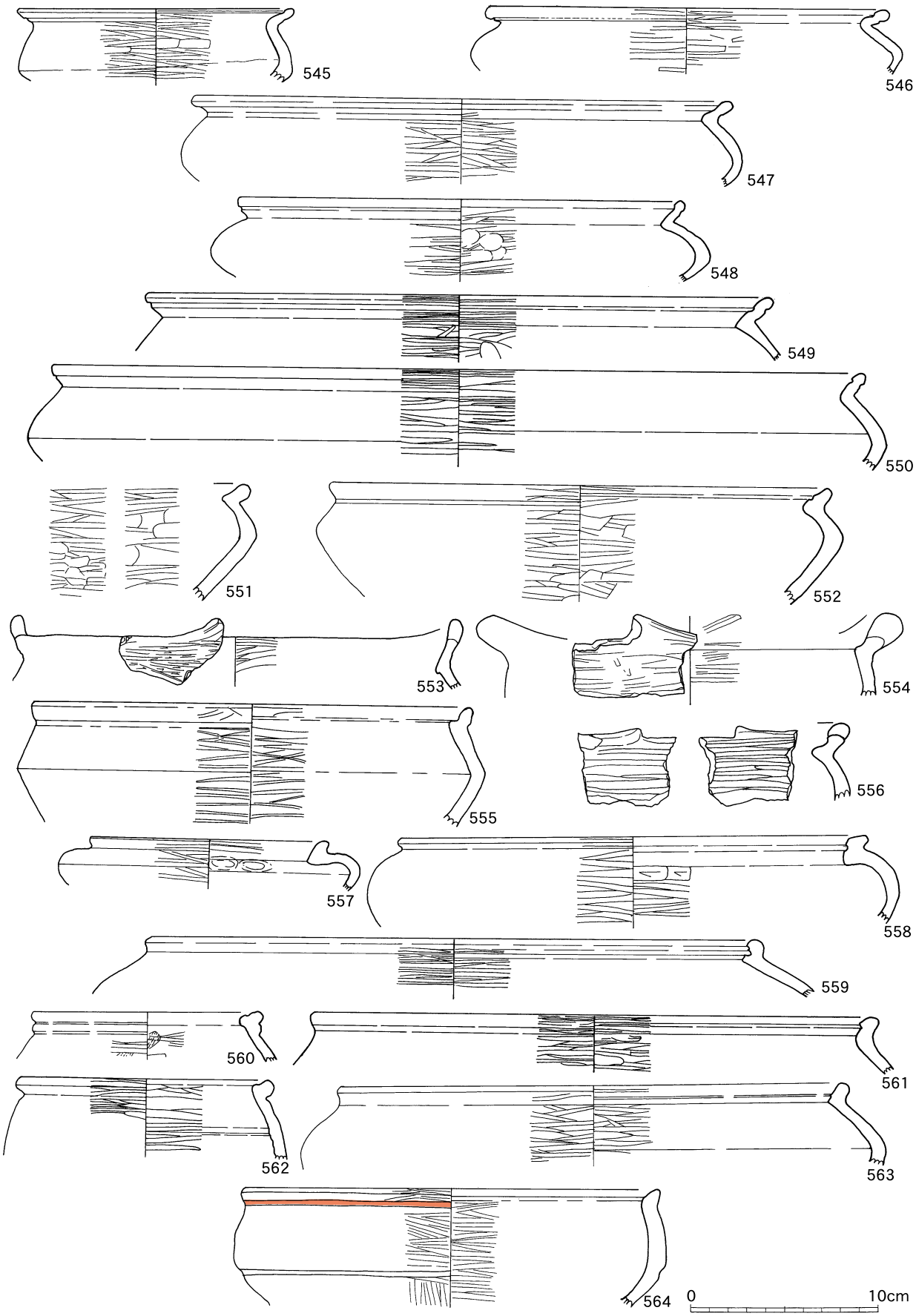
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
47図	565	D-4	Ⅲ	灰黄	黄灰	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	山形口縁
	566	C-4	Ⅲ	灰白	灰オリーブ	A.B	沈線，ミガキ	ヘラケズリ	山形口縁
	567	L-9	Ⅱ	浅黄	明黄褐	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	568	D-7	Ⅲ	浅黄	淡黄	A.B	沈線，ミガキ，ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	
	569	C-4	Ⅲ	灰	浅黄	A.B	ヘラケズリ後ナデ	沈線，ミガキ	
	570	E-3	Ⅲ	灰	灰	A.B	ヘラケズリ	ミガキ	山形口縁
	571	K-8	Ⅲ	灰白	灰	A.B.C	ミガキ	ミガキ	山形口縁
	572	F-10	Ⅱ	灰	灰オリーブ	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	573	E-3	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	沈線，ヘラケズリ	ヘラケズリ	ベンガラ
	574	K-9	Ⅲ	明黄褐	浅黄	A.B	沈線，ミガキ	ミガキ	
	575	K-9	Ⅲ	灰黄	黒褐	A	沈線，ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	
	576	H-6	Ⅲ	黒褐	黒褐	A.B	沈線，ミガキ	ヘラケズリ	
	577	C-4	Ⅲ	褐灰	褐灰	A	ヘラケズリ	ミガキ	
	578	G-10	Ⅱ	黄灰	浅黄橙	A.B	ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	
	579	K-8	Ⅲ	明赤褐	明赤褐	A.B，金雲母	沈線，ヘラケズリ	沈線，ミガキ	完形品
	580	B-4	Ⅲ	灰黄褐	にぶい黄橙	A.B.C	沈線，ヘラケズリ後ミガキ	沈線，ヘラケズリ後ミガキ	完形品



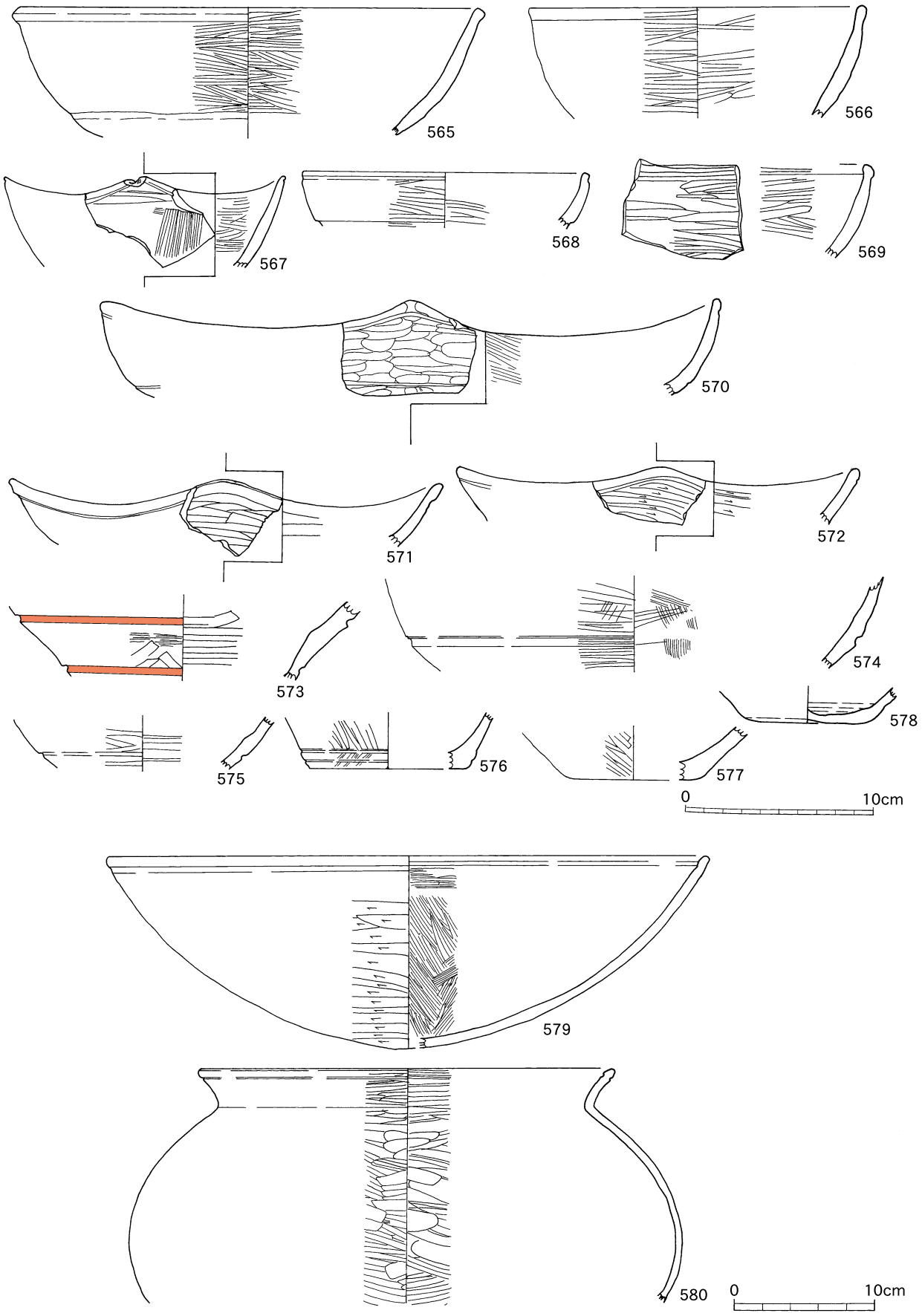
第44図　XVIa類土器（浅鉢形土器）1



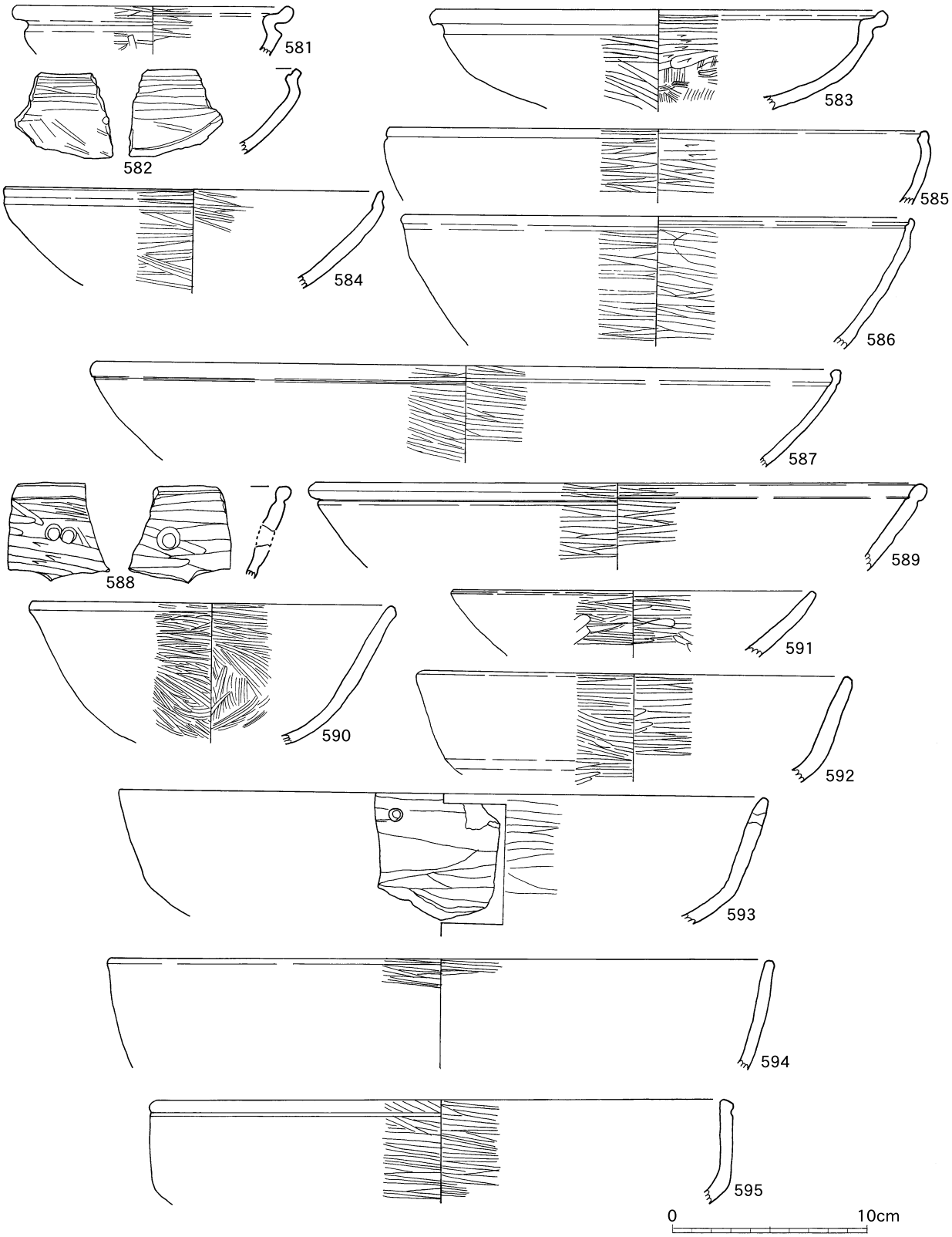
第45図　XVIa類土器（浅鉢形土器）2



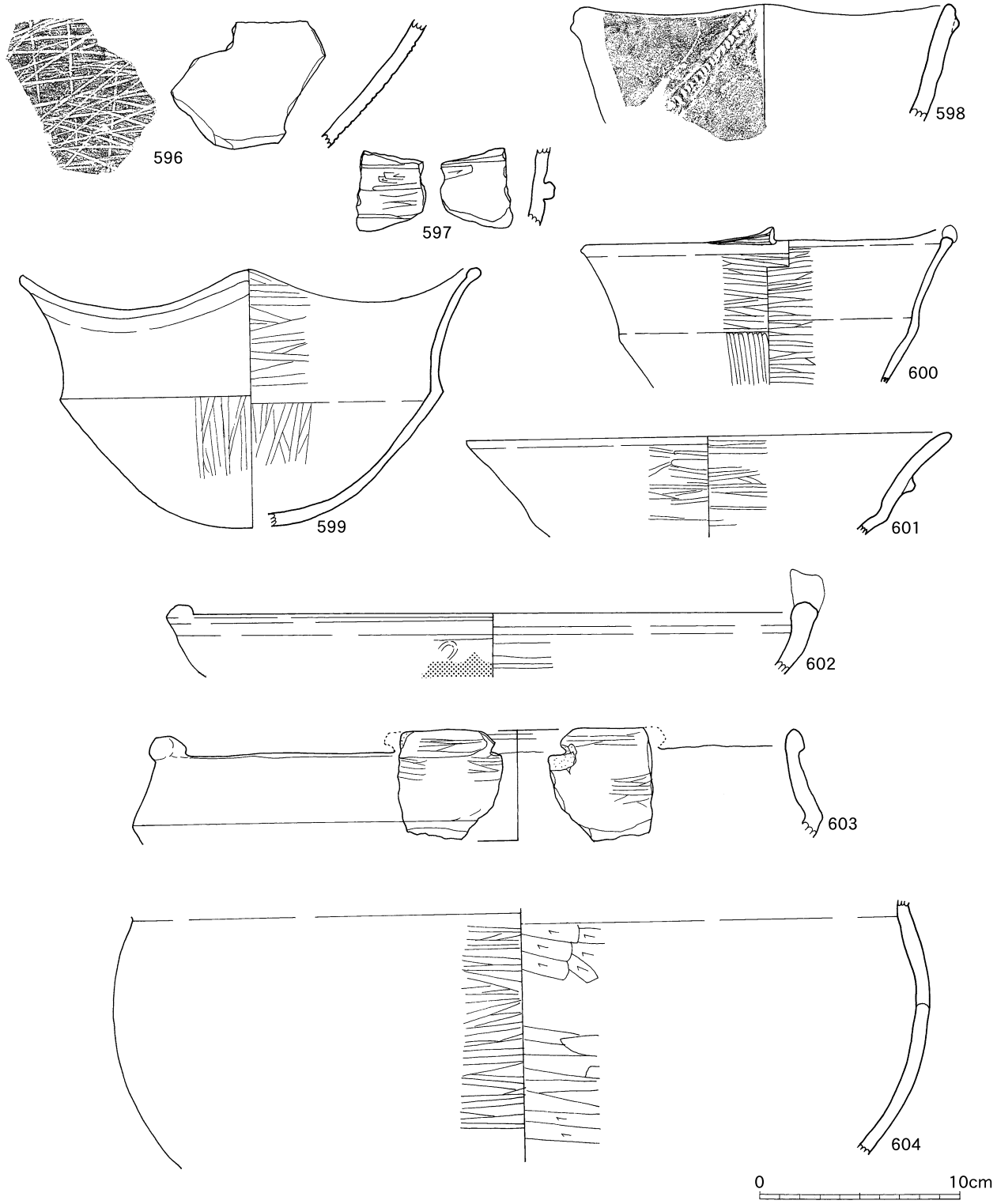
第46図　XVIb類土器（浅鉢形土器）1



第47図　XVIc類土器（浅鉢形土器）1



第48図　XVI類土器（浅鉢形土器）1

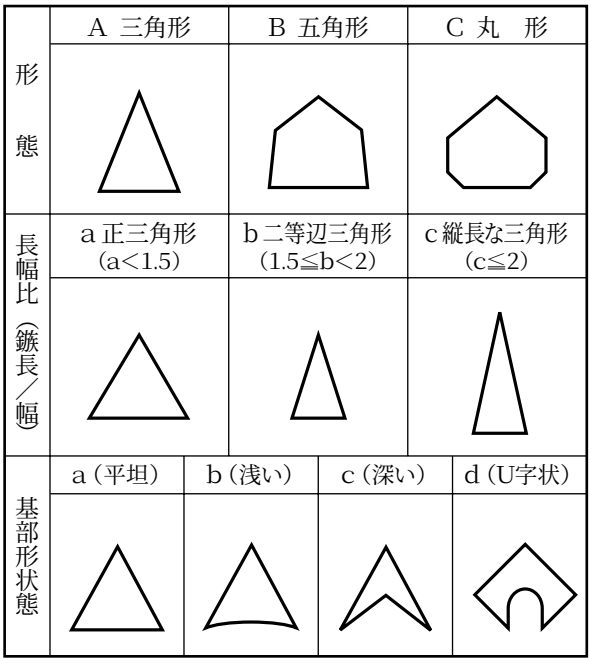


第49図　XVI類土器（浅鉢形土器）2

⑶　遺物（石器）

石鏃（第50～52図）

石鏃は，遺跡の北側斜面から平坦地に掛けて，Ｃ－３～５区から11点，Ｄ－３～５区から９点，Ｅ－７・８区から２点，Ｆ－４・６～８区から17点，Ｇ－４・５区から５点，Ｈ～Ｋ－５～９区から各１点ずつ５点，Ｌ－９区から４点，トレンチＤ（Ｇ－７・８区）から４点，その他15点の合計72点が出土している。



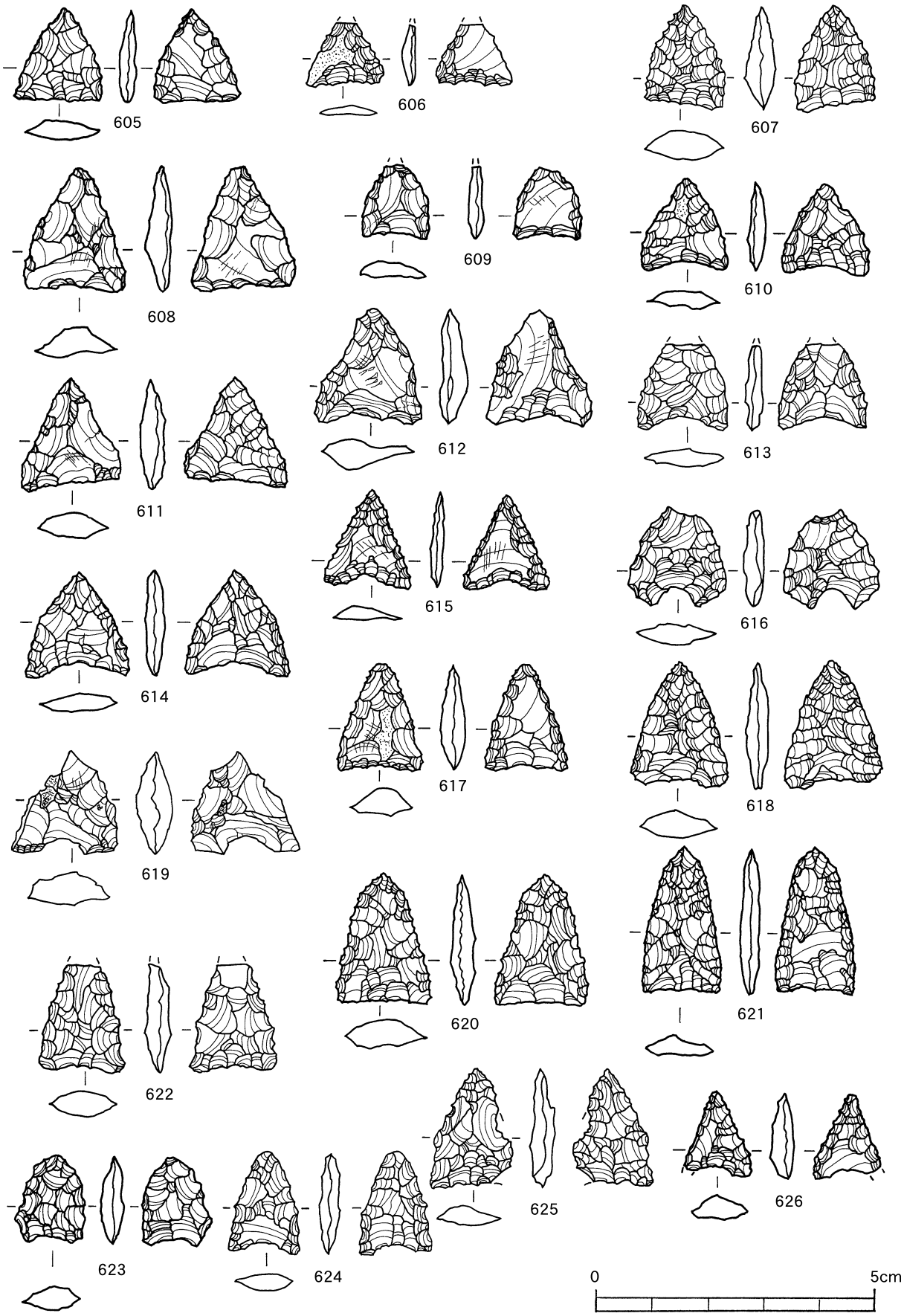
素材は黒曜石，安山岩，頁岩，チャート，蛋白石，鉄石英など豊富である。その内，黒曜石は，肉眼観察によると上牛鼻産に類似するものが３点，三船産に類似するものが１点，北西九州系（椎葉川産系２点，針尾，淀姫産系11点，腰岳産系18点）に類似するものが31点，合計35点が出土している。

分類は，左記の表のとおり，形態，長幅比率（鏃身÷幅），基部形状によって行った。形態を胴部と基部の比率で，ほぼ三角形をＡ，ほぼ五角形をＢ，ほぼ丸形をＣの３類に分けた。長幅比は，1以上1.5未満のほぼ正三角形のもの（正三角形）をａ，1.5以上２未満のほぼ二等辺三角形のもの（二等辺三角形）をｂ，２以上の縦長の三角形のもの（縦長の三角形）をｃの３類に分けた。基部形状は，抉りの深さによって，平坦なものをａ，浅いものをｂ，深いもの（抉りが深く形態がＶ字になるもの）をｃ，抉りが丸くＵ字状になるものをｄ，の４類に分類した。

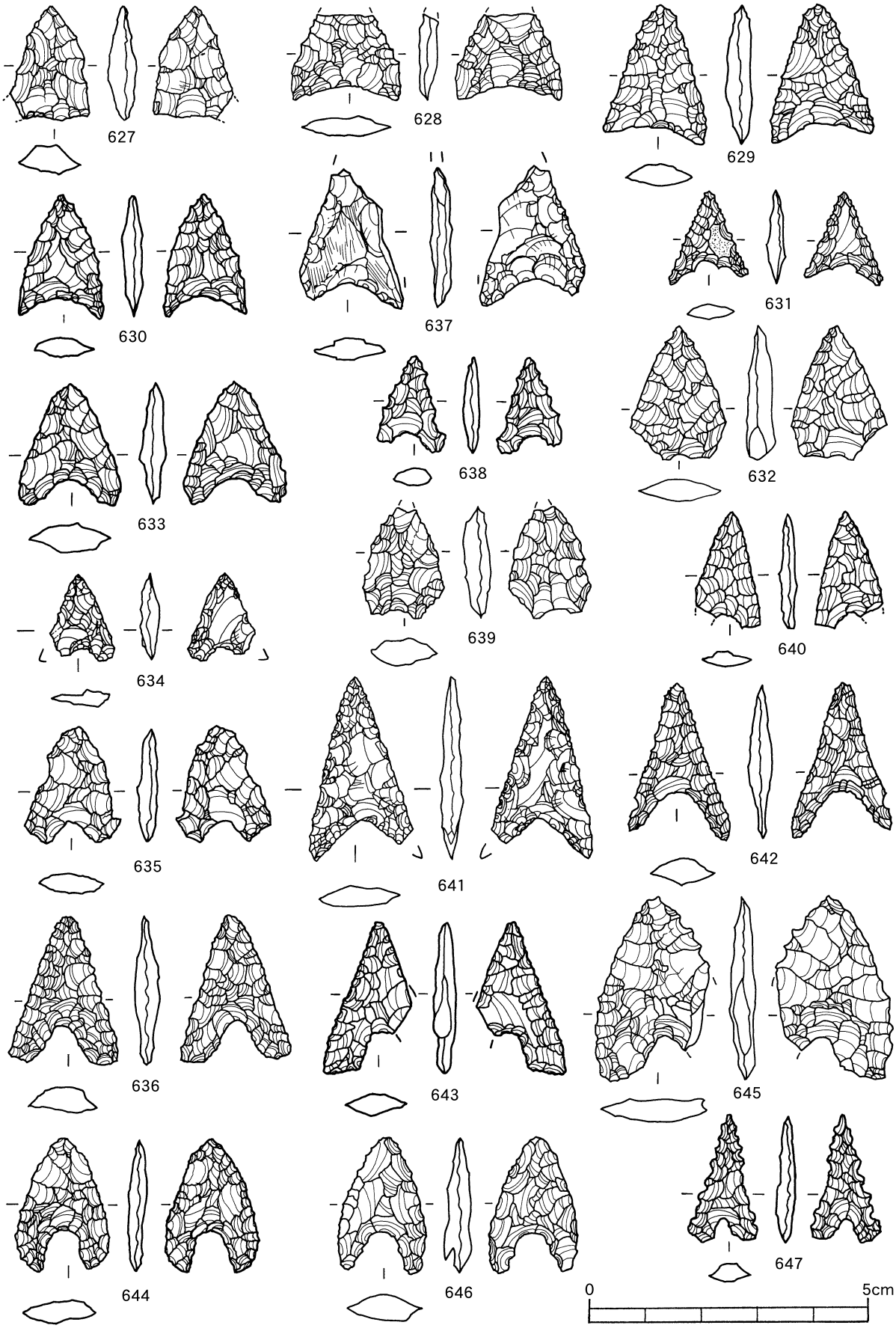
石鏃は打製で，ほとんどのものが入念な交互剥離により調整されている。72点中28点が破損しており，先端部が破損しているものは10点，基端の片方が破損しているものは９点，基端の両方が破損しているものは１点，形状が不明なものが８点である。なお，形状が不明な８点は，掲載していない。

XVI類土器

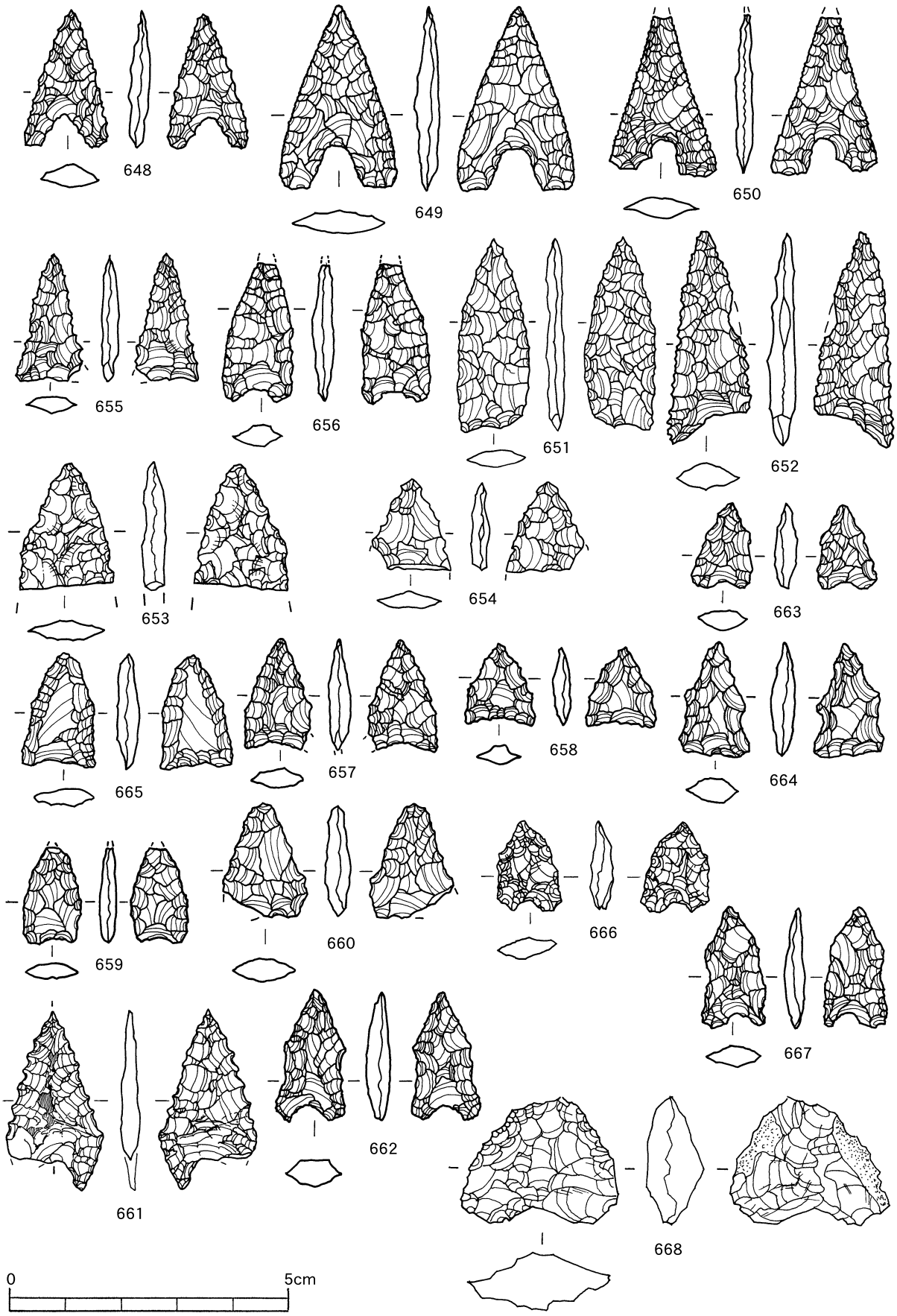
挿図番号	報告番号	出土区	層位	色調 内	色調 外	胎土	外面	内面	備考
				A：長石　B：石英　C：角閃石					
48図	581	Ｂ－５	Ⅲ	褐灰	褐灰	Ａ.Ｂ	沈線，ミガキ	ミガキ	
	582	Ｅ－７	Ⅲ	灰黄褐	褐灰	Ａ.Ｂ	ミガキ	ミガキ	
	583	Ｂ－５	Ⅲ	にぶい黄橙	褐灰	Ａ.Ｂ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	584	Ｃ－４	Ⅲ	灰黄褐	灰黄褐	Ａ.Ｂ	沈線，ミガキ	ミガキ	
	585	Ｃ－５	Ⅲ	褐灰	にぶい黄橙	Ａ.Ｂ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	
	586	Ｅ－７	Ⅲ	褐灰	黒褐	Ａ.Ｂ	沈線，ミガキ	ミガキ	
	587	Ｈ－６	Ⅲ	にぶい褐	にぶい褐	Ａ.Ｂ	沈線，ミガキ	ミガキ	
	588	Ｉ－６	Ⅲ	にぶい褐	にぶい橙	Ａ.Ｂ.Ｃ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ	穿孔，補修孔
	589	Ｉ－６	Ⅲ	黒褐	にぶい橙	Ａ.Ｂ	沈線，ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	590	Ｉ－２		黒褐	黒褐	Ａ.Ｂ	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	591	Ｅ－５	Ⅲ	褐灰	灰黄	Ａ.Ｂ	ヘラケズリ後ミガキ	ヘラケズリ後ミガキ	
	592	Ｋ－９	Ⅱ	にぶい黄橙	浅黄橙	Ａ.Ｂ.Ｃ	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	
	593	Ｌ－10	Ⅱ	にぶい黄橙	灰黄	Ａ.Ｂ	ヘラケズリ，ミガキ	ヘラケズリ，ミガキ	補修孔なし
	594	Ｌ－９	Ⅲ	黄灰	黄灰	Ａ.Ｂ	ミガキ	ミガキ	
	595	Ｌ－10	Ⅲ	黒褐	黒褐	Ａ.Ｂ	沈線，ミガキ	ミガキ	
49図	596	ナシ	Ⅲ	灰	黄	Ａ.Ｂ	沈線（縦・横・斜），ヘラケズリ	ミガキ	
	597	Ｅ－７	Ⅲ	明黄褐	にぶい黄橙	Ａ.Ｂ.Ｃ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	長方形突帯
	598	Ｃ－４	Ⅲ	黄灰	にぶい黄	A.B.C，砂粒	ミガキ	ミガキ	刻目貼付突帯
	599	Ｇ－６	Ⅲ	灰	橙	Ａ.Ｂ.Ｃ	ミガキ	ミガキ	
	600	Ｉ－６	Ⅲ	灰	灰	Ａ.Ｂ	ミガキ	ミガキ	
	601	Ｇ－５	Ⅲ	灰	灰黄	Ａ.Ｂ	ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	リボン状突起
	602	Ｅ－７	Ⅲ	灰	灰	Ａ.Ｂ	ミガキ	ヘラケズリ	ラッパ状突起
	603	Ｅ－７	Ⅲ	橙	橙	Ａ.Ｂ	ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	棒状突起
	604	Ｂ－４	Ⅲ	灰白	灰	Ａ.Ｂ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	



第50図　縄文時代晩期石器１（石鏃）



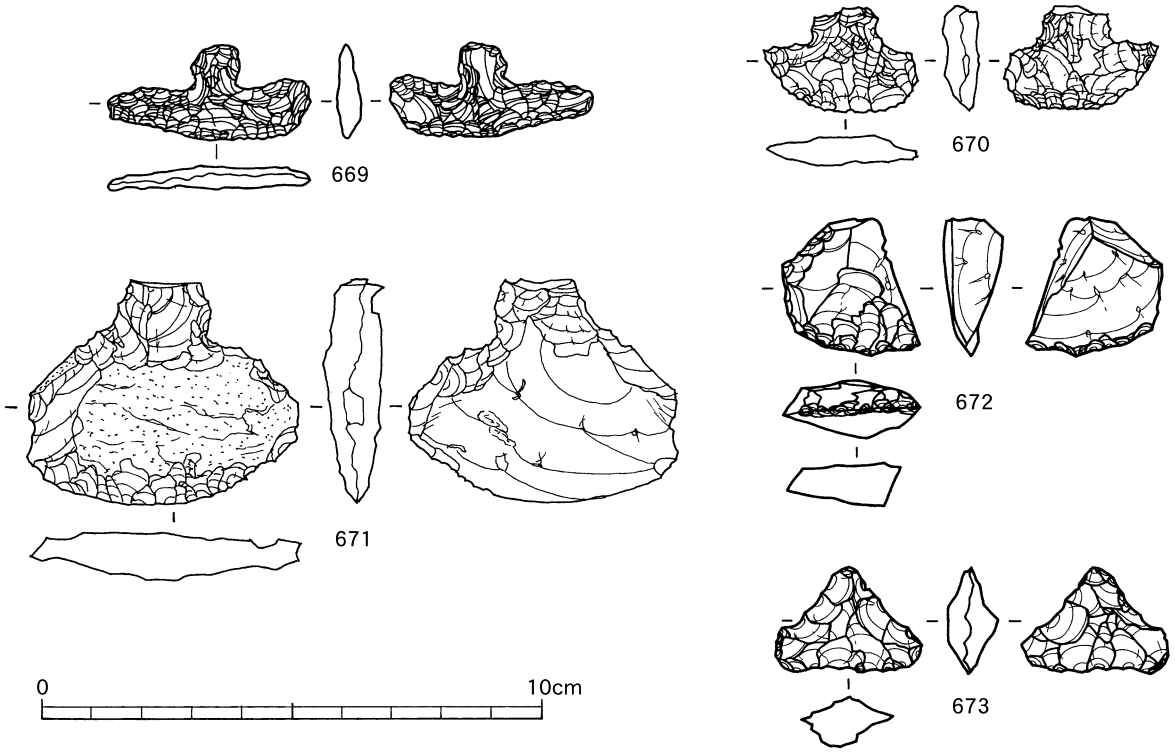
第51図　縄文時代晩期石器２（石鏃）



第52図　縄文時代晩期石器３（石鏃）

縄文時代晩期石器１～３

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	鏃身 cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
50図	605	Ⅲ	石鏃	Ｆ－４	安山岩	1.66	1.6	0.3	0.64	Ａａａ
	606	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	硬質頁岩	1.12	1.47	0.2	0.32	Ａａａ
	607	Ⅲ	石鏃	Ｔｒ－Ｄ	安山岩	1.9	1.45	0.5	1.05	Ａａａ
	608	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	無斑晶安山岩	2.25	1.85	0.48	1.56	Ａａａ
	609	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	無斑晶安山岩	1.35	1.2	0.3	0.46	Ａａａ
	610	Ⅲ	石鏃	Ｆ－10	安山岩	1.65	1.55	0.3	1.01	Ａａａ
	611	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	安山岩	2.02	1.82	0.45	1.14	Ａａａ
	612	Ⅲ	石鏃	Ｃ－４	安山岩	2.1	1.9	0.5	1.41	Ａａｂ
	613	Ⅲ	石鏃	Ｅ－３	安山岩	1.55	1.6	0.25	0.66	Ａａｂ
	614	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	安山岩	1.9	1.9	0.35	0.96	Ａａｂ
	615	Ⅲ	石鏃	Ｇ－10	黒曜石（上牛鼻）	1.7	1.55	2	0.45	Ａａｂ
	616	Ⅲ	石鏃	Ｔｒ－Ｄ	黒曜石（腰岳）	1.8	1.73	0.35	0.93	Ａａｂ
	617	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	安山岩	1.9	1.5	0.45	1.04	Ａａｂ
	618	Ⅲ	石鏃	Ｃ－４	安山岩	2.3	1.75	0.4	1.26	Ａａｂ
	619	Ⅲ	石鏃	Ｔｒ－Ｄ	黒色安山岩	1.85	1.95	0.65	1.61	Ａａｂ
	620	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	安山岩	2.35	1.7	0.45	1.41	Ａａｂ
	621	Ⅲ	石鏃	Ｆ－８	黒曜石（腰岳）	2.65	1.45	0.35	1.13	Ａｂｂ
	622	Ⅲ	石鏃	Ｆ－８	安山岩	1.95	1.55	0.5	1.28	Ａｂｂ
	623	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	黒曜石（腰岳）	1.6	1.3	0.4	0.66	Ｂａｂ
	624	Ⅲ	石鏃	Ｅ－７	黒曜石（針尾・淀姫）	1.85	1.3	0.35	0.71	Ｂａｂ
	625	Ⅲ	石鏃	Ｇ－５	黒曜石（腰岳）	1.15	1.5	0.4	0.77	Ｂａｂ
	626	Ⅲ	石鏃	Ｃ－３	黒曜石（針尾・淀姫）	1.55	1.2	0.4	0.46	Ｂａｂ
51図	627	Ⅲ	石鏃	Ｌ－９	安山岩	2.03	1.4	0.5	1.01	Ｃａｂ
	628	Ⅲ	石鏃	攪乱	黒曜石（腰岳）	1.51	1.9	0.35	0.81	Ａａｂ
	629	Ⅲ	石鏃	Ｃ－３	黒曜石（針尾・淀姫）	1.5	1.85	0.45	1.5	Ａａｂ
	630	Ⅲ	石鏃	Ｃ－３	黒曜石（針尾・淀姫）	2.19	1.48	0.35	0.85	Ａａｃ
	631	Ⅲ	石鏃	Ｄ－４	珪質安山岩	1.68	1.4	0.35	0.31	Ａａｃ
	632	Ⅲ	石鏃	Ｃ－５	黒曜石（針尾・淀姫）	2.4	1.75	0.45	1.43	Ａａｃ
	633	Ⅲ	石鏃	Ｆ－６	安山岩	2.15	1.8	0.5	1.16	Ａａｃ
	634	Ⅲ	石鏃	Ｇ－５	黒曜石（上牛鼻）	1.55	1.15	3	0.46	Ａａｃ
	635	Ⅲ	石鏃	表採	黒曜石（腰岳）	2.1	1.7	0.35	0.85	Ａａｃ
	636	Ⅲ	石鏃	Ｃ－５	黒曜石（腰岳）	2.65	1.95	0.45	1.31	Ａａｃ
	637	Ⅲ	石鏃	Ｌ－９	安山岩	2.5	1.8	0.4	0.4	Ａｂｃ
	638	Ⅲ	石鏃	Ｊ－７	黒曜石（腰岳）	1.71	1.13	0.4	0.38	Ａｂｃ
	639	Ⅲ	石鏃	Ｔｒ－Ａ	チャート	2.01	1.48	0.5	1.16	Ａｂｃ
	640	Ⅲ	石鏃	Ｆ－４	頁岩	2.1	1.23	0.3	0.58	Ａｂｃ
	641	Ⅲ	石鏃	表採	黒曜石（腰岳）	3.25	1.8	0.35	0.92	Ａｂｃ
	642	Ⅲ	石鏃	Ｄ－４	黒曜石（針尾・淀姫）	2.8	1.8	0.45	0.92	Ａｂｃ
	643	Ⅲ	石鏃	Ｃ－４	鉄石英	2.72	1.58	0.4	1.1	Ａｂｃ
	644	Ⅲ	石鏃	Ｋ－９	珪質頁岩	2.4	1.7	0.4	0.98	Ａａｄ
	645	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	黒曜石（針尾・淀姫）	3.27	1.97	0.45	2.29	Ａｂｄ
	646	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	安山岩	2.45	1.55	0.35	1.01	Ａｂｄ
	647	Ⅲ	石鏃	Ｇ－５	黒曜石（椎葉川）	2.3	1.3	0.3	0.44	Ａｂｄ
52図	648	Ⅲ	石鏃	Ｆ区	黒曜石（針尾・淀姫）	2.5	1.5	0.4	0.8	Ａｂｄ
	649	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	安山岩	3.31	2.1	0.5	2.07	Ａｂｄ
	650	Ⅲ	石鏃	Ｃ－４	チャート	2.8	1.9	0.3	1.32	Ａｂｄ
	651	Ⅲ	石鏃	Ｆ－10	安山岩	3.5	1.3	0.3	1.49	Ａｃｂ
	652	Ⅲ	石鏃	Ｉ－６	黒曜石（腰岳）	3.82	1.5	0.45	1.85	Ａｃｂ
	653	Ⅲ	石鏃	表採	チャート	2.3	1.2	0.4	0.84	Ａｃｂ
	654	Ⅲ	石鏃	Ｆ－６	チャート	1.59	1.4	0.3	0.59	Ａｃｂ
	655	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	チャート	2.3	1.2	0.3	0.71	Ａｂｂ
	656	Ⅲ	石鏃	Ｆ－４	チャート	2.5	1.3	0.35	1.02	Ａｂｂ
	657	Ⅲ	石鏃	Ｌ－９	蛋白石	2	1.2	0.4	0.82	Ａｂｂ
	658	Ⅲ	石鏃	Ｃ－４	安山岩	1.5	1.25	0.3	0.52	Ａｂｂ
	659	Ⅲ	石鏃	Ｈ－５	蛋白石	1.7	1.05	0.3	0.61	Ａｂｂ
	660	Ⅲ	石鏃	Ｆ－８	蛋白石	2.03	1.45	0.4	1.1	Ａｂｂ
	661	Ⅲ	石鏃	Ｔｒ－Ｄ	珪質頁岩	3.15	1.85	0.4	1.3	Ａｂｂ
	662	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	黒曜石（腰岳）	2.3	1.3	0.45	1.03	Ａｂｂ
	663	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	黒曜石（腰岳）	1.53	1.1	0.4	0.42	Ａａｂ
	664	Ⅲ	石鏃	Ｇ－５	頁岩	2.1	1.3	0.45	0.86	Ａａｂ
	665	Ⅲ	石鏃	Ｆ－７	チャート	2.05	1.34	0.4	1.09	Ａａｂ
	666	Ⅲ	石鏃	Ｄ－３	黒曜石（腰岳）	1.6	1.7	0.4	0.66	Ａａｂ
	667	Ⅲ	石鏃	表採	黒曜石（腰岳）	2.17	1.15	0.3	0.72	Ａａｂ
	668	Ⅲ	石鏃	Ｌ－９	黒曜石（上牛鼻）	2.45	2.75	1.1	5.3	Ａａｂ



第53図　縄文時代晩期石器４（石匕・スクレイパー）

石匕・スクレイパー（第53図）

669・670は小型の石匕で，石材は669がチャート，670は黒曜石である。横型で全体に両面からの細かな交互剥離が施される。両側縁には，使用による微細な剥離が観られる。671は54×43㎜の横型の石匕で，石材は黒曜石である。自然面を残し，片面を剥離調整している。

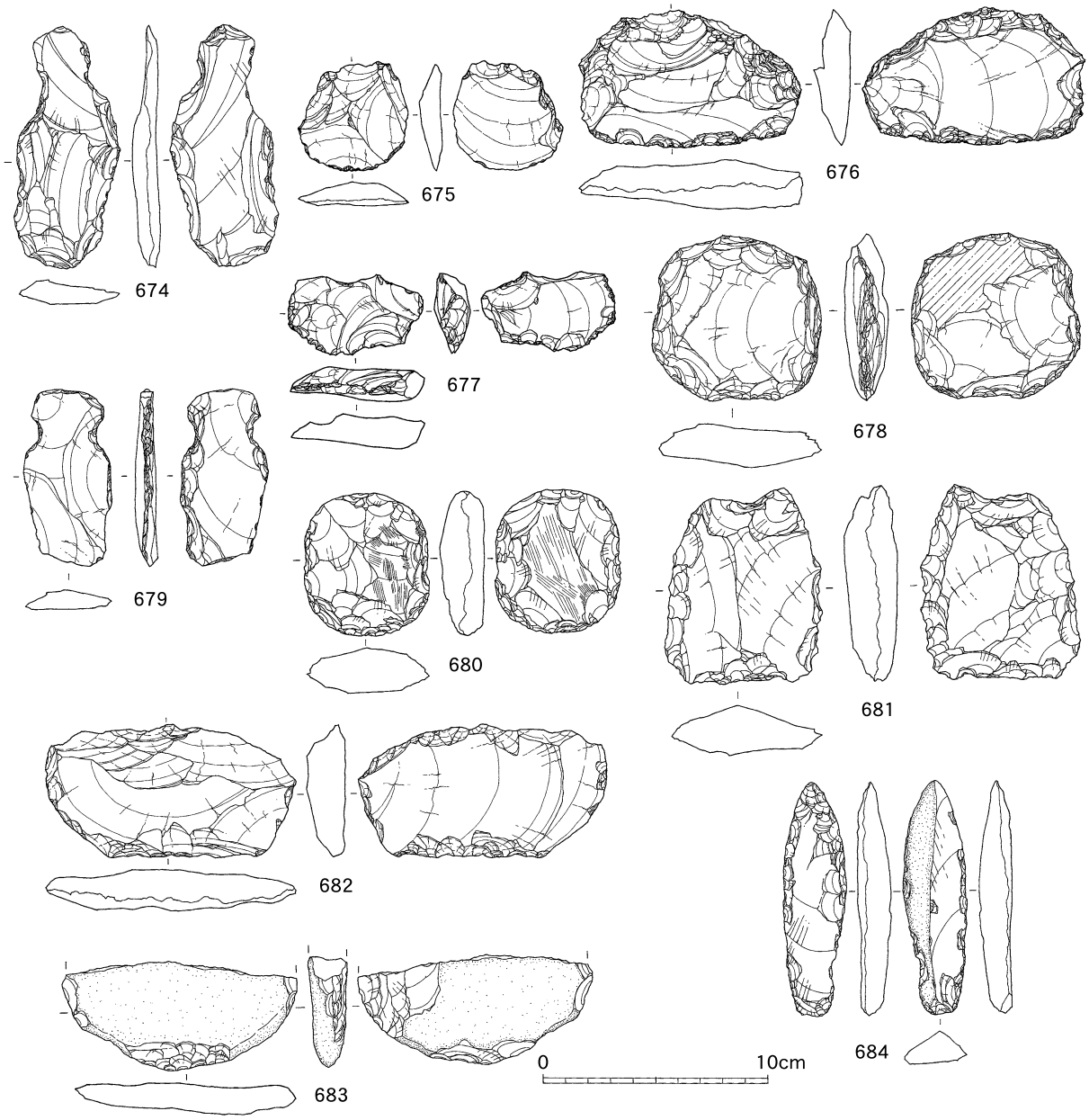
672・673はスクレイパーである。672は下部に押圧剥離による加工を施し，刃部形成が行われている。673は硬質頁岩製で，背部に瘤状の突起を形成し，突起と左刃部背面に摩耗がみられる。

上記の黒曜石の原産地は，肉眼観察によると，上牛鼻産系のものである。

縄文時代晩期石器４

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
53図	669	Ⅲ	石匕	C-3	チャート	1.9	4.1	0.4	2.5	
	670	Ⅲ	石匕	C-3	黒曜石(上牛鼻)	2.1	3.1	0.6	3.62	
	671	Ⅲ	石匕	C-3	黒曜石(上牛鼻)	4.5	5.4	1.1	22.63	
	672	Ⅲ	スクレイパー	D-3	黒曜石(上牛鼻)	2.8	2.3	1.2	6.81	
	673	Ⅲ	スクレイパー	G-5	頁岩	2.9	2	1	3.12	
54図	674	Ⅲ	スクレイパー	H-5	頁岩	10.8	4.8	1.1	51.72	
	675	Ⅲ	スクレイパー	H-5	頁岩	4.7	4.7	0.95	23.56	
	676	Ⅲ	スクレイパー	H-5	頁岩	9.9	6	2.1	135	
	677	Ⅲ	スクレイパー	H-5	黒曜石(腰岳)	5.9	3.3	1.6	32.16	
	678	Ⅲ	スクレイパー	F-4	頁岩	6.5	7.4	1.8	135	
	679	Ⅲ	スクレイパー	K-8	ホルンフェルス	7.7	3.9	0.85	30.51	
	680	Ⅲ	スクレイパー	H-5	頁岩	6.45	5.55	2	92.44	
	681	Ⅰ	スクレイパー	H-5	頁岩	8.7	7.1	2.35	160	
	682	Ⅴ	スクレイパー	E-6	頁岩	5.8	11.1	1.7	90	
	683	Ⅴ	スクレイパー	L-10	安山岩	4.8	10.5	1.5	107.82	
	684	Ⅲ	スクレイパー	K-8	頁岩	10.4	2.9	1.45	40.59	

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
60図	685	Ⅲ	石錘	F-6	珪藻岩	2.85	1.8	1.7	7.7	
	686	Ⅲ	石錘	G-5	砂岩	4.2	2.3	2.65	32.87	
	687	Ⅲ	石錘	D-3	滑石	3	2.1	0.9	7.38	
	688	Ⅲ	石錘	H-5	安山岩	5.25	6.1	1.95	97.72	
	689	Ⅲ	石錘	C-4	安山岩	6.1	6.8	1.55	92.55	
	690	Ⅲ	石錘	I-6	安山岩	4.7	8.1	1.4	82.94	
	691	Ⅲ	石錘	H-5	安山岩	5.5	6.8	1.55	82.89	
	692	Ⅲ	石錘	D-3	安山岩	6.2	7.2	2	112.93	
	693	Ⅲ	石錘	H-5	安山岩	6.95	7.9	2.25	195	
	694	Ⅲ	石錘	D-5	安山岩	7.2	7	2.1	150	
	695	Ⅲ	石錘	I-6	安山岩	9.15	8.3	2.3	150	
	696	Ⅲ	石錘	I-6	安山岩	7.1	6.9	2.5	109.52	
	697	Ⅰ	石錘	E-11	安山岩	8.2	8.2	3	320	



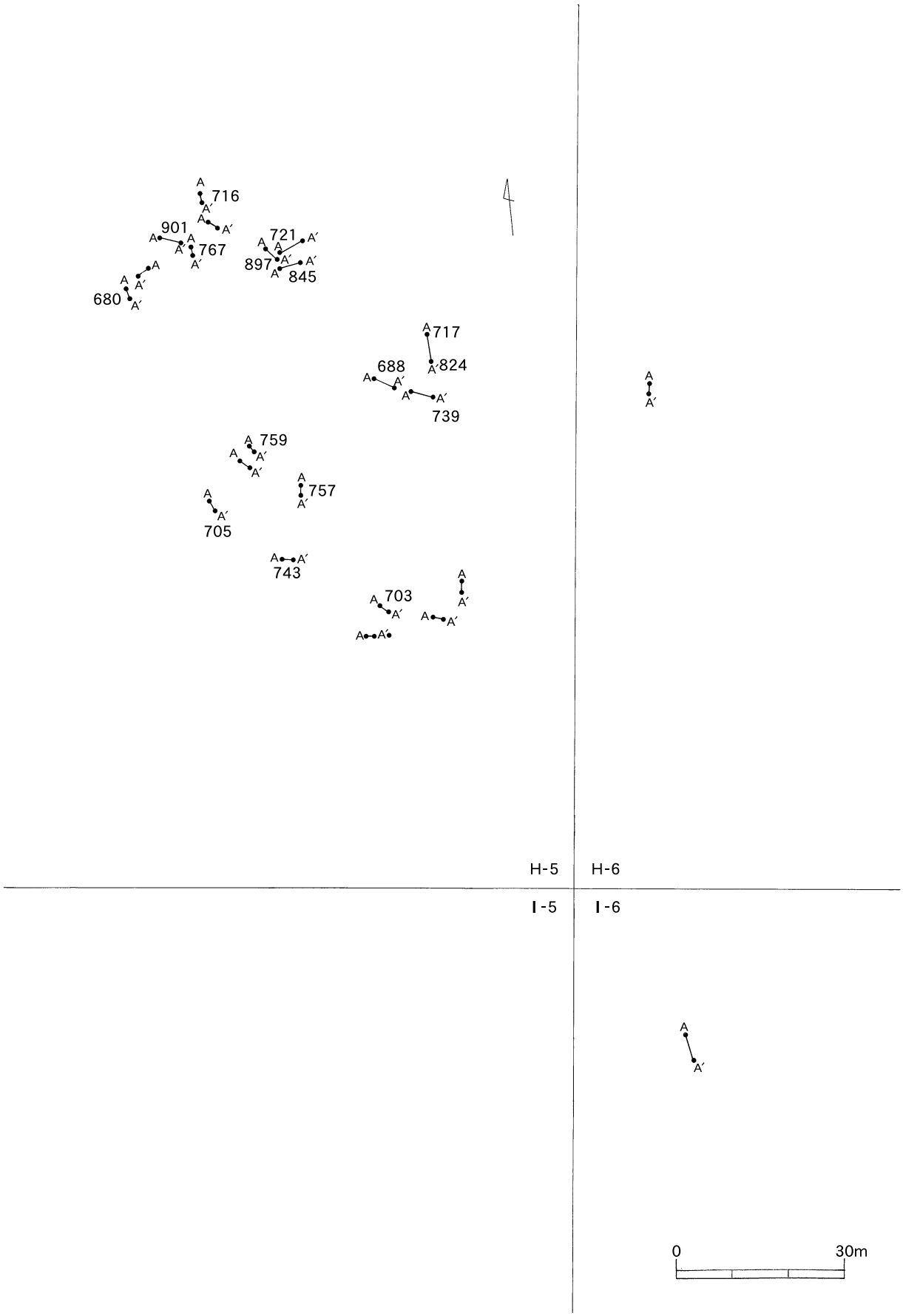
第54図　縄文時代晩期石器５（スクレイパー）

スクレイパー（第54図）

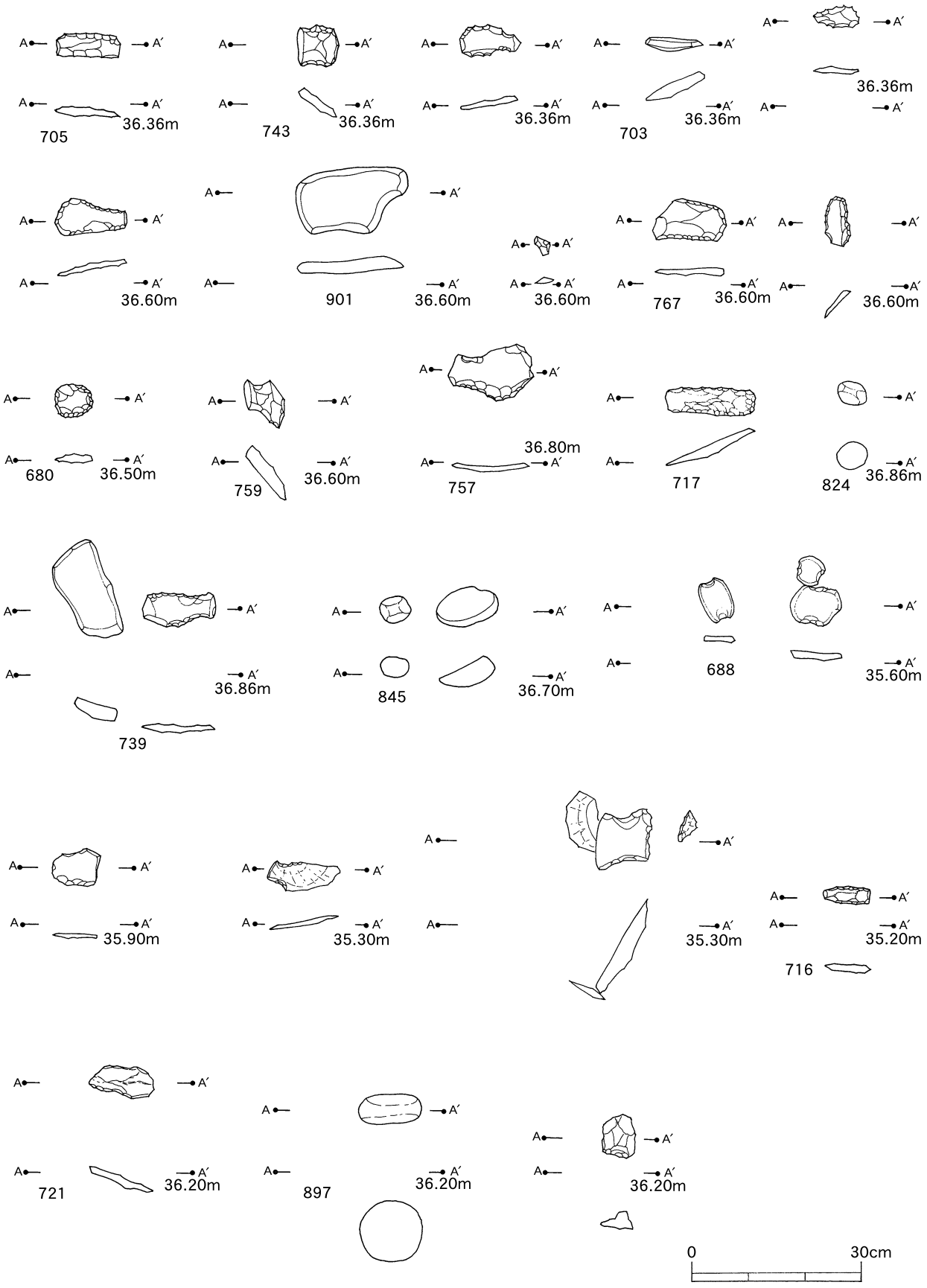
674・679は縦型のスクレイパーである。674は両面から細かな交互剥離が施され，細かな段をつけて刃部を形成している。側縁部に，使用痕によると思われる刃部の摩耗が見られる。679は抉りを形成し，両面から細かく微細な剥離を行い側縁部を形成している。679を除く675～682は，横型のスクレイパーである。小さく浅い角度で段を付け，刃部を形成している。676は横長の剥片を使用している。683は自然のデイサイトの円礫を用いて，側縁部に細かな形成を行っているが，半分が欠損している。684は左背面に自然の節理面を残し，側縁部及び先端部に掛けて細かな交互剥離を行い刃部を形成している。先端部の刃部には摩耗が見られる。形状や摩耗から石槍の可能性もある。

晩期石器の出土状況（第55図～59図）

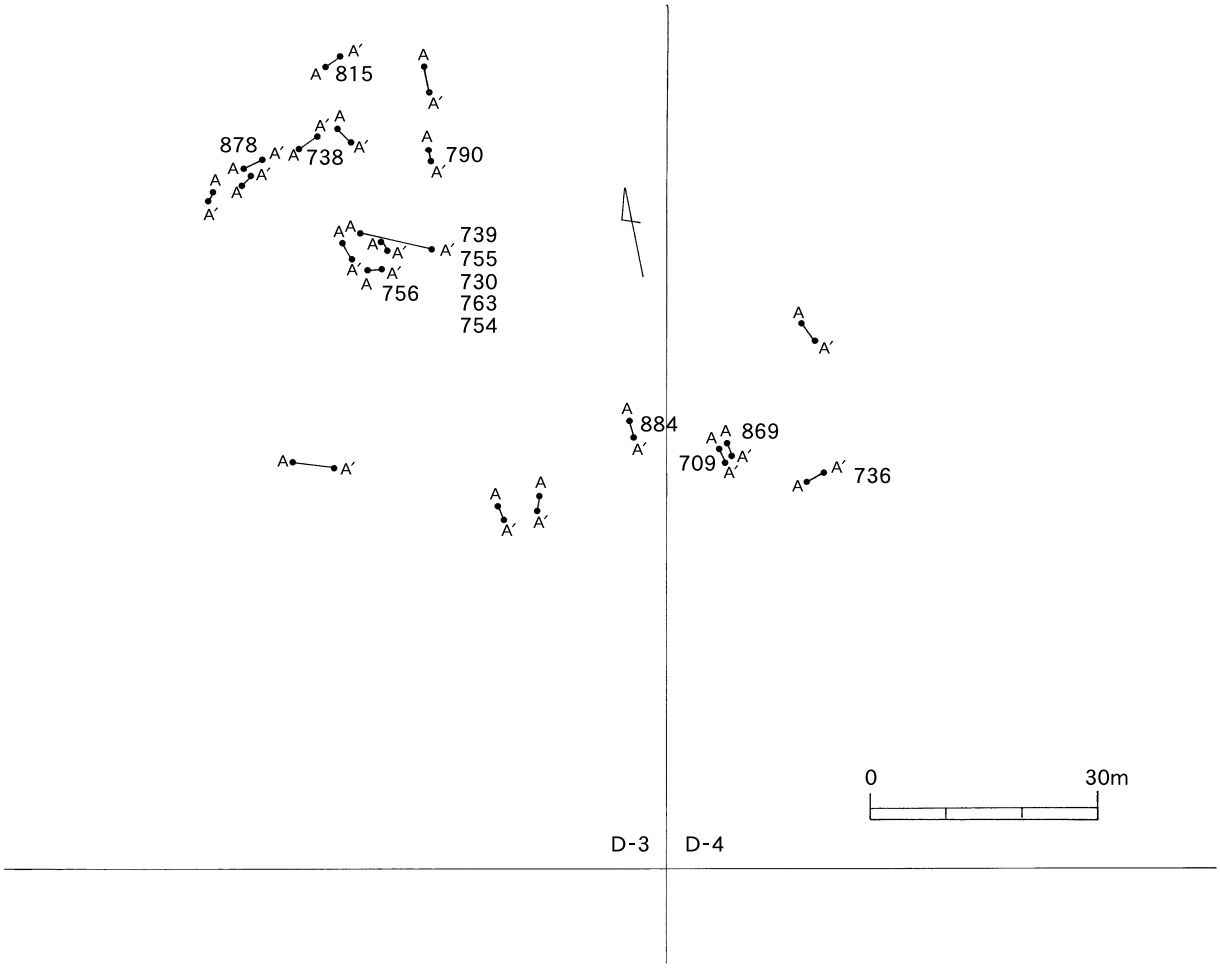
ＨＩ－５・６区，ＣＤ－４・５区と大量に石器が包含層内から出土した。石斧や石錘のデポが２カ所見つかっているが，これも包含層内の出土である。



第55図　縄文時代晩期石器出土状況 1



第56図　縄文時代晩期石器出土状況 2



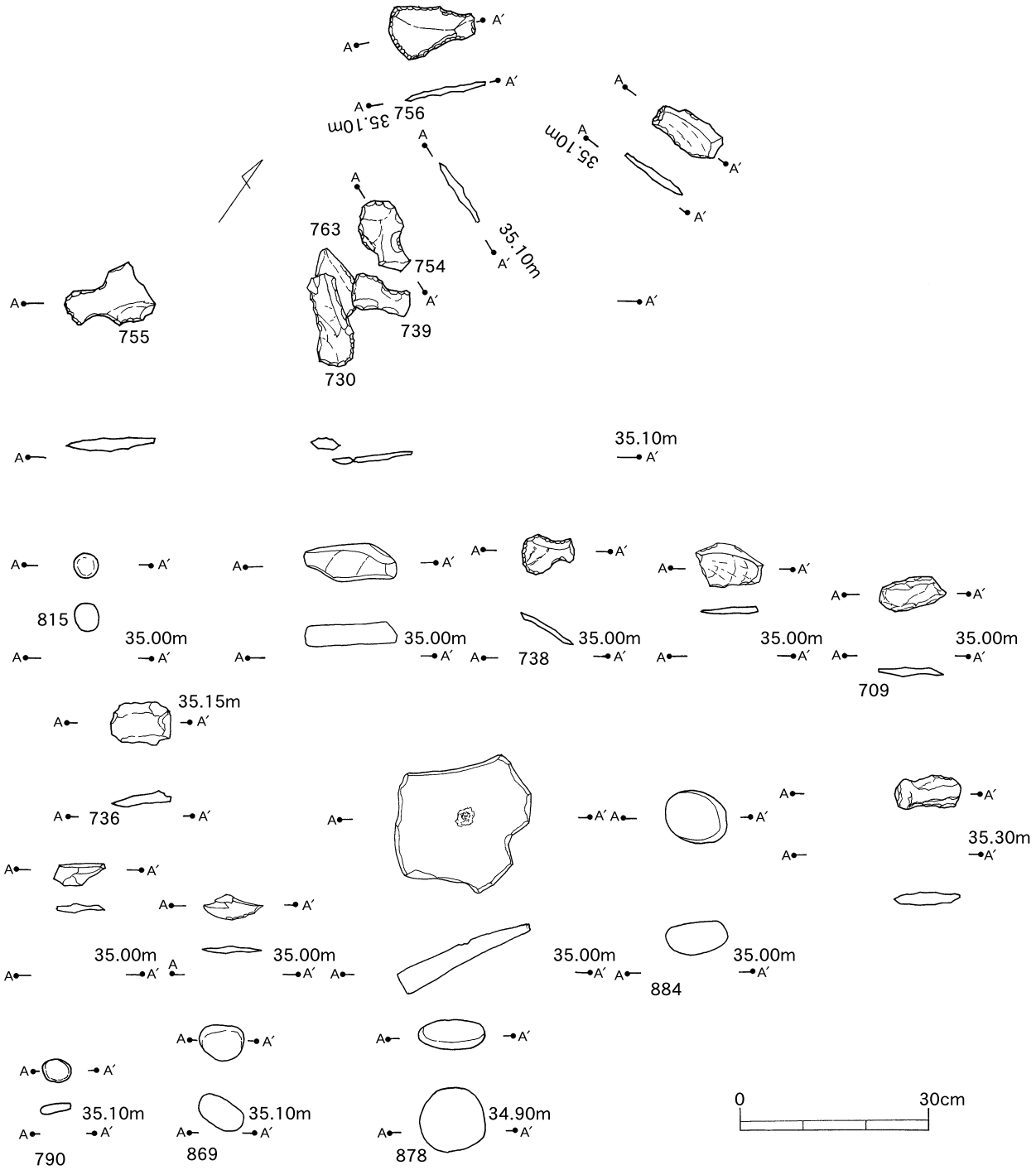
第57図　縄文時代晩期石器出土状況 3

縄文時代晩期石器 7

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
61図	698	Ⅲ	磨製石斧	L-9	頁岩	5.9	2.1	0.65	14.61	
	699	Ⅲ	磨製石斧	L-9	頁岩	7.5	2.1	1.75	36.51	
	700	Ⅲ	磨製石斧	G-5	頁岩	7.85	1.65	1.2	19.54	
	701	Ⅲ	磨製石斧	E-3	頁岩	8.9	1.9	0.8	30.22	
	702	Ⅲ	磨製石斧	H-5	頁岩	11.55	2.7	1.7	92.63	
	703	Ⅲ	磨製石斧	H-6	頁岩	12.9	4.75	1.95	160	
	704	Ⅲ	磨製石斧	H-5	頁岩	11.7	4.2	1	95.2	
	705	Ⅲ	磨製石斧	G-5	頁岩	10.1	3.25	1.3	65.37	
	706	Ⅲ	磨製石斧	H-6	頁岩	12.5	5.4	1.8	175	
	707	Ⅲ	磨製石斧	F-7	蛇紋岩	11.6	5.9	3.1	297.5	
	708	Ⅲ	磨製石斧	D-4	頁岩	11.3	5.25	1.4	91.41	
	709	Ⅲ	磨製石斧	D-4	頁岩	4.7	3.7	1.3	40.65	
	710	Ⅲ	磨製石斧	G-6	緑閃片岩	14.7	6.9	3.7	546	
	711	Ⅲ	磨製石斧	B-5	砂岩	7.7	7.5	3.3	250	
	712	Ⅲ	磨製石斧	F-7	砂岩	6.2	5.35	2.4	140	
	713	Ⅲ	磨製石斧	F-7	砂岩	7.9	4.5	3.0	107.57	

縄文時代晩期石器 8

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
62図	714	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	10.2	4.1	1.5	89.77	
	715	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	8.8	3	1.4	50.18	
	716	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	16.6	4.55	1.65	170	
	717	Ⅲ	打製石斧	B-4	泥岩	14.75	5.75	1.4	165	
	718	Ⅲ	打製石斧	G-7	頁岩	14.3	3.85	2.45	160	
	719	Ⅳ	打製石斧	G-7	頁岩	15.4	8.35	4.95	650	
	720	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.6	5.5	1.5	130	
	721	Ⅲ	打製石斧	H-5	泥岩	12.15	4.45	1.15	78.15	
	722	Ⅲ	打製石斧	L-9	頁岩	10.4	4.8	1.9	130	
	723	Ⅲ	打製石斧	G-4	砂岩	12.3	4.1	1.7	100.06	
	724	Ⅲ	打製石斧	F-10	ホルンフェルス	14.5	6.2	1.8	140	
	725	Ⅲ	打製石斧	K-9	頁岩	11.4	4.7	2.1	130	
	726	Ⅲ	打製石斧	L-9	頁岩	13.4	4	1.3	63.53	



第58図　縄文時代晩期石器出土状況４

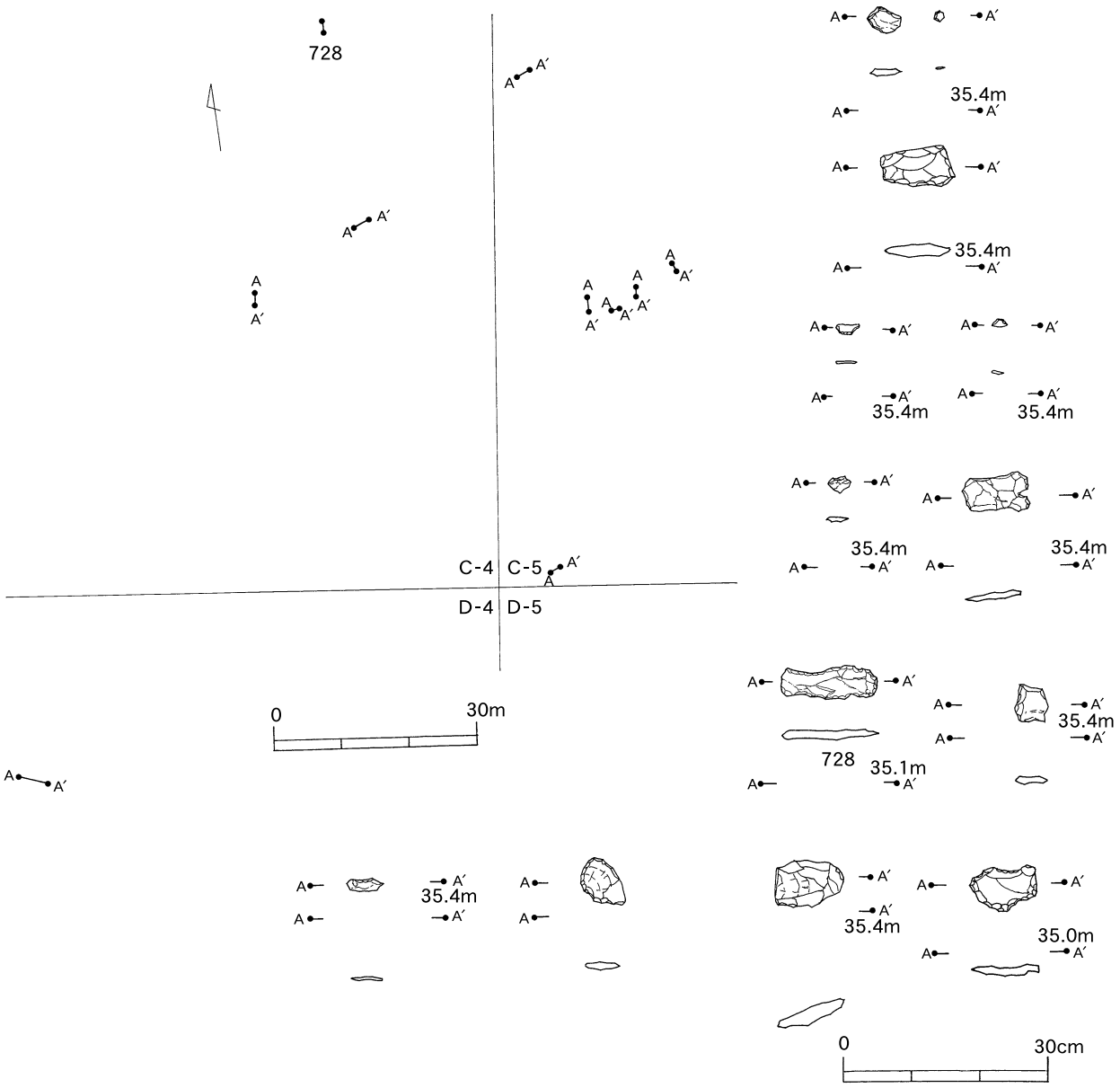
石錘（第60図）

石錘は13点出土している。685～687は小型の石錘である。685は加工のしやすい珪藻岩を楕円球体に磨き調整した上に，溝を縦横に刻み込んでいる。686は上下部の形状を平坦に研磨調整している。687は滑石製品で，穿孔した部分から縦に欠損したものである。688～697は両面に自然面を残す扁平な方形，楕円形の礫を素材とし両側縁に両面から剥離し，抉りを調整している。

石斧（第61図～第66図）

石斧は磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧があり，破損品を含めて69点出土している。加工方法や刃部の形状，肩部の有無によって分類を行った。

698～713は磨製石斧である。698～700は磨製製品を再加工し刃部形成したものである。形状から698～701は石のみである可能性もある。707は蛇紋岩製



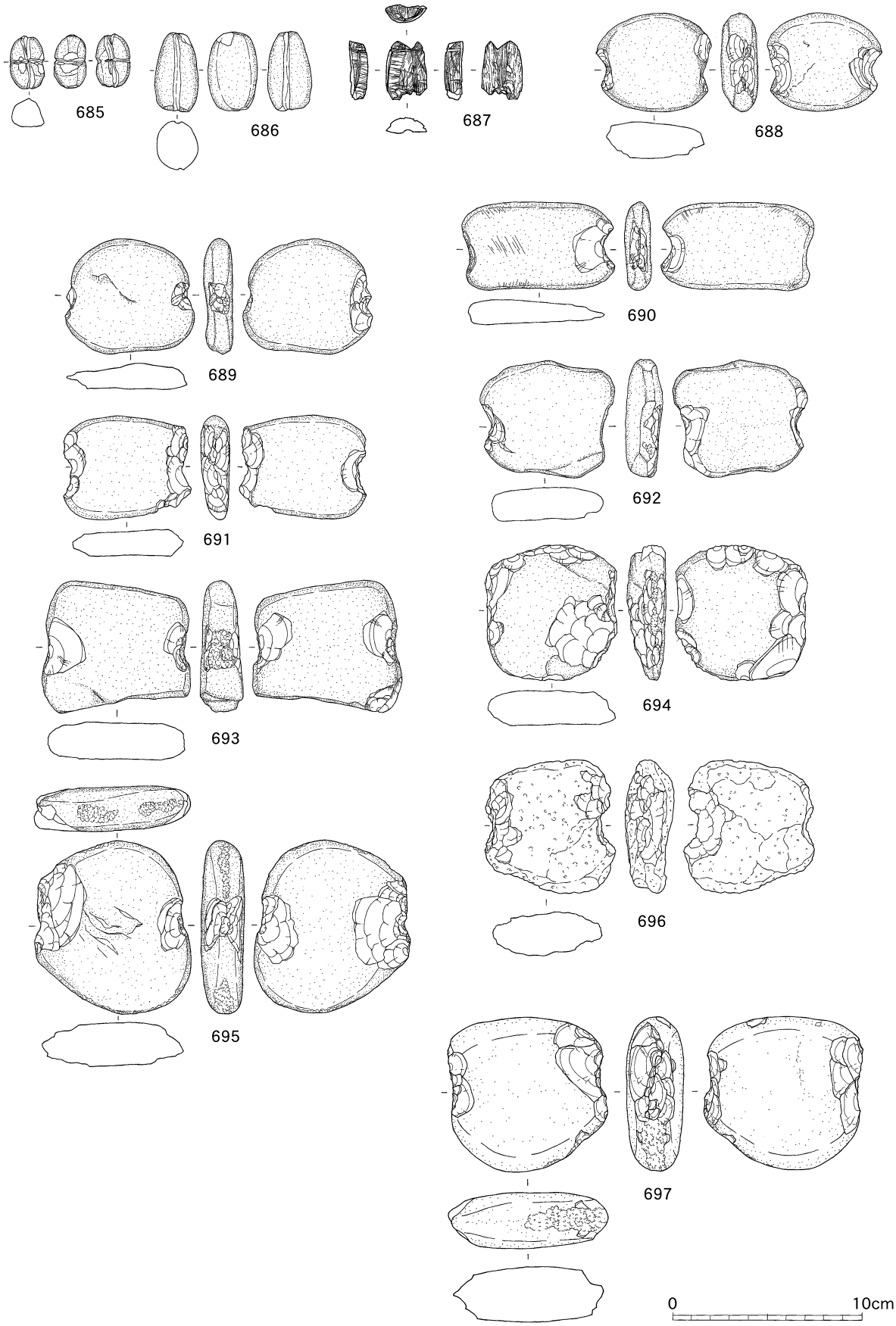
第59図　縄文時代晩期石器出土状況５

のばち型をした磨製石斧である。708は磨製石斧を横長剥片を使用し，極部的に摩耗痕がある。711～713は欠損した刃部である。713は刃部欠損後，基部を使って再加工し，刃部を形成している。

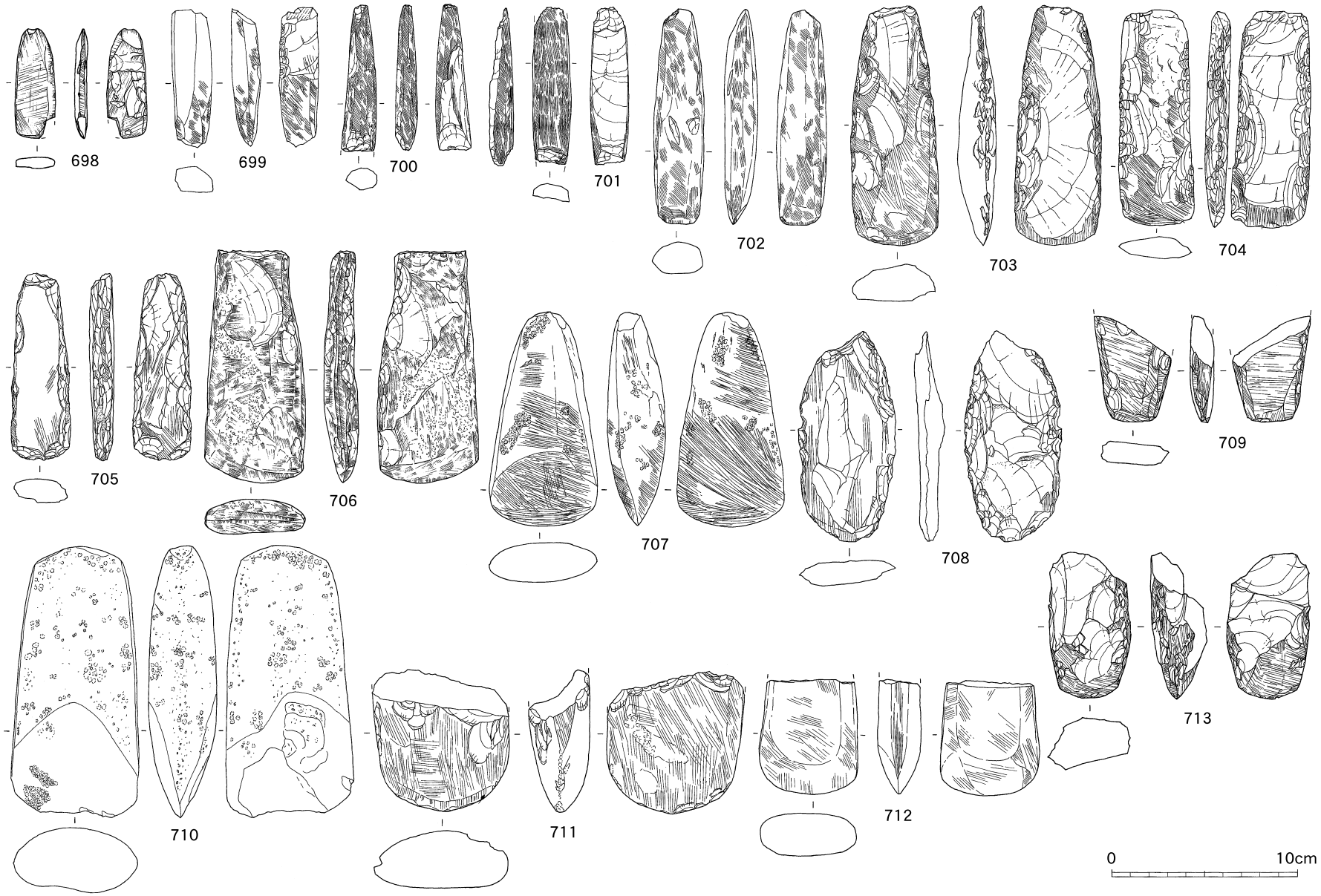
714～767は打製石斧で，714～720は短冊形の石斧である。716は頸部に，723は背面に装着痕がみられる。718は刃部，側縁部を使用により摩耗している。721～767は有肩石斧である。721は肩部から側縁部にかけて，723は背面に，725は肩部に，726は右側面にそれぞれ使用による摩耗がある。また，714と726は磨製石斧を再加工して刃部を形成して使用している。

727～737は有肩の打製石斧で刃部と基部の差が不明瞭なものである。728・729・731・732・735・737は，刃部に使用による摩耗がみられる。特に731は刃部，側縁部に，733は背面部全面に及ぶ。

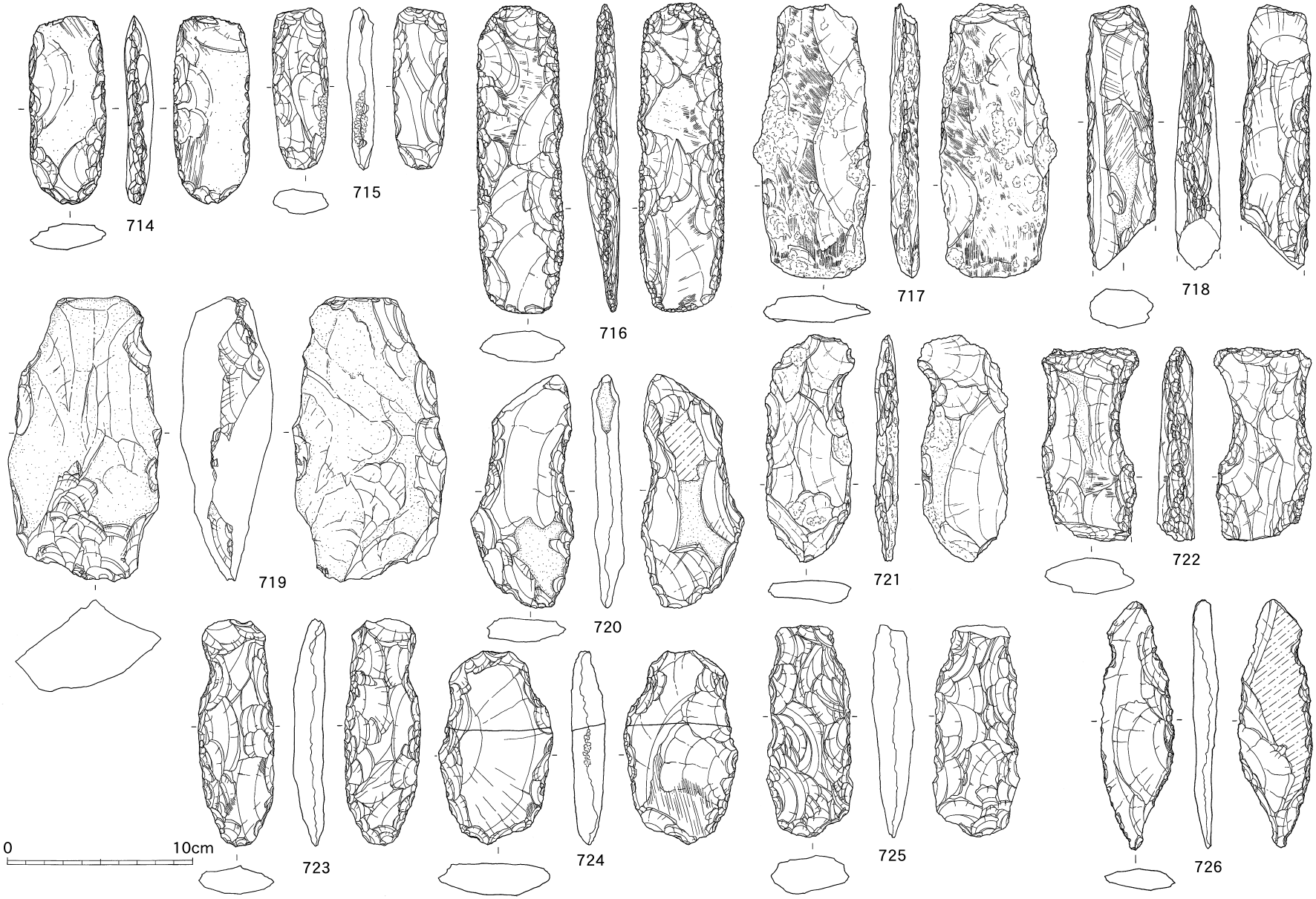
738～748は有肩の打製石斧で，刃部と基部の長さが，同じかあるいはやや刃部の長いものである。ほとんどの刃部，側縁部に使用による摩耗がみられるが，740・741・744には摩耗がみられない。738・741には頸部に装着痕が残る。746は刃部に再加工を施している。744は自然の節理面を有し，刃部が欠損しているが，使用の痕跡がみられない石斧である。



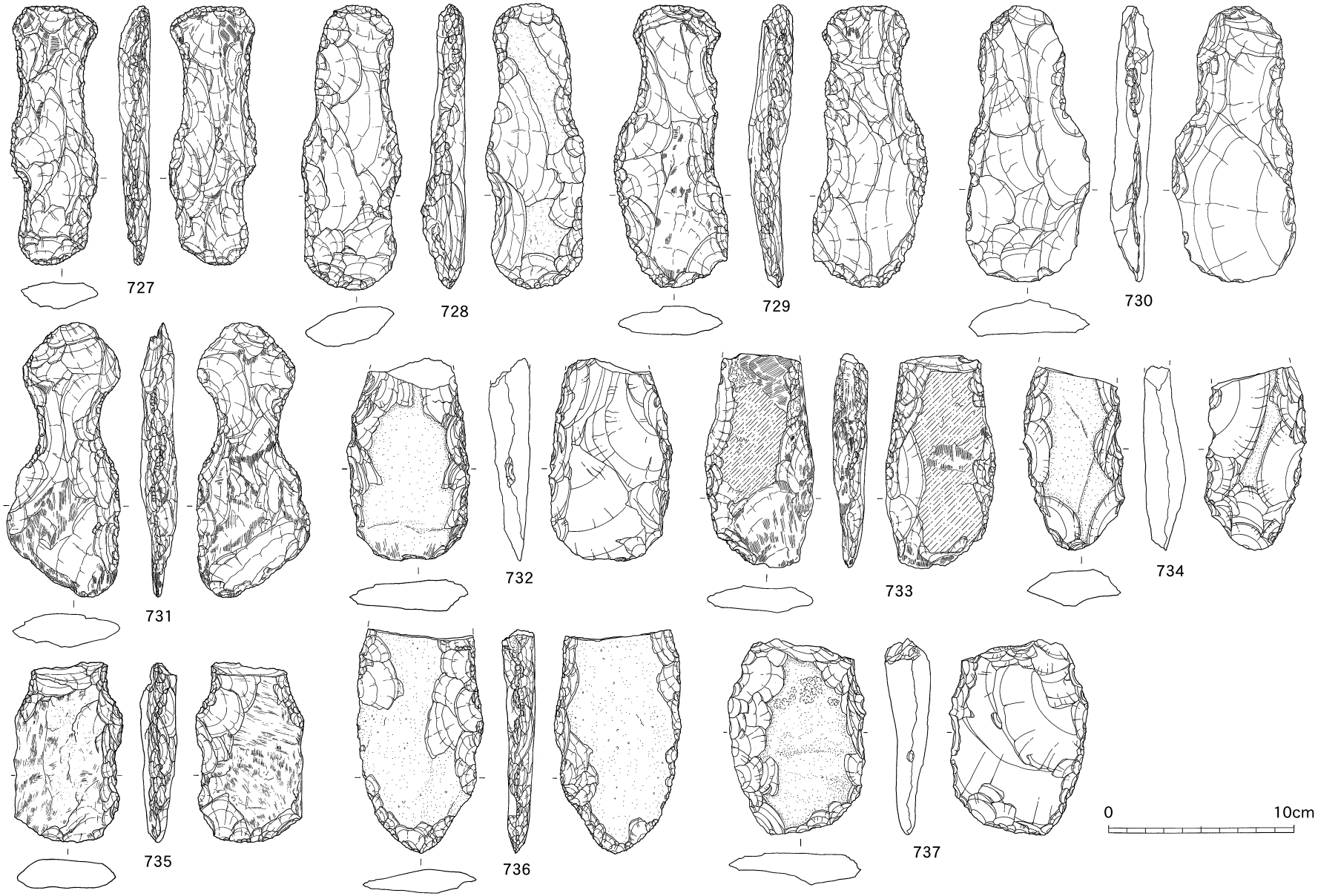
第60図　縄文時代晩期石器６（石錘）



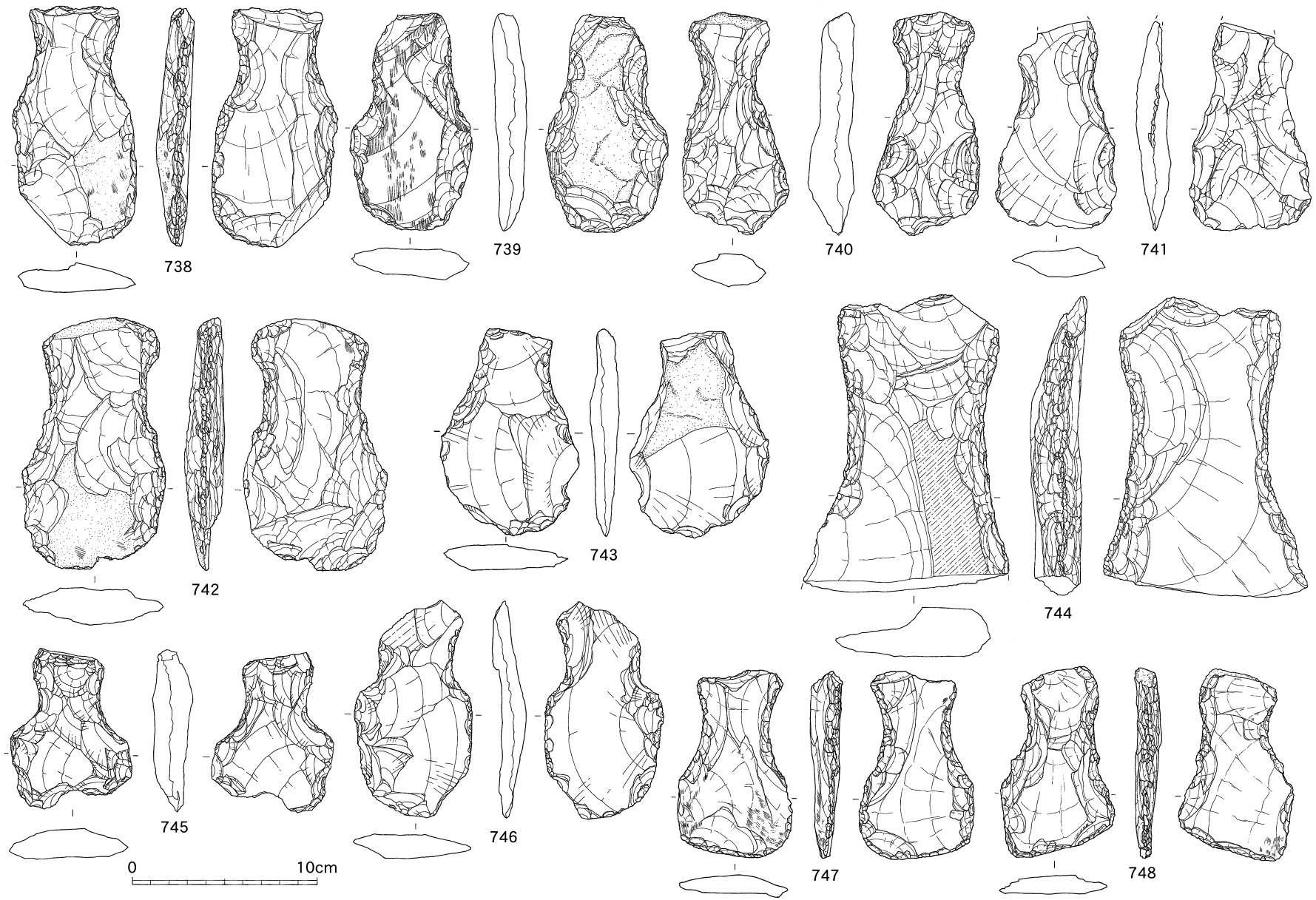
第61図　縄文時代晩期石器７（石斧）



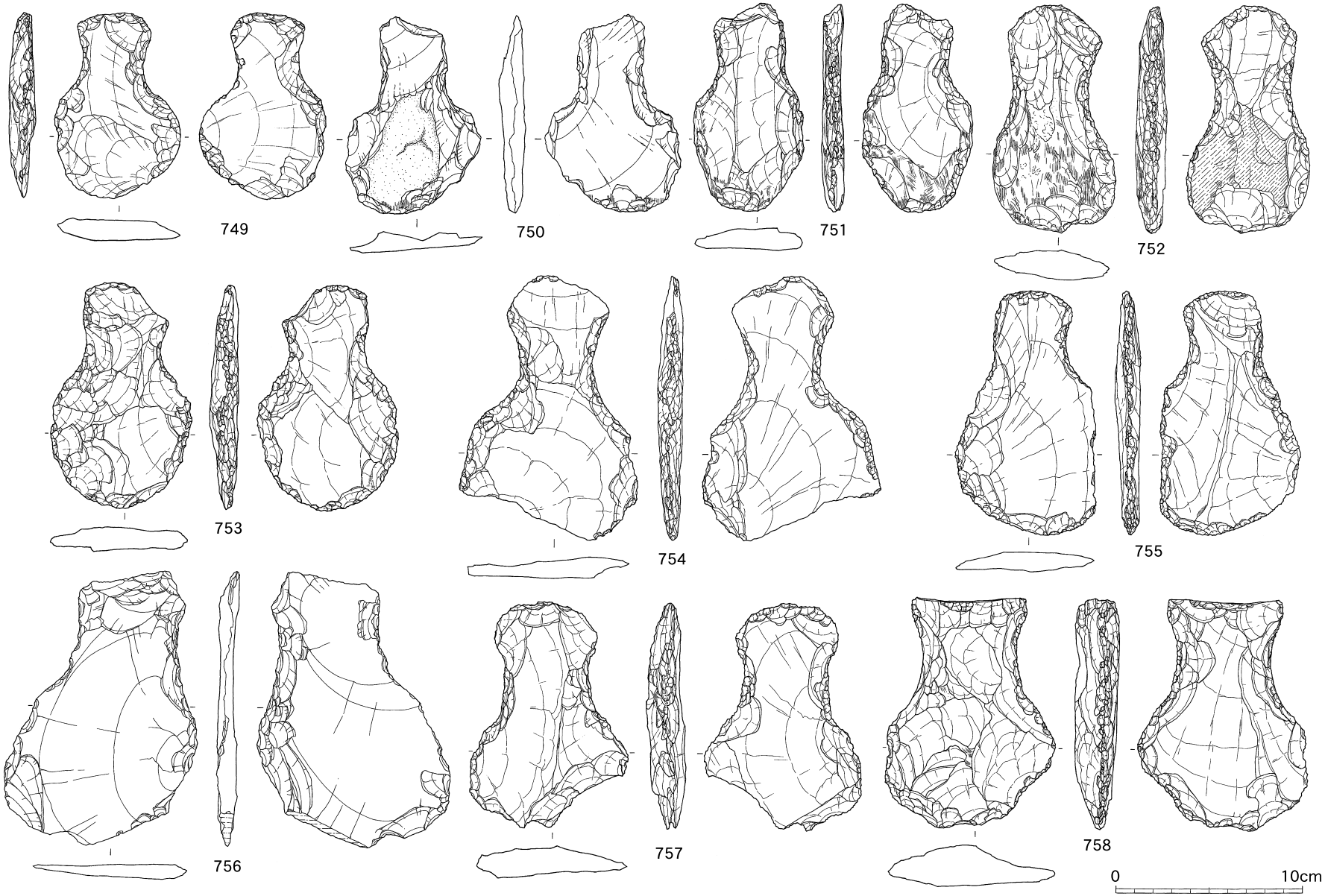
第62図　縄文時代晩期石器８（石斧）



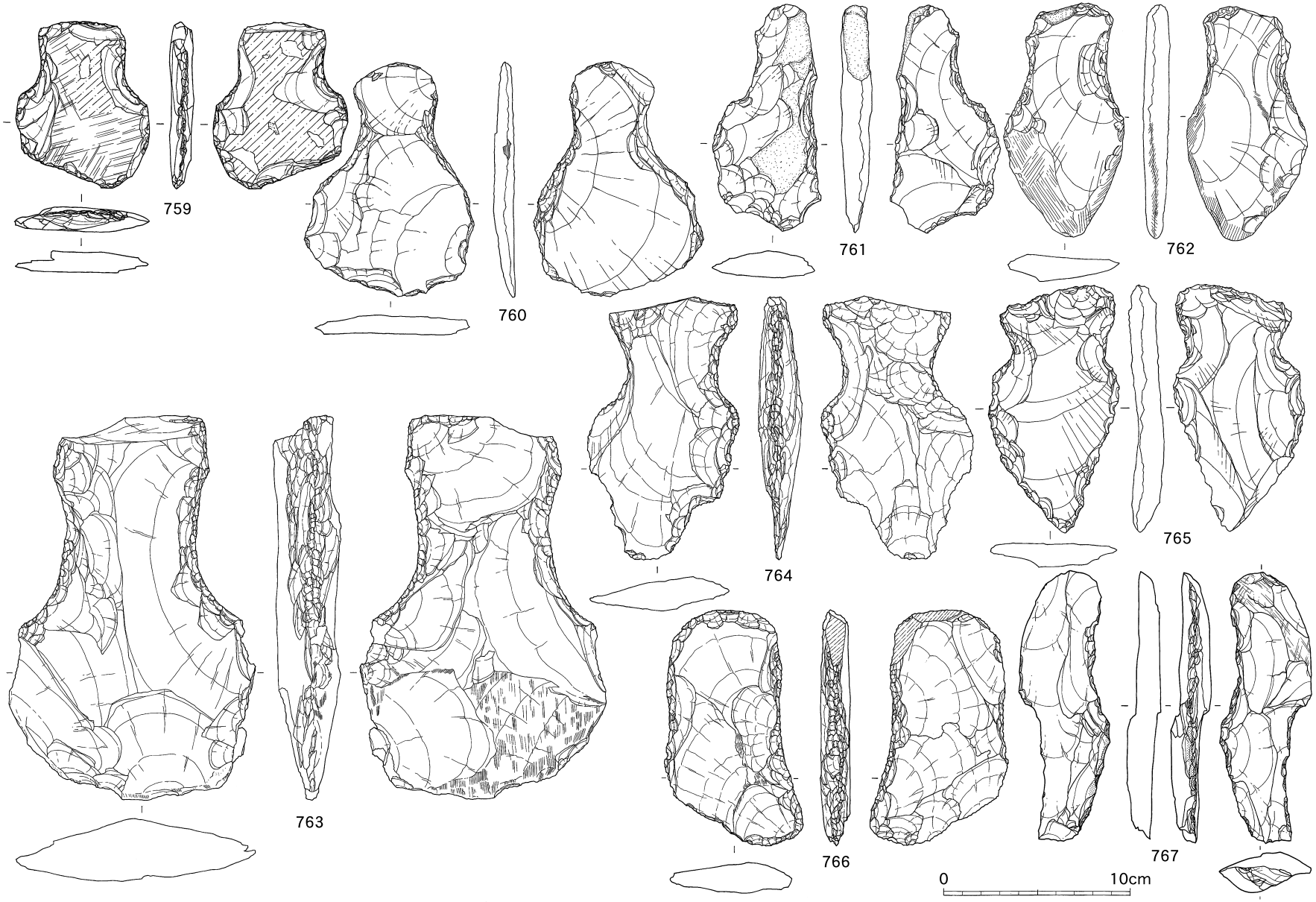
第63図　縄文時代晩期石器９（石斧）



第64図　縄文時代晩期石器10（石斧）



第65図　縄文時代晩期石器11（石斧）



第66図　縄文時代晩期石器12（石斧）

749～753は有肩の打製石斧で，ラケット形をしたものである。749を除くほとんどの石斧の刃部に使用による摩耗がみられる。750は厚さが0.8㎝と薄いことから他とは別目的の使用が考えられる。

754～760・763は，有肩の打製石斧でばち形をしたものである。ほとんどの刃部には使用による摩耗がみられる。757は肩部下の側縁部に摩耗がみられる。756～758・760には頸部に装着痕が残る。

763は斧長20.7㎝，最大幅12.9㎝，厚さ3.3㎝，基部8.4㎝と本遺跡最大の石斧である。刃部に使用による摩耗がみられるが，再加工による刃部の形成はみられない。

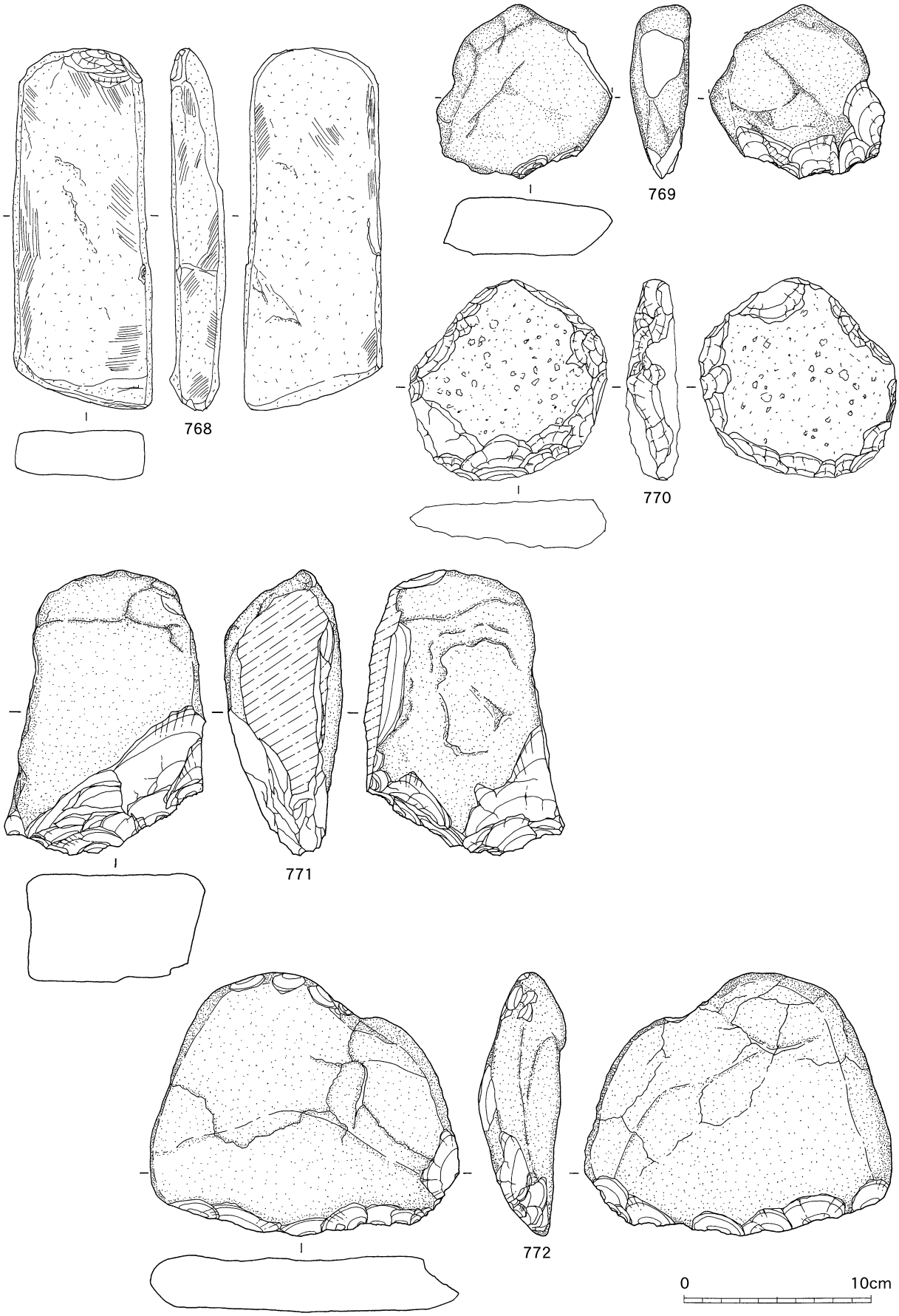
761・762・764・765は有肩の打製石斧で，側縁部が刃部となる靴形をしたものである。761・762は，使用による摩耗によって刃部がつぶれている。761・765の頸部には装着痕がみられる。

766・767は前述のどの形にも当てはまらないものである。766は基部に自然の節理面を残し，摩耗はみられない。側縁から刃部に掛けて刃部形成の調整痕がみられる。767は磨製石斧を再加工して，基部を再加工して，刃部を形成している。

縄文時代晩期石器 9

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
63図	727	Ⅲ	打製石斧	C-5	頁岩	14	4.8	1.8	130	
	728	Ⅲ	打製石斧	H-5	安山岩	15.3	5.3	2.4	195	
	729	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	15.2	6.2	2.4	185	
	730	Ⅲ	打製石斧	I-6	頁岩	14.9	6.7	2.2	215	
	731	Ⅲ	打製石斧	I-6	頁岩	14.9	6.2	2.1	170	
	732	Ⅲ	打製石斧	H-4	頁岩	11	6.7	2.2	180	
	733	Ⅲ	打製石斧	C-4	頁岩	11.6	5.9	1.9	150	
	734	Ⅲ	打製石斧	I-6	珪質頁岩	10	5.5	2	130	
	735	Ⅲ	打製石斧	D-4	頁岩	9.7	5.8	2.1	125	
	736	Ⅲ	打製石斧	H-5	安山岩	12.1	6.9	1.8	180	
	737	Ⅰ	打製石斧	H-5	安山岩	10.55	7.5	2.4	190	
64図	738	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.9	6.4	1.55	170	
	739	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	11.8	6.7	1.65	160	
	740	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.1	5.8	2.5	150	
	741	Ⅲ	打製石斧	K-9	頁岩	11.3	6.6	1.7	114.73	
	742	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	13.25	7.6	1.9	240	
	743	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	11.3	7.6	1.5	114.99	
	744	Ⅲ	打製石斧	I-6	頁岩	16.2	8.3	2.65	490	
	745	Ⅲ	打製石斧	K-9	頁岩	8.75	6.65	1.75	105.11	
	746	Ⅲ	打製石斧	C-4	頁岩	11.7	6.4	1.8	108.02	
	747	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	10.1	5.9	1	84.12	
	748	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	10.25	5.9	1	84.49	

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
65図	749	Ⅲ	打製石斧	K-9	頁岩	9.95	6.55	1.15	88.73	
	750	Ⅲ	打製石斧	E-7	頁岩	10.6	7.3	0.8	84.27	
	751	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	11	5.75	1.2	92.08	
	752	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	12.15	6.1	1.6	140	
	753	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	12.05	7.4	1.3	145	
	754	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	14.15	9.6	1.1	160	
	755	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	13.1	7.4	1.05	125	
	756	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	14.8	10.45	1.15	130	
	757	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.1	8.1	1.55	160	
	758	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.3	8.9	2.15	290	
66図	759	Ⅲ	打製石斧	E-7	頁岩	7.9	725	1.3	105.61	
	760	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	12.6	9.2	1.05	130	
	761	Ⅲ	打製石斧	C-5	頁岩	12.2	5.9	1.7	113.32	
	762	Ⅲ	打製石斧	D-3	頁岩	12.55	6.5	1.4	130	
	763	Ⅲ	打製石斧	F-6	頁岩	20.7	12.85	3.3	970	
	764	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	14.15	7.5	1.65	220	
	765	Ⅲ	打製石斧	K-8	頁岩	13.2	7.1	1.5	165	
	766	Ⅲ	打製石斧	H-5	頁岩	12.6	6.6	1.65	190	
	767	Ⅲ	打製石斧	F-9	頁岩	14.6	4.3	1.6	108.93	



第67図　縄文時代晩期石器13（礫器）

礫器（第67図）

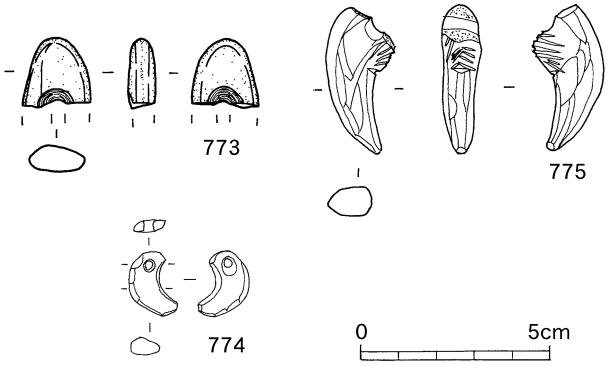
768～772の５点である。768は側縁部を平面に磨き，基部や刃部に調整敲打痕がみられる。769～772は敲打や押圧剥離による刃部調整を両面から行っている。

錘飾・土製勾玉（第68図）

773は安山岩の自然礫に穿孔を施した錘飾である。穿孔部から欠損している。

774は緑色をした石の勾玉である。出土状況は，Ｆ－５区の包含層出土である。

775は土製の勾玉である。焼成は良好で黒色を呈し，丁寧なヘラミガキが施される。穿孔付近に沈線文が施してある。



第68図　縄文時代晩期石製錘飾・土製勾玉

縄文時代晩期石器13

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
67図	768	Ⅲ	礫器	L-10	頁岩	19.4	7.4	2.4	725	
	769	Ⅲ	礫器	B-5	砂岩	9.35	9.4	3.3	340	
	770	Ⅲ	礫器	C-5	安山岩	10.7	10.6	2.8	390	
	771	Ⅲ	礫器	L-9	頁岩	15	10.8	6.25	1300	
	772	Ⅲ	礫器	E-4	砂岩	14.1	16.5	4.35	1150	

縄文時代晩期石製錘飾・土製勾玉

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
68図	773	Ⅲ	錘飾	G-7	頁岩	1.8	1.8	0.7	2.98	
	774	Ⅲ	勾玉	F-5		1.7	0.8	0.4	1.05	
	775	Ⅲ	勾玉		土製	(4)	(1.8)	(1)	5.0	

磨石（第69図～第77図）

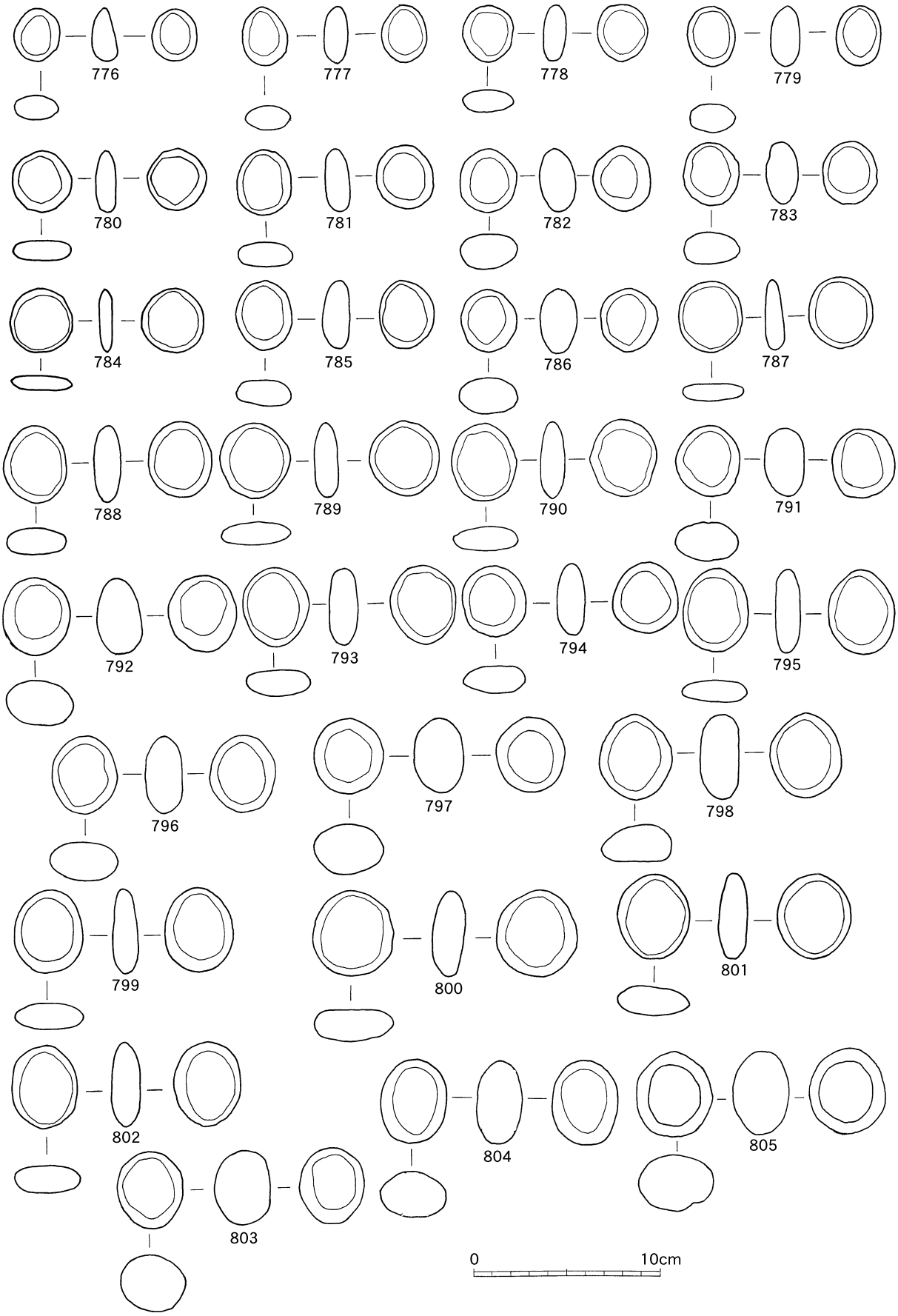
円礫を用いた磨石で，磨石のみの機能を持ったもの，磨石と敲石の機能を持ったもの，磨石，敲石，凹石の機能を持ったものがみられる。776～826，870～881は磨石の機能のみ持つものである。石材は砂岩や安山岩のものが多い。827～897は磨石と敲石の機能を持ったものである。834・844・852・859・891・893・894・896は，凹石の機能を兼ね備えたものである。878の石材は，鉱物の組み合わせは花崗岩に類似しているが，粒子は，花崗岩より小粒であり断定できなかった。

899は敲石である。縦長のばち状で，全体を磨いて整形している。底部に敲打による剥離がみられる。

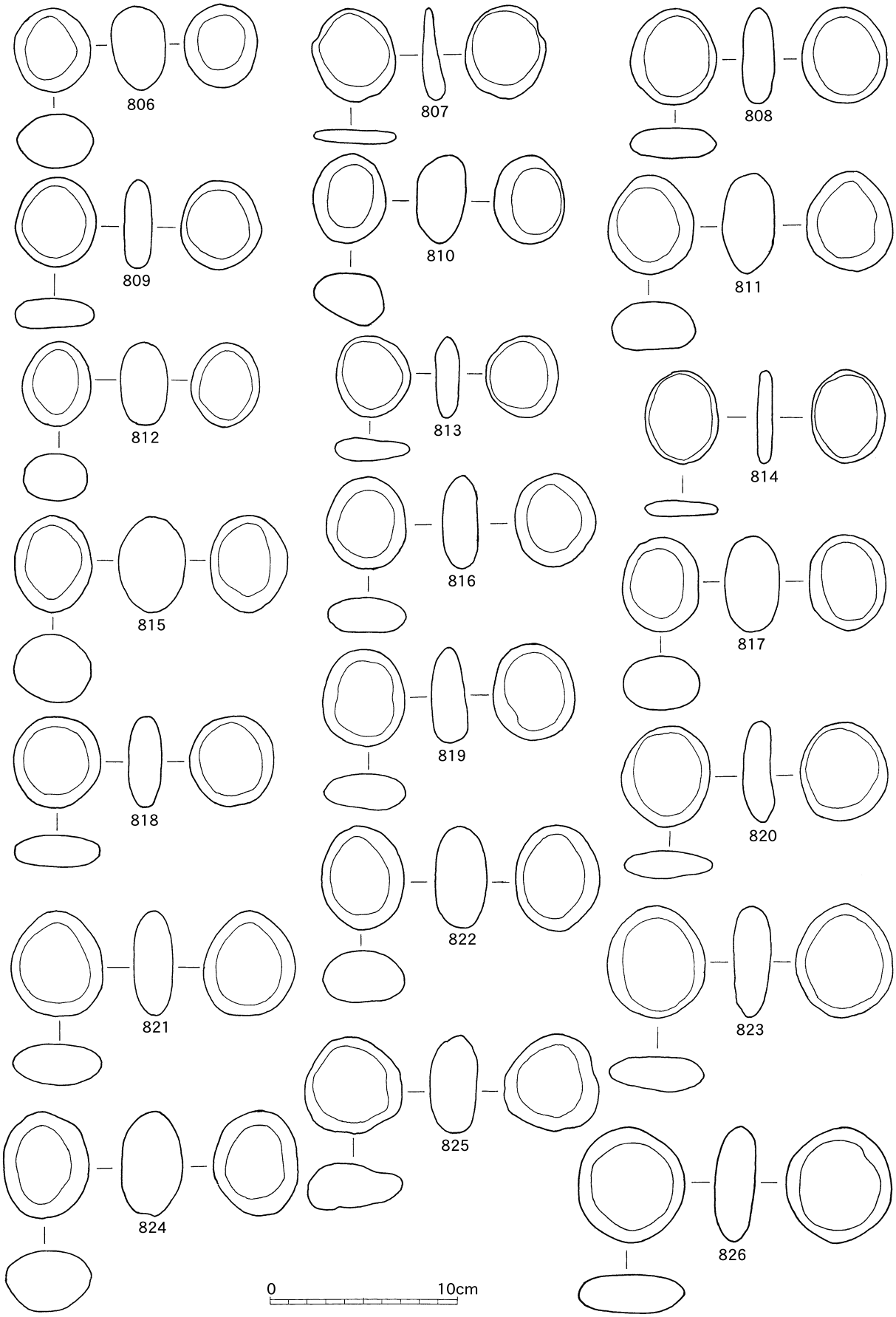
縄文時代晩期石器14

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
69図	776	Ⅳ	磨石	H-5	砂岩	2.9	2.3	1.3	11.23	
	777	Ⅳ	磨石	I-6	砂岩	3.1	2.4	1.3	13.04	
	778	Ⅲ	磨石	E-6	砂岩	3	2.7	1.2	13.93	
	779	Ⅲ	磨石	I-10	砂岩	3.3	2.4	1.5	17.85	
	780	Ⅲ	磨石	I-2	砂岩	3.3	3.1	1.1	15.09	
	781	Ⅳ	磨石	I-6	砂岩	3.4	3	1.3	18.77	
	782	Ⅲ	磨石	F-4	安山岩	3.4	3.1	2	23.02	
	783	Ⅲ	磨石	E	安山岩	3.3	2.9	1.6	20.65	
	784	Ⅲ	磨石	F-5	砂岩	3.4	3.3	0.8	14.15	
	785	Ⅱ	磨石	F-9	砂岩	3.7	2.9	1.5	21.87	
	786	Ⅱ	磨石	F-9	砂岩	3.4	3	1.9	25.78	
	787	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	3.8	3.4	1	18.04	
	788	Ⅱ	磨石	D-3	砂岩	4.1	3.4	1.4	25.16	
	789	Ⅲ	磨石	I-2	砂岩	4	3.7	1.2	26.01	
	790	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	4.1	3.6	1.3	27.04	

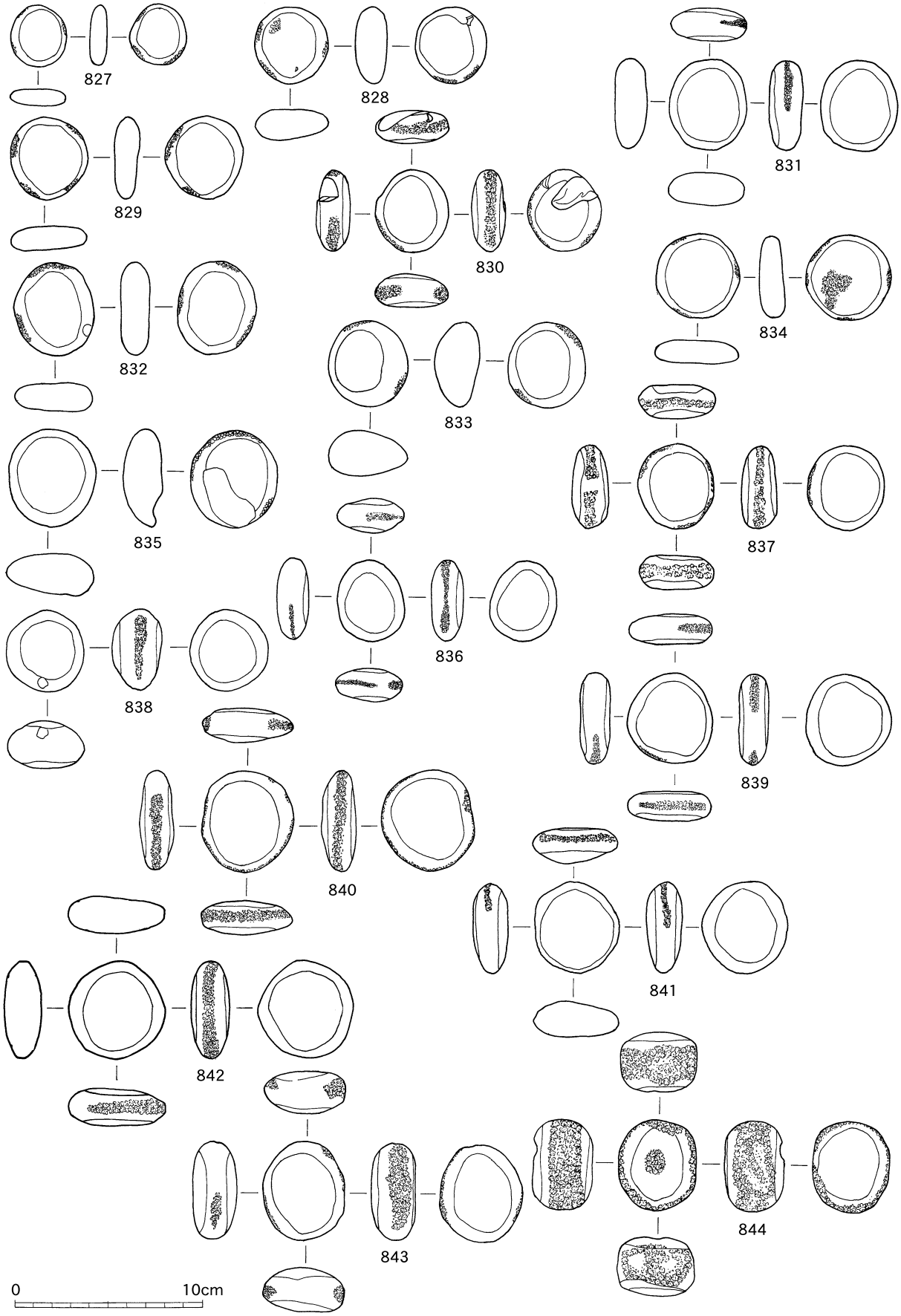
挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
69図	791	Ⅲ	磨石	I-6	安山岩	3.7	3.3	2.1	24.81	
	792	Ⅲ	磨石	H-5	安山岩	4.1	3.6	2.3	47.21	
	793	Ⅲ	磨石	G-7	砂岩	4.2	3.5	1.5	28.56	
	794	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	3.9	3.5	1.4	27.66	
	795	Ⅲ	磨石	E-4	砂岩	4.5	3.5	1.3	29.66	
	796	Ⅲ	磨石	C-3	砂岩	4.2	3.5	2	43.34	
	797	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	4	3.7	2.7	54.06	
	798	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.6	3.8	2	53.48	
	799	Ⅲ	磨石	F-4	砂岩	4.5	3.7	1.3	30.49	
	800	Ⅲ	磨石	I-6	砂岩	4.6	4.2	1.6	44.57	
	801	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.6	4	1.5	37.79	
	802	Ⅲ	磨石	F-7	砂岩	4.5	3.6	1.5	35.94	
	803	Ⅳ	磨石	D-13	砂岩	4.1	3.5	3	52.11	
	804	Ⅲ	磨石	G-11	砂岩	4.5	3.5	2.4	54.26	
	805	Ⅲ	磨石	E-5	安山岩	4.5	4	3	80.47	



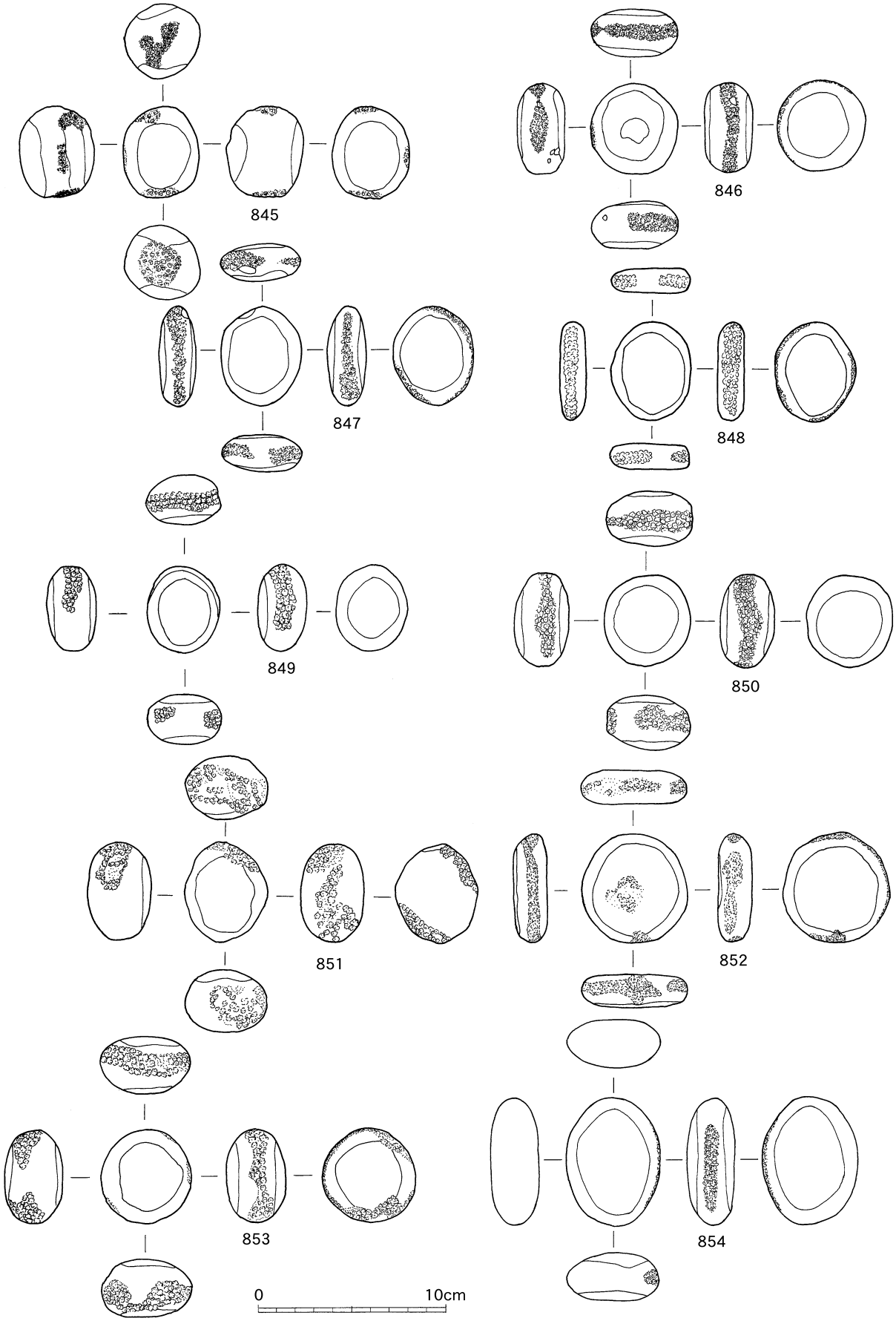
第69図　縄文時代晩期石器14（磨石）



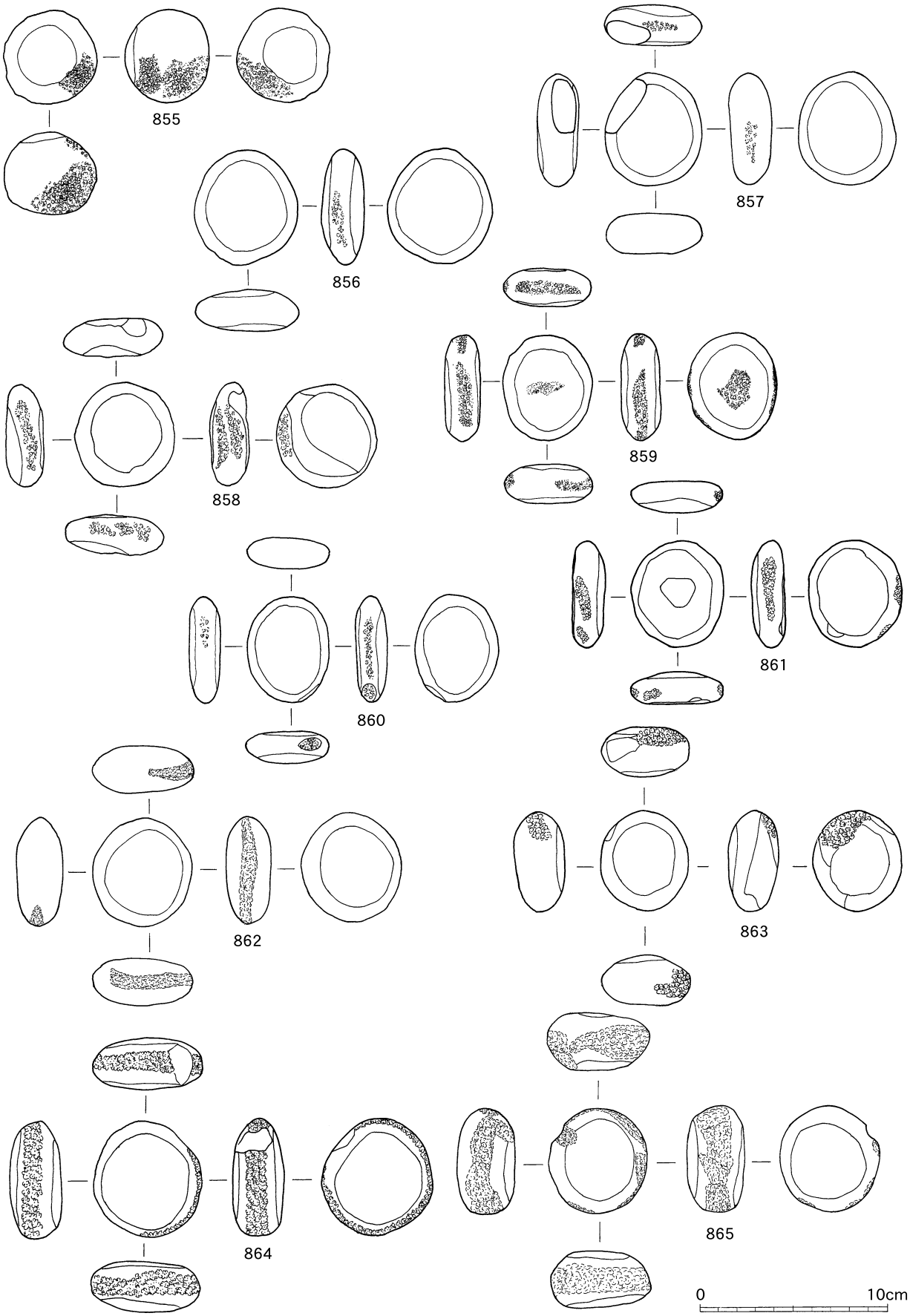
第70図　縄文時代晩期石器15（磨石）



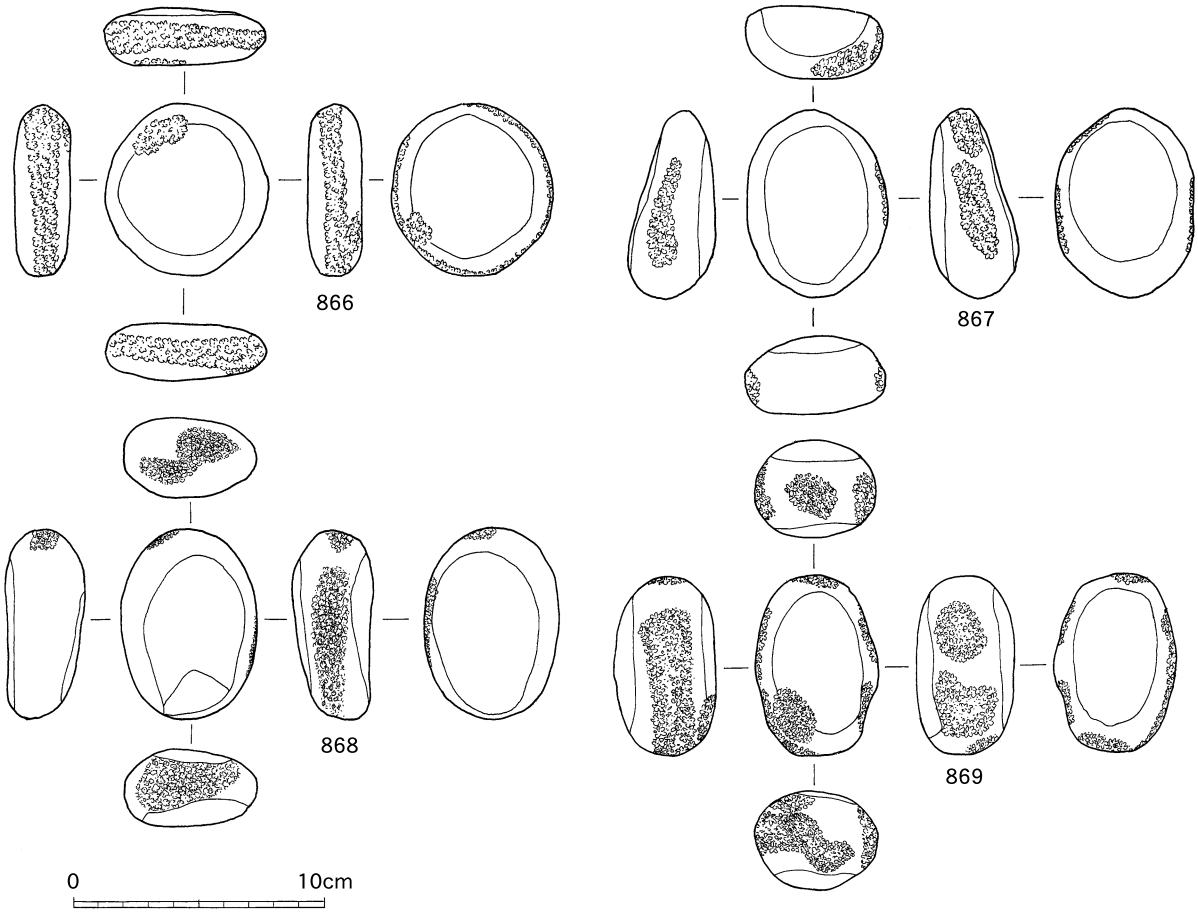
第71図　縄文時代晩期石器16（磨石）



第72図　縄文時代晩期石器17（磨石）



第73図　縄文時代晩期石器18（磨石）

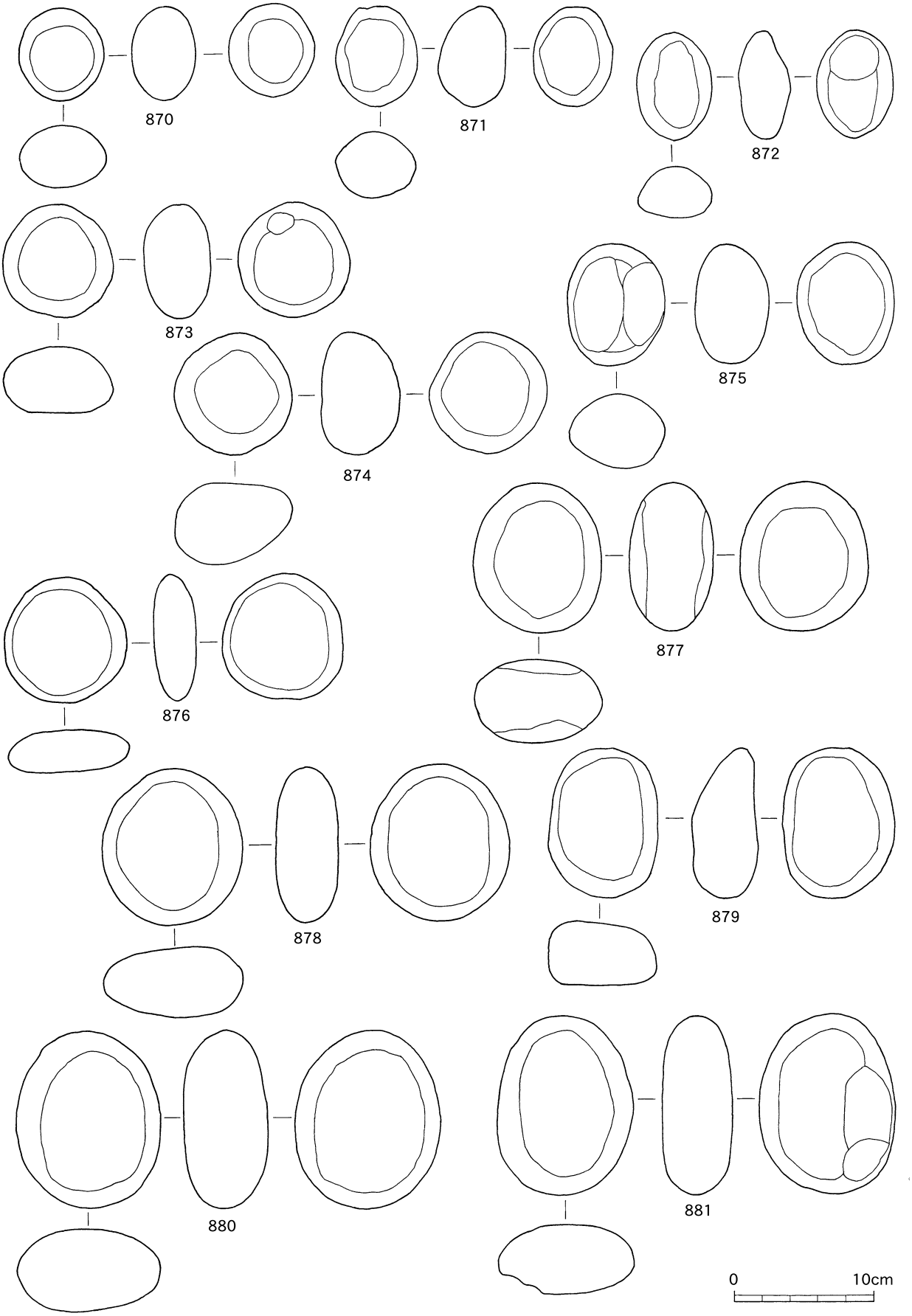


第74図　縄文時代晩期石器19（磨石）

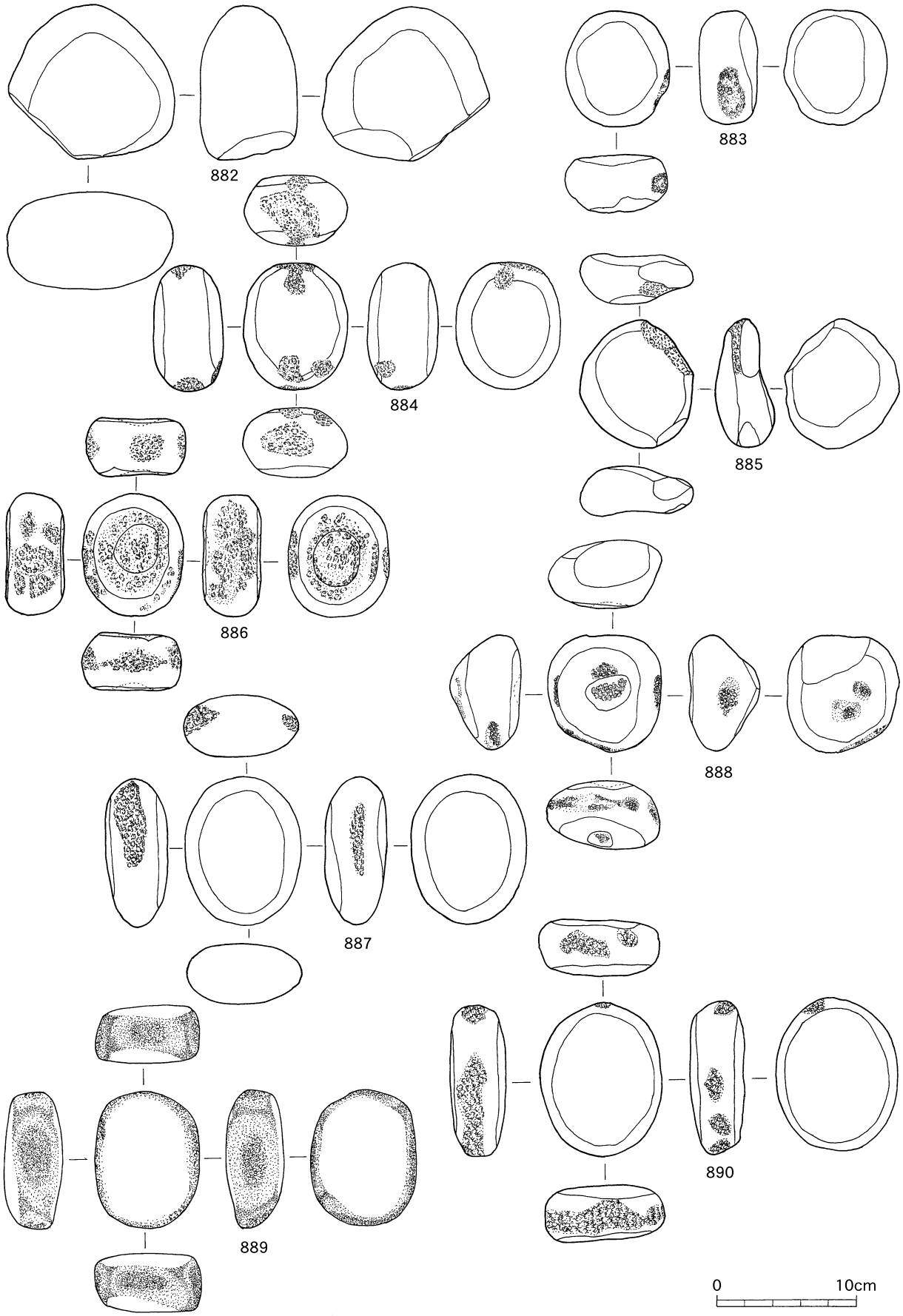
縄文時代晩期石器15

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
70図	806	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	4.5	4	2.9	69.63	
	807	Ⅱ	磨石	A	砂岩	4.3	5	1.1	28.99	
	808	Ⅲ	磨石	D-4	砂岩	5.2	4.6	1.7	63.41	
	809	Ⅲ	磨石	G-9	砂岩	4.7	4.3	1.4	49.67	
	810	Ⅲ	磨石	F-9	砂岩	4.8	3.8	2.6	65.41	
	811	Ⅲ	磨石	E	砂岩	5.3	4.6	2.7	90.62	
	812	Ⅲ	磨石	I-7	砂岩	4.6	3.6	2.5	57.93	
	813	Ⅲ	磨石	G-7	砂岩	4.3	3.8	1.2	31.26	
	814	Ⅲ	磨石	H-5	安山岩	5	4	0.8	23.43	
	815	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	5.2	4.1	3.6	103.22	
	816	Ⅲ	磨石	G-4	砂岩	4.9	4.2	1.8	58.26	

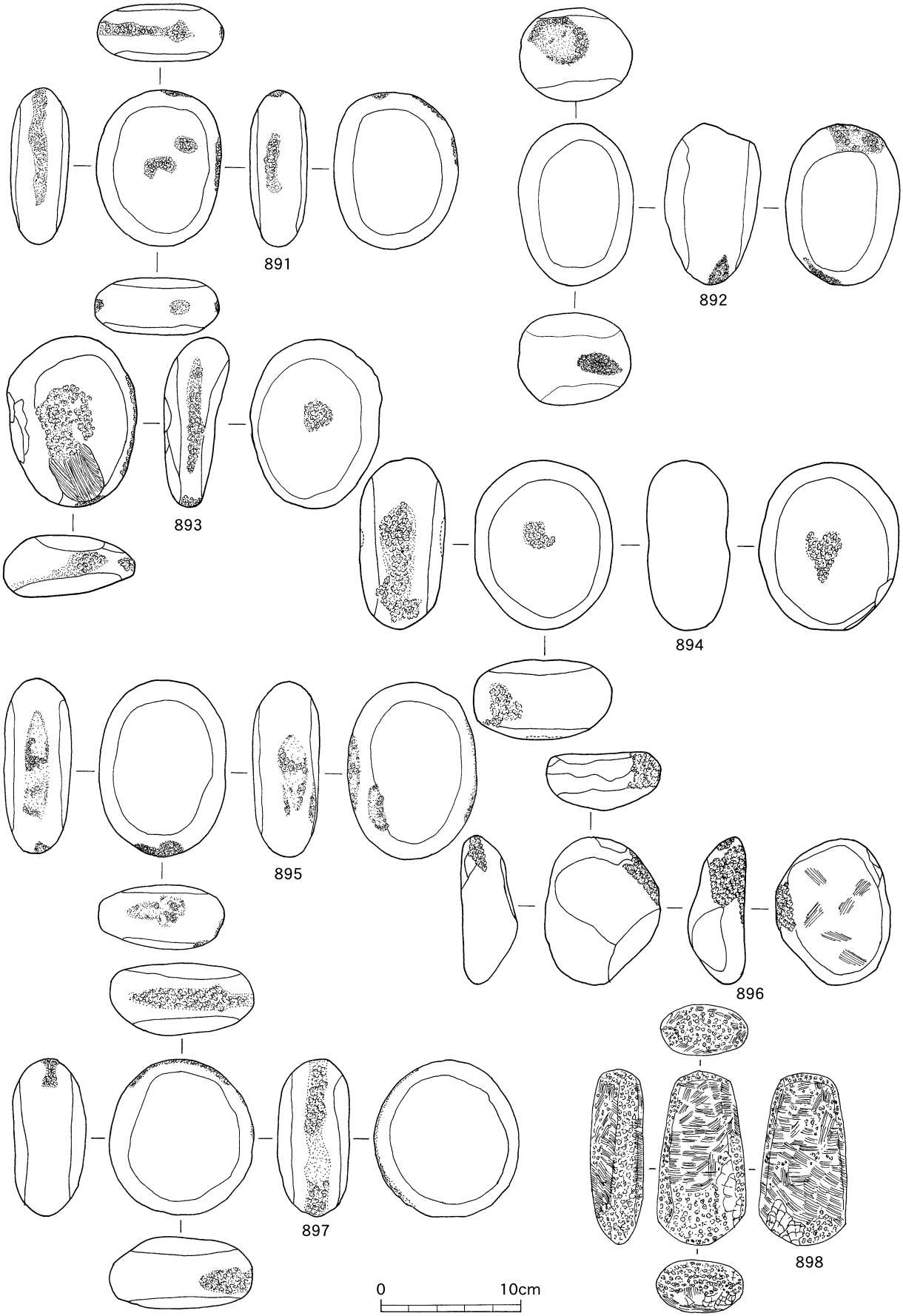
挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
70図	817	Ⅲ	磨石	A	砂岩	5.2	4.1	2.9	86.31	
	818	Ⅲ	磨石	B-5	砂岩	4.9	4.5	1.8	59.02	
	819	Ⅲ	磨石	I-2	砂岩	5.2	4.3	1.8	64.41	
	820	Ⅲ	磨石		砂岩	5.4	4.7	1.5	54.42	
	821	Ⅲ	磨石	E-4	砂岩	5.6	4.8	2.1	85.19	
	822	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	5.5	4.5	2.6	92.89	
	823	Ⅲ	磨石	I-6	安山岩	6	5.2	1.9	87.17	
	824	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	5.7	4.5	3.3	107.22	
	825	Ⅲ	磨石	D-3	安山岩	5.2	5.1	2.4	91.12	
	826	Ⅲ	磨石	B-4	砂岩	6.2	5.8	2.1	112.94	



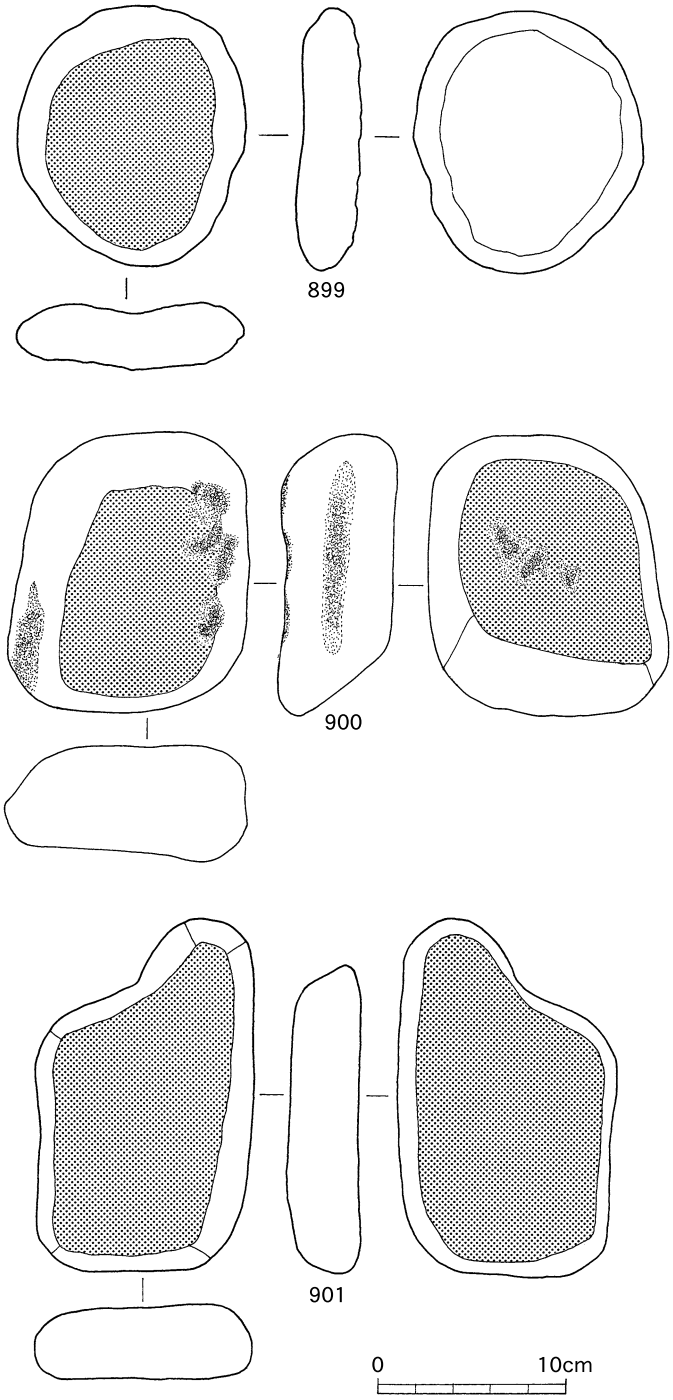
第75図　縄文時代晩期石器20（磨石）



第76図　縄文時代晩期石器21（磨石）



第77図　縄文時代晩期石器22（磨石）



第78図　縄文時代晩期石器23（石皿）1

石皿（第78図・第79図）

石皿は８点を図化した。主に安山岩，砂岩を石材に用いたもので，ほとんどが自然礫を利用したものである。903・904は砂岩の節理面を利用して形を整えて使用している。906は使用面に溝が走っていることから攻玉砥石の可能性がある。900・905は作業面に敲打痕がみられる。

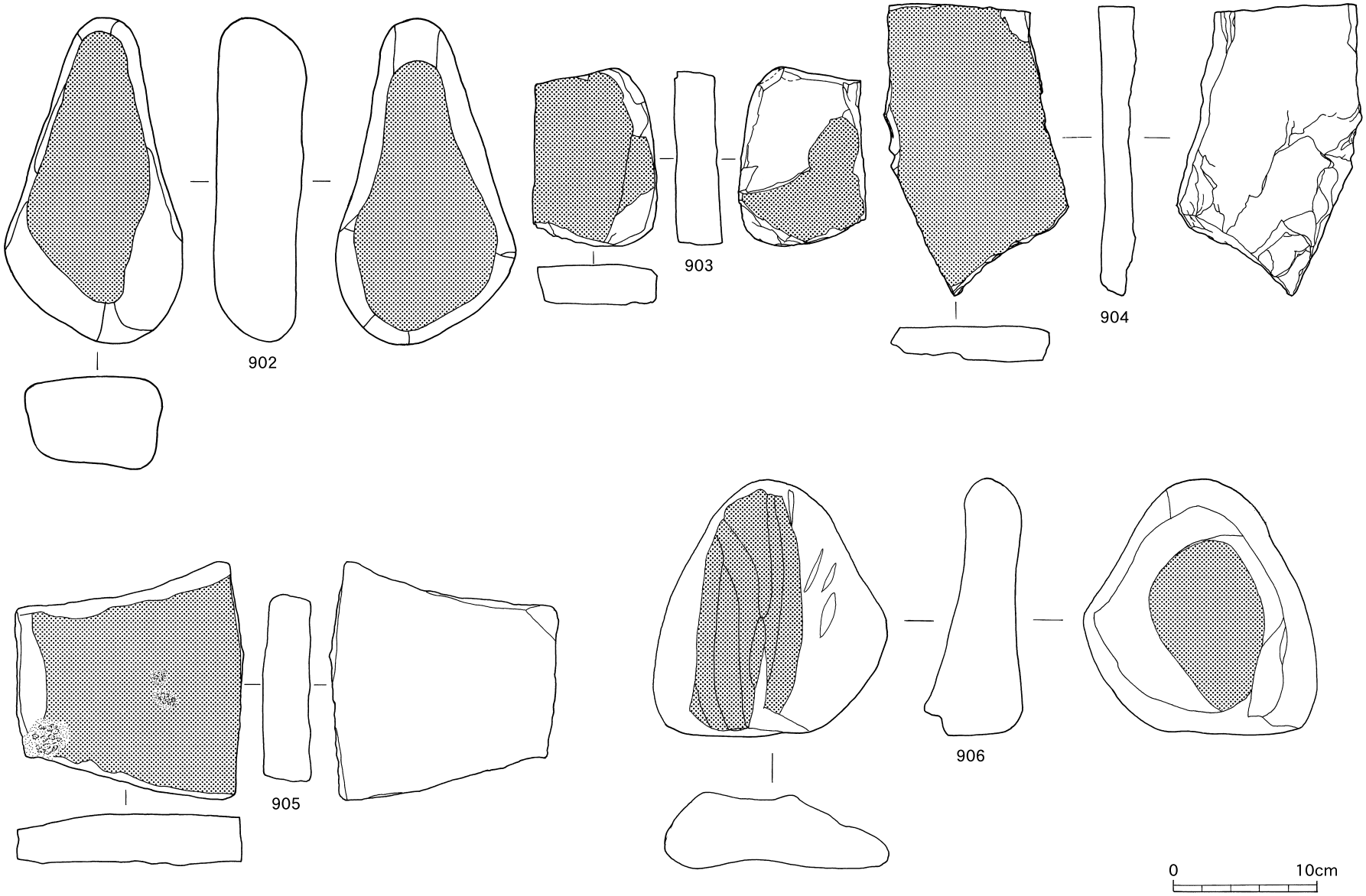
軽石製品（第80図）

軽石製品は12点出土している。円形もしくはそれを加工したもので，気泡の大きなものと小さなものがある。915は片面の中央部に途中まで穿孔又は窪みを付けている。また，その窪みの端部に，両面から穿孔し貫通している。913は橙色をした軽石で角を削って抉りを付けている。908は正面下部に，角のあるもので筋を付けた痕跡がある。

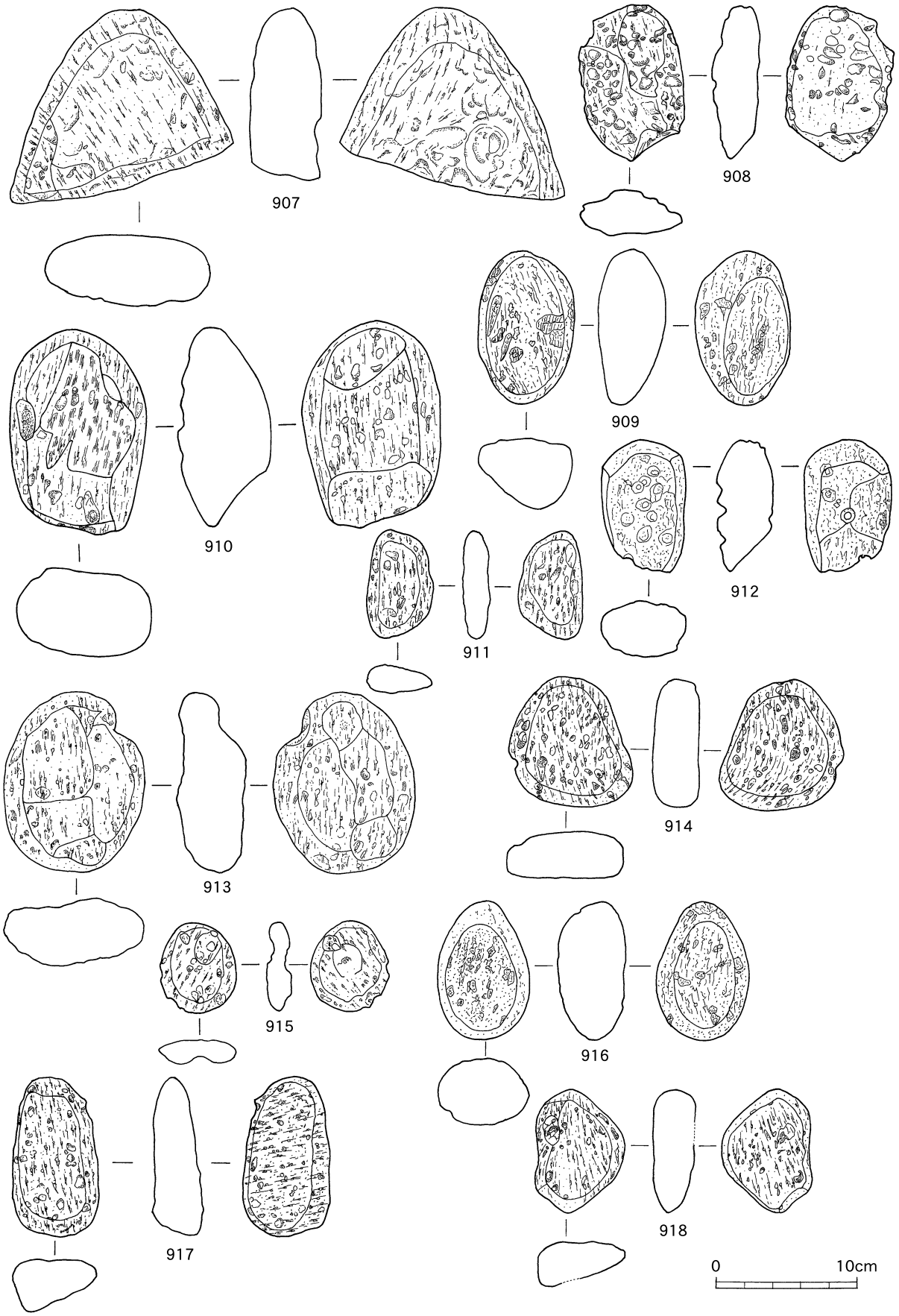
縄文時代晩期石器16

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
71図	827	Ⅲ	磨石	G-5	砂岩	2.2	3	0.9	13.13	
	828	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	4.1	3.9	1.7	38.43	
	829	Ⅲ	磨石	G-7	砂岩	3.9	4.1	1.3	34.41	
	830	Ⅲ	磨石	F-4	砂岩	4.3	4.9	1.8	41.38	

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
71図	831	Ⅲ	磨石	K-9	砂岩	4.8	4.1	1.8	52.57	
	832	Ⅰ	磨石	K-9	砂岩	4.9	4.2	1.5	48.49	
	833	Ⅱ	磨石	F-10	砂岩	4.5	4.2	2.4	64.84	
	834	Ⅱ	磨石	F-9	砂岩	4.5	4.4	1.4	36.56	



第79図　縄文時代晩期石器24（石皿）2



第80図　縄文時代晩期石器25（軽石製品）

縄文時代晩期石器16～20

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
71図	835	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	5.2	4.7	2.1	74.25	
	836	Ⅲ	磨石	H-6	砂岩	4.4	3.6	1.6	40.64	
	837	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.5	4.1	1.9	66.19	
	838	Ⅲ	磨石	F-7	安山岩	4.4	4.2	2.6	66.13	
	839	Ⅱ	磨石	G-6	砂岩	4.9	4.5	1.6	53.2	
	840	Ⅲ	磨石	I-5	安山岩	5.4	4.9	1.8	69.38	
	841	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.9	4.5	1.8	54.29	
	842	Ⅲ	磨石	E-7	砂岩	5.2	5.2	2	76.62	
	843	Ⅲ	磨石	I-7	砂岩	5.2	4.3	2.3	73.79	
	844		磨石	K-8	安山岩	4.8	4.2	3.2	101.37	
72図	845	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.8	4.1	4	101.96	
	846	Ⅲ	磨石	F-7	安山岩	4.8	4.6	2.5	86.94	
	847	Ⅲ	磨石	I-6	砂岩	5.3	4.3	2	65.62	
	848	Ⅲ	磨石	I-6	安山岩	5.3	4.3	1.4	52.6	
	849	Ⅲ	磨石	H-5	砂岩	4.7	3.8	2.7	72.1	
	850	Ⅲ	磨石	F-12	砂岩	4.9	4.6	2.9	97.29	
	851	Ⅲ	磨石	K-8	安山岩	5.3	4.4	3.4	100.7	
	852	Ⅲ	磨石	J-8	砂岩	5.8	5.6	1.8	97.69	
	853	Ⅲ	磨石	F-7	安山岩	5.1	4.9	3.1	108.87	
	854	Ⅲ	磨石	B-5	安山岩	6.8	5	2.5	125	
73図	855	Ⅲ	磨石	C-5	安山岩	5	7	5.4	160	
	856	Ⅲ	磨石	L-10	砂岩	6.1	5.5	2.2	107.73	
	857	Ⅲ	磨石	H-0	砂岩	6	5.2	2.2	99.08	
	858	Ⅲ	磨石	D-4	安山岩	5.6	5.3	2.1	58.71	
	859	Ⅲ	磨石	C-4	安山岩	5.7	4.8	2.1	89.17	
	860	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	5.7	4.4	1.7	55.16	
	861	Ⅲ	磨石	B-4	砂岩	5.7	5	1.8	69.72	
	862	Ⅲ	磨石	E-5	砂岩	5.9	5.4	2.4	110.06	
	863	Ⅲ	磨石	F-7	砂岩	5.4	4.7	2.7	97.11	
	864	Ⅲ	磨石	D-5	砂岩	6.2	5.8	2.7	140	
	865	Ⅲ	磨石	E-5	砂岩	5.7	5.4	3	130	
74図	866	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	6.8	6.5	2.1	155	
	867	Ⅲ	磨石	E-4	砂岩	7.5	5.4	3.5	165	
	868	Ⅲ	磨石	G-7	砂岩	7.6	5.3	3.2	180	
	869	Ⅲ	磨石	D-3	安山岩	7.1	4.9	3.9	170	
75図	870	Ⅲ	磨石	E-4	砂岩	6.7	6.2	4.5	250	
	871	Ⅲ	磨石	C-5	砂岩	7.2	5.6	4.8	260	
	872	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	7.8	5.4	3.7	180	
	873	Ⅲ	磨石	C-3	砂岩	8.2	7.9	4.8	420	
	874	Ⅲ	磨石	C-4	砂岩	8.8	8.4	5.7	525	
	875	Ⅲ	磨石	C-4	安山岩	8.7	7	5.3	445	
	876	Ⅲ	磨石	G-6	砂岩	9	8.7	3.1	360	
	877	Ⅲ	磨石	J-7	安山岩	10.7	9.2	6	880	
	878	Ⅲ	磨石	D-3	火成岩系	11.2	10	4.6	690	花崗岩類似
	879	Ⅲ	磨石	C-6	砂岩	10.8	7.7	4.6	590	
	880	Ⅲ	磨石	B-5	安山岩	13.8	10.4	6.1	1110	
	881	Ⅲ	磨石	C-5	安山岩	12.9	9.8	5	920	

縄文時代晩期石器21～25

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
76図	882	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	11.1	11.9	7	1240	
	883	Ⅲ	磨石	C-3	砂岩	8.2	7.3	4.1	370	
	884	Ⅲ	磨石	D-4	安山岩	9.1	7.5	5	535	
	885	Ⅲ	磨石	E-3	砂岩	9.3	8.2	3.5	330	
	886	Ⅲ	磨石	E-7	安山岩	8.8	7.3	4.1	450	
	887	Ⅲ	磨石	E-5	砂岩	10.7	8.3	4.3	580	
	888	Ⅲ	磨石	D-3	砂岩	8.4	8.2	4.8	415	
	889	Ⅲ	磨石	G-11	砂岩	9.8	7.6	4.1	460	
	890	Ⅲ	磨石	G-5	砂岩	10.9	8.7	3.9	565	
77図	891	Ⅲ	磨石	C-5	安山岩	11.2	8.9	4.1	660	
	892	Ⅲ	磨石	D-3	安山岩	11.5	8.2	6.5	880	
	893	Ⅲ	磨石	H-7	砂岩	12.2	9.4	4.4	615	
	894		磨石	ナシ	安山岩	12.2	9.9	5.8	1055	
	895	Ⅱ	磨石	G-11	安山岩	12.6	9	4.6	865	
	896	Ⅱ	磨石	F-11	砂岩	10.4	8.2	4.4	455	
	897	Ⅲ	磨石	H-5	安山岩	11.3	10.4	5.2	895	
	898	Ⅲ	叩石	F-9	頁岩	12.6	6.3	3.9	485	
78図	899	Ⅲ	石皿	L-10	デイサイト	13.8	12.2	3.1	630	
	900	Ⅲ	石皿	D-4	砂岩	14.8	12.4	6.2	1835	
	901	Ⅲ	石皿	H-5	砂岩	18.8	11.6	3.9	1485	
79図	902	Ⅲ	石皿	G-11	砂岩	21.5	12.5	5.9	2170	
	903	Ⅱ	石皿	G-11	砂岩	12.3	8.7	3.2	530	
	904	Ⅲ	石皿	H-0	シルト岩	20.2	12.8	2.6	830	
	905	Ⅲ	石皿	F-4	シルト岩	16.5	15.7	3.6	1475	
	906	Ⅱ	石皿	G-7	砂岩	17.8	15.5	6.8	2120	
80図	907	Ⅱ	加工品	G-7	軽石	12.2	14.9	5	295	
	908	Ⅲ	加工品	F-10	軽石	11	7.1	3.2	56.44	
	909	Ⅲ	加工品	K-8	軽石	10.9	6.8	4.8	65.68	
	910	Ⅲ	加工品	F-4	軽石	14.4	9.8	6.7	240	
	911	Ⅲ	加工品	G-5	軽石	7.7	4.7	1.8	18.33	
	912	Ⅳ	加工品	G-5	軽石	9.2	6.2	4.1	50.62	
	913		加工品	ナシ	軽石	13.8	10	4.7	130	
	914	Ⅲ	加工品	K-9	軽石	9.1	8.2	3.3	115	
	915		加工品	ナシ	軽石	6.4	5.5	1.8	16.3	
	916	Ⅱ	加工品	G-11	軽石	9.8	6.5	4.7	70.47	
	917	Ⅲ	加工品	ナシ	軽石	11.2	6.1	3.5	49.95	
	918	Ⅲ	加工品	H-6	軽石	8.8	6.1	3	49.97	

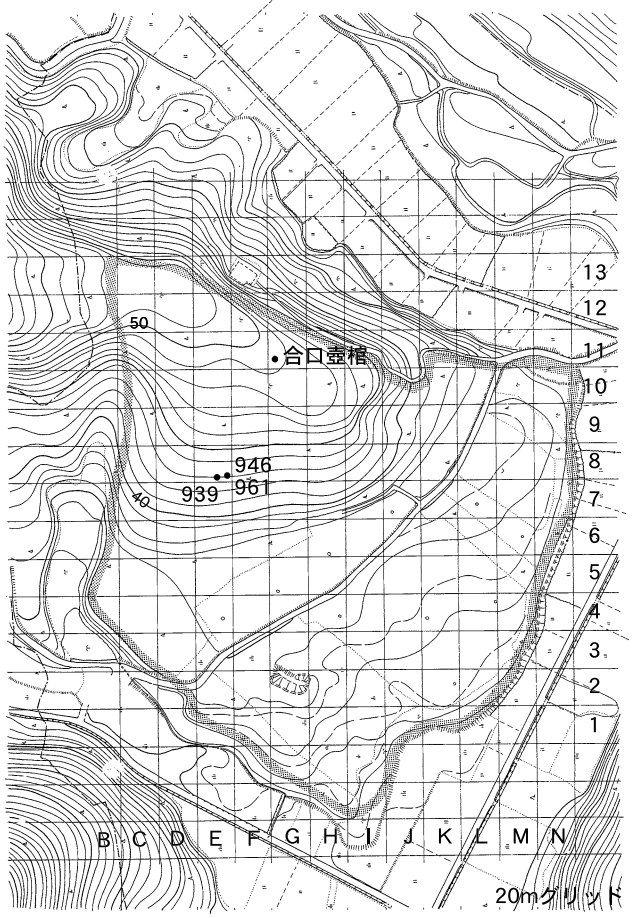
第２節　弥生時代の調査

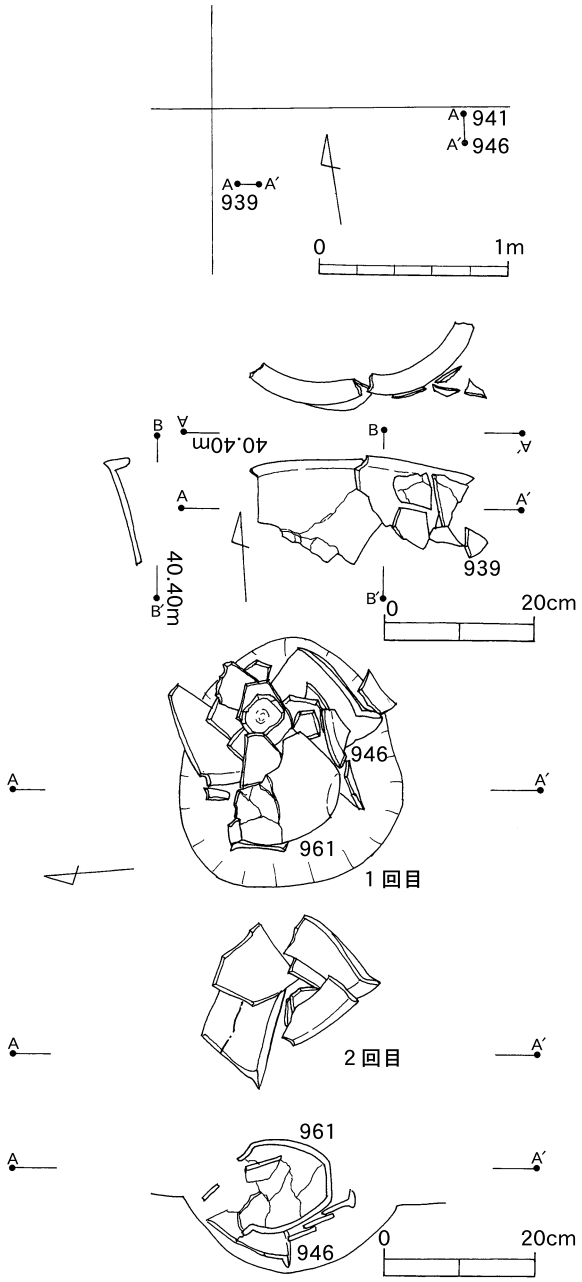
弥生時代の遺構・遺物は多くはないが中期を中心に出土している。また，遺構も小児用合口壺棺が検出されるなど貴重な資料が得られた。

１　遺構（第81図・第82図）

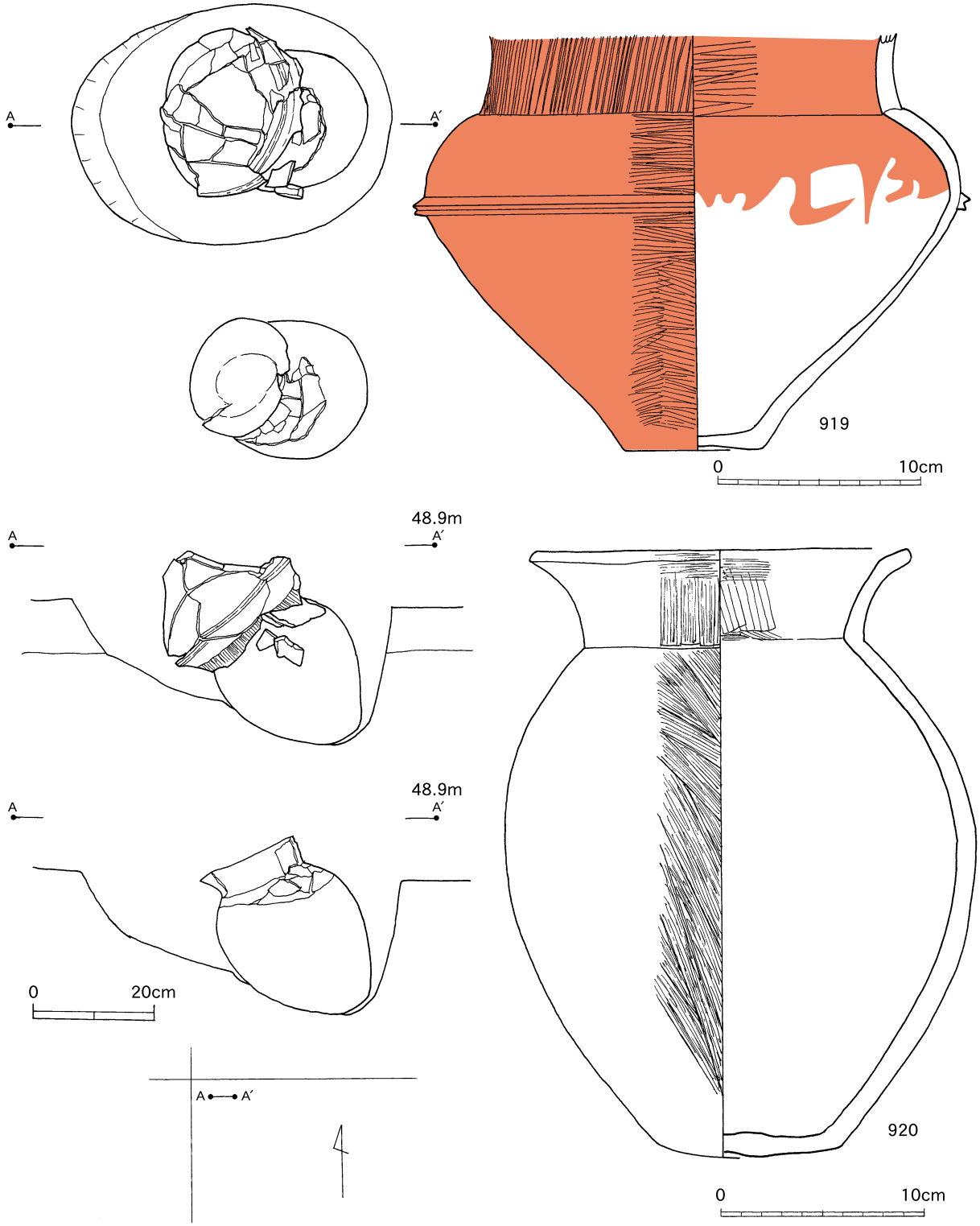
遺構は，Ｇ－11区Ⅲ層上面において小児用合口壺棺１基が検出された。

長軸53㎝，短軸40㎝，深さ23㎝の楕円形の土坑内に壺形土器２個体が合わさった状態で検出された。西側に約50度傾いた状態で安置されている。蓋になる壺は，全面丹塗りの広口壺で須玖式土器と思われるものである。身になる壺は黒髪式土器と思われるものである。土坑内及び壺棺内からは副葬品などは検出されなかった。また，蓋になる壺の口縁部は意識的に欠いてある。上の壺（919）は口縁部を欠損するものである。底部は径7.2㎝のわずかなあげ底で，胴部の最大径は器高の半分よりやや上位にあるものと思われ，その部分にM字状の突帯を廻らす。突帯部分から頸部は内湾してしまり，口縁部は直行気味に立ち上がった後外反するものと思われる。口縁部は欠損するものの，単純口縁部の可能性が高いものである。頸部から口縁部へかけて縦方向の暗文が施され，全面に丹塗りでヘラ磨きがなされている。ヘラ磨きは４分割磨きである。下の壺（920）は口縁部径19.2㎝，器高30.3㎝を測るもので，底部は凸レンズ状を呈する。胴部はあまり張らずに頸部へ至るもので，口縁部は頸部からゆるやかに外反するものであるが，口縁端部近くで屈曲するものである。外面は板ナデ，内面はハケ目調整が認められる。





第81図弥生時代遺物出土状況



第82図　弥生時代合口壺棺

2　遺物（第82図～第86図）

弥生時代の遺物は多くはないものの，前期から後期までの土器がみられる。また，石器については４点が出土している。921～923は胴部に刻目突帯を廻らすものである。924～931は口縁部が短く逆Ｌ字状に外反するもので，胴部に三角突帯を廻らすもの（924～925），沈線文を廻らすもの（927）がある。929は口縁部に焼成前の穿孔がみられるものである。933・935は口縁端部を分厚く仕上げて外反状にするものである。935は口縁内面に突起を有する。934は口縁部が内湾し内面に突出するもので，口縁部直下に三角突帯を廻らす。937は高坏ではないかと思われるものである。口縁部は平坦に仕上げ，Ｔ字状口縁を呈する。口縁内面に突起を有し，口縁部平坦面には分割暗文がみられる。938は壺の口縁部である。939～942・951～957はくの字状口縁の甕形土器である。939はやや張った胴部からわずかに内湾し口縁部へ至る。口縁部は分厚くくの字状に外反し内面に突出部を有する。胴部上位に細い沈線文を廻らす。940～946は口縁内面に突起を有するものである。940・943はしゃくれ気味の口縁部である。946は口縁部径23㎝，器高25.7㎝を測るもので，中空の脚台からあまり開かず立ち上がる。胴部上位がわずかに張った後内湾し，口縁部へ至る。口縁部はくの字状に外反し，内面に突起を有する。外面はハケ目調整である。947～957は内面に突起を有しないものである。960は口縁部がなだらかに外反し，内面の稜線が明瞭ではない。943～949は三角突帯を廻らすものである。958・959は底部でわずかに凹みをもつ脚台である。961は口縁部径15㎝，器高13.4㎝を測る鉢である。平底の底部から胴部は膨らみ，口縁部はくの字状に外反する。

962～969は壺形土器。962～964は口縁部で963・964は二叉状口縁である。966～969は三角突帯を廻らすものであるが，966はやや広い突帯を１条廻らす。967～969はシャープな三角突帯を廻らす。

970は平底の底部である。

弥生時代合口壺棺

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
82図	919	壺	完形	G-11	Ⅲ	にぶい赤褐	赤褐	A.B.C	ヘラミガキ	分割ヘラミガキ	丹塗り
	920	壺	完形	G-11	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ハケ目・ナデ	板ナデ	

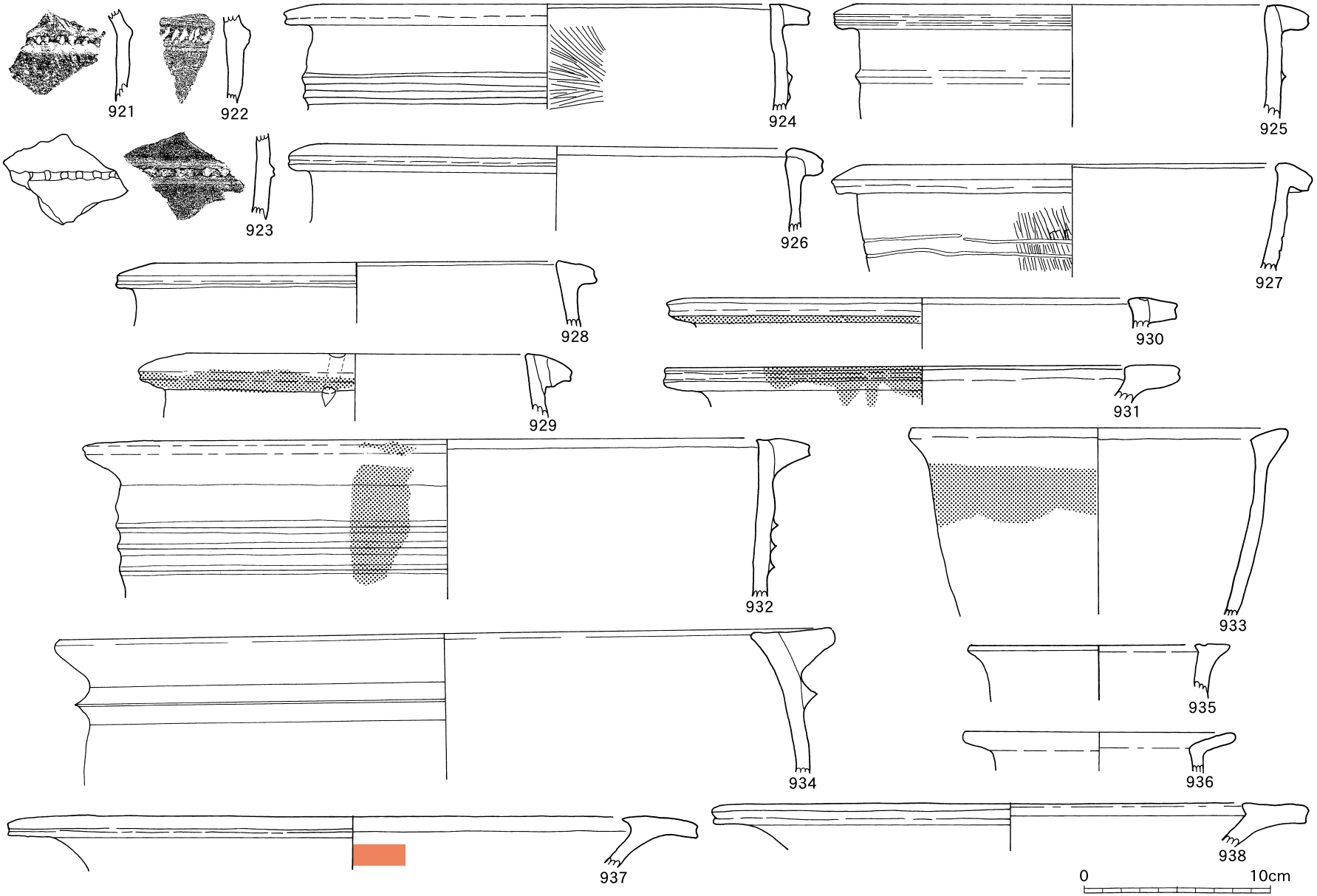
弥生時代土器

A：長石　B：石英　C：角閃石

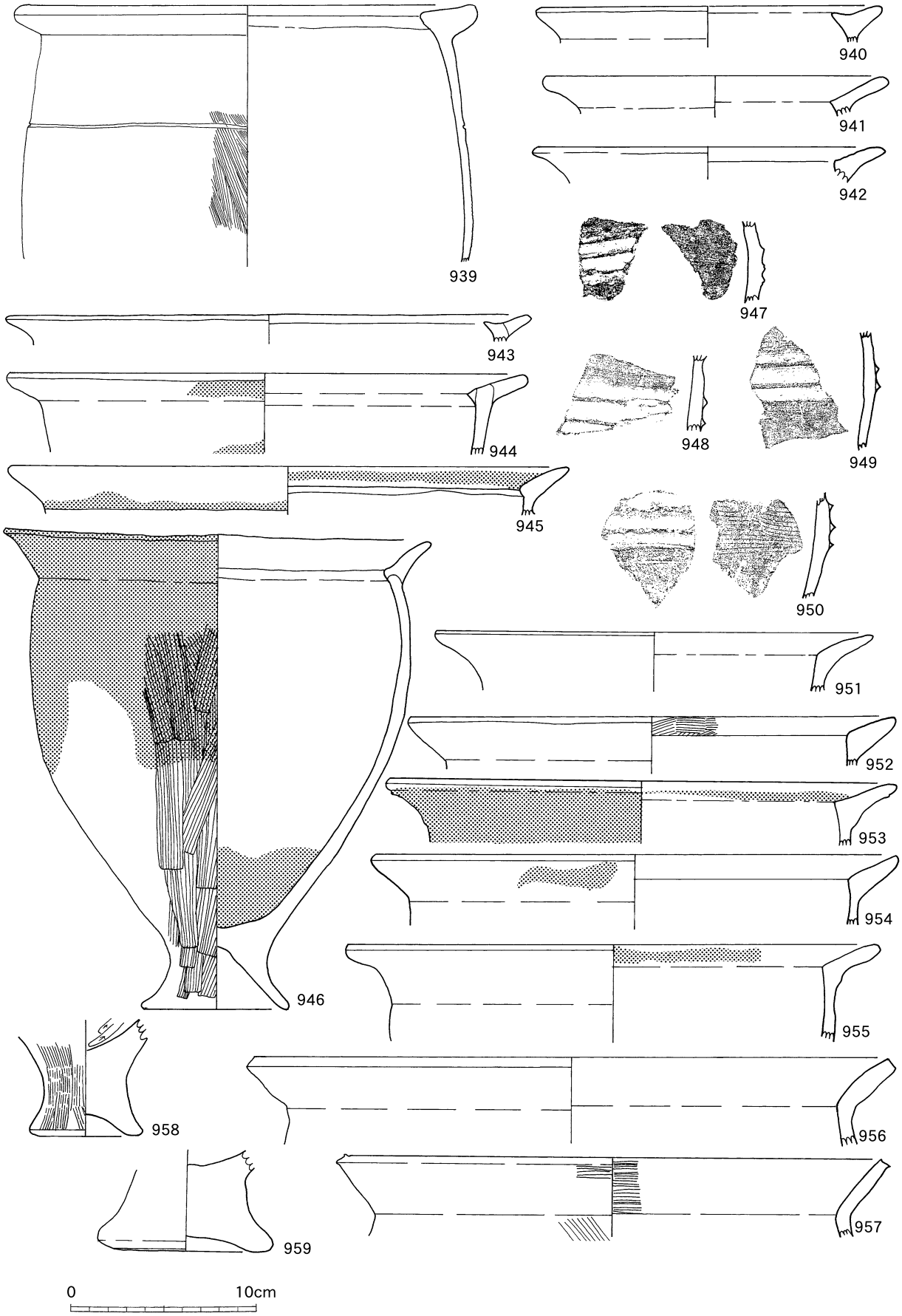
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
83図	921	甕	胴部	E-7	Ⅱ	にぶい橙	黒褐	A.B	ナデ	ナデ	刻目突帯
	922	甕	胴部	E-12	Ⅳ	橙	橙	A.B	ナデ	ナデ	刻目突帯
	923	甕	胴部	B-5	Ⅲ	赤褐	黒褐	A.B	板ナデ	ヘラミガキ	刻目突帯
	924	甕	口縁部	B-5	Ⅲ	明褐	黒	A.B	ハケ目	ハケ目	突帯
	925	甕	口縁部	E-7	Ⅲ	にぶい赤褐	赤褐	A.B.C	板ナデ	ナデ	突帯 スス付着
	926	甕	口縁部	E-8	Ⅰ	黒褐	黒褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	927	甕	口縁部	B-4	Ⅲ	黒褐	黒褐	A.B	ナデ	ナデ・ハケ目	沈線 スス付着
	928	甕	口縁部	E-7	Ⅲ	にぶい褐	明赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	929	甕	口縁部	B-5	Ⅲ	赤褐	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	930	甕	口縁部	B-5	Ⅲ	明褐	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	スス付着
	931	甕	口縁部	F-8	Ⅲ	明褐	にぶい赤褐	A.B.C	板ナデ	板ナデ	スス付着
	932	甕	口縁～胴部	E-7	Ⅲ	赤褐	にぶい黄褐	A.B.C	ナデ	ナデ	スス付着
	933	甕	口縁～胴部	F-11	Ⅱ	黄褐	褐	A.B.C	ナデ	ナデ	スス付着
	934	甕	口縁～胴部	G-6	Ⅳ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	ナデ	ナデ	突帯
	935	甕	口縁部	F-11	Ⅱ	黒褐	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	936	甕	口縁部	F-11	Ⅲ	黒褐	黒	A.B	ナデ	ナデ	
	937	甕	口縁部	E-7	Ⅲ	にぶい橙	橙	A.B	ナデ	ナデ	丹塗り
	938	壺	口縁部	F-4	Ⅲ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	ナデ	ナデ	
84図	939	壺	口縁～胴部	F-8	Ⅲ	橙	橙	A.B	ナデ・ハケ目	ハケ目	
	940	甕	口縁部	G-5	Ⅲ	にぶい黄橙	灰黄褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	941	甕	口縁部	F-7	Ⅲ	赤褐	暗赤褐	B.C.金雲母	ナデ	ナデ	
	942	甕	口縁部	E-7	Ⅲ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	ナデ	ナデ	

A：長石　B：石英　C：角閃石

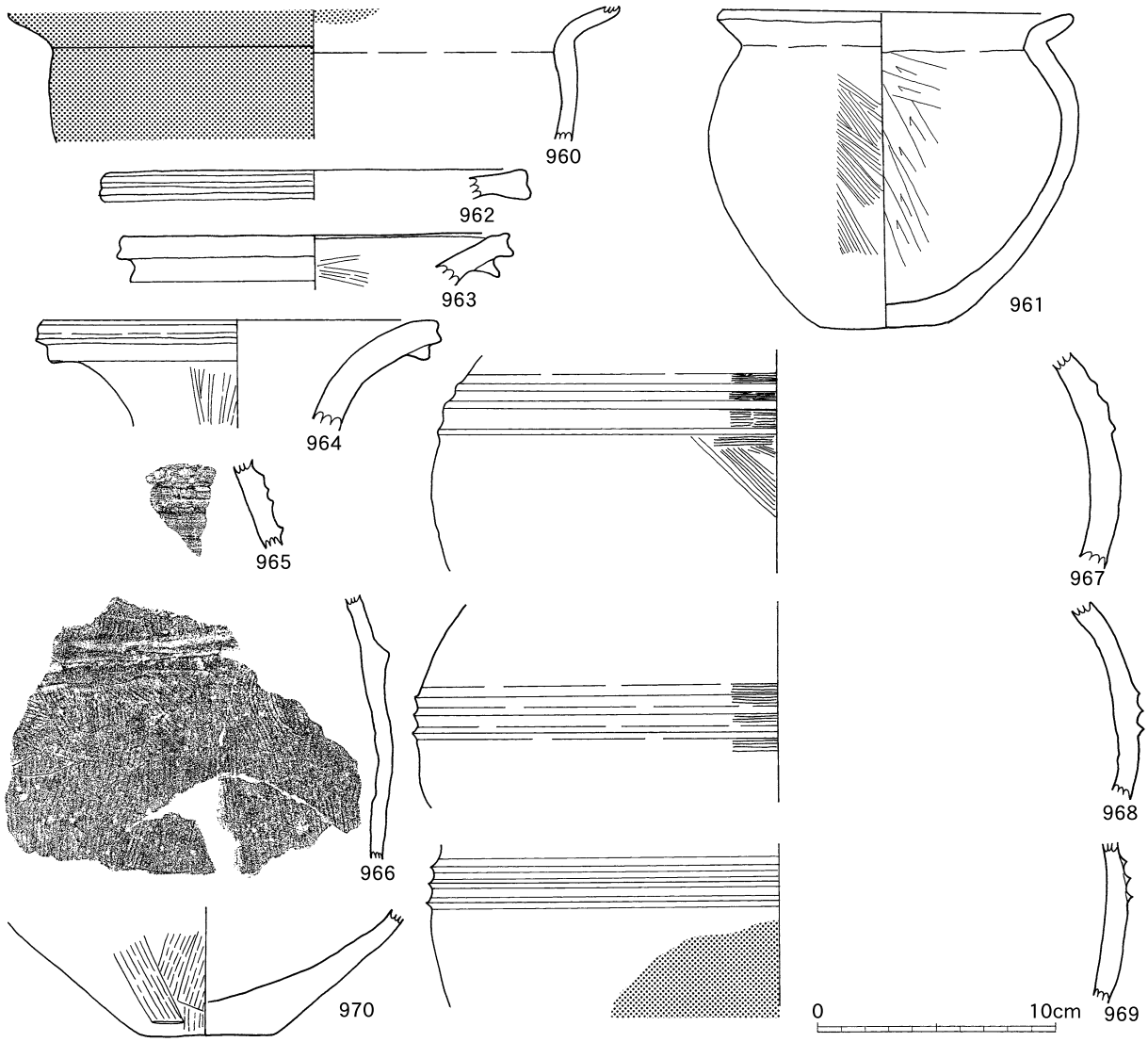
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
84図	943	甕	口縁部	G-5	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	944	甕	口縁部	ナシ		明赤褐	赤褐	B.C.金雲母	ナデ	ナデ	スス付着
	945	甕	口縁部	H-6	Ⅲ	にぶい褐	にぶい橙	B.C.金雲母	ナデ	ナデ	スス付着
	946	甕	完形	F-8	Ⅲ	明褐	黒褐	B.C.金雲母	ナデ	ハケ目	スス付着
	947	甕	胴部	C-4	Ⅲ	にぶい褐	橙	A.B.C	ナデ	ナデ	突帯
	948	甕	胴部	B-5	Ⅲ	赤褐	赤褐	A.B.C	ハケ目	ナデ	突帯
	949	甕	胴部	B-5	Ⅲ	明赤褐	黒褐	A.B.C	ナデ	ナデ	突帯
	950	甕	胴部	G-11	Ⅱ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	突帯
	951	甕	口縁部	G-4	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	952	甕	口縁部	H-6	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	B.C.金雲母	ハケ目	ナデ	
	953	甕	口縁部	ナシ		黒褐	黒褐	A.B	ナデ	ナデ	スス付着
	954	甕	口縁部	F-7	Ⅰ	にぶい褐	黒褐	A.B	ナデ	ナデ	スス付着
	955	甕	口縁部	ナシ		にぶい黄褐	黒褐	A.B	板ナデ，ナデ	ハケ目	
	956	甕	口縁部	F-8	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B	ナデ	ナデ	
	957	甕	口縁部	G-5	Ⅲ	橙	橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	スス付着
	958	甕	底部	F-8	Ⅲ	黒褐	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ハケ目	
	959	甕	底部	K-9	Ⅲ	褐	明褐	A.B	ナデ	ナデ	
85図	960	甕	胴部	D-3	Ⅲ	明褐	にぶい褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	961	壺	口縁部	D-3	Ⅲ	明赤褐	にぶい褐	A.B.C	ヘラケズリ	ハケ目	
	962	壺	口縁部	G-7	Ⅲ	浅黄橙	浅黄橙	A.B	ナデ	ナデ	丹塗り
	963	壺	口縁部	F-7	Ⅲ	明赤褐	明赤褐	A.B	ヘラミガキ	ナデ	
	964	壺	口縁部	F-7	Ⅲ	にぶい褐	にぶい褐	A.B	ナデ	ナデ，ヘラミガキ	
	965	壺	胴部	F-7	Ⅲ	にぶい黄	橙	A.B	ナデ	ナデ	
	966	壺	胴部	D-3	Ⅲ	にぶい黄橙	橙	A.B	ナデ	ハケ目	突帯
	967	壺	胴部	F-7	Ⅲ	にぶい橙	明赤褐	A.B	ナデ	ハケ目	
	968	壺	胴部	C-4	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B	ハケ目	ハケ目	突帯
	969	壺	胴部	C-4	Ⅲ	灰黄	浅黄	A.B	ナデ	ナデ	突帯
	970	壺	底部	F-4	Ⅲ	明灰黄	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	突帯



第83図　弥生時代土器１



第84図　弥生時代土器２



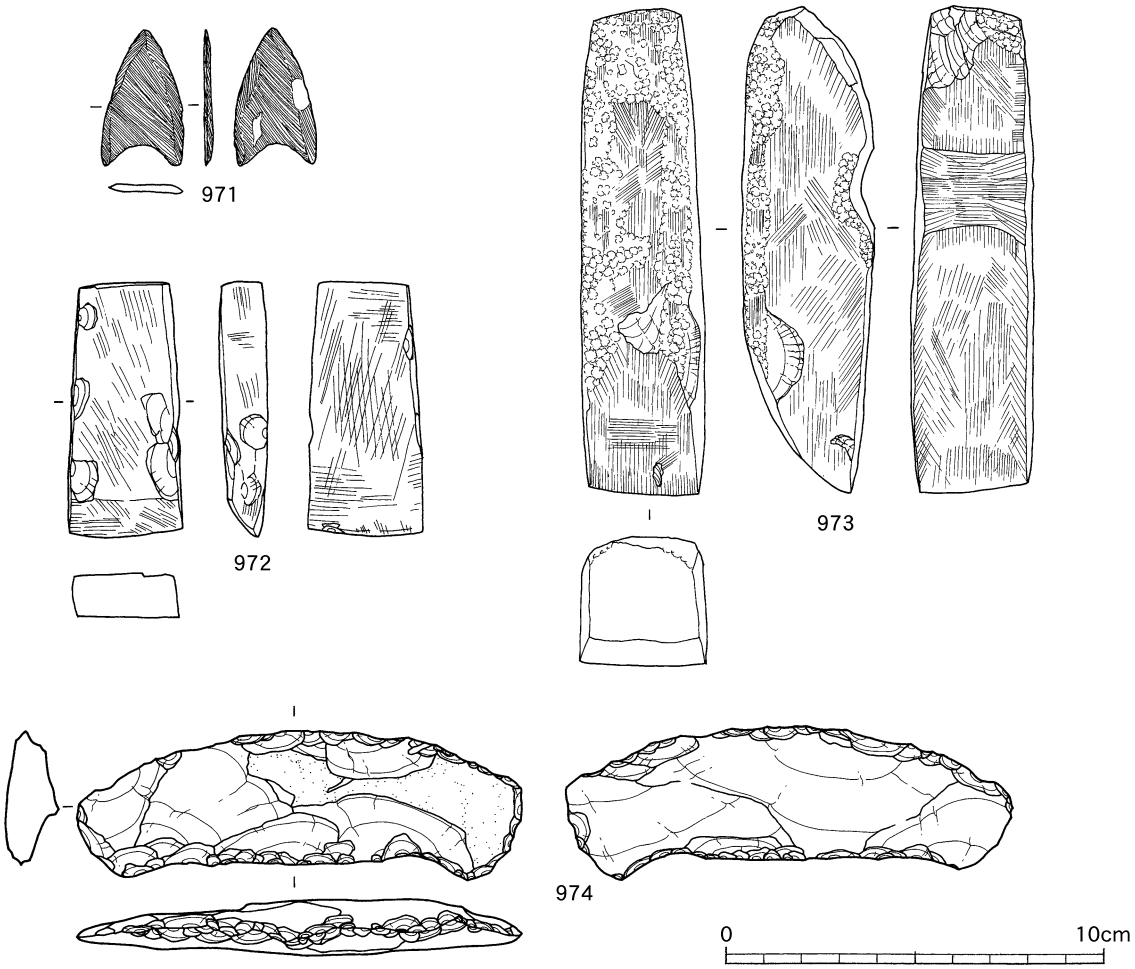
第85図　弥生時代土器３

971は磨製石鏃。長さ3.65㎝，幅2.15㎝で全面に擦痕が明瞭にみられる。973は長さ13㎝，幅3.2㎝，厚さ3.5㎝の柱状抉入片刃石器。断面はほぼ方形である。基部よりやや下位にヒモ掛けと思われる抉りを有する。刃部は抉り部へ向う片刃である。

972は片刃の磨製石斧。刃部がわずかに広いがほぼ長方形である。刃部は片刃で全面に擦痕が認められる。974は石鎌と思われる。幅3.5㎝，長さ11.8㎝，厚さ1.5㎝の横長剥片を素材としたものでわずかに湾曲するものである。両端にわずかな抉りが認められ，内湾する範囲に交互剥離による刃部を形成するものである。

弥生時代石器

挿図番号	報告番号	層位	器種	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
86図	971	Ⅲ	磨製石鏃	G-5	頁岩	3.65	2.15	0.25	1.9	
	972	Ⅲ	磨製石斧	F-7	シルト岩	6.8	3.05	1.3	58.6	
	973	Ⅲ	柱状抉入片刃石器	G-5	頁岩	12.9	3.25	3.5	250.0	
	974	Ⅲ	石鎌	G-5	頁岩	11.8	3.5	1.5	67.5	



第86図　弥生時代石器

第３節　古墳時代の調査

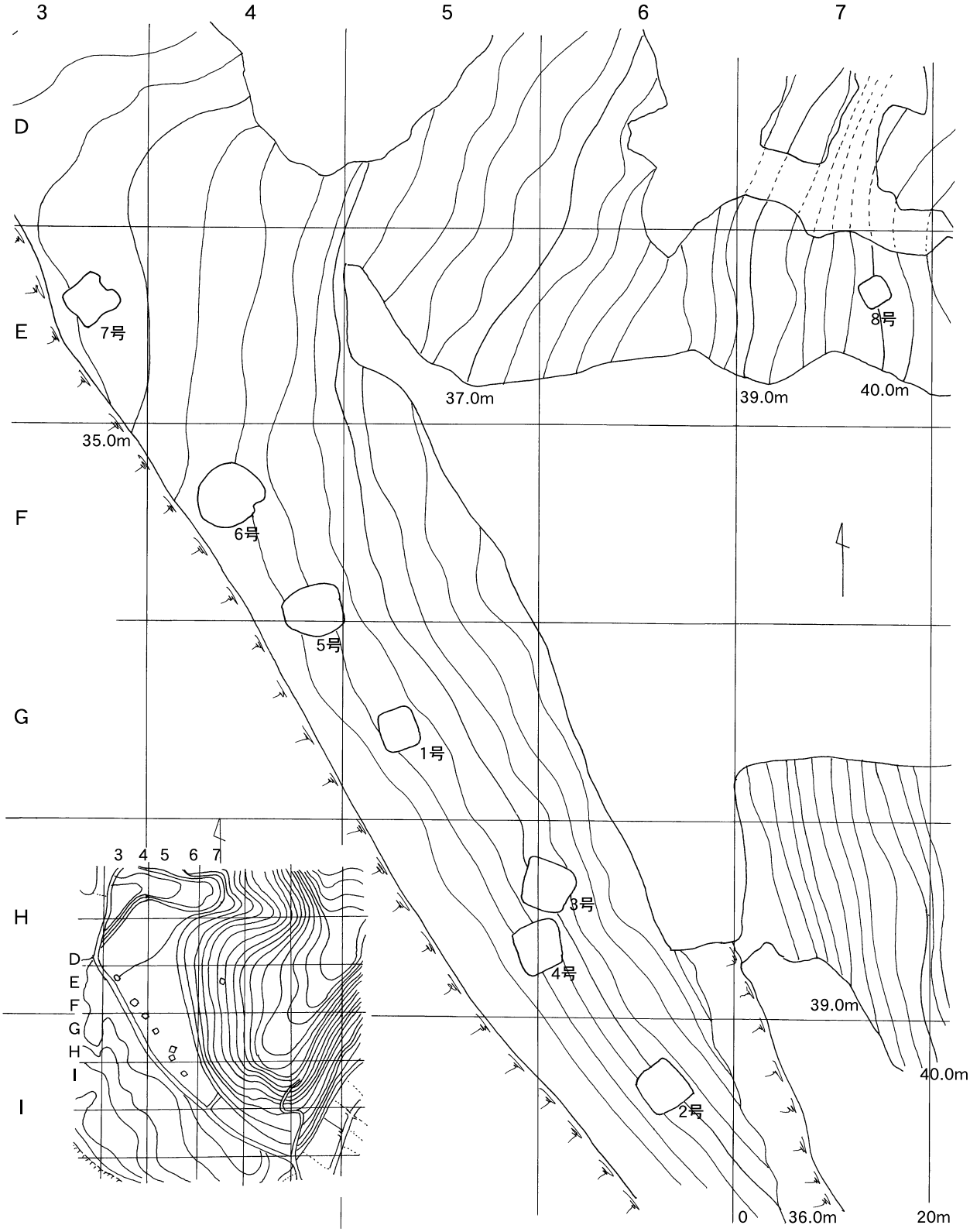
古墳時代の遺構は竪穴住居跡８軒が検出されているが，遺物包含層が削除されている部分が多く出土量は多くはない。

１　遺構（第87図）

遺構は竪穴住居跡が８軒検出された。１号住居跡～７号住居跡は調査区の南西側の標高約35mの部分に集中しているが，８号住居跡については標高40mの一段高い部分に単独で検出された。１～７号より南西側には平坦面がのびるが，現状保存の処置が取られたため未調査である。竪穴住居跡の広がりは未調査部分へものびると思われる。

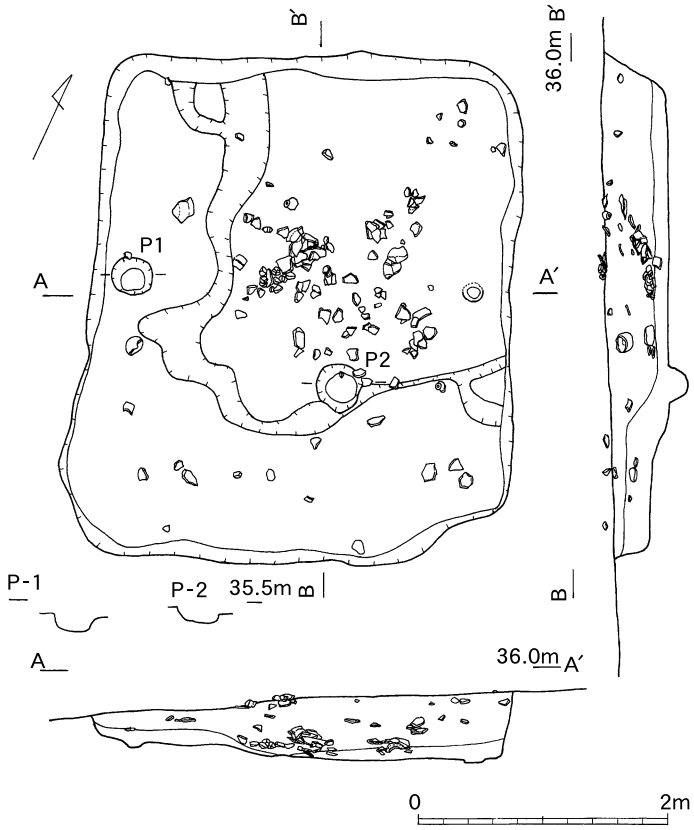
１号住居跡（第88図～第91図）

１号住居跡はＧ－５区において検出された。長軸はほぼ南北で，南側と西側にベッド状に一段高くなった部分がある。規模は4.04×3.34m，深さ50㎝であるが，ベッド状の部分は25㎝である。明瞭な柱穴は検出されなかったが，ピット１及び２の２箇所が可能性がある。遺物は土器片がまんべんなく出土し，まとまったものはない。975は口縁部径29.6㎝，器高8.2㎝を測る蓋形土器。丸みを帯びた天井部から口縁部は大きく外反し口縁端部はわずかに凹むものである。976～980は甕形土器。976は頸部に三角突帯を廻らし口縁部は外反する。口縁内面にはかすかに稜線が残る。977・978は口縁内面に稜を有せずゆるやかに外反するものである。980は胴部に刻目突帯を廻らすものである。981～983は中空の脚台である。984～988は鉢形土器。986は口縁部径17㎝，器高11.3㎝を測る。やや厚手のもので，平底から直線的に立ち上がり口縁部へ至るものである。985・988は底部を欠損するものの脚台を有するものと思われる。989～997は壺形土器。989・990は胴部が張



第87図　古墳時代住居跡配置図

らず口縁部はゆるやかに外反する。いずれも胴部最大径よりやや上位に刻目突帯を廻らす。991も胴部は張らず胴部上位に突帯を廻らす。992は胴部が球形状に膨らみ，胴部最大径の部分に刻目突帯を廻らす。993は口縁部径10.1㎝，器高21.9㎝，胴部最大径14㎝を測る細長い形状のものである。口縁部は頸部から直行してから外反するものである。



第88図　１号竪穴住居跡

１号竪穴住居跡内遺物

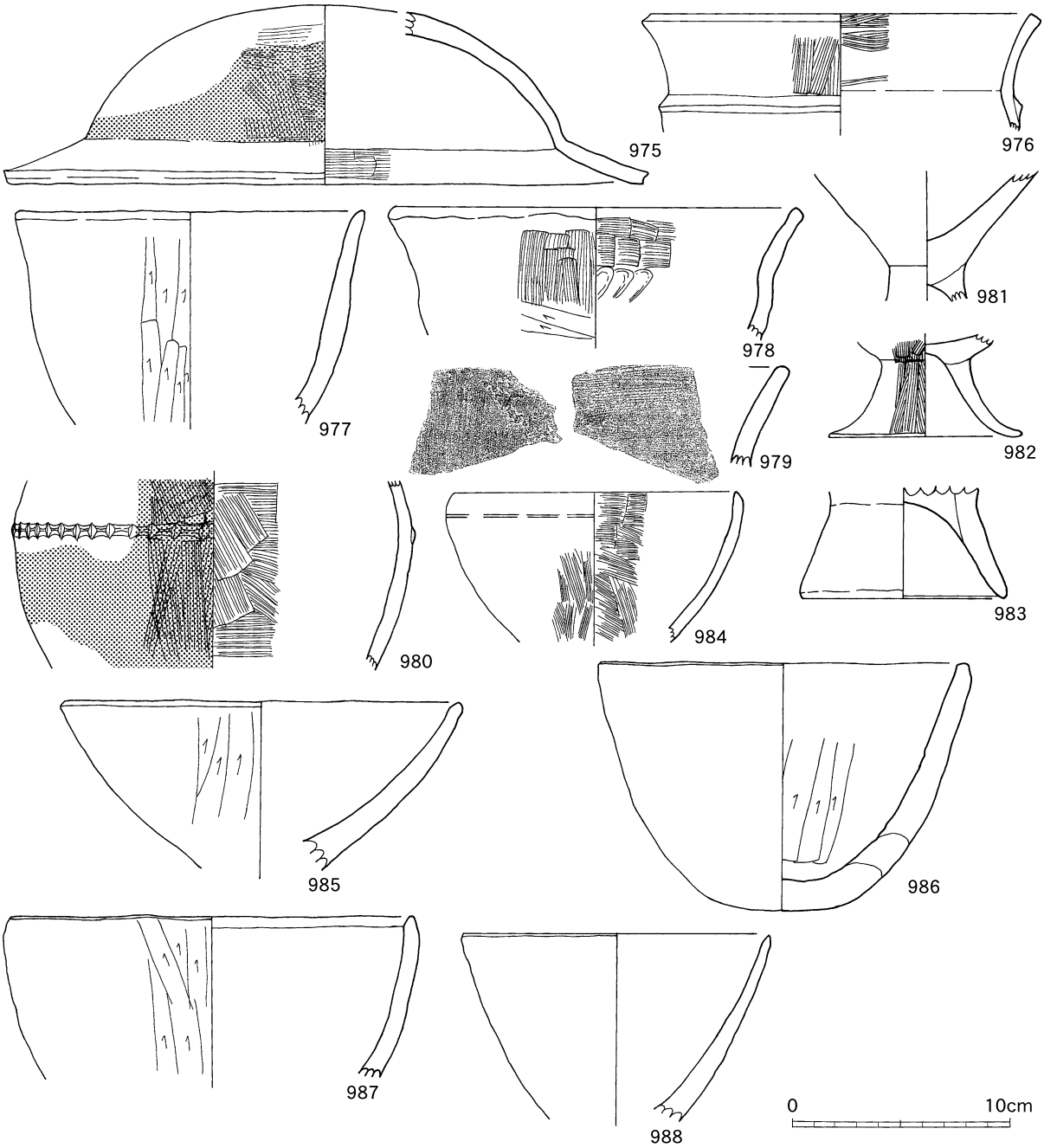
A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
89図	975	蓋	天井, 口縁部			にぶい黄橙	明赤褐	A.B	ナデ，ハケ目	ナデ，ハケ目	スス付着
	976	甕	口縁部			明黄橙	明赤褐	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	977	甕	口縁部			橙	明赤褐	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	978	甕	口縁部			にぶい黄橙	にぶい橙	A.B	ハケ目, 指頭押圧	ハケ目ヘラケズリ	
	979	甕	口縁部			にぶい橙	にぶい橙	A.B	ハケ目	ハケ目	スス付着
	980	甕	胴部			黒褐	橙	A.B	ハケ目	ハケ目	
	981	甕	底部			にぶい橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	982	甕	底部			明赤褐	明赤褐	A.B.C	ナデ	ハケ目	
	983	甕	底部			橙	にぶい黄橙	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	984	鉢	口縁部			明赤褐	明赤褐	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	985	鉢	口縁部			橙	橙	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	986	鉢	完形			橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ヘラケズリ	
	987	鉢	口縁部			橙	にぶい橙	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	988	鉢	口縁部			にぶい橙	にぶい橙	A.B	ナデ	ナデ	
90図	989	壺	口縁～胴部			にぶい黄橙	橙	A.B	ハケ目，指頭押圧	ハケ目ヘラケズリ	スス付着
	990	壺	口縁～胴部			橙	にぶい橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	スス付着
	991	壺	胴部			橙	にぶい橙	A.B	ハケ目	ヘラケズリ	
	992	壺	胴部			にぶい黄橙	橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目ヘラケズリ	
91図	993	壺	完形			橙	橙	A.B.C	ハケ目，指頭押圧	ヘラケズリ	
	994	壺	口縁部			橙	橙	A.B	ナデ	ナデ	
	995	壺	口縁部			にぶい黄橙	橙	A.B	ハケ目	ハケ目	
	996	壺	胴部，底部			橙	橙	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	997	壺	底部			明黄褐	黄褐	A.B	ナデ	ナデ	

２号竪穴住居跡内遺物

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
93図	998	甕	口縁部			橙	橙	A.B	ナデ	ナデ	刻目突帯
	999	甕	口縁部			橙	橙	A.B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	刻目突帯
	1000	甕	口縁部			浅黄	橙	A.B	ナデ	ナデ	刻目突帯
94図	1001	甕	口縁部			黒褐	赤褐	A.B.C	ナデ	ナデ	刻目突帯
	1002	甕	胴部			明赤褐	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	刻目突帯 スス付着
	1003	甕	胴部			にぶい黄褐	橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1004	甕	胴部			黒褐	赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1005	甕	底部			黒褐	明褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1006	甕	底部			黒褐	にぶい褐	A.B	ナデ	ナデ	スス付着
	1007	甕	底部			明赤褐	明褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1008	甕	底部			明赤褐	明赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1009	甕	底部			明黄褐	明黄褐	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	1010	甕	底部			明褐	明褐	A.B	ナデ	ハケ目	
	1011	甕	底部			明黄褐	にぶい黄褐	B	ナデ	ハケ目	
	1012	甕	底部			明赤褐	明赤褐	A.B	板ナデ	ナデ	
	1013	甕	底部			暗褐	褐	A.B	板ナデ	ナデ	
	1014	鉢	口縁部			橙	黒	A.B	ハケ目	板ナデ	
	1015	甕	底部			明褐	明赤褐	A.B	ナデ	ハケ目	
	1016	甕	底部			黒	明褐	A.B	ナデ	ハケ目	
	1017	丸底甕	完形			赤褐	明黄褐	A.B	板ナデ，指頭押圧	ハケ目，ヘラケズリ	丹塗り
	1018	壺	胴部			にぶい黄橙	明黄褐	A.B	ハケ目	ヘラケズリ	
	1019	壺	底部			橙	灰褐	A.B	ナデ	ナデ	
95図	1020	高坏	脚部			明赤褐	暗赤褐	A.B	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1021	高坏	脚部			明赤褐	暗赤褐	A.B	ハケ目	ヘラミガキ後ナデ	丹塗り
	1022	高坏	脚部			橙	暗赤褐	A	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1023	鉢	完形			にぶい橙	にぶい黄褐	A.B	指頭押圧	指頭押圧	手捏ね
	1024	鉢	完形			にぶい赤褐	橙	A.B.C	ナデ	指頭押圧	
	1025	坏	完形			灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1026	甕	胴部			灰	灰	A	同心円叩き	平行叩き	須恵器



第89図　1号竪穴住居跡内遺物1

989

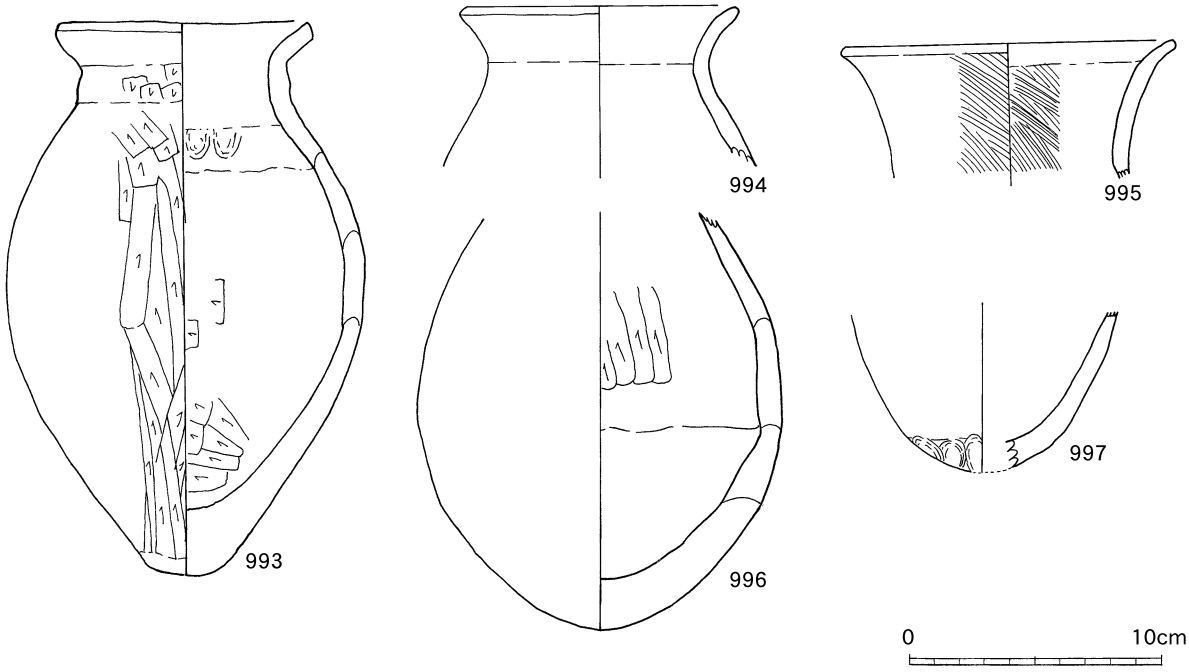
991

990

992

0 10cm

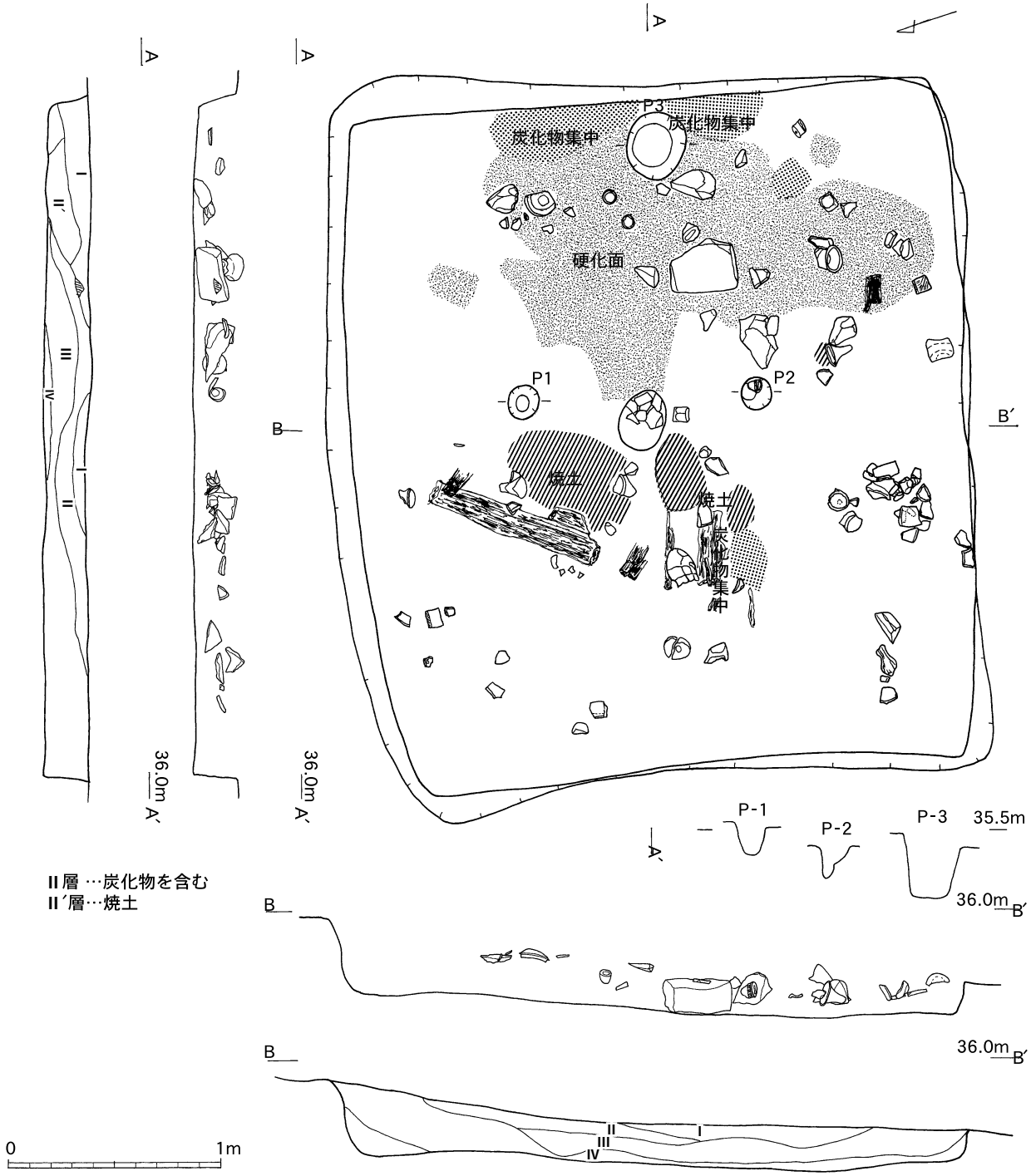
第90図　1号竪穴住居跡内遺物2



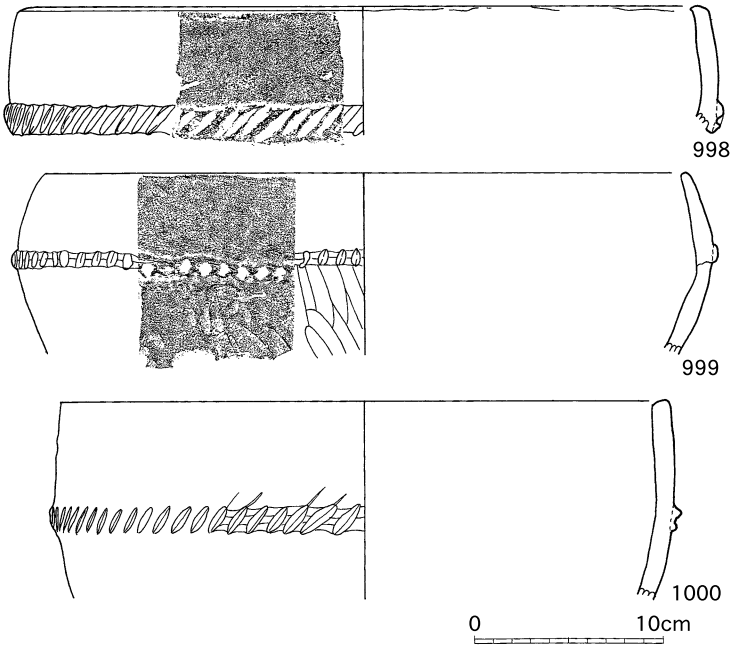
第91図　1号竪穴住居跡内遺物3

２号住居跡（第92図～第95図）

２号住居跡はＩ－６区において検出された。長軸はほぼ南北で，規模は3.23×３ｍと方形に近い。深さは20㎝である。遺物は大型破片が多く，須恵器もみられる。床面には炭化物・炭化木が多く，焼土もみられる。また，南側には硬化面も認められる。柱穴と思われるものは少ないが，ピット１・２の２箇所が柱穴と考えられる。998～1013は甕形土器である。998～1000は口縁部径30㎝以上の大型のもので，胴部上位に刻目突帯を廻らし，口縁部は突帯部分から内湾する。1002・1003は突帯を廻らすもの。1005～1013は中空の脚台である。1014～1016は鉢形土器



第92図　２号竪穴住居跡

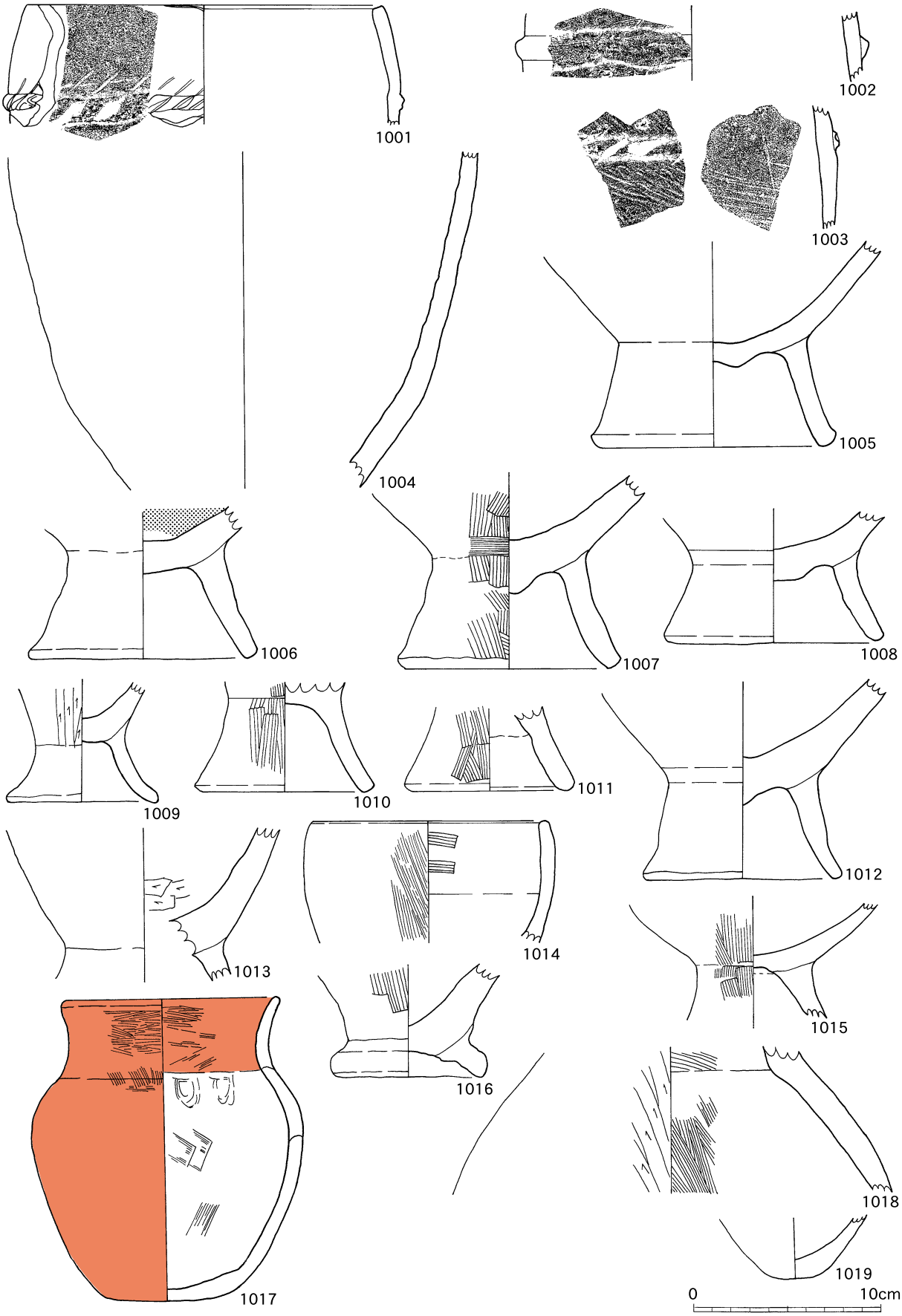


第93図　２号竪穴住居跡内遺物１

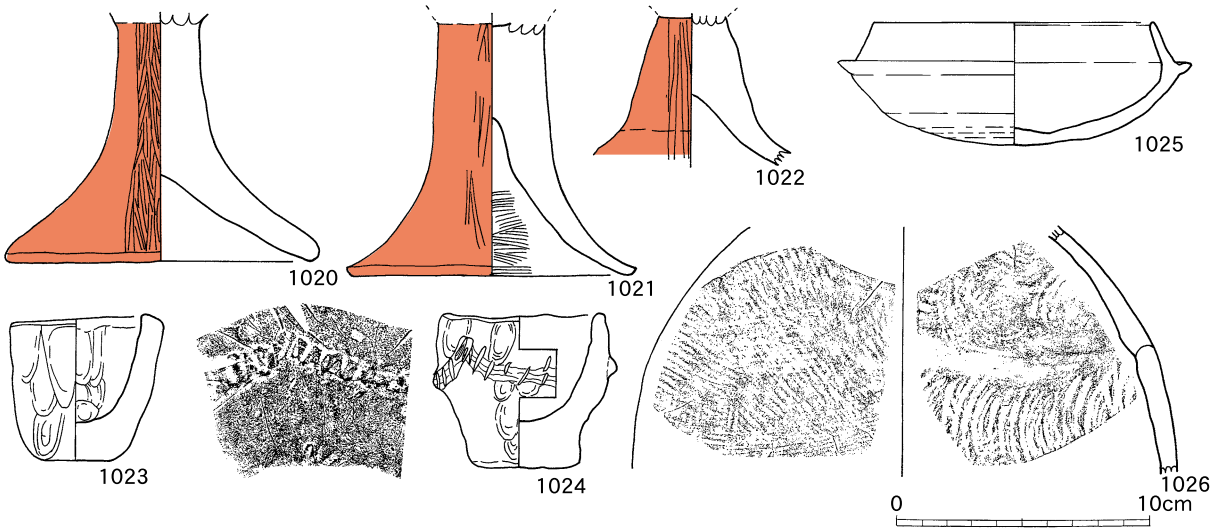
と思われる。1014は口縁部が内湾する。1017～1019は壺形土器。1017は丹塗りの広口壺。口縁部径11.7㎝，器高16.2㎝を測る。平底の底部から胴部はあまり張らず口縁部は直行気味に外反する。1020～1022は高坏の脚部。やや細目の脚柱部から裾部へと広がるものである。1023・1024は手捏ねの小型土器である。いずれも指頭押圧が明瞭に認められる。1024は刻目突帯を廻らすが，双方から斜めにせり上がっているものである。1025・1026は須恵器。1025は口縁部径11.2㎝，器高4.9㎝を測る坏である。立ち上がりは内傾し口縁端部と受部は丸くおさめる。底部のヘラ削りの方向は逆時計まわりである。1026は甕。外面は平行叩き，内面は同心円叩きであるが，弧状を呈するものである。

３号住居跡（第96図～第102図）

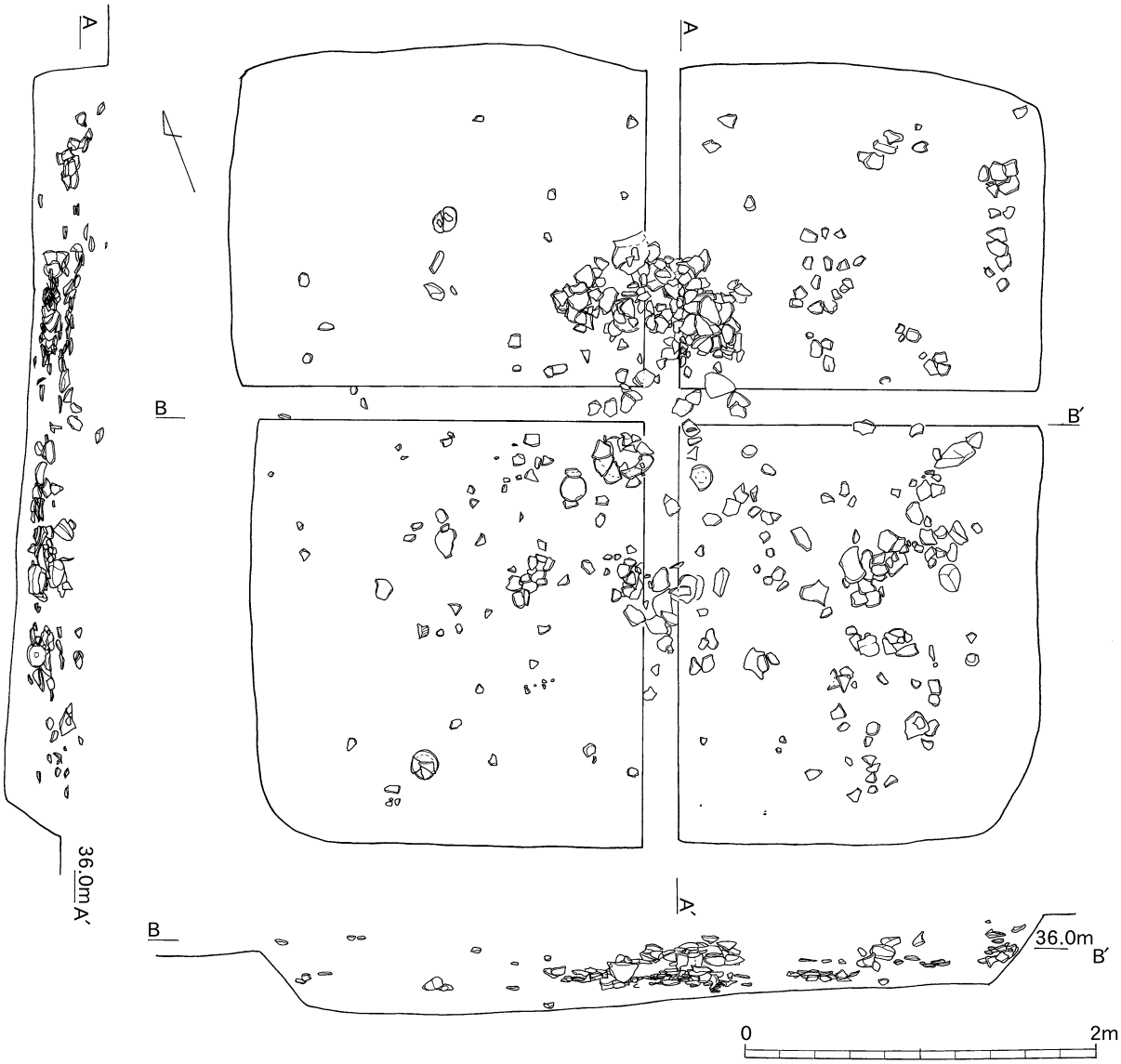
３号住居跡はＨ－５・６区において検出された。長軸はほぼ東西で，4.5×4.4mの方形である。深さは40㎝である。住居内からは夥しい量の遺物が出土し完形土器も多い。また，須恵器も出土している。柱穴はピット１～４の４箇所と思われる。1027は口縁部径21.2㎝，器高9.6㎝を測る蓋形土器。天井部は分厚く不整形である。口縁部の外反は弱くやや深いものである。口縁内面にはススが付着する。1028～1043は甕形土器で，1028～1034は中空の脚台を有するものと思われる。1028・1032・1033は内湾口縁で胴部上位に刻目突帯を廻らす。1034は口縁部径24.3㎝，器高26.8㎝を測る。やや深めの脚台から直線的に立ち上がり，口縁端部近くでわずかに内湾するもので，刻目突帯を廻らす。1035は脚台を有しない平底の甕形土器である。口縁部径23.3㎝，器高24.9㎝を測る。口縁部は突帯部分より屈曲気味に内湾する。1036～1043は丸底甕形土器である。底部は丸底もしくは丸に近い平底で，胴部は大きく膨らむものである。頸部のくびれは壺形土器に比して弱く，口径も大きい。口縁部は直行気味に外反するものである。1040は補修した痕跡が認められる。1041は頸部のくびれが無く，なだらかに口縁部へ至るものである。1044は口縁部径13.2㎝，器高6.1㎝を測る坏で全面丹塗りである。1047・1048は脚台を有する鉢形土器である。1047～1053は壺形土器。1050・1051は頸部に刻目突帯を廻らし口縁部は直行気味に外反する。1047は外面にススが付着する。1054～1061は高坏。1054は口縁部径19.4㎝を測るもので，椀状の深い坏部である。1055～1061は脚部で裾部が広がるものである。1062・1063は須恵器の坏。1062は口縁部径11.8㎝，器高5.6㎝，1063は口縁部径10.2㎝，器高4.5㎝を測るものである。いずれも立ち上がりはわずかに内傾し端面は内側へ傾斜し，浅い凹みを有する。受部は外上方へのびる。底部はヘラ削りによりほぼ平坦に仕上げる。



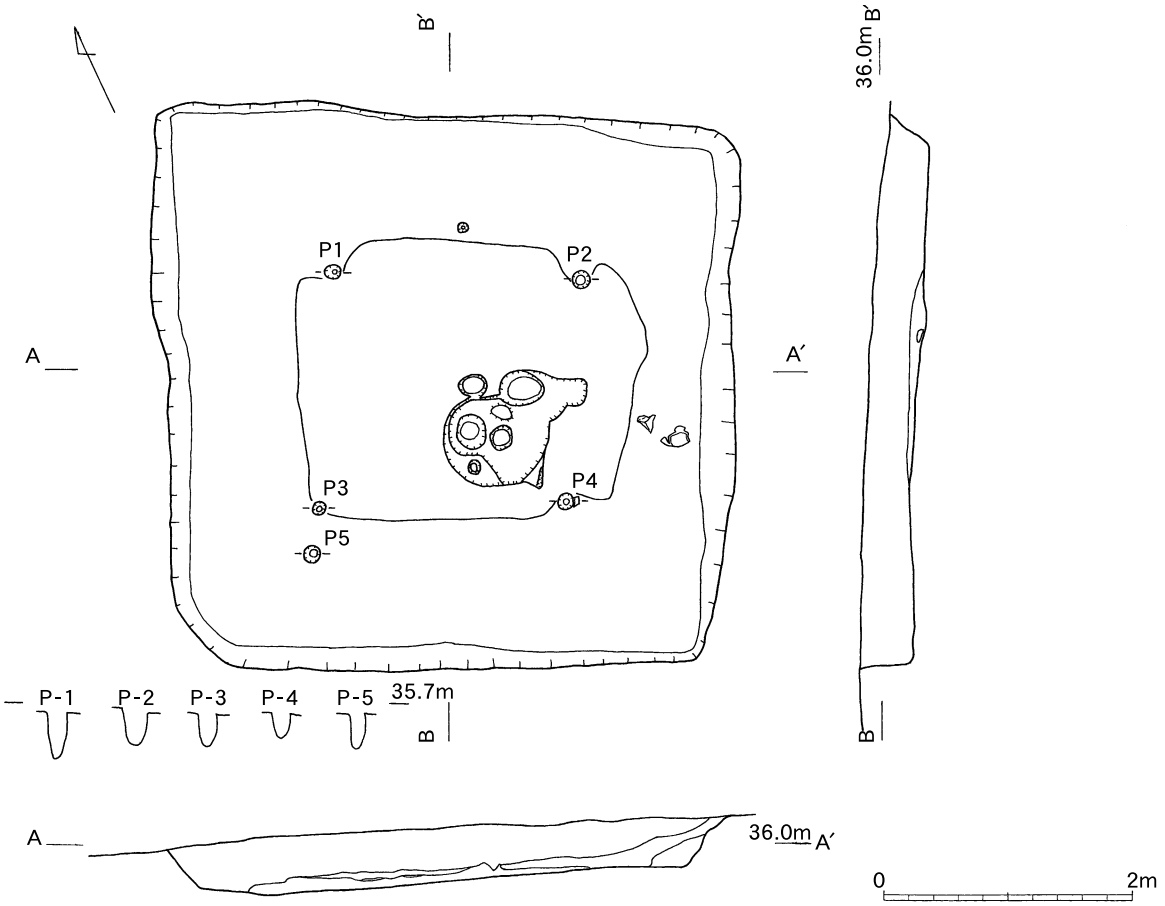
第94図　２号竪穴住居跡内遺物２



第95図　２号竪穴住居跡内遺物３



第96図　３号竪穴住居跡



第97図　3号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡内遺物

A：長石　B：石英　C：角閃石

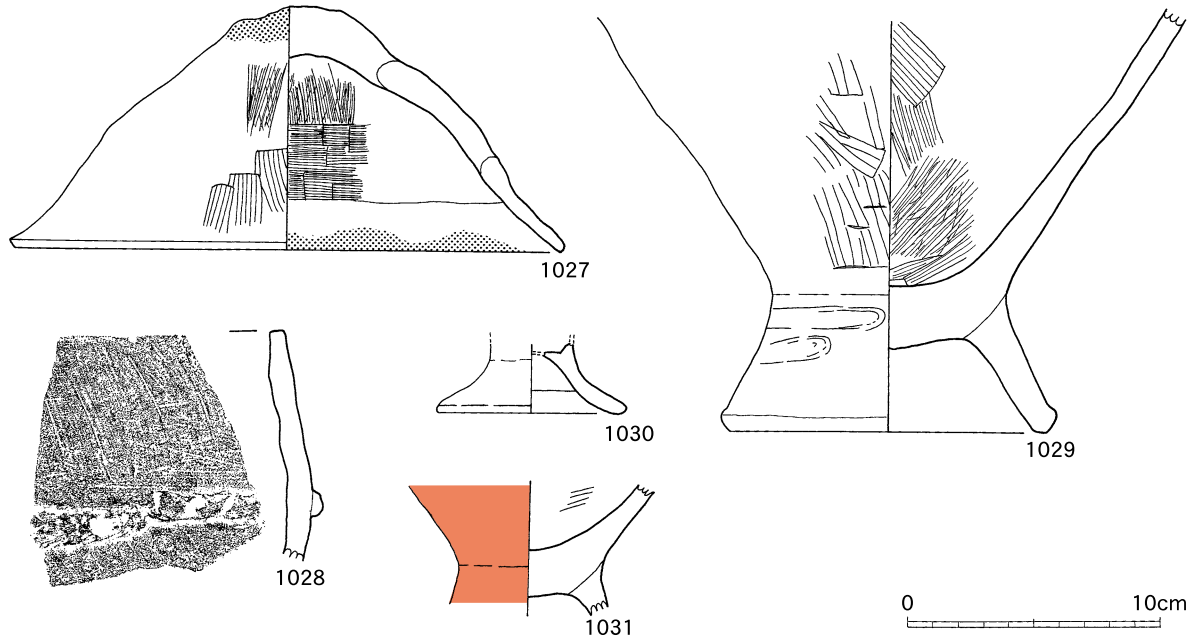
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
98図	1027	蓋	完形			橙	橙	A.B.C	板ナデ	ハケ目	スス付着
	1028	甕	口縁部			橙	浅黄橙	A.B.C	板ナデ	板ナデ	スス付着
	1029	甕	胴部,底部			橙	橙	A.B.C	ハケ目，板ナデ	ハケ目	
	1030	甕	底部			黄橙	黄橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1031	甕	底部			にぶい黄橙	赤	A.B	ナデ	ナデ	丹塗り
99図	1032	甕	口縁部			橙	橙	A.B.C	板ナデ	板ナデ	刻目突帯
	1033	甕	口縁部			にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ハケ目，ヘラケズリ	刻目突帯
	1034	甕	完形			赤	赤	A.B.C	ハケ目，指頭押圧	板ナデ	
	1035	甕	完形			赤褐	赤	A.B.C	板ナデ，指頭押圧	板ナデ	刻目突帯
	1036	丸底甕	完形			橙	橙	A.B	ヘラミガキ，指頭押圧	ハケ目	
	1037	丸底甕	完形			橙	橙	A.B	ハケ目，指頭押圧	ナデ，ヘラケズリ	スス付着
	1038	丸底甕	完形			橙	橙	A.B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	スス付着
100図	1039	丸底甕	完形			にぶい褐	橙	A.B.C	ナデ，指頭押圧	ヘラケズリ	スス付着
	1040	丸底甕	口縁～胴部			暗褐	暗褐	A.B.C	ハケ目，指頭押圧	板ナデ	スス付着
	1041	丸底甕	口縁～胴部			にぶい赤褐	灰褐	A.B	ナデ，指頭押圧	ヘラケズリ	スス付着
	1042	丸底甕	口縁～胴部			橙	橙	A.B	ハケ目，指頭押圧	板ナデ	丹塗り
	1043	丸底甕	口縁～胴部			橙	橙	A.B.C	ハケ目，指頭押圧	板ナデ	
	1044	坏	完形			赤	赤	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	1045	鉢	完形			橙	にぶい赤褐	A.B.C	ナデ	板ナデ	
	1046	鉢	口縁～胴部			明赤褐	明赤褐	A.B.C	板ナデ	ヘラミガキ後ナデ	丹塗り

A：長石　B：石英　C：角閃石

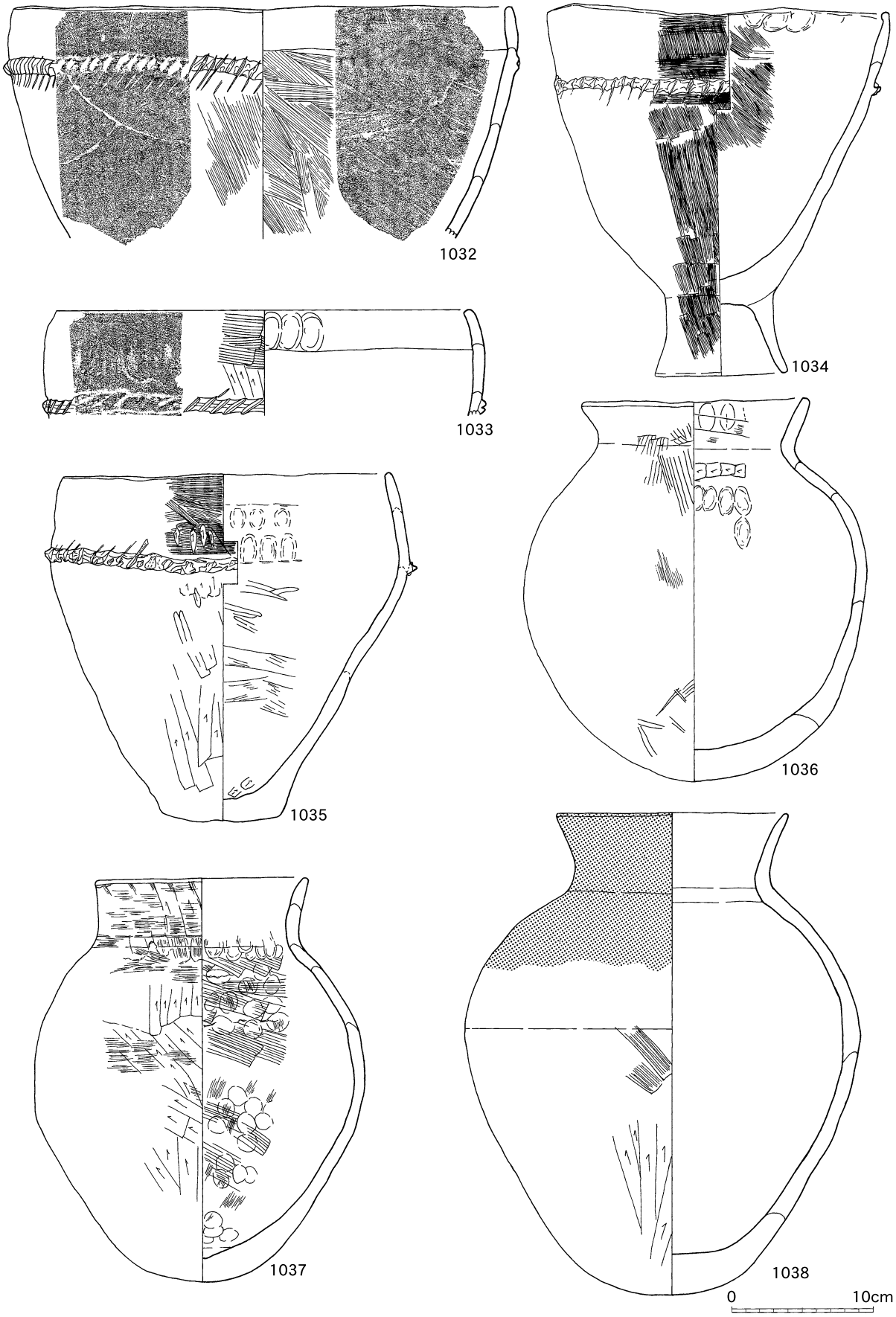
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
101図	1047	壺	胴部			にぶい黄	橙	A.C	ナデ	ヘラケズリ	丹塗り
	1048	壺	胴部			にぶい橙	にぶい黄橙	A	ナデ	ハケ目	
	1049	壺	胴部			にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	板ナデ，ナデ	
102図	1050	壺	口縁～頸部			赤褐	明赤褐	A.B.C	ナデ	ナデ	刻目突帯
	1051	壺	口縁～頸部			浅黄	橙	A.B	ナデ	ハケ目	刻目突帯
	1052	壺	胴部			黒	明黄褐	A.B.C	ハケ目	ナデ	刻目突帯
	1053	壺	胴部			黄橙	橙	A.B.C	板ナデ	板ナデ	
	1054	高坏	坏部			浅黄橙	黄橙	A.B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1055	高坏	脚部			灰	にぶい黄橙	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	丹塗り
	1056	高坏	坏部			明黄褐	明赤褐	A.B	ナデ	板ナデ	丹塗り
	1057	高坏	脚部，坏部			橙	赤	A.B.C	ナデ，ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り
	1058	高坏	脚部			明黄褐	明赤褐	A.B	ハケ目，ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り
	1059	高坏	脚部			暗青灰	赤褐	B	ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り
	1060	高坏	脚部			淡黄	赤褐	B	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1061	高坏	脚部			灰	赤	B	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1062	坏	完形			灰白	オリーブ灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1063	坏	完形			灰白	オリーブ灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	

４号住居跡（第103図～第110図）

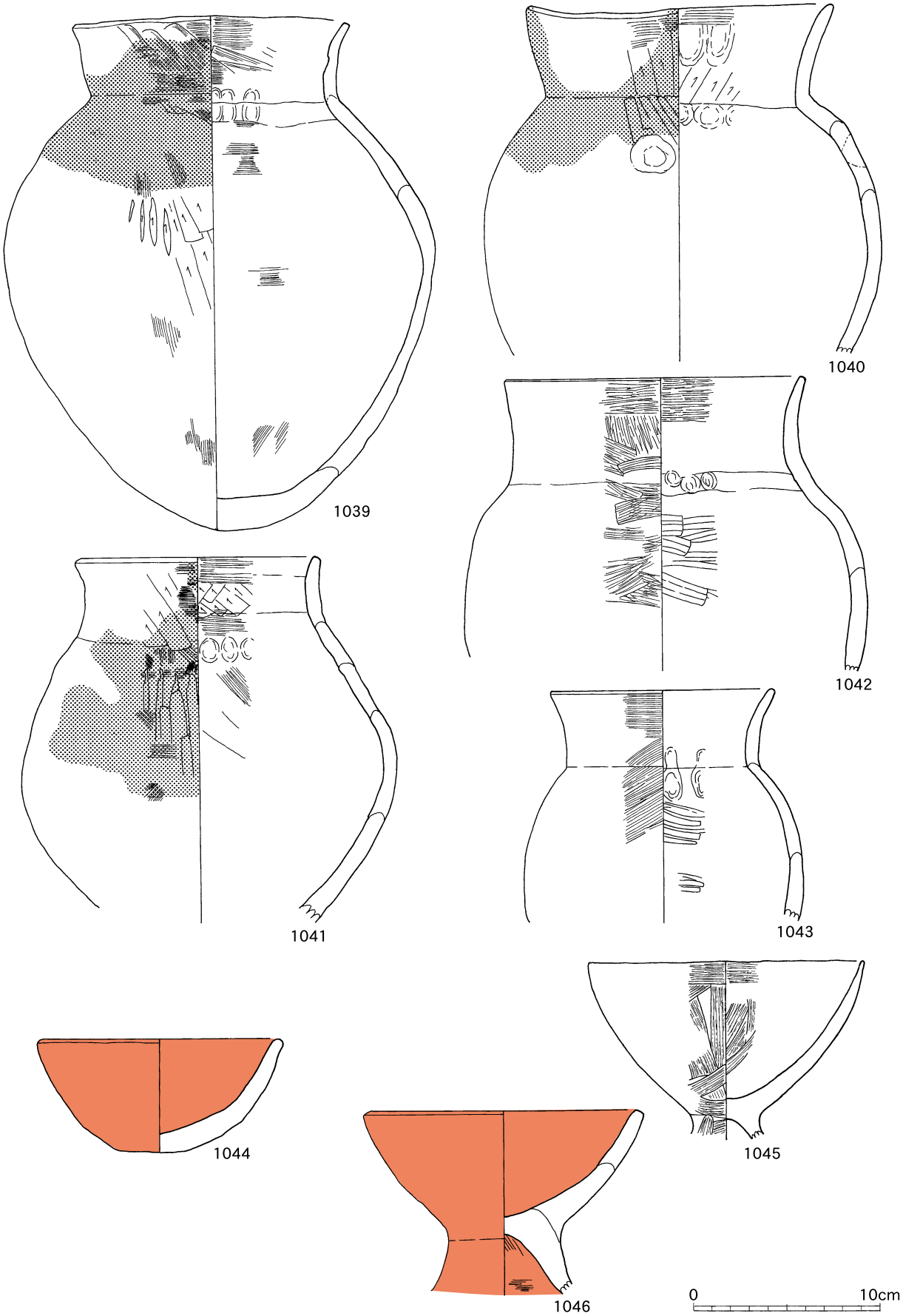
４号住居跡はＨ－５・６区の３号住居跡と相接して検出された。長軸はほぼ南北で4.8×4.4mの方形で，深さは60㎝である。柱穴はピット１～４の４箇所と思われるが，ピット５～８も補助的な役割を果たしていたものと思われる。住居の中央部は硬化面が認められ，直径44㎝の浅い掘り込みもみられる。遺物は３号住居跡と同様に夥しい量で，須恵器もみられる。1064～1069・1075～1098は中空の脚台を有する甕形土器で，1070～1074・1099～1103は丸底の甕形土器である。その内1064～1074は大型である。1064は口縁部径34.2㎝，器高35.5㎝を測る。胴部は直線的に開き，口縁部は突帯部分からわずかに内湾するものである。刻目突帯は鋸歯状である。1065は口縁部径31.6㎝，器高35㎝を測る。胴部は丸みを帯び口縁部は直行する。突帯は指でつまみ三角形を呈する。また，右側からのびた突帯は左上方へはねあがるものである。1166は口縁部径35.8㎝，器高43.1㎝を測る。胴部は直線的で口縁部は直行する。刻目突帯は1065と同様である。1067は口縁部径28.8㎝，器高36.1㎝を測る。胴部は丸く膨らみ，頸部でいったんしまった後で口縁部は外反する。突帯は鋸歯状を呈する。1068・1069は底部を欠損するものの1067と同様の器形と思われる。1070は胴部が球形状に膨らみ口縁部は直行気味である。1071～1074は口縁部が外反するもので，外面にススが付着するものもある。1072は内面にもコゲ状のススが付着する。1075～1082は刻目突帯を廻らすものである。1075～1077は口縁部が直行するもの，1078～1080は口縁部が内湾するものである。1083～1098は中空の脚台部分である。1099～1101は底部を欠損するが丸底甕と思われる。1102は口縁部径12.8㎝，器高19.8㎝を測る。丸底の底部から胴部の張りはなく頸部のしまりも弱いもので，口縁部は外反する。1103は口縁部径12.4㎝，器高15.5㎝を測るもので，胴部は球形状に膨らみ頸部はくびれ，内面には稜を有する。口縁部は直行気味であるが端部で外反する。1104～1106は鉢形土器。1104は口縁部径21㎝，器高11.4㎝を測る。高台状の底部から胴部は，大きく開いて立ち上がり口縁部へ至るものである。1105・1106は脚台を有するものである。1107～1113は壺形土器。1107は口縁部径15.2㎝を測るもので頸部に鋸歯状の刻目突帯を廻らす。丹塗り土器であるが胴部にススが付着している。1108は頸部に刻目突帯を廻らす。1108～1113は底部である。1109・1111は平底で他は丸底である。1114・1115は坩形土器。1114は口縁部径14㎝，器高18㎝を測る。底部は平底で体部は球形状を呈す。口縁部は頸部から細長くのびるものである。全面が丹



第98図　３号竪穴住居跡内遺物１

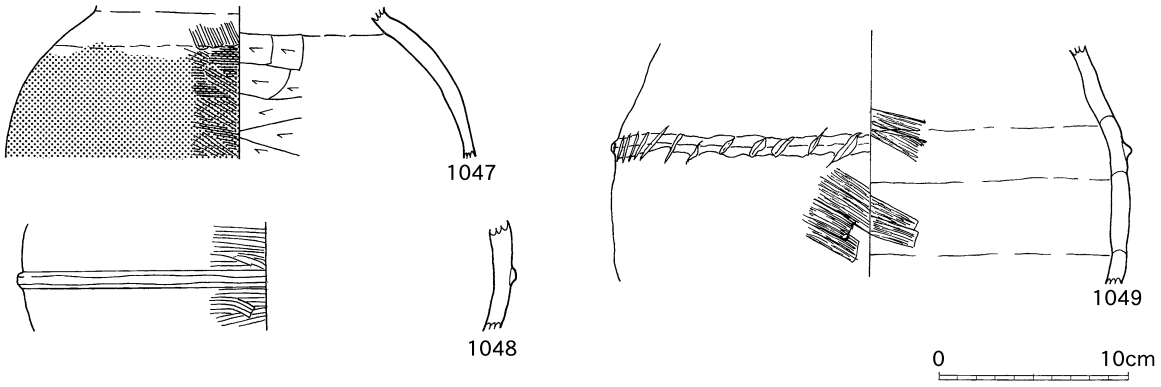


第99図　3号竪穴住居跡内遺物2

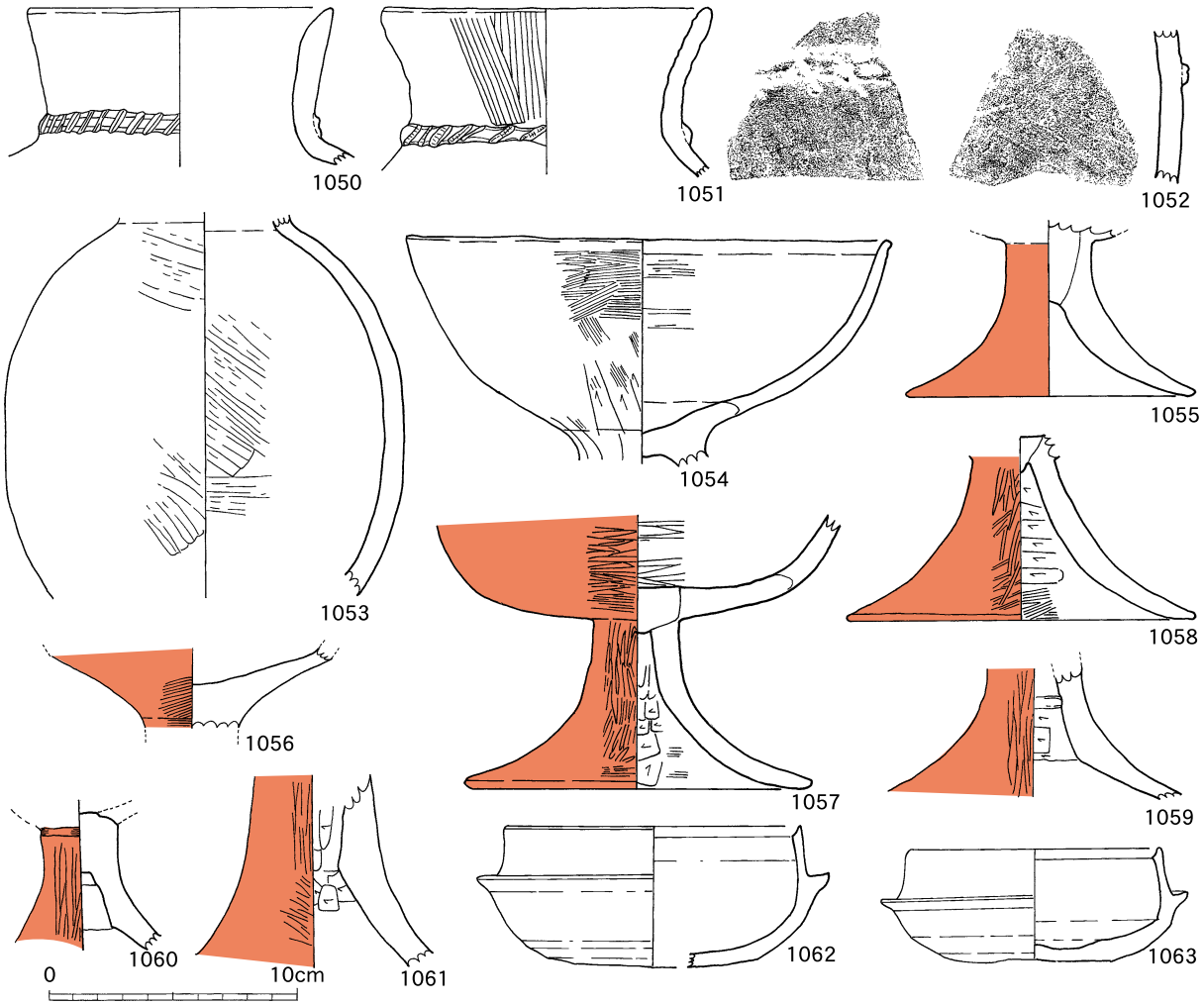


第100図　３号竪穴住居跡内遺物３

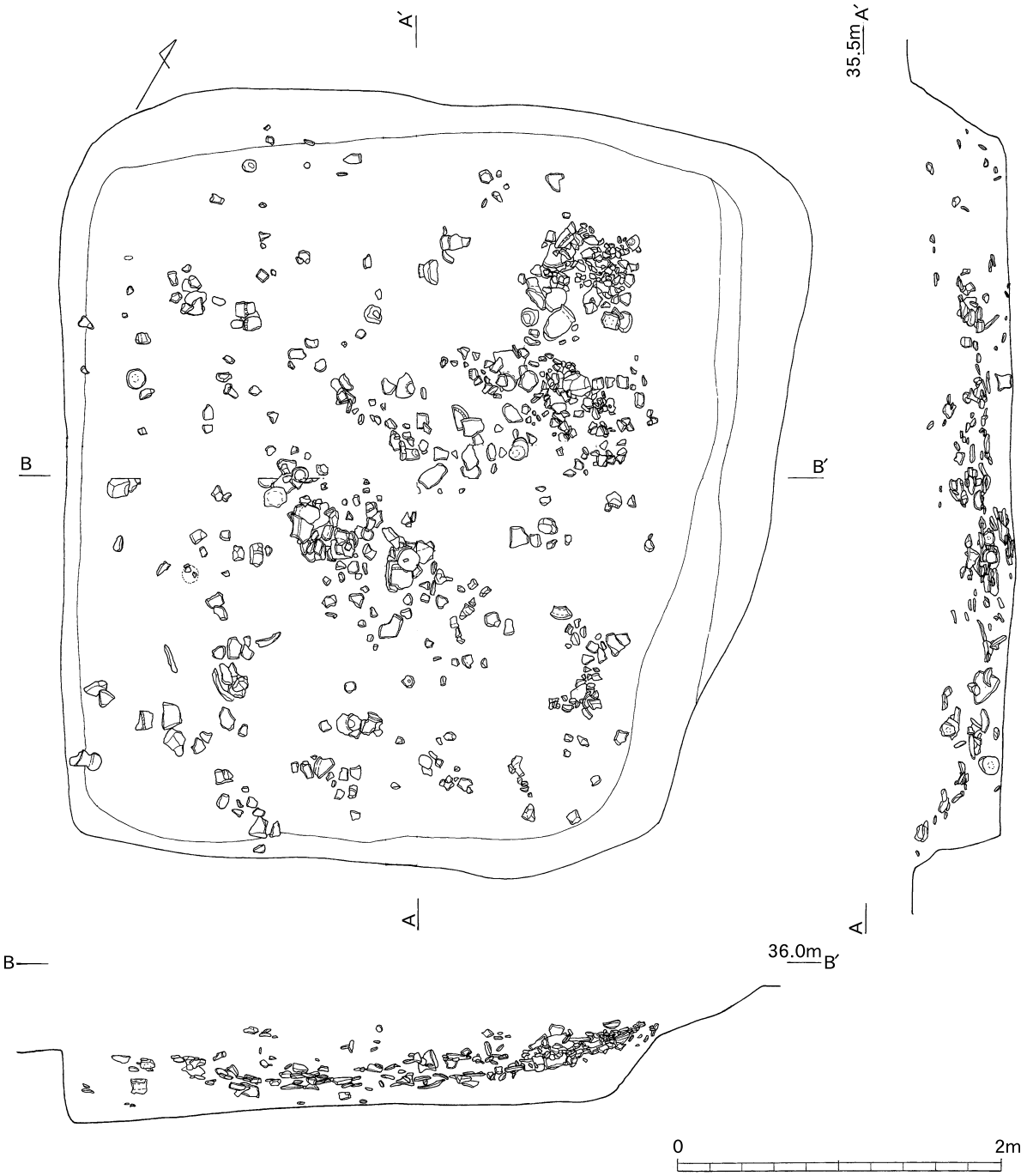
塗りできめ細かなヘラミガキが施される。1115は体部である。1116～1124は高坏。1116は口縁部径14.6㎝，器高13.1㎝を測る。筒状の脚柱部から裾部はゆるやかに外反する。坏部はわずかに内湾し口縁部へ至る。1117・1118は坏部で直線的に外反する。1119～1124は脚部である。



第101図　３号竪穴住居跡内遺物４

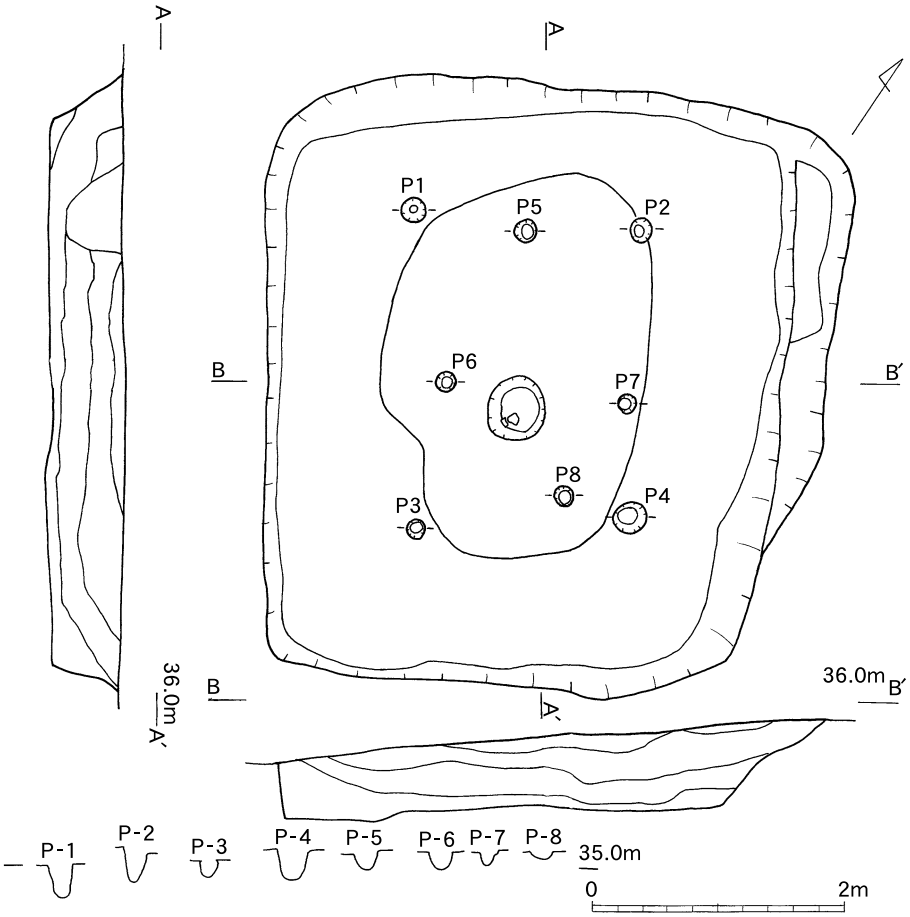


第102図　３号竪穴住居跡内遺物５



第103図　4号竪穴住居跡

1125は口縁部径7.1㎝，器高3.9㎝を測る手捏ね土器。底部は尖底で外面に指頭押圧の痕跡が残る。1126～1135は須恵器。1126～1131は坏蓋。1126は口縁部径12.8㎝，器高3.9㎝。1127は口縁部径15.7㎝，器高4.7㎝。1128は口縁部径16.6㎝，器高4.8㎝を測る。いずれも天井部はあまり膨らまないものである。1126・1127は天井部と口縁部をわける突出部は明瞭ではない。1128は天井部と口縁部の境には凹線を廻らす。1129は天井部と口縁部の境に突出部が認められ稜線が明瞭である。1132～1134は坏。1132は口縁部径11.2㎝，器高4.4㎝。1133は口縁部径11.7㎝，器高5㎝。1134は口縁部径14.7㎝，器高5.2㎝を測る。いずれも立ち上がりは内傾し，口縁端部には面を有せず丸くおさめる。受部はほぼ水平に伸び端部は丸くおさめる。底部はヘラケズリにより平坦に仕上げるものである。1135は甕の口縁部と思われる。



第104図　４号竪穴住居跡

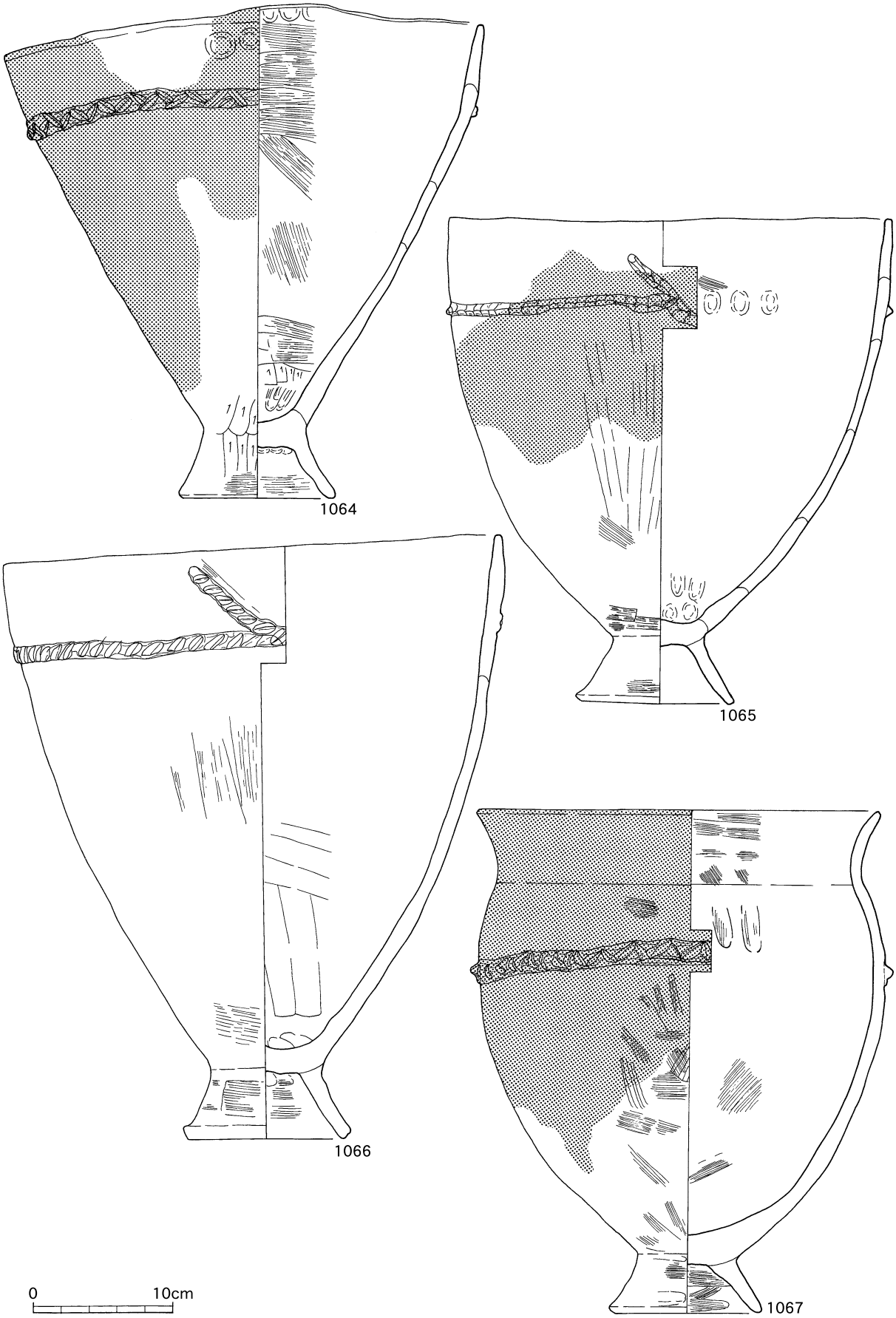
４号竪穴住居跡内遺物

A：長石　B：石英　C：角閃石

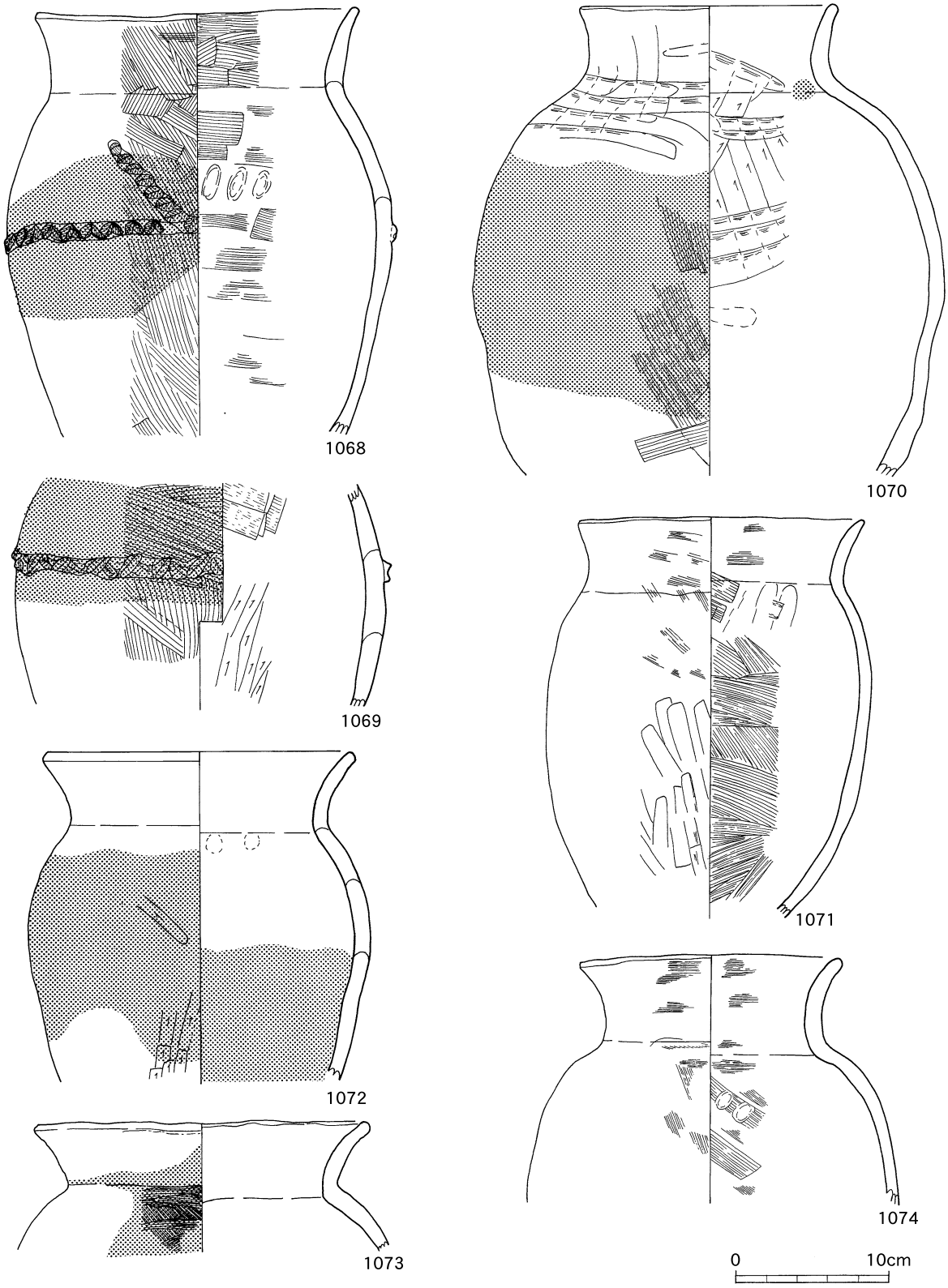
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
105図	1064	甕	完形			にぶい黄橙	黄橙	A.B.C	ナデ	板ナデ	
	1065	甕	完形			にぶい赤褐	赤	A.B	ヘラケズリ	ナデ，指頭押圧	
	1066	甕	完形			明赤褐	明赤褐	A.B.C	板ナデ	ヘラケズリ	
	1067	甕	完形			にぶい黄橙	橙	A.B	板ナデ	板ナデ	スス付着
106図	1068	甕	口縁，胴部			明赤褐	橙	A.B.C	ハケ目，指頭押圧	ハケ目	スス付着
	1069	甕	胴部			にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ハケ目	ヘラケズリ，板ナデ	スス付着
	1070	丸底甕	口縁，胴部			にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ハケ目，板ナデ	ヘラケズリ，板ナデ	スス付着
	1071	丸底甕	口縁，胴部			橙	橙	A.B.C	板ナデ	ヘラケズリ	
	1072	丸底甕	口縁，胴部			にぶい橙	黒褐	A.B.C	ナデ，ヘラケズリ	ナデ	内外スス
	1073	丸底甕	口縁，胴部			にぶい褐	黒褐	A.B.C	ナデ	ナデ	スス付着
	1074	丸底甕	口縁，胴部			にぶい褐	にぶい褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
107図	1075	甕	口縁部			橙	にぶい褐	A.B.C	板ナデ	ハケ目	スス付着
	1076	甕	口縁部			橙	褐灰	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1077	甕	口縁部			にぶい橙	黒褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1078	甕	口縁部			にぶい橙	褐灰	A.B.C	板ナデ	板ナデ	
	1079	甕	口縁部			明赤褐	黒褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1080	甕	口縁部			橙	灰黄褐	A.B.C	ナデ，ヘラケズリ	ハケ目	スス付着
	1081	甕	胴部			にぶい橙	褐灰	A.B.C	板ナデ	ハケ目	スス付着
	1082	甕	口縁部			にぶい橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	スス付着
	1083	甕	底部			橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ，ヘラケズリ	ナデ，ヘラケズリ	
	1084	甕	底部			黒褐	にぶい赤褐	A.B.C	ナデ	ハケ目	
	1085	甕	底部			赤褐	赤褐	A.B.C	ナデ，ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
108図	1086	甕	底部			黒褐	赤褐	A.B.C	ヘラケズリ	ハケ目	
	1087	甕	底部			明赤褐	にぶい橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1088	甕	底部			黒褐	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1089	甕	底部			にぶい褐	橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1090	甕	底部			橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	板ナデ	
	1091	甕	底部			にぶい赤褐	赤	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1092	甕	底部			にぶい褐	橙	A.B.C	ヘラミガキ，ヘラケズリ	ハケ目	
	1093	甕	底部			橙	橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1094	甕	底部			黒褐	橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	
	1095	甕	底部			にぶい橙	黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1096	甕	底部			にぶい橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	
	1097	甕	底部			明赤褐	明赤褐	A.B	ナデ	ハケ目	

A：長石　B：石英　C：角閃石

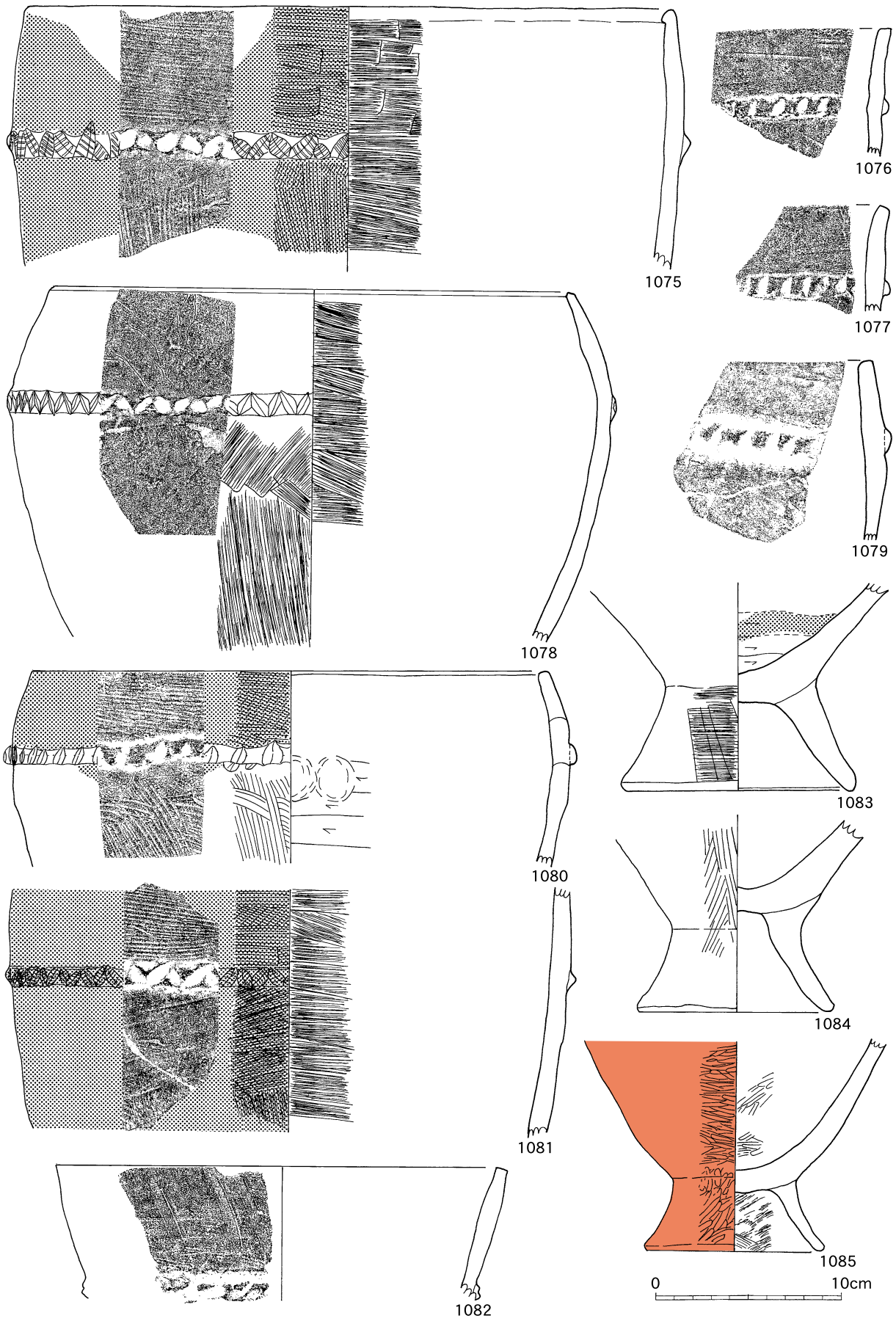
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
108図	1098	甕	底部			黒褐	橙	A.B.C	ナデ	ヘラケズリ	
	1099	丸底甕	口縁，胴部			赤	赤橙	A.B.C	ハケ目，板ナデ	ハケ目	
	1100	丸底甕	口縁部			にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ヘラケズリ，板ナデ	ハケ目	
	1101	丸底甕	口縁部			橙	にぶい橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1102	丸底甕	完形			橙	橙	A.B.C	ヘラケズリ	ナデ，ヘラミガキ	スス付着
	1103	丸底甕	完形			にぶい黄橙	赤	A.B.C	ヘラケズリ，板ナデ	ハケ目，ナデ	スス付着
109図	1104	鉢	完形			明赤褐	赤褐	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1105	鉢	胴部			にぶい橙	赤	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り
	1106	鉢	胴部			橙	赤褐	A.B.C	板ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1107	壺	口縁			にぶい橙	赤褐	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り スス
	1108	壺	口縁，胴部			橙	赤褐	A.B.C	板ナデ，指頭押圧	ヘラミガキ後ナデ	丹塗り
	1109	壺	底部			にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	板ナデ	ハケ目	
	1110	壺	底部			にぶい橙	橙	A.B.C	ヘラケズリ，板ナデ	ハケ目	
	1111	壺	底部			橙	にぶい橙	A.B.C	板ナデ	ナデ	
	1112	壺	底部			褐灰	にぶい橙	A.B.C	板ナデ	板ナデ	
	1113	壺	底部			褐灰	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1114	坩	完形			橙	赤	A.B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
	1115	坩	体部			橙	赤褐	A.B	ナデ，指頭押圧	ヘラミガキ	丹塗り
110図	1116	高坏	完形			暗赤灰	赤	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
	1117	高坏	口縁部			にぶい橙	赤褐	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1118	高坏	口縁部			橙	赤褐	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
	1119	高坏	脚部			にぶい黄褐	赤褐	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1120	高坏	坏部			にぶい橙	赤褐	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
	1121	高坏	脚部			橙	赤褐	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1122	高坏	脚部			にぶい橙	赤褐	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1123	高坏	脚部			にぶい黄褐	赤褐	A.B.C	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1124	高坏	脚部			にぶい黄橙	赤褐	A.B	ヘラケズリ	ヘラミガキ	丹塗り
	1125	鉢	完形			にぶい褐	褐	A.B	ナデ	指頭押圧	手捏ね
	1126	蓋	完形			灰	暗灰	B	ナデ	ナデ	須恵器
	1127	蓋	完形			灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1128	蓋	完形			灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1129	蓋	口縁部			灰	灰	B	ナデ	ナデ	須恵器
	1130	蓋	口縁部			灰	灰	B	ナデ	ナデ	須恵器
	1131	蓋	天井部			灰白	灰	B	ナデ	ヘラケズリ	須恵器
	1132	坏	完形			灰白	灰白	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1133	坏	完形			灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1134	坏	完形			にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	須恵器
	1135	甕	口縁部			灰	灰	B	ナデ	ナデ	須恵器



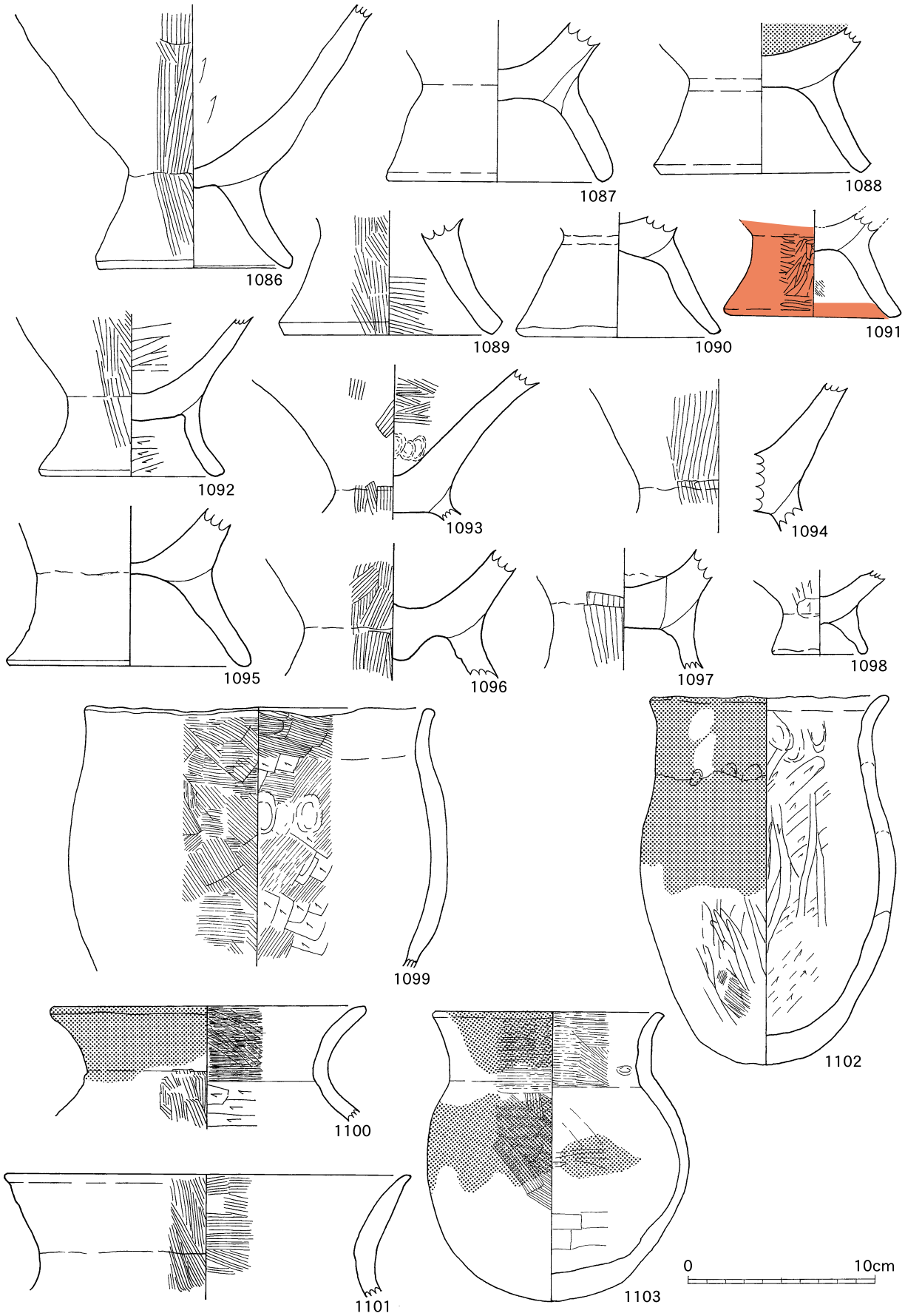
第105図　４号竪穴住居跡内遺物１



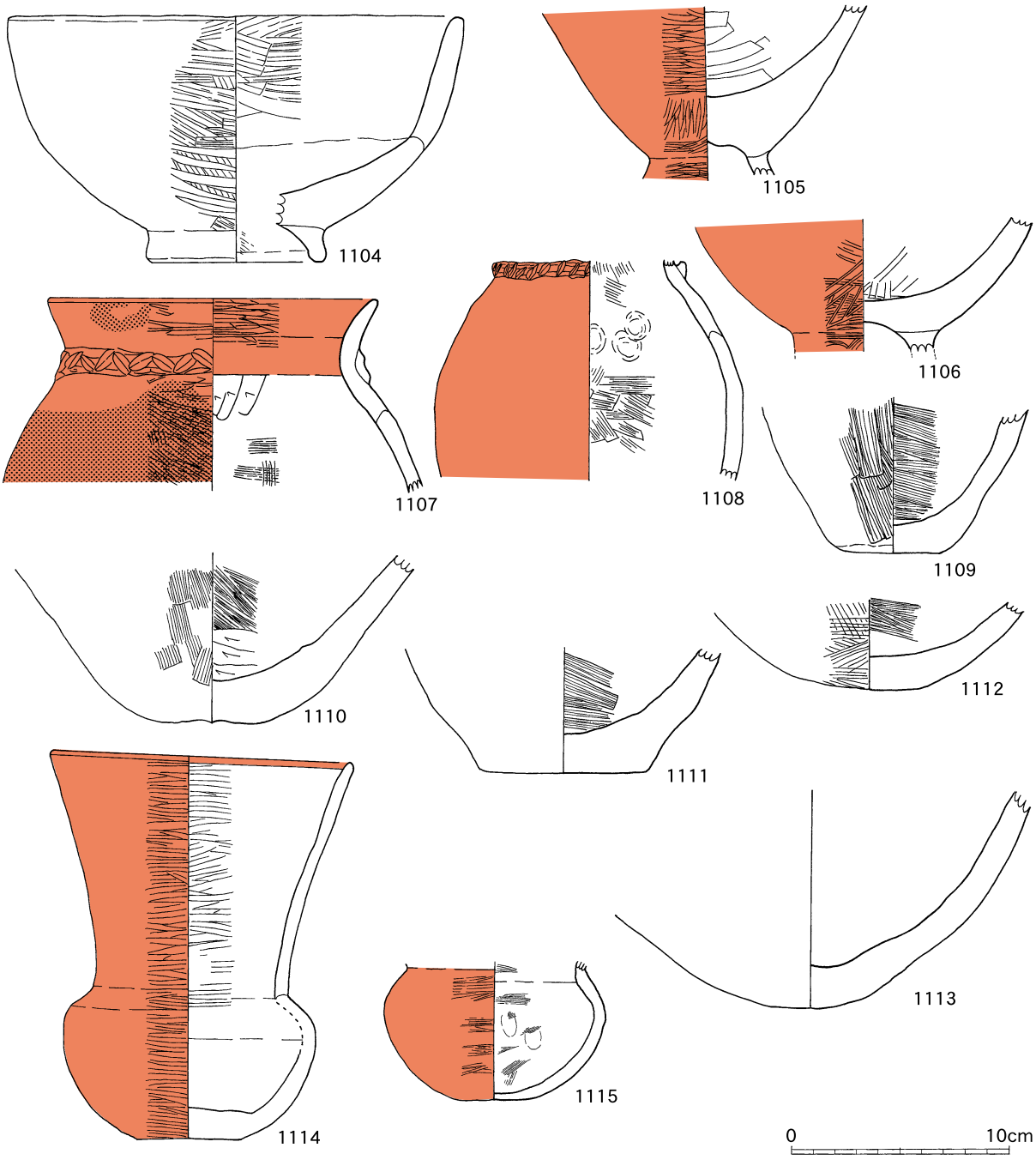
第106図　４号竪穴住居跡内遺物２



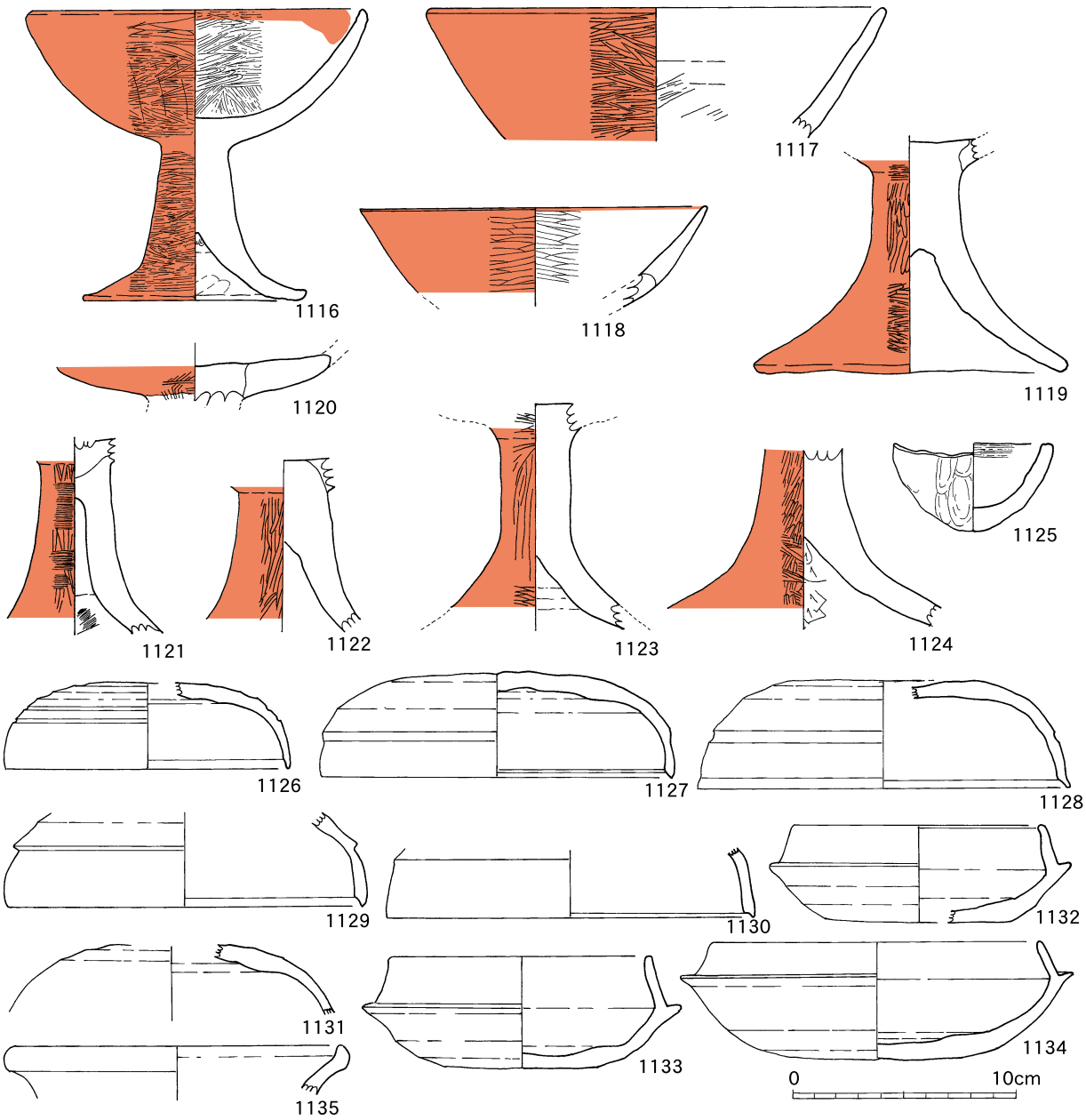
第107図　４号竪穴住居跡内遺物３



第108図　４号竪穴住居跡内遺物４



第109図　４号竪穴住居跡内遺物５



第110図　４号竪穴住居跡内遺物６

５号住居跡（第111図・第112図）

５号住居跡はＦ・Ｇ－４区において検出された。長軸はほぼ東西で６×4.8mの不整形な形をしている。深さは44㎝である。柱穴は，ピット１～４の４箇所と思われる。北側の壁に近い部分に径1.2m，深さ20㎝の浅い掘り込みを有する。遺物は少ないものである。1136は口縁部径31.4㎝，器高10㎝を測る蓋形土器。丸みを帯びた天井部から口縁部は大きく外反するもので，口縁内面にはススが付着する。1138～1142は甕形土器。1138・1140は口縁部が外反するものである。1143は平底であるが，壺形土器か甕形土器か判断できないものである。1144～1148は壺形土器。1144は口縁部径13.0㎝を測る。頸部から直線的に外反するものである。1145は口縁部径5.8㎝，器高9.5㎝を測る小型のものである。尖底の底部から胴部は張らず，口縁部は頸部から直行気味に外反するものである。1146は口縁部径4.7㎝を測る無頸壺である。1149は高坏の坏部。1150は表面の全面と裏面の一部に磨耗痕が認められるものである。砥石の可能性が高いものであるが，磨耗が著しく他の用途も考える必要がある。

第111図　5号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡内遺物

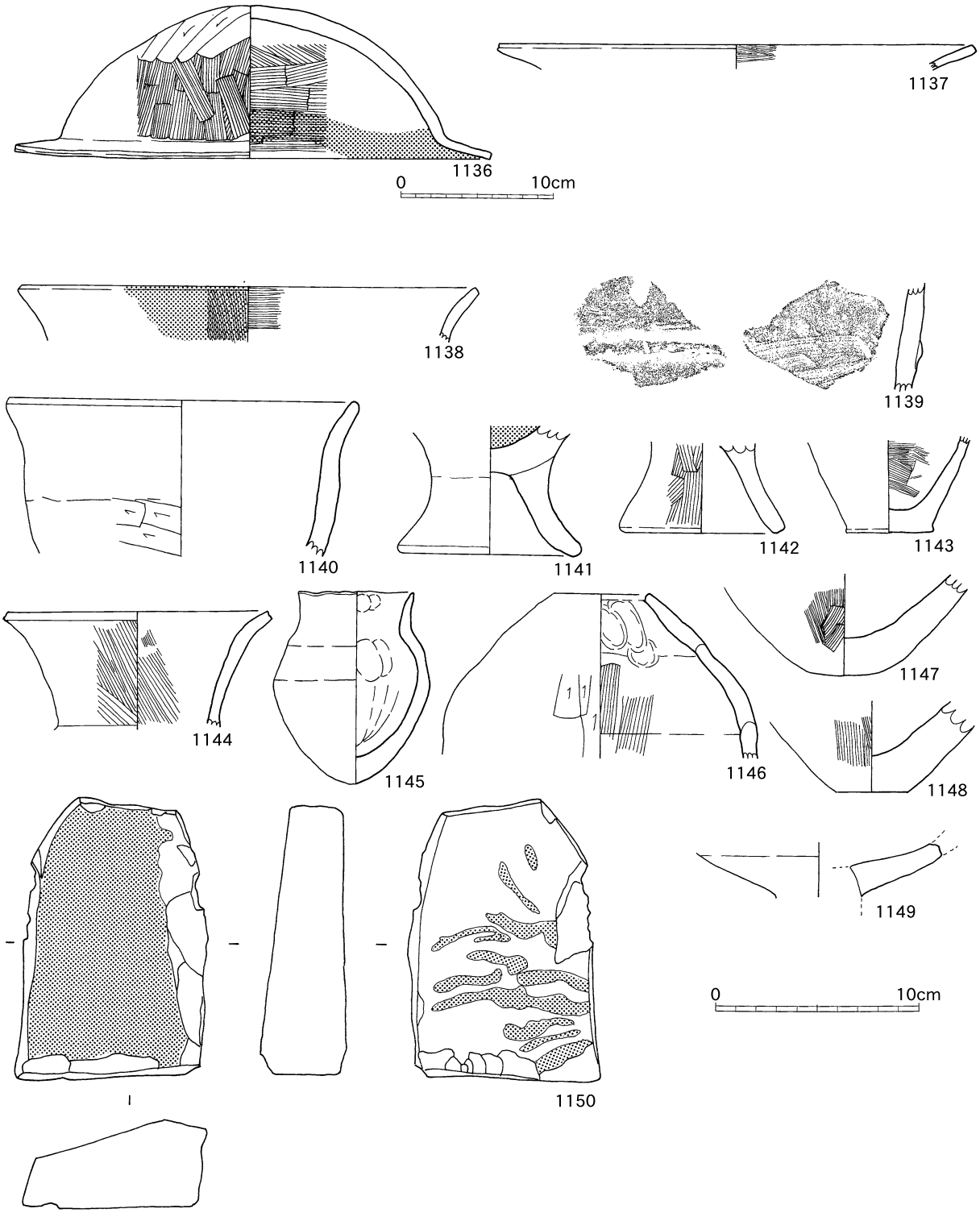
A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
112図	1136	蓋	完形			にぶい橙	にぶい黄橙	A.B	ナデ，板ナデ	ハケ目，ヘラケズリ	
	1137	甕	口縁部			にぶい黄橙	暗灰黄	A.B	ハケ目	ナデ	
	1138	甕	口縁部			橙	橙	B	板ナデ	ハケ目	
	1139	甕	胴部			にぶい黄橙	橙	A.B	ハケ目	ナデ	
	1140	甕	口縁部			橙	オリーブ黒	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1141	甕	底部			にぶい橙	橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1142	甕	底部			明黄褐	にぶい黄橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1143	壺	口縁部			橙	橙	B.C	板ナデ	ナデ	
	1144	壺	完形			黄橙	にぶい黄橙	B.C	ハケ目	ハケ目	

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
112図	1145	壺	口縁部			浅黄橙	明黄褐	B.C	ナデ，指頭押圧	ナデ	
	1146	壺	底部			黒	にぶい黄橙	A.B	ナデ，指頭押圧	ヘラケズリ	
	1147	壺	底部			黒	にぶい黄橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1148	壺	底部			浅黄橙	浅黄橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1149	高坏	坏部			橙	にぶい黄橙	B	ナデ	ナデ	

	器種	出土層	層	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
1150	砥石				13.8	9.5	4.35	880	

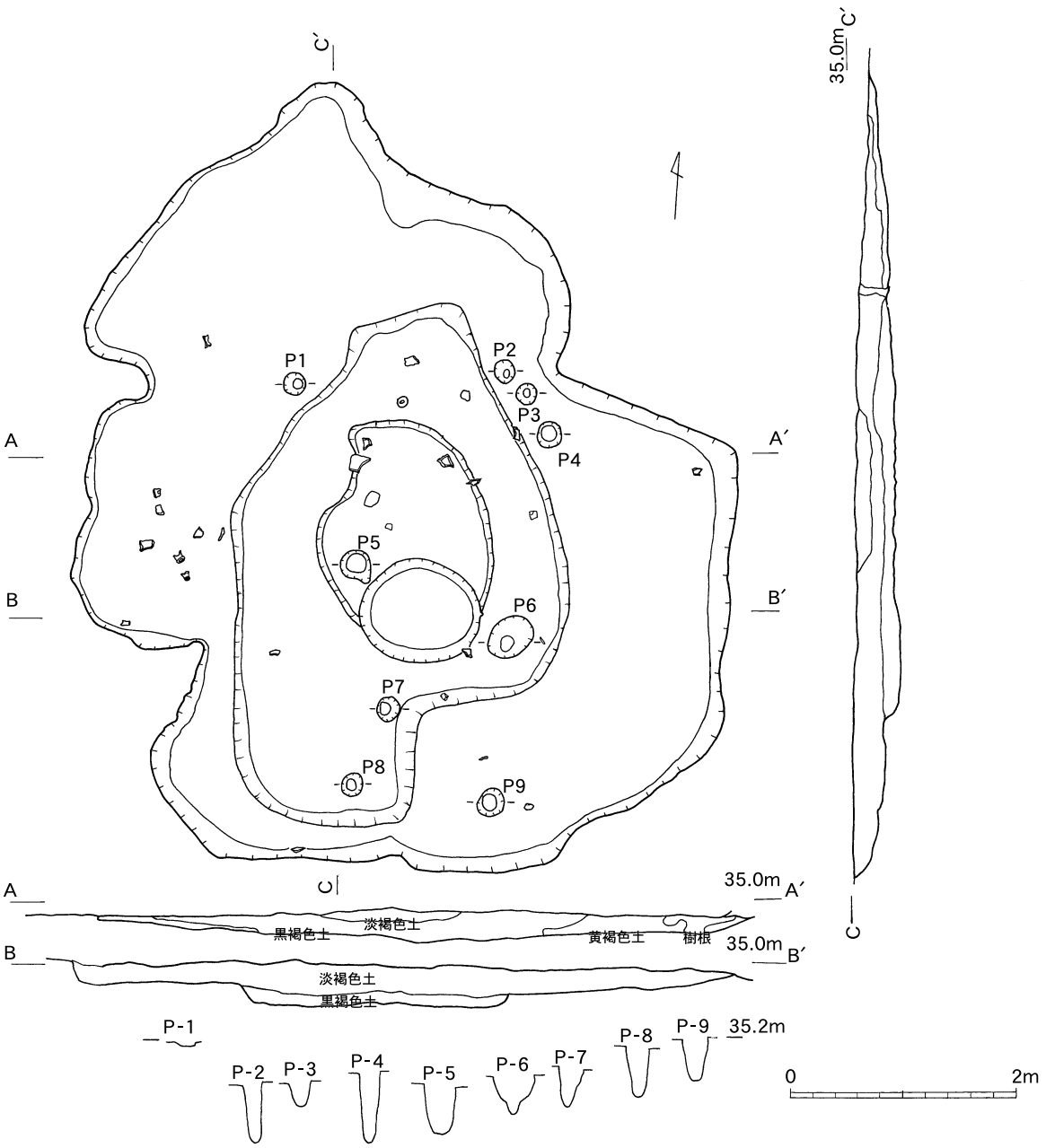


第112図　５号竪穴住居跡内遺物１

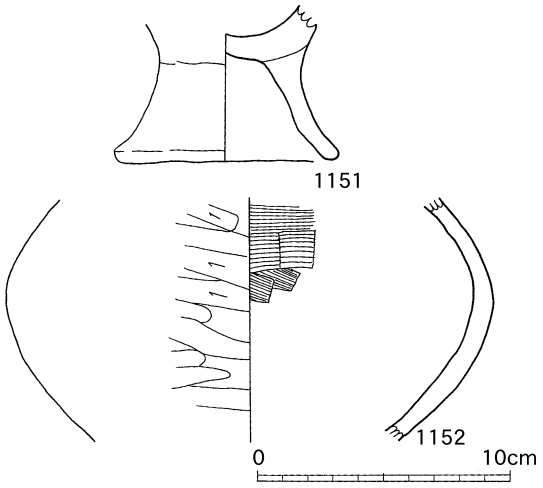
６号住居跡（第113図～第114図）

６号住居跡はＦ－４区において検出された。長軸はほぼ南北で最大長3.3m，最大幅2.9mの不整形な住居である。ほぼ中央に２×1.5mの一段低い部分があり深さ20㎝であるが，周辺は深さ10㎝程度の浅い張り出し状の施設をもつものである。ピットは９個と多いが柱穴として並ぶものはない。

遺物は多くはなく図化出来たものも２点しかない。1151は甕形土器の底部で中空の脚台である。1152は壺形土器。胴部が球形状に膨らむものである。



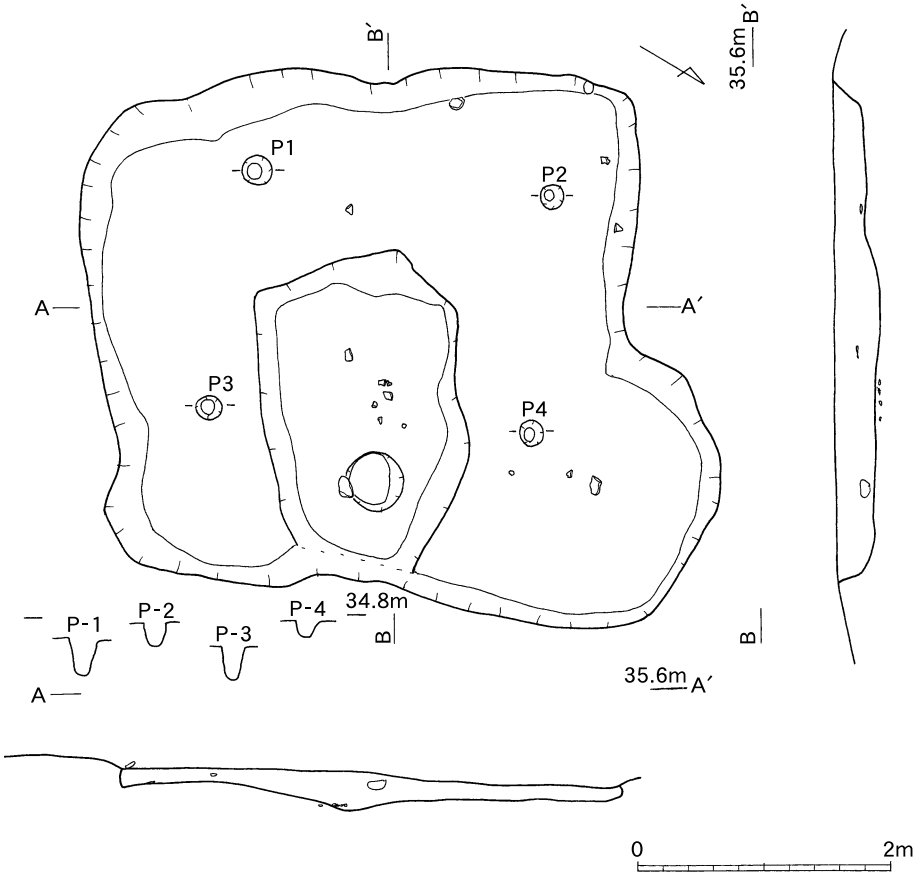
第113図　６号竪穴住居跡



第114図　６号竪穴住居跡内遺物１

７号住居跡（第115図）

７号住居跡はＥ－３区において検出された。長軸はほぼ東西で4.2×４mの方形であるが，北西側に２×0.8mの突出部を有する。深さは40㎝で柱穴はピット１～４の４箇所と思われる。北側の壁寄りに幅1.6m，長さ2.4mの掘り込みを有する。遺物は少なく小さいもので図化できるものはなかった。



第115図　７号竪穴住居跡

８号住居跡（第116図・第117図）

８号住居跡はＥ－７区において検出された。１～７号住居跡とは１軒だけ離れた標高約40mの緩傾斜地に建てられているのが特徴である。長軸はほぼ南北で2.9×2.8mの方形である。ピット５箇所が検出されているが柱穴はピット２・４の２箇所が想定される。遺物は小破片が多くみられる。1153～1162は甕形土器。1153は口縁部径19.5㎝を測る。胴部はあまり張らず口縁部は内湾する。胴部上位にすれ違いの刻目突帯を廻らす。1155～1157は中空の脚台である。1158～1162は胴部に刻目突帯を廻らすものである。1163・1164は壺形土器の底部。1165は坩形土器の体部。1166は口縁部径7.2㎝，器高7.9㎝を測る手捏ね土器。内外面に指頭押圧が明瞭に認められるものである。1167～1176は高坏。1167～1173は坏部である。1167～1170は接合部に稜を有し，口縁部は直線的に外反するものである。1169は接合部に稜を有して立ち上がり，口縁部近くでさらに外反するものである。1174～1176は脚部。脚柱部から裾部へなだらかに広がるものである。

６号竪穴住居跡内遺物

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
114図	1151	甕	脚部			オリーブ黒	にぶい黄橙	B	ナデ	ナデ	スス付着
	1152	坩	胴部			浅黄橙	橙	B	ナデ，ハケ目	ヘラケズリ	

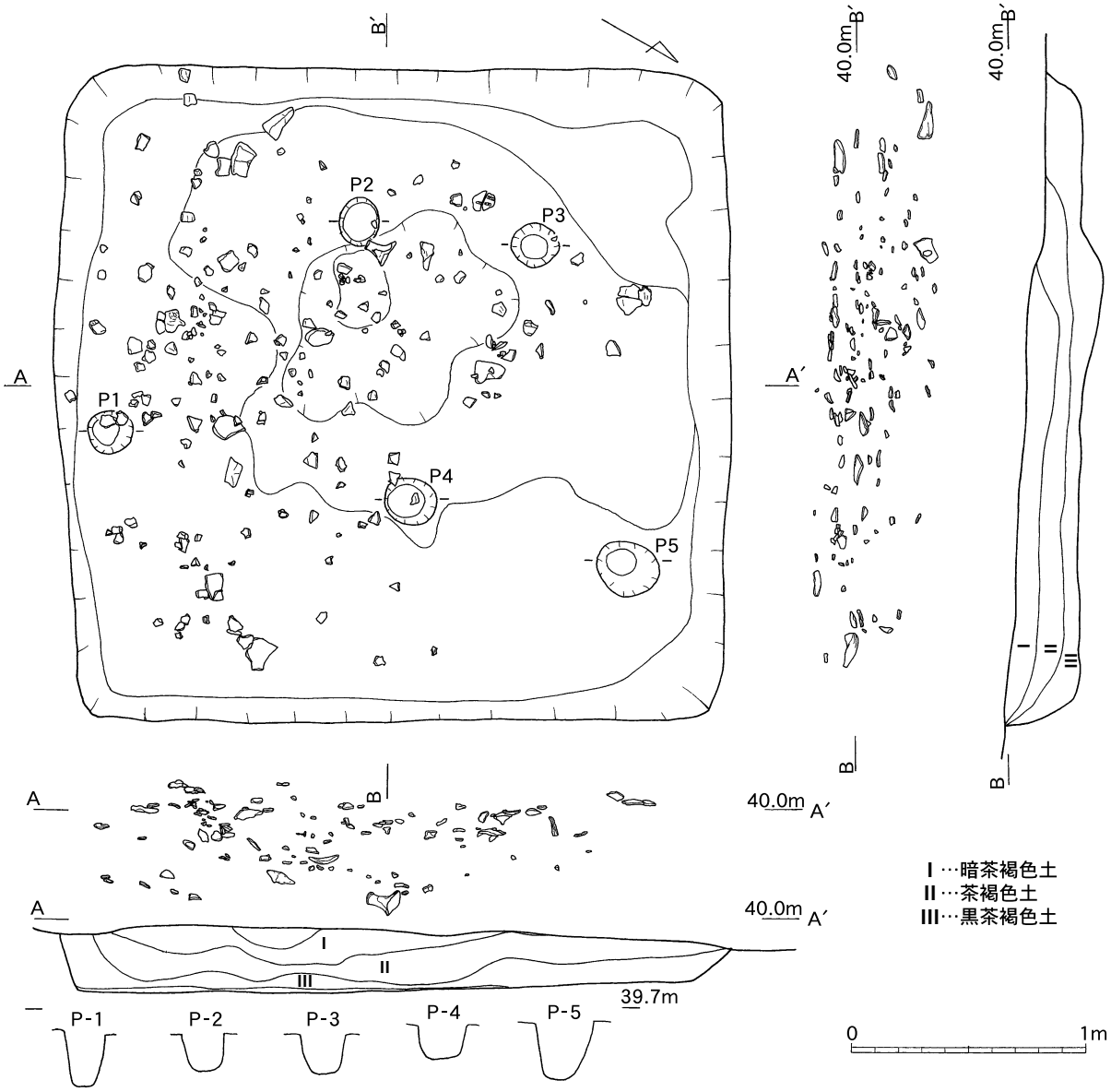
８号竪穴住居跡内遺物

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
117図	1153	甕	口縁，胴部			浅黄	浅黄	A.B.C	ヘラケズリ	ナデ，ハケ目	スス付着
	1154	甕	胴部			浅黄橙	橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	
	1155	甕	底部			浅黄	橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1156	甕	底部			明赤褐	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1157	甕	底部			橙	明黄褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1158	甕	胴部			にぶい黄	橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1159	甕	胴部			にぶい黄橙	黒褐	A.B.C	ナデ	板ナデ	スス付着
	1160	甕	胴部			明黄橙	橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	スス付着
	1161	甕	胴部			にぶい褐	浅黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	スス付着

A：長石　B：石英　C：角閃石

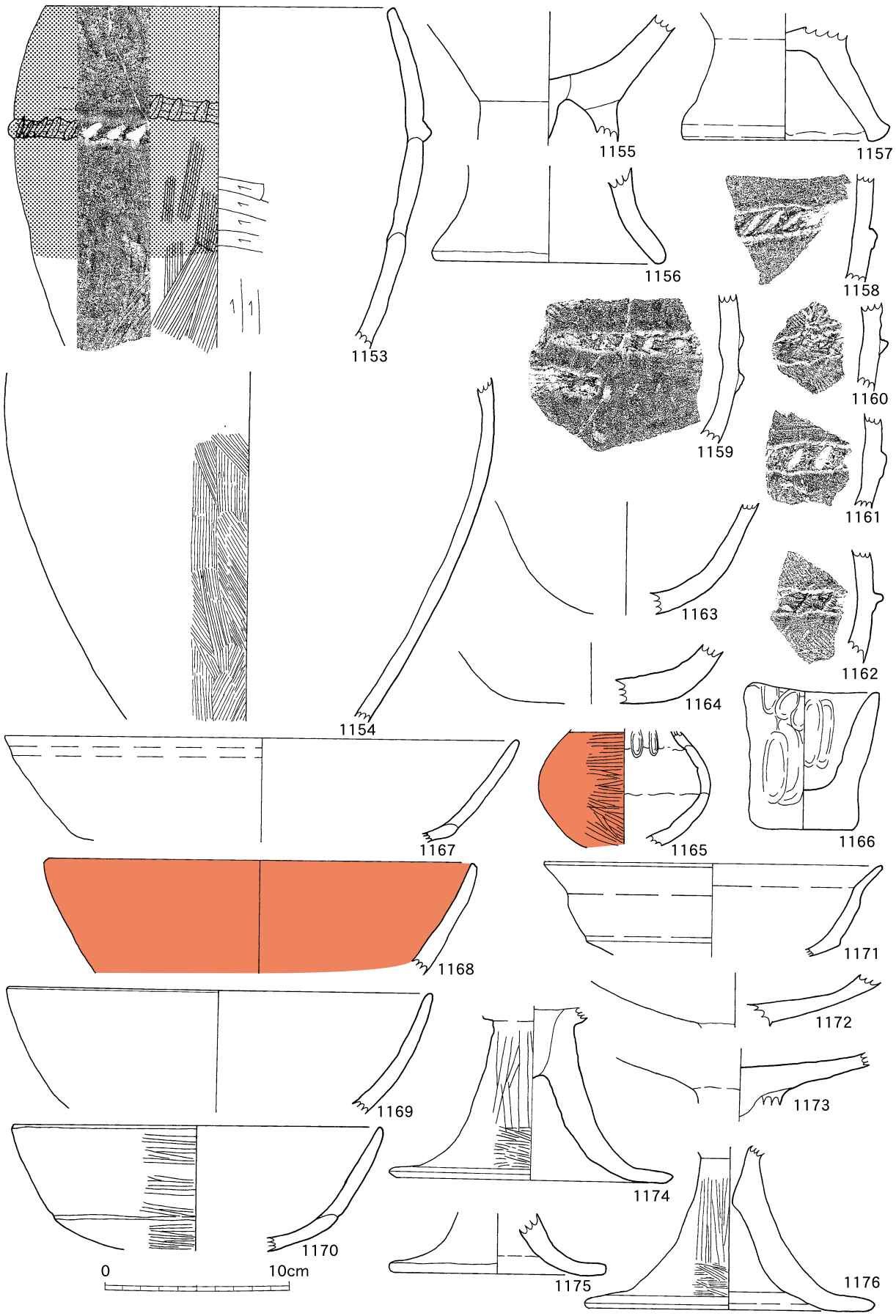
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
117図	1162	甕	胴部			橙	オリーブ黒	B.C	ハケ目	ハケ目	スス付着
	1163	壺	底部			淡黄	浅黄橙	B.C	ナデ	ハケ目	
	1164	壺	底部			明赤褐	明赤褐	A.B.C	板ナデ	ナデ	
	1165	坩	体部			橙	橙	B.C	ナデ，指頭押圧	ヘラミガキ	丹塗り
	1166	鉢	完形			浅黄	にぶい黄	B	指頭押圧	指頭押圧	スス付着 手捏ね
	1167	高坏	坏部			橙	橙	B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	1168	高坏	坏部			橙	明赤褐	A.B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹塗り
	1169	高坏	坏部			黄橙	明黄褐	B.C	ヘラミガキ後ナデ	ナデ	
	1170	高坏	坏部			橙	橙	B.C	ナデ	ヘラミガキ	
	1171	高坏	坏部			黄橙	橙	B	ナデ	ヘラミガキ	
	1172	高坏	坏部			橙	橙	B.C	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	1173	高坏	坏部			明赤褐	橙	B	ナデ	ナデ	
	1174	高坏	脚部			明黄褐	橙	B	ナデ	ヘラミガキ	
	1175	高坏	脚部			橙	橙	B	ナデ	ヘラミガキ	
	1176	高坏	脚部			橙	橙	B	ナデ	ヘラミガキ	



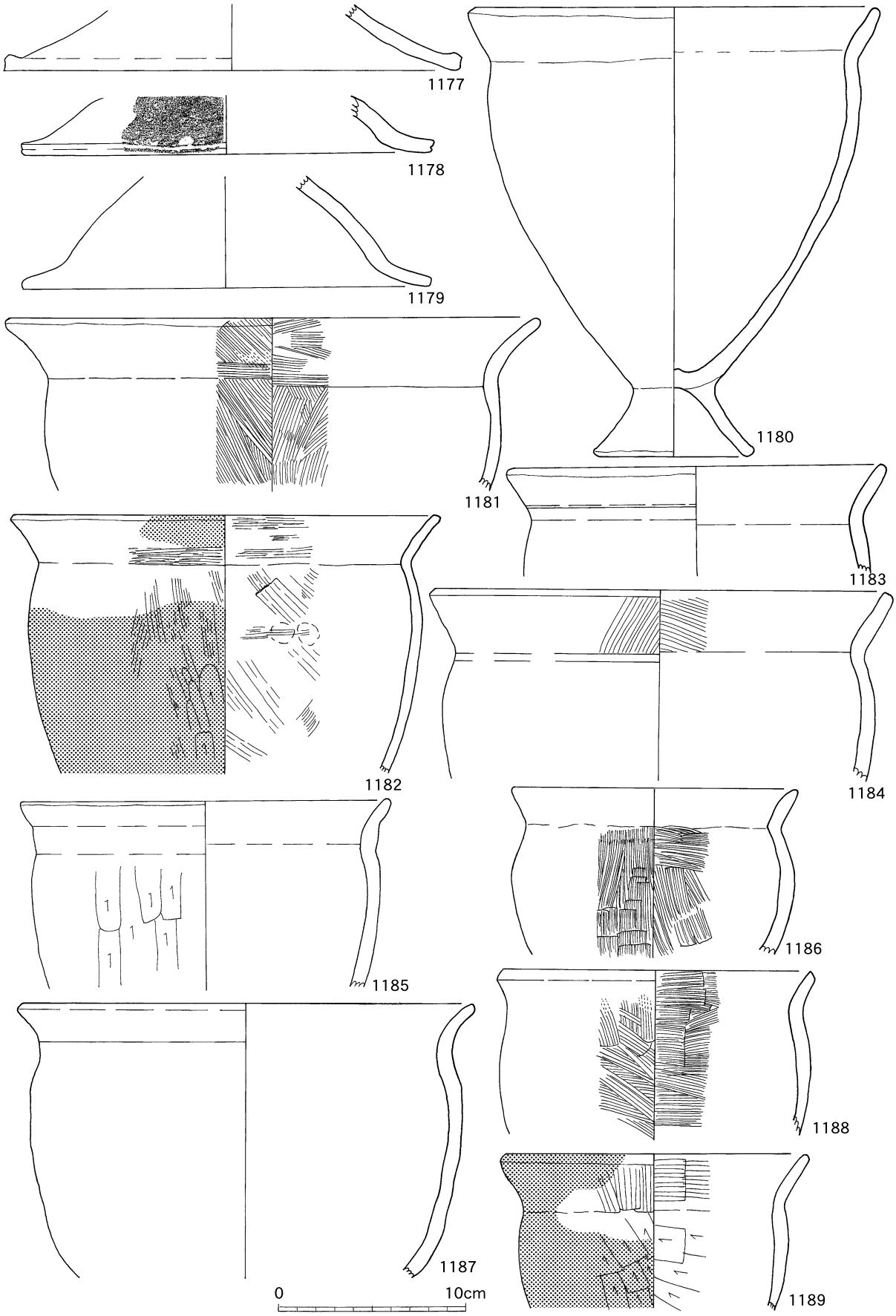
第116図　8号竪穴住居跡

2　古墳時代の土器（第118図～第121図）

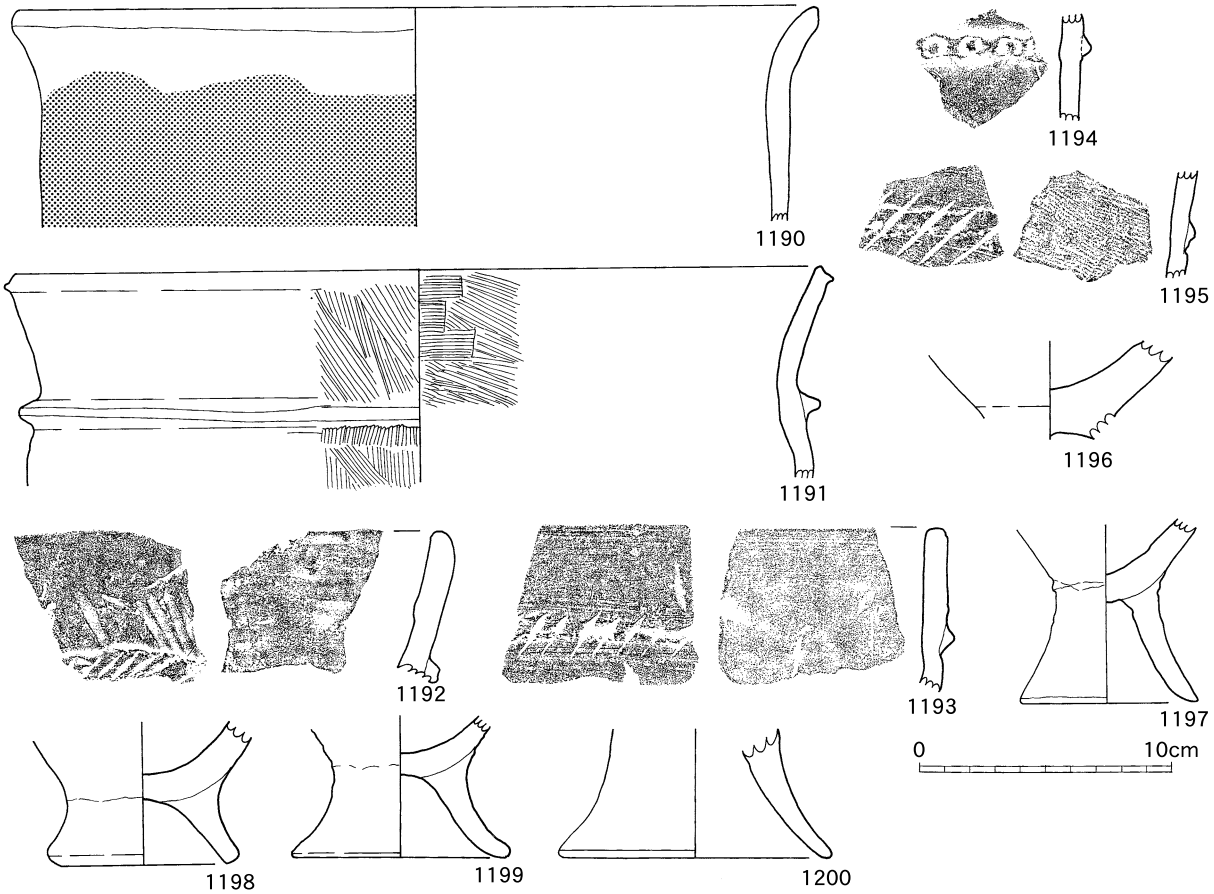
古墳時代で遺構に伴わない土器も，Ⅰ層・Ⅱ層から出土している。1177～1179は蓋形土器。いずれも天井部を欠損するものである。1180～1200は甕形土器。1180は口縁部径22㎝，器高24㎝を測る。中空の脚台から胴部はやや丸みを帯び，口縁部はややしまった頸部から外反する。口縁内面には稜線がかすかに残るものである。1181～1186は口縁部が外反し，内面に稜線を有するものである。1187～1190は口縁部が外反するが，内面に稜線が残らないものである。1191は頸部に突帯を廻らし，口縁部は内面に稜線を有せず外反するものである。1193～1195は刻目突帯を廻らすものである。1197～1200は中空の脚台である。1201～1212は壺形土器。1201～1204はしまった頸部から口縁部が外反するものである。1205は頸部に刻目突帯を廻らす。1206～1209は胴部で突帯を廻らすものである。1210は胴部が細長いものである。1211・1212は底部である。1213・1214は坩形土器。1213は平底の底部から胴部は球形状に膨らみ頸部へ至るものである。胴部最大径の位置に稜が認められる。1215は口縁部が短く外反するものであるが，無頸壺の範疇に入れたい。1216～1220は鉢形土器。1216は口縁部径10.7㎝，器高7.5㎝を測るもので，手捏ね土器に近い。1217は分厚い底部で，口縁部はくの字状に外反する。1219は短い脚台から直線的に立ち上がるもので，細身に仕上げる。1220は胴部が丸みを帯びるものである。1221～1224は高坏。1222は穿孔を有する脚部である。1225～1233は須恵器。



第117図　８号竪穴住居跡内遺物



第118図　古墳時代土器１



第119図　古墳時代土器２

古墳時代土器

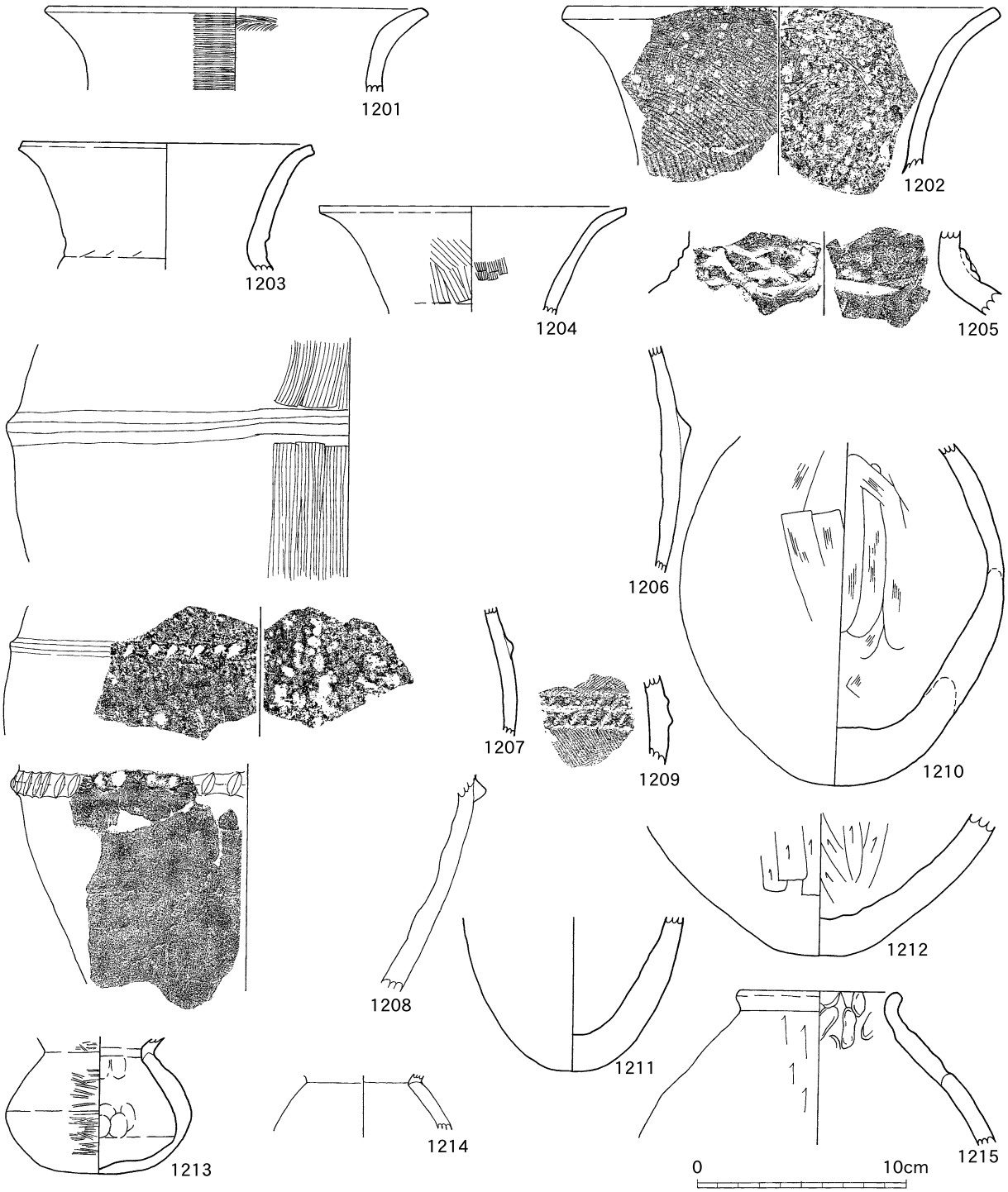
A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
118図	1177	蓋	口縁部	G-5	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	内面スス
	1178	蓋	口縁部	B-5	Ⅲ	橙	にぶい黄橙	A.C	ナデ	ナデ	
	1179	蓋	口縁部	C-5	Ⅲ	橙	にぶい橙	A	ナデ	ナデ	
	1180	甕	完形	B-4	Ⅲ	にぶい橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1181	甕	口縁部,胴部	F-10	Ⅲ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B	ハケ目	ハケ目	スス付着
	1182	甕	口縁部,胴部	F-10	Ⅱ	橙	橙	A	ハケ目	ナデ，ヘラケズリ	スス付着
	1183	甕	口縁部,胴部	B-4	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.C	ナデ	ナデ	
	1184	甕	口縁部,胴部	F-4	Ⅲ	灰黄褐	黒褐	A.B.C	ナデ，ハケ目	ナデ，ハケ目	スス付着
	1185	甕	口縁部,胴部	E-4	Ⅲ	にぶい黄	にぶい黄	A.B.C	ナデ	ヘラケズリ	
	1186	甕	口縁部,胴部	F-4	Ⅲ	にぶい黄橙	橙	B	板ナデ	ハケ目	スス付着
	1187	甕	口縁部,胴部	D-3	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい赤橙	A.B.C	ナデ，ヘラケズリ	ナデ，ハケ目	
	1188	甕	口縁部,胴部	F-10	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい褐	A.C	ハケ目	ハケ目	
	1189	甕	口縁部,胴部	B-4	Ⅱ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ハケ目，ヘラケズリ	ハケ目，ヘラケズリ	スス付着
119図	1190	甕	口縁部	H-5	Ⅲ	茶褐	にぶい黄	A.B.C	ナデ	ナデ，ハケ目	スス付着
	1191	甕	口縁部	G-11	Ⅱ	浅黄	にぶい橙	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1192	甕	口縁部	G-5	Ⅲ	にぶい黄橙	黒褐	A.B.C	板ナデ	ヘラケズリ	
	1193	甕	口縁部	G-5	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1194	甕	胴部	I-6	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	A.B.C	ナデ	ナデ	竹管文突帯
	1195	甕	胴部	C-4	Ⅲ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	A.B.C	ハケ目	ハケ目	
	1196	甕	底部	G-5	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	A.B.C	ナデ	ナデ	丹塗り
	1197	甕	底部	G-10	Ⅱ	黄橙	にぶい橙	A.B.C	ハケ目	ナデ	
	1198	甕	底部	G-11	Ⅱ	褐灰	橙	A.B.C	ナデ	板ナデ	
	1199	甕	底部	F-10	Ⅱ	褐灰	明黄褐	A.B.C	ナデ	ナデ，ハケ目	
	1200	甕	底部	G-7	Ⅲ	黒褐	にぶい黄褐	A.B	ナデ	ハケ目	
120図	1201	壺	口縁部	F-5	Ⅲ	黒褐	にぶい赤褐	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1202	壺	口縁部	C-5	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1203	壺	口縁部	F-4	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B.C	ナデ	ハケ目	

A：長石　B：石英　C：角閃石

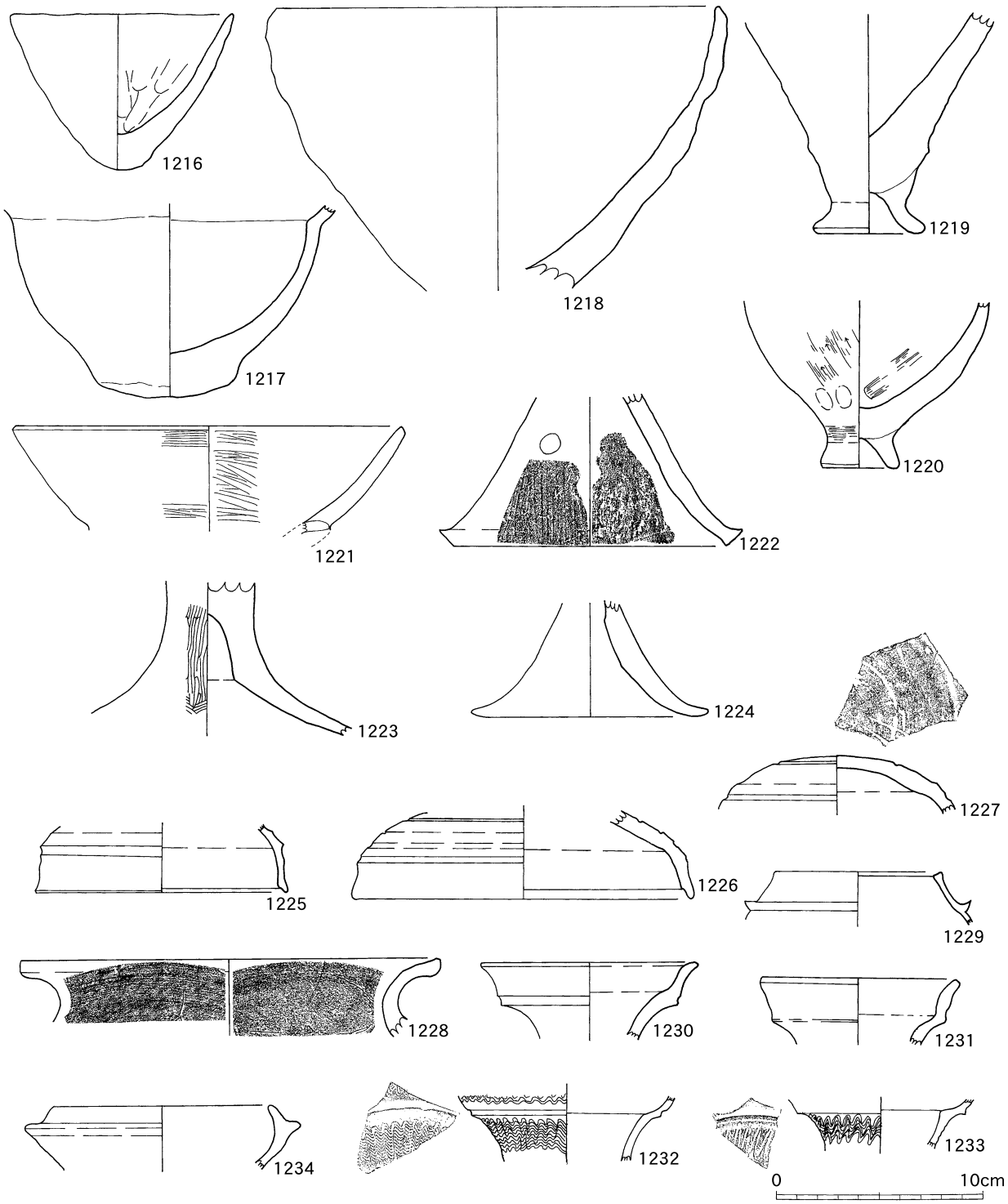
挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
120図	1204	壺	口縁部	G-4	Ⅲ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ，ハケ目	ハケ目	
	1205	壺	頸部	H-6	Ⅲ	灰黄褐	にぶい赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1206	壺	胴部	D-3	Ⅲ	にぶい黄橙	橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1207	壺	胴部	B-4	Ⅲ	灰黄	にぶい黄橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1208	壺	胴部	E-4	Ⅲ	明赤褐	橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1209	壺	胴部	H-6	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	A.B	ナデ	ハケ目	
	1210	壺	胴部,底部	F-4	Ⅲ	明赤褐	にぶい赤褐	A.B	板ナデ	板ナデ	
	1211	壺	底部	G-6	Ⅲ	明赤褐	明赤褐	A.B	ナデ	ナデ	
	1212	壺	底部	E-3	Ⅲ	赤褐	にぶい黄橙	A.B.C	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	1213	坩	体部	F-7	Ⅲ	橙	明赤褐	A.B	ナデ，指頭押圧	ヘラケズリ	
	1214	坩	体部	ナシ	Ⅴ	明赤褐	明赤褐	A	ヘラケズリ	ナデ	丹塗り
	1215	壺	口縁部	D-3	Ⅲ	橙	橙	A.B.C	ナデ	ナデ	無頸壺
121図	1216	鉢	完形	E-4	Ⅲ	黄橙	明黄褐	A.B	ヘラケズリ	ナデ	
	1217	鉢	胴部，底部	L-9	Ⅲ	明赤褐	橙	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1218	鉢	口縁部，胴部	D-3	Ⅲ	にぶい黄橙	橙	A.B	板ナデ	板ナデ	
	1219	鉢	胴部，底部	C-4	Ⅱ	にぶい黄橙	橙	A.B.C	板ナデ	ナデ	
	1220	鉢	胴部，底部	E-11		橙	明黄褐	A.B	ナデ	板ナデ	
	1221	高坏	口縁部	F-7	Ⅲ	橙	橙	B	ヘラミガキ	ヘラミガキ後ナデ	
	1222	高坏	脚部	F-10	Ⅱ	橙	明黄褐	A.B	ナデ	ハケ目	穿孔
	1223	高坏	脚部	H-5	Ⅲ	浅黄橙	赤褐	A.B	ナデ	ヘラミガキ	
	1224	高坏	脚部	F-7	Ⅰ	淡黄	赤	A.B	ナデ	ヘラミガキ	丹塗り
	1225	蓋	口縁部	F-7	Ⅲ	灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1226	蓋	口縁部	G-10	Ⅱ	灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1227	蓋	口縁部	G-10	Ⅱ	オリーブ灰	オリーブ灰	B	ナデ	ヘラケズリ	
	1228	甕	口縁部	ナシ		灰	暗青灰	B	ナデ	平行叩後ナデ	
	1229	壺	口縁部	C-3	Ⅱ	暗青灰	暗青灰	B	ナデ	ナデ	
	1230	はそう	口縁部	H-5	Ⅱ	青灰	灰褐	B	ナデ	ナデ	
	1231	はそう	口縁部	F-10	Ⅱ	オリーブ灰	暗青灰	B	ナデ	ナデ	
	1232	はそう	頸部	G-5	Ⅱ	暗青灰	青灰	B	ナデ	櫛描波状文	
	1233	はそう	頸部	H-6	Ⅱ	青灰	暗青灰	B	ナデ	櫛描波状文	
	1234	坏	口縁部	F-4	Ⅱ	淡黄	淡黄		ナデ	ナデ	模倣坏

1225～1227は蓋。1225は口縁部径12.2㎝を測る。天井部を欠損するものであるが器高は高いものと思われる。天井部と口縁部をわける稜は短い。口縁端部は内傾し内面に稜を有する。1226は口縁部径16.6㎝を測る。天井部と口縁部をわける稜線は認められないものである。1228は口縁部が短く外反する甕。口縁部径20.3㎝を測るもので端部は丸みを帯びる。1229は口縁部が内傾し端部を平坦におさめるものである。口縁部下位に鋭い突出部を有するが，全体器形の判明しないものである。1230～1233は小型の壺



第120図　古墳時代土器３

もしくは瓹の口縁部である。1230・1231はやや太めの頸部で口縁部との境には稜を有する。1232・1233は頸部と口縁部の境の稜がシャープなものである。1232は口縁部と頸部，1233は頸部に櫛描波状文を施す。1234は須恵器の模倣土師器である。口縁部径10.6㎝を測るもので，口縁部は短く内傾し端部は丸くおさめる。受部は水平にのび端部は丸くおさめる。全体に厚手である。



第121図　古墳時代土器４・須恵器

第４節　古代・中世の調査

古代及び中世の時期ではＪ・Ｋ－６・７区を中心に遺物が出土している。ピットも数少ないが検出されている。

１　遺構

古代・中世の遺構はピットが検出されたが建物になるような状況ではなかった。

２　遺物（第122図・第127図）

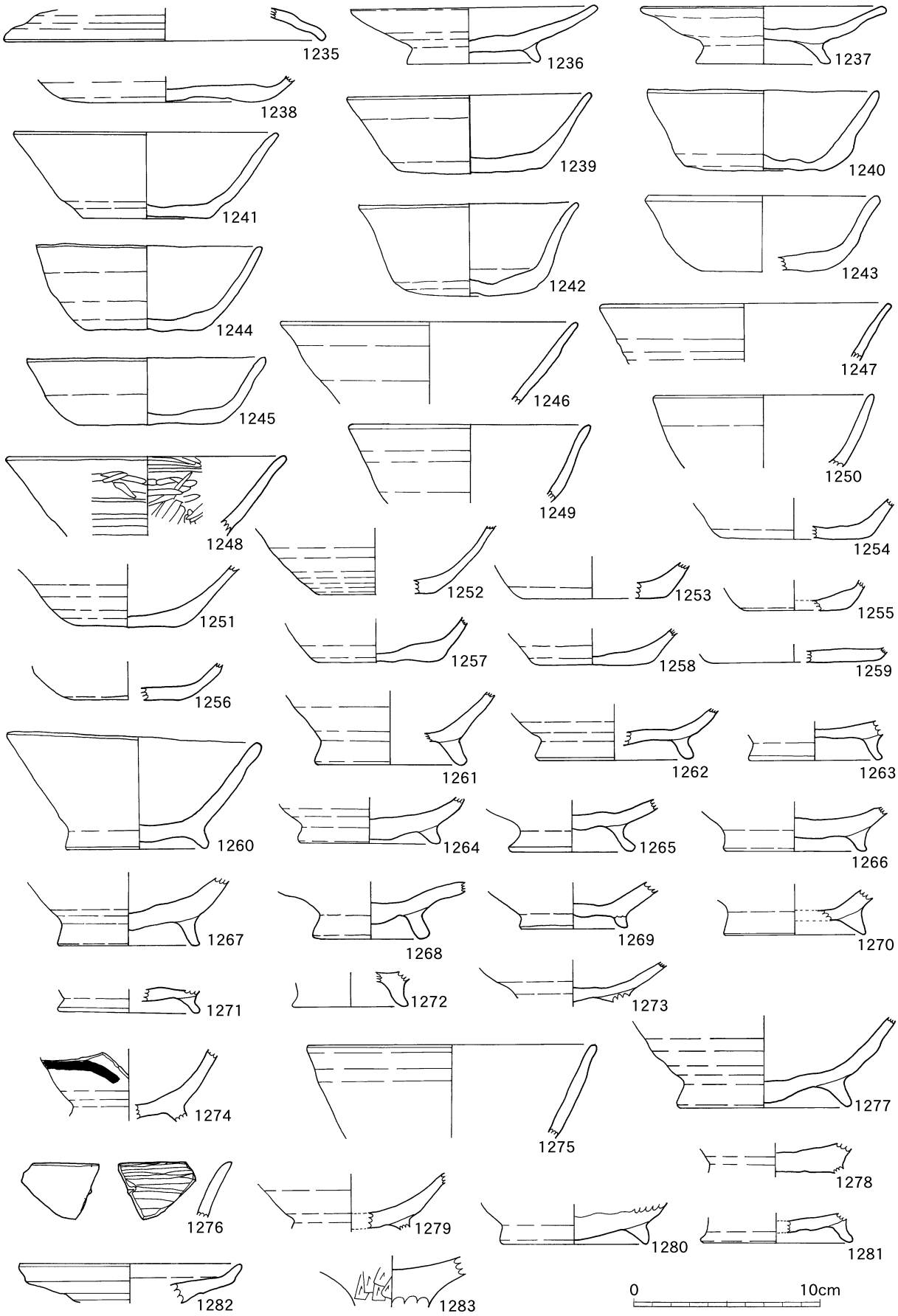
遺物は古代の土師器・須恵器，中世の磁器などが出土している。

土師器（第122図・第123図）

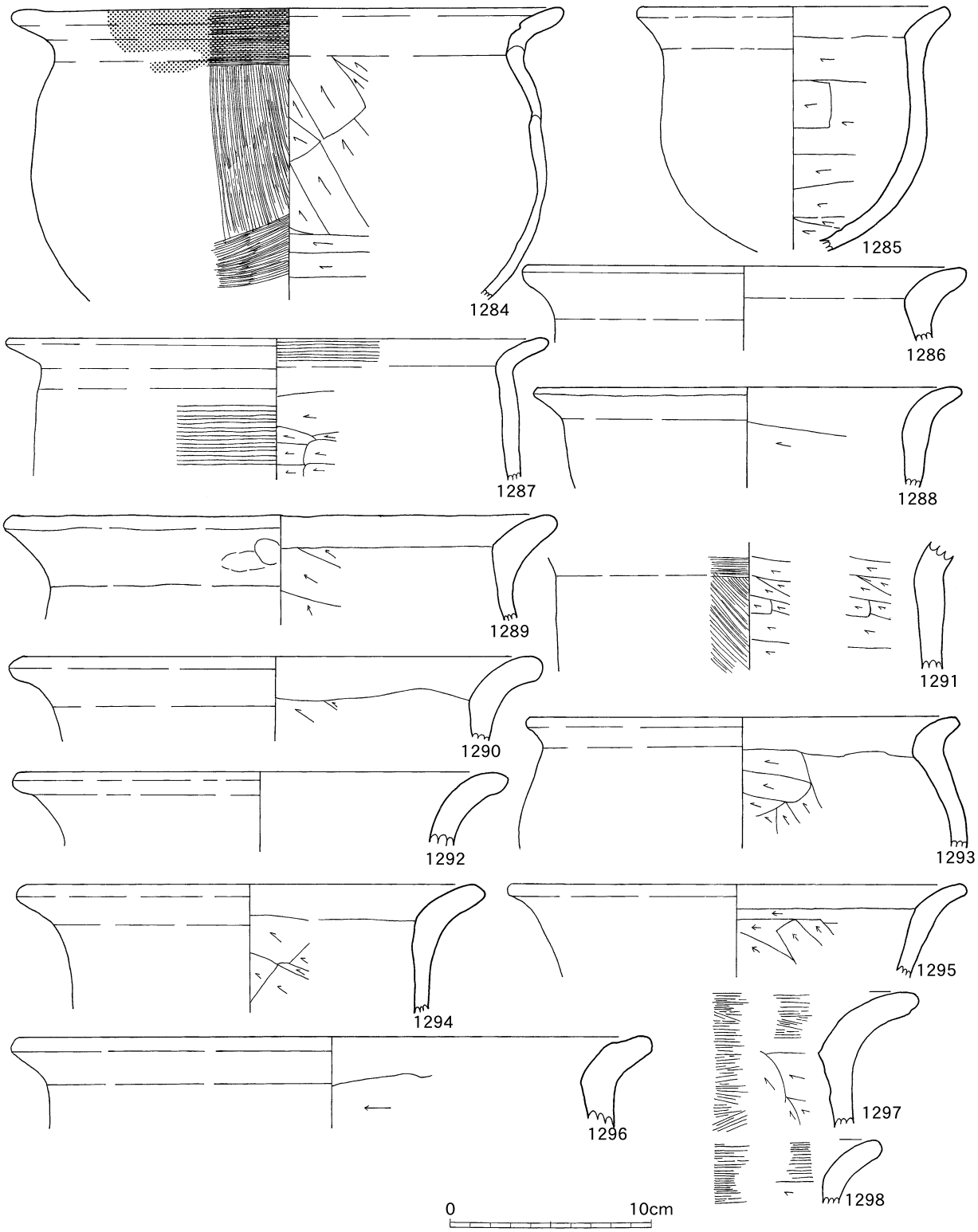
1235は口縁部径17.3㎝を測る蓋。天井部は欠損するが，やや深めの蓋と思われる。天井部から開いた体部は口縁部でやや内湾するものである。1236～1238は皿。1236・1237は口縁部径13.3㎝，器高3.0㎝を測るもので高台を有するものである。高台は外方へふんばり端部は丸くおさめる。1237はいったん屈曲してから口縁部が外反するものである。1238は口縁部を欠損するものであるが，浅めの皿と思われる。1239～1259は坏。平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部へ至るもの（1239～1241・1244）と丸みを帯び口縁部がやや外反するもの（1242・1243・1245）とがある。1240は底部からの立ち上り部分が分厚くなる。1242・1243は底部が丸みを帯び，体部から口縁部へと外反するものである。口縁部径は11㎝～13㎝のもの（1239・1240・1242～1244・1250）13㎝～16㎝のもの（1241・1245～1249）に大別できる。1260～1282は高台を有するもので椀と思われる。1260は口縁部径13.7㎝，器高6.4㎝を測る。外方にふんばった高台から直線的に立ち上がるもので，口縁部近くでわずかに凹み口縁部は外反状にみえる。端部は丸くおさめる。1274は内黒土師器。外面に墨書が認められるが破片のため判読は不可能である。1275～1281は内面に丹が塗布してある内赤土師器である。1275は口縁部端部から外面上位にかけて丹塗りである。1276は外面の一部にも丹がみられる。1278は丹が一部しか残っていないものである。1282・1283は高坏と思われる。1282は直線的に開いた体部から口縁部は逆くの字状に屈曲する。1284～1298は内面をヘラケズリ整形する甕である。底部は欠損するものの丸底になるものと思われる。1284は口縁部径27.4㎝を測る。胴部が張り，ややしまった頸部から口縁部が外反するものである。1285は口縁部径15.5㎝を測る小型のものである。わずかに張った胴部から頸部はあまりしまらず，口縁部は外反する。1286～1292・1294～1298は胴部以下が欠損するが，胴部のあまり張らないものと思われる。

須恵器（第124図～第126図）

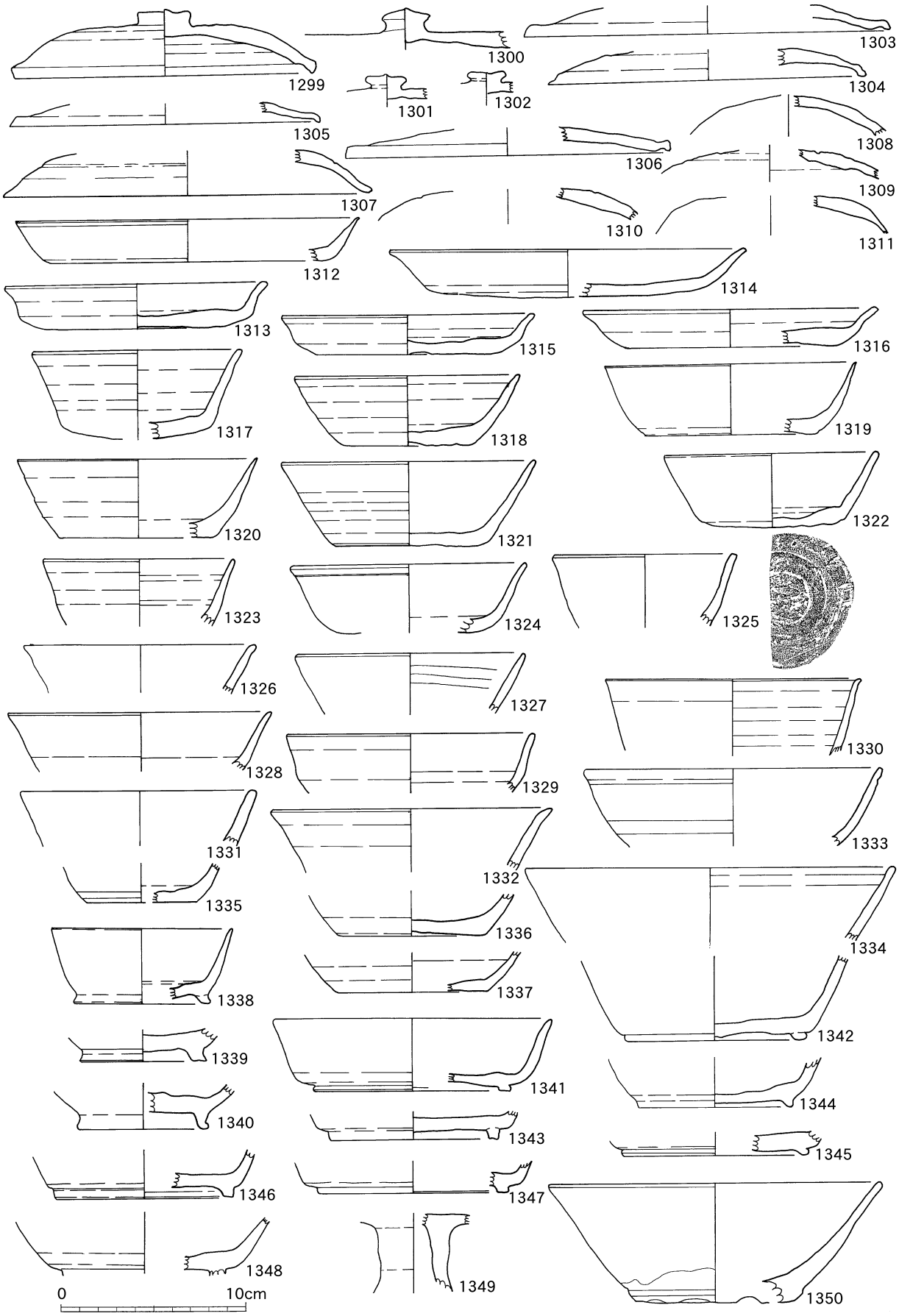
1299～1311は蓋。1299～1302は扁平な宝珠形つまみを有するもので，天井部はヘラケズリで平坦に仕上げるものである。1299は口縁部径16.3㎝，器高3.5㎝を測るやや深めの蓋である。口縁端部は下方へ短く屈曲し，先端はにぶい稜をなす。1312～1316は皿。口縁部径が13～15㎝程度のもの（1313・1315・1316）と19㎝程度のもの（1312・1314）がある。いずれも体部・口縁部が低いものである。1313～1315は底部がやや分厚い。1316～1337は坏。口縁部が９～12㎝程度のもの（1317・1322～1327・1331）と13～14㎝程度のもの（1319～1321・1328～1330・1332・1333）に分けられる。口縁部が直線的に外反し，端部は丸くおさめるものがほとんどであるが，口縁部がわずかに外反するもの（1324～1326・1328・1332）や端部を鋭くおさめるもの（1320）もある。1317は底部が膨らむものである。1338～1347は高台をもつ坏。1327は口縁部径12.4㎝を測る。高台は高くなくわずかに外方へふんばる。体部は直線的に立ち上がり口縁端部は鋭くおさめるものである。1341は口縁部径15㎝，器高3.9㎝を測る。口縁部径に比して器高が低いものである。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。いずれも高台はやや外方にふんばるもので，脚端面が水平なものと丸みを帯びるものとがある。1349は高坏の脚部である。1351～1377は甕。1351は口縁部径20㎝を測る。頸部は短く口縁部は大きく外反する。口縁端部は屈曲して短く立ち上がるものである。外面は格子目叩き，内面は同心円叩きである。1352は頸部。1354は胴部上位である。外面は平行叩きと格子目叩きがみられ，内面は平行叩きと同心円叩きと平行叩きがみられる。1378～1393は壺。1378は細い頸部から口縁部は外反し端部は外方へ屈曲するもので



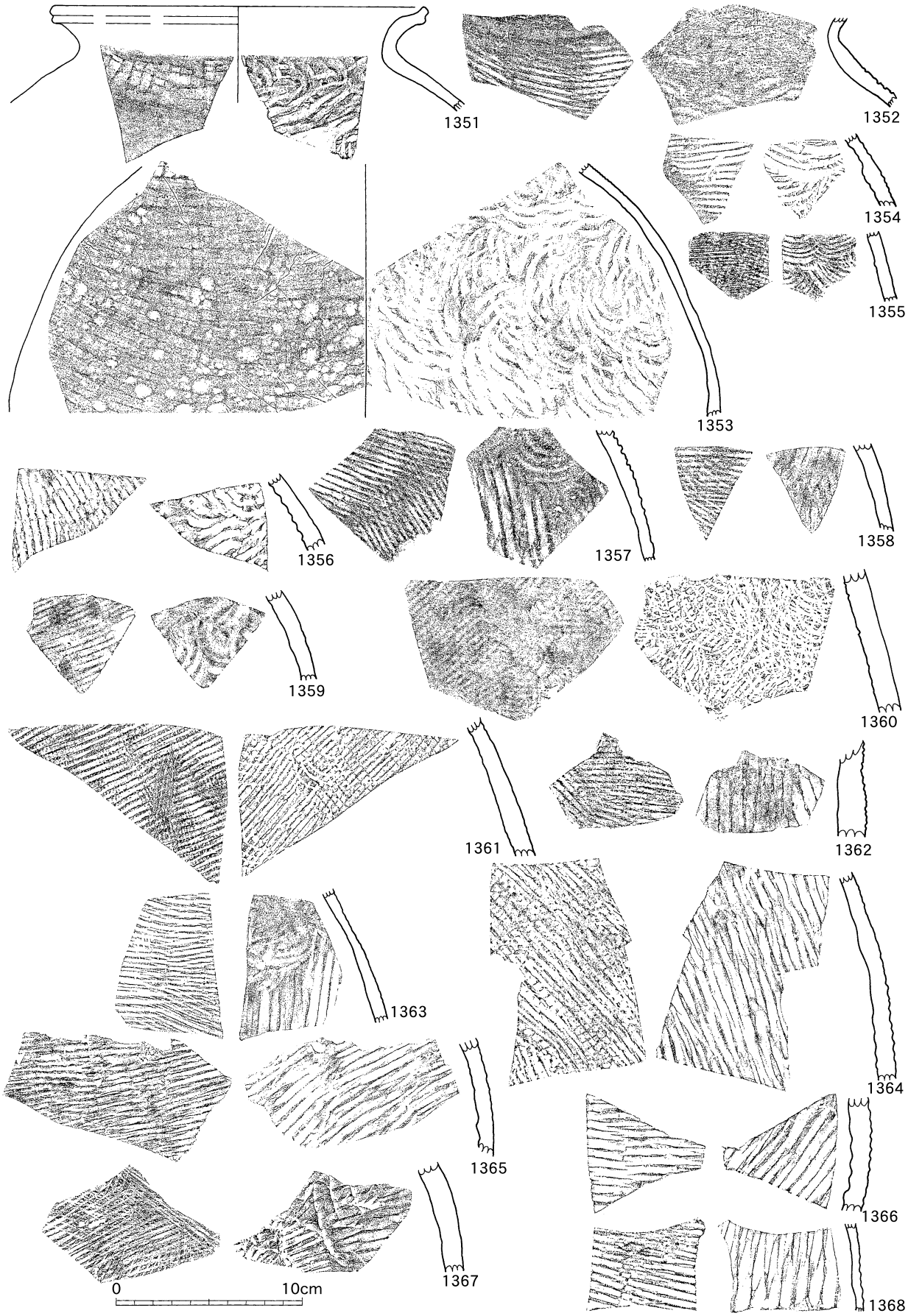
第122図　古代土師器１



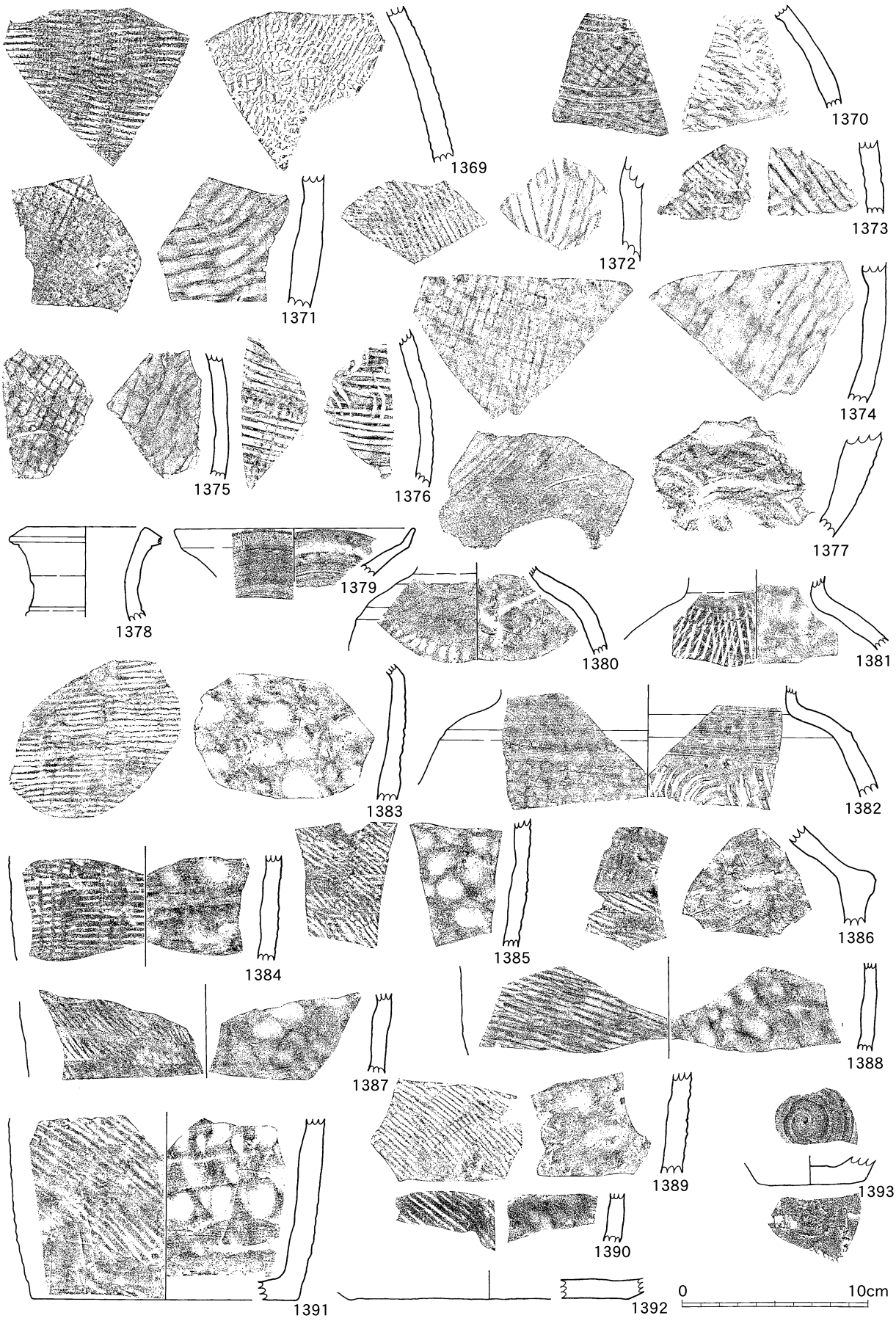
第123図　古代土師器２



第124図　古代須恵器１



第125図　古代須恵器２



第126図　古代須恵器３

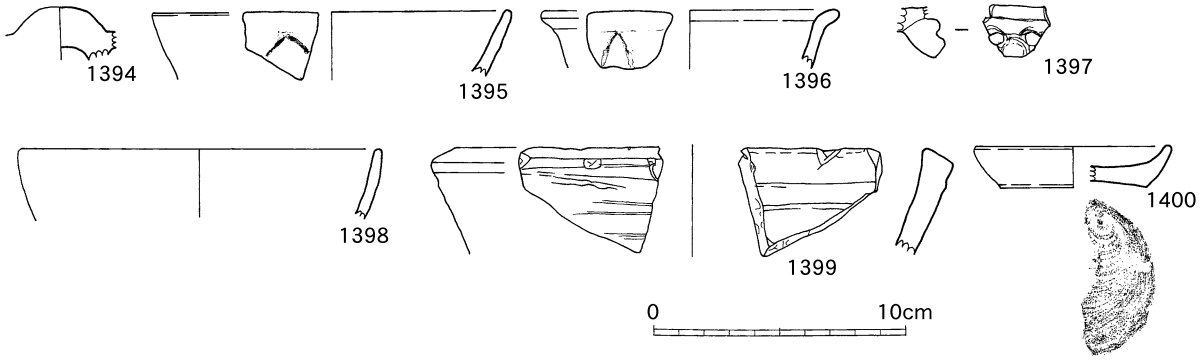
ある。1379は口縁部径13cmを測る。頸部から大きく外反した口縁部は端部で上方へ屈曲するものである。1380～1382は肩部がナデ肩を呈するものである。1383～1391は平底の底部から胴部は直行気味に立ち上がり，肩部で内側に屈曲して口縁部へ至るものである。口縁部は欠損している。1386は肩部に幅1.5cm，長さ約５cmの縦型の突起を有する。外面は平行叩きである。内面は当て具に布で包んだ小石を使ったと思われる痕跡が認められる。また，仕上げは横方向のナデによる。1392・1393は底部である。

青磁（第124図）

1350は越州窯系の青磁碗と思われる。口縁部径18cm，器高6.4cmを測る。体部は大きく開いて立ち上がり口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸みを帯びる。見込み及び底部外面に目跡の痕跡が認められる。内外面にオリーブ色の釉薬がかかり，外面下位から底部にかけては露胎である。

中世の陶磁器（第127図）

1394～1398は青磁。1394は蓋のつまみと思われる。水注等の蓋ではないかと思われる。1395・1396は蓮弁文の碗。1395は幅広の蓮弁，1396は口縁部が外反する蓮弁文碗である。1397は短い獣足状の足の部分である。足の部分だけのため全体形状は把握出来ないが，三足盤等の足ではないかと推測される。1398は線書き蓮弁の碗。1399は陶器のこね鉢と思われる。1400は土師器の皿で口縁部径7.8cm，器高1.6cmを測る。底部の糸切りの痕跡が明瞭な浅い皿である。



第127図　中世陶磁器

古代土師器

挿図番号	報告番号	出土区	層	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	胎土	色調（外）	備考
122図	1235	K-9	Ⅱ	蓋	17.3					浅黄橙	回転ナデ
	1236	K-9	Ⅱ	高台付き皿	13.3	7	6		茶粒	黄橙	回転ナデ
	1237	K-9	Ⅱ	高台付き皿	13.2	7.2	3.1		茶粒	浅黄橙	回転ナデ
	1238	H-5	Ⅲ	皿		11.6			赤色顔料付着	にぶい橙	回転ナデ
	1239	H-5	Ⅱ	坏	13.2	7.6	4.2		茶粒	橙	ヘラ切り
	1240	L-10	Ⅱ	坏	12.6	7.9	4.4		茶粒	橙	ヘラ切り
	1241	K-9	Ⅲ	坏	14.3	7	4.6			橙	ヘラ切り
	1242	H-5	Ⅳ	坏	11.9	7.2	4.9		茶粒	橙	
	1243	G-11	Ⅱ	坏	12.6	6	4.1			浅黄橙	
	1244	G-11	Ⅱ	坏	12.2	6.4	4.5		茶粒	明黄橙	丹塗り
	1245	H-5	Ⅲ	坏	12.9	7.5	3.6			橙	ヘラ切り
	1246	G-11	Ⅱ	椀	16					浅黄橙	
	1247	K-9	Ⅲ	椀	16.9				赤色粒	橙	
	1248	K-9	Ⅲ	椀	15.2					浅黄橙	
	1249	G-11	Ⅱ	椀	13.1					浅黄橙	
	1250	H-5	Ⅱ	椀	12					灰白	
	1251	F-11	Ⅱ	坏		5.8				浅黄橙	朱色あり
	1252	G-11	Ⅱ	坏		6.2			茶粒	浅黄橙	
	1253	D-3	Ⅳ			8				浅黄橙	
	1254	G-6	Ⅱ	坏		8.2				にぶい黄橙	
	1255	L-9	Ⅲ	椀		6			茶粒	浅黄	赤粒あり
	1256	F-10	Ⅱ	椀		5.6			茶粒	浅黄橙	
	1257	L-9	Ⅲ	椀		6.2				浅黄橙	
	1258	F-11	Ⅱ	坏		6.5				浅黄橙	
	1259	S-9	Ⅲ			9				橙	
	1260	E-11	Ⅲ	椀	13.7	7.7	5.4		茶粒	浅黄橙	
	1261	F-10	Ⅱ	高台付椀		8				浅黄橙	
	1262	L-9	Ⅱ	高台付椀		8				浅黄	
	1263	L-9	Ⅱ	高台付椀		6.8			茶粒	浅黄	
	1264	L-9	Ⅱ	高台付椀		7.3				浅黄橙	
	1265	K-9	Ⅲ	高台付椀		6.6				橙	
	1266	F-11	Ⅱ	高台付椀		7.4				浅黄橙	赤色顔料

挿図番号	報告番号	出土区	層	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	高台高	胎土	色調（外）	備考
122図	1267	F-11	Ⅱ	高台付皿		7.6				浅黄橙	
	1268	L-10	Ⅱ	椀		5.8				明黄橙	
	1269	G-6	Ⅱ	高台付椀		5.8			茶粒	橙	
	1270	F-11	Ⅱ	高台付椀		6.4				浅黄橙	
	1271	F-10	Ⅱ	高台付椀		7.2				橙	
	1272	G-11	Ⅱ	椀		6				にぶい黄橙	
	1273	I-6	Ⅱ	椀						明黄橙	
	1274	F-10	Ⅱ	高台付椀						明黄橙	
	1275	G-11	Ⅱ	椀	17.3					橙	丹塗り
	1276	G-11	Ⅱ	椀					内丹塗り	浅黄橙	丹塗り
	1277	L-9	Ⅱ	高台付椀			9			橙	丹塗り
	1278	L-9	Ⅱ	椀						にぶい黄橙	丹塗り
	1279	L-9	Ⅱ	坏						にぶい黄橙	丹塗り
	1280	F-10	Ⅱ	高台付椀			7.8			にぶい黄橙	丹塗り
	1281	L-9	Ⅱ	高台付椀			8			にぶい黄橙	丹塗り
	1282	I-6	Ⅱ	蓋	12					浅黄橙	
	1283	T-6	Ⅲ	高坏						橙	
123図	1284	K-8	Ⅲ	丸底甕	27.4					淡黄	
	1285	K-9	Ⅲ	甕	15.5					にぶい褐	
	1286	F-10	Ⅱ	甕	21.5				茶粒	黄橙	
	1287	L-9	Ⅱ	甕	27				茶粒	にぶい黄橙	
	1288	ナシ		甕	21.2				茶粒，石英，長石	淡黄	
	1289	D-5	Ⅱ	甕	27.4				茶粒	にぶい黄橙	
	1290	J-7	Ⅲ	甕	26.5				茶粒	橙	
	1291	J-7	Ⅲ	甕					茶粒	橙	
	1292	J-7	Ⅲ	甕	24				茶粒	黒	
	1293	J-7	Ⅱ	甕	25.5				茶粒，石英	明赤褐	
	1294	J-7	Ⅲ	甕	23.2				茶粒	橙	
	1295	G-10	Ⅲ	甕	22.9				茶粒，石英	橙	
	1296	B-5	Ⅲ	甕	31.8				茶粒	橙	
	1297	F-10	Ⅱ	甕						橙	
	1298	F-10	Ⅱ	甕					茶粒	橙	

古代須恵器１

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
124図	1299	蓋	天井部	H-5	Ⅱ	灰白	灰白	A.B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	宝珠つまみ
	1300	蓋	天井部	H-5	Ⅱ	灰白	灰	A.B.C	ナデ	ナデ	宝珠つまみ
	1301	蓋	天井部	H-5	Ⅱ	灰オリーブ	灰オリーブ	A.B	ナデ	ヘラケズリ	宝珠つまみ
	1302	蓋	天井部	H-5	Ⅱ	灰	灰	A.B	ナデ	ナデ	宝珠つまみ
	1303	蓋	口縁部	H-5	Ⅱ	灰	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1304	蓋	口縁部	H-5	Ⅱ	青灰	青灰	A.B	ナデ	ナデ	
	1305	蓋	口縁部	H-5	Ⅲ	暗灰	灰	B	ナデ	ナデ	
	1306	蓋	口縁部	H-5	Ⅲ	浅黄	浅黄	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1307	蓋	口縁部	F-10	Ⅱ	灰	灰	A.B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1308	蓋	口縁部	H-5	Ⅱ	灰白	灰白	B	ナデ	ヘラケズリ	
	1309	蓋	口縁部	H-5	Ⅲ	淡黄	灰白	B	ナデ	ヘラケズリ	
	1310	蓋	口縁部	G-5	Ⅱ	灰	灰	B	ナデ	ヘラケズリ	
	1311	蓋	口縁部	G-10	Ⅱ	灰白	淡黄	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	1312	皿	口縁部～底部	G-5	Ⅱ	暗青灰	暗青灰	A.B	ナデ	ナデ	
	1313	皿	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	浅黄	浅黄	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1314	皿	口縁部～底部	H-5	Ⅲ	灰白	灰白	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1315	皿	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰白	灰白	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	緋ダスキ
	1316	皿	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	淡黄	淡黄	A.B	ナデ	ナデ	緋ダスキ
	1317	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅲ	にぶい橙	にぶい橙	A.B	ナデ	ナデ	
	1318	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰白	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1319	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰	灰白	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1320	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰褐	灰白	A.B.C	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	緋ダスキ
	1321	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰白	灰白	A.B	ナデ	ナデ	
	1322	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰	灰	B	ナデ	ナデ，ヘラケズリ	
	1323	坏	口縁部～胴部	H-5	Ⅱ	灰	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1324	坏	口縁部～底部	H-5	Ⅱ	灰	灰	B	ナデ	ナデ	
	1325	坏	口縁部～胴部	H-5	Ⅱ	にぶい褐	にぶい褐	B	ナデ	ナデ	
	1326	坏	口縁部	ナシ		灰黄褐	灰黄褐	B	ナデ	ナデ	
125図	1327	坏	口縁部	G-11	Ⅱ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	
	1328	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	緋ダスキ
	1329	坏	口縁部	G-7	Ⅱ	暗灰黄	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1330	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	灰	灰白	B	ナデ	ナデ	緋ダスキ
	1331	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	
	1332	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	灰黄	灰	B	ナデ	ナデ	
	1333	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	灰黄	灰	B	ナデ	ナデ	
	1334	坏	口縁部	H-5	Ⅱ	浅黄	灰褐	B	ナデ	ナデ	
	1335	坏	底部	H-5	Ⅲ	黄灰	黄灰	B	ナデ	ナデ	
	1336	坏	底部	H-5	Ⅲ	浅黄	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1337	坏	底部	H-5	Ⅱ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	
	1338	高台付坏	底部	H-5	Ⅱ	黄灰	黄灰	B	ナデ	ナデ	緋ダスキ
	1339	高台付坏	底部	G-7	Ⅱ	灰	灰	B	ナデ	ナデ	
	1340	高台付坏	底部	H-5	Ⅲ	浅黄	灰	B	ナデ	ナデ	
	1341	高台付坏	底部	K-9	Ⅲ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	
	1342	高台付坏	底部	ナシ	Ⅲ	灰	灰黄褐	B	ナデ	ナデ	
	1343	高台付坏	底部	H-5	Ⅲ	浅黄	浅黄	B	ナデ	ナデ	
	1344	高台付坏	底部	G-5	Ⅲ	淡黄	淡黄	B	ナデ	ナデ	
	1345	高台付坏	底部	J-7	Ⅱ	灰白	灰	B	ナデ	ナデ	
	1346	高台付坏	底部	I-2	Ⅲ	灰黄	灰黄	B	ナデ	ナデ	

A：長石　B：石英　C：角閃石

挿図番号	報告番号	器種	部位	出土区	層	色調 内面	色調 外面	胎土	調整 内面	調整 外面	備考
125図	1347	高台付坏	底部	D-3	Ⅲ	灰	灰	B	ナデ	ナデ	
	1348	高台付坏	底部	G-5	Ⅱ	灰白	灰白	B	ナデ	ナデ	
	1349	高坏	胴部	H-5	Ⅱ	浅黄	灰	B	ナデ	ナデ	
	1350	青磁	口縁部	H-6	Ⅱ	オリーブ	オリーブ				目跡有り
	1351	甕	口縁部	I-6	Ⅲ	にぶい赤褐	にぶい褐		同心円	格子目	
	1352	甕	口縁部	G-10	Ⅲ	浅黄橙	浅黄橙	A.B	同心円	平行	
	1353	甕	胴部	I-6	Ⅱ	灰褐	にぶい褐	B	同心円	格子目	
	1354	甕	胴部	H-5	Ⅱ	にぶい褐	褐	C	同心円	平行	
	1355	甕	胴部	G-5	Ⅲ	灰	灰	B	同心円	格子目	
	1356	甕	胴部	G-11	Ⅱ	灰	黒褐	B	同心円	格子目	
	1357	甕	胴部	F-11	Ⅱ	浅黄橙	浅黄橙	A.B	平行，同心円	平行	
	1358	甕	胴部	G-11	Ⅱ	灰	黒褐	B	平行	平行	
	1359	甕	胴部	F-10	Ⅱ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	B	同心円	平行	
	1360	甕	胴部	H-5	Ⅱ	灰	暗褐	B	同心円	格子目	
	1361	甕	胴部	L-9	Ⅱ	灰黄	灰黄	B	平行，同心円	格子目	
	1362	甕	胴部	L-9	Ⅱ	にぶい黄褐	褐	B	平行	平行	
	1363	甕	胴部	F-10	Ⅱ	灰黄	褐灰	B	平行，同心円	平行	
	1364	甕	胴部	F-10	Ⅱ	暗灰黄	暗赤褐	B	平行	格子目	
	1365	甕	胴部	G-11	Ⅱ	灰	灰	B	平行	平行	
	1366	甕	胴部	G-11	Ⅱ	にぶい褐	にぶい赤褐	B	平行	平行	
	1367	甕	胴部	K-9	Ⅱ	にぶい褐	にぶい赤褐	B	平行	平行	
	1368	甕	胴部	K-8	Ⅱ	黄灰	暗赤褐	B	平行	平行	
126図	1369	甕	胴部	G-5	Ⅱ	灰白	灰オリーブ	B	同心円	格子目	
	1370	甕	胴部	G-5	Ⅱ	灰	暗青灰	B	同心円	格子目	
	1371	甕	胴部	G-5	Ⅱ	青灰	褐灰	B	平行	格子目	
	1372	甕	胴部	G-5	Ⅱ	にぶい褐	にぶい黄褐	B	平行	平行	
	1373	甕	胴部	K-8	Ⅱ	灰	灰オリーブ	B	平行	平行	釉薬
	1374	甕	胴部	H-5	Ⅱ	明オリーブ灰	オリーブ灰	B	平行	格子目	
	1375	甕	胴部	H-6	Ⅱ	にぶい黄褐	褐灰	B	平行	格子目	
	1376	甕	胴部	K-8	Ⅱ	にぶい褐	灰オリーブ	B	平行	格子目	
	1377	甕	胴部	I-6	Ⅱ	灰	灰	B	平行	格子目	
	1378	壺	口縁部～首	ナシ		明黄褐	浅黄	B	ナデ	ナデ	
	1379	壺	口縁部	G-5	Ⅱ	灰	灰	A.B.C	ナデ	ナデ	
	1380	壺	頸部	G-11	Ⅱ	明黄褐	灰黄	A.B	ナデ	ヘラケズリ	
	1381	壺	頸部	G-11	Ⅱ	灰	にぶい黄橙	B	布巻小石	格子目	
	1382	壺	頸部	G-6	Ⅲ	暗青灰	暗青灰	B	同心円	格子目	
	1383	壺	胴部	G-11	Ⅱ	浅黄	灰白	B	小石	格子目	
	1384	壺	胴部	G-11	Ⅱ	にぶい橙	灰黄	A.B	ナデ	格子目	
	1385	壺	胴部	L-9	Ⅱ	明黄褐	灰白	B	小石	平行	
	1386	壺	胴部	K-8	Ⅱ	褐灰	暗灰黄	B	布巻小石，ナデ	平行	釉薬
	1387	壺	胴部	F-10	Ⅱ	にぶい黄	灰白	B	布巻小石	平行	
	1388	壺	胴部	K-8	Ⅱ	灰	灰オリーブ	B	ナデ（小石）	平行	
	1389	壺	胴部	F-11	Ⅱ	黄褐	にぶい赤褐	B	ナデ	格子目	
	1390	壺	胴部	K-8	Ⅱ	灰	灰黄褐	B	ナデ	平行	
	1391	壺	底部	G-11	Ⅱ	にぶい黄	褐灰	B.C	布巻小石，ナデ	平行	
	1392	壺	底部	K-9	Ⅱ	灰黄褐	灰白	B			
	1393	壺	底部	ナシ		灰	灰	B			

第Ⅵ章　まとめにかえて

1　縄文時代

縄文時代早期から晩期に至るまで，長期間に渡っている。遺跡の山頂部は縄文時代早期，尾根部から谷部に掛けては縄文時代晩期まで生活が営まれていたことが分かった。特に縄文時代早期の遺構，遺物量と縄文時代晩期の遺物量は顕著である。

⑴　縄文時代早期

遺跡の山稜部の山頂付近を中心に，遺構・遺物が広がりをみせる。

ア　遺構

遺構は，集石が８基検出されたが，遺跡の小高い山稜の山頂部に集中しており，山頂部の西側に５基，南側に２基，遺跡西側の谷部に１基ずつ検出された。南側から検出された集石遺構は，いずれも周辺には石坂式土器などの縄文時代早期の土器を多数伴っている。

イ　遺物

早期の土器は，Ⅰ類からⅩ類まで10類に分類されたが，Ⅳ類土器の出土量は顕著である。

Ⅰ類は，志風頭タイプといわれる土器に類するものである。南さつま市志風頭遺跡を標識遺跡として志風頭式土器とする意見[註1]もあるが，鹿児島市松元町前原遺跡においてこのタイプの土器が数多く出土しており，今後の類例資料の増加と研究を待ちたい。Ⅱ類は，指宿市小牧３Ａ遺跡を標識とする小牧３Ａ式土器に類する土器である[註2]。Ⅲ類は，吉田式土器に類する土器である。胴部に貝殻押引文を施すものをこれに分類した。Ⅳ類は，石坂式土器に類する土器である。193点を掲載したが，本遺跡において最大の出土量である。Ⅴ類は，中原式土器，Ⅵ類は，下剥峯式土器に類する土器である。Ⅶ類は，桑ノ丸式土器に類する土器である。Ⅷ類は，押型文土器。Ⅸ類は，変形撚糸文土器。Ⅹ類は塞ノ神Ａｂ式土器に類する土器である。

⑵　縄文時代前期・中期・後期

前期から後期にかけての遺構は検出できなかったが，土器は，Ⅺ・Ⅻ類を縄文時代前期，ⅩⅢ・ⅩⅣ類は縄文時代中期，ⅩⅤ類は縄文時代後期のⅪ類からⅩⅢ類の５類に分類された。

Ⅺ類は曽畑式土器。Ⅻ類は深浦式土器。ⅩⅢ類土器は船元式土器，ⅩⅣ類土器は春日式土器に類する土器である。ⅩⅤ類は指宿式土器に類する。

⑶　縄文時代晩期

遺跡の山頂部から下った尾根部から谷部にかけてその遺構や遺物の広がりがみられる。

ア　遺構

遺構は，集石遺構が１基，集積遺構が２基，埋設土器が２基検出されている。土器や石器の出土量からすると，遺構の検出量は少ない。

イ　遺物

土器は，粗製深鉢・粗製浅鉢・精製浅鉢をまとめてⅩⅥ類土器とした。これをａ・ｂ・ｃに小分類し，ⅩⅥ類土器は，ⅩⅥａ類を入佐式土器，ⅩⅥｂ類を黒川式土器，ⅩⅥｃ類を南さつま市の干河原遺跡を標識とする干河原（ひこばる）段階の土器に分類される。ⅩⅥｃ類の土器は，東和幸氏が，黒川式土器の最終段階に位置付けられる鹿児島の無刻目突帯文土器を「干河原段階」と設定したものによる[註3]。

石器は，打製石斧の検出量が顕著である。打製石斧は，掘り具としての使用が知られている[註4]が，首都大学東京，都市教育学部助教授山田昌久氏の指摘によると，頁岩製打製石斧の石鋤としての使用痕や磨滅の過程から，当時の製作直後から破棄までが分かることを指摘された。しかし，今回は時間的に他遺跡との比較を含めて検証はできなかった。また，その出土量や製作跡のないことや遺構の検出がないことから，想像をたくましくすると本遺跡が畠地を中心として活用されていたのではないかという示唆をいただけた。

石鏃は，検出地点が全て遺跡の山稜部の尾根部分に集中していることから，尾根部を狩猟場としていたことが推測できる。

このことから，縄文時代晩期は谷部は畠として利用したり，山の尾根部を狩猟場として利用

したりして生活していたのではないかと推測される。

2　弥生時代

弥生時代は，遺物の量は多くはないが中期を中心に遺構・遺物が出土している。遺構では小児用合口壺棺が検出された。壺棺の上壺が北部九州系の須玖Ⅱ式の全面丹塗りの広口壺で，下壺が中部九州系の黒髪Ⅱ式の壺という組合せである。須玖Ⅱ式土器は，須玖式特有の「分割ミガキ」が施されている。このミガキは真下からみると四角形状を呈するものである。また，頸部に施されている暗文の幅・傾き・揃い方も須玖式の典型的な特徴である。胴部の器壁の厚さが極めて薄く，胎土も精製土器である点なども南九州ではみられないものであることから北部九州からの搬入品の可能性が高いものである[註5]。下壺の黒髪Ⅱ式土器は，やや長胴ではあるが，きめの細かいハケ目調整・底部がやや凸レンズ状に膨らむ点など黒髪式の特徴を備えているものである。南九州で作られた可能性もあるが搬入品と考えられるものである。中期後半に北部九州と中九州からの搬入土器で，北部九州的な埋葬である甕棺（壺棺）葬が行なわれている点に注目したい。遺物は弥生時代前期の突帯文系の甕形土器（921～923），中期前半の入来Ⅱ式土器（924～931），黒髪Ⅰ式（939～943），中期中葉の吉ヶ崎式（932），中期後半では山ノ口式（948～950・963～969），黒髪Ⅱ式（944～955・961），須玖Ⅱ式（937・938）等がみられる。当地域は，黒髪式系の土器が多くみられる傾向にあり，西海岸添いの交流が頻繁にあったことが考えられているが，本遺跡でもそのことを裏付ける資料が多く出土している。石器も柱状片刃石器や片刃の磨製石斧及び打製石鎌が出土し，稲作農耕を裏付けるものである。

3　古墳時代

古墳時代では，竪穴住居跡８軒が検出されている。１～７号住居跡は傾斜面から西側へのびた平坦面に並ぶように検出されたが，8号住居跡だけは１軒だけ離れた緩傾斜地において検出されている。住居の形態をみると１号～４号・８号はほぼ方形であるが，５号・６号は不整形なもので，7号は張り出しをもつものである。

１号住居跡は，ベッド状の施設を有するもので形態的にはやや古いものと思われる。住居内土器についても，中津野式土器の新しいタイプとするか，中津野式の特徴を有したものとするかであるが，時期としては古墳時代前期前半の範疇で捉えられよう。

２号住居跡は，炭化材による^{14}C年代測定では，1510±40年（補正^{14}C年代1480±40）という数値が出ている。土器は笹貫式土器の範疇である。また，須恵器（須恵Ⅱ式）を伴っており６世紀代と思われる。

３号住居跡は，炭化材による^{14}C年代測定では，1430±40（補正^{14}C年代1420±40），1580±40（補正^{14}C年代1560±40）という数値が出ている。土器は２号住居跡同様笹貫式の範疇である。また，須恵器（須恵Ⅱ式）が伴っており６世紀代と思われる。

４号住居跡からは，多くの土器が出土している。土器は２・３号住居跡と同様笹貫式の範疇である。須恵器も坏・坏蓋等多く出土している。これらの須恵器は陶邑古窯跡のＭＴ15型式（Ⅱ－１）～ＴＫ10型式（Ⅱ－２）の特徴を有しており，6世紀前半代と思われる。

５号住居跡は，蓋や甕形土器の形状から１号住居跡と近い時期にあるものと思われる。

６号住居跡は，遺物が少なく時期判定が困難であるが，住居の形態から５号住居と近いものと思われる。

７号住居跡は，遺物が少なく形式判定ができる状況ではなかった。

８号住居跡は，須恵器は出土しないものの，土器は４号住居跡出土の甕形土器と似ており笹貫式である。

尾ヶ原遺跡の住居跡についてみると，１号・５号・６号の中津野式の新段階の時期と思われる[註6]一群と，２号・３号・４号・８号の笹貫式の時期と思われる一群に大きく２分される傾向がみられる。ただし３号と４号は同時に存在することはないと思われるほど近接しており，笹貫式の段階でも時間差はあるものと考えられる。２号・３号・４号の須恵

器についてみると，３号の坏がＭＴ15型式，２号・４号の坏・蓋はＴＫ10型式と思われるもので，３号が２号・４号よりやや古い段階のものと考えられる。全体的には中津野式と笹貫式との間にかなりの時間差がある点が問題ではあるが，隣接する吹上小中原遺跡の古墳時代の住居跡にＴＫ208型式（須恵Ｉ）を伴う東原式段階の住居があり，今後両遺跡の関連について検討する必要があろう。また，須恵器の供給元についてみると，大阪府陶邑と考えるのが妥当であろうが，近年九州内や四国等でも古墳時代の窯跡が発見されているため，その辺りも視野に入れておく必要があろう。特に熊本県植木町宇城産須恵器はＴＫ47型式（５世紀）にさかのぼる可能性があることや６世紀をとおして陶邑とは異なり大型化しない等の特徴があることがわかりはじめているということである。本遺跡の須恵器が宇城産である可能性は十分に考えられる[註7]。また，三辻利一による蛍光Ｘ線分析においても，陶邑の範疇のものと宇城東・宇城西の範疇のものがみられるということである。今後の検討課題として残される。

また，尾ヶ原遺跡においても，吹上小中原遺跡と同様広口口縁の丸底の甕形土器が多い特徴があるが，従来成川式にある脚台を有する甕形土器も存在する。このことは，肝属郡肝付町東田遺跡，後田山下遺跡および南さつま市金峰町上水流遺跡でも同様の状況がみられる。古墳時代の土師器様式が拠点的に導入された結果ではないかと考えられる。また，吹上小中原遺跡の４号住居跡（東原式）出土の甕は，内面ヘラケズリが顕著なものと，ヘラケズリが無いものとが存在するが，本遺跡では内面ヘラケズリの無いものばかりである。このことは，土師器様式の情報が時間と共に欠落していったことの現れではないだろうか。

４　古代・中世

古代・中世では，ピットが若干検出されたが建物としてとらえることは出来なかった。遺物は，古代の土師器・須恵器が多く出土している。土師器・須恵器は９世紀から10世紀を中心にしたものと思われる。また，１点ではあるが，越州窯の青磁碗が出土している点が注目される。農業開発総合センター遺跡群内で古代の遺構・遺物が出土しているのは，諏訪牟田遺跡の掘立柱建物跡，神原遺跡のＶ字溝等があげられるだけで意外と少ないようである。本遺跡では，遺構は無いものの遺物が多く，越州窯青磁碗が出土するなど貴重な資料が得られた。今後，諏訪牟田遺跡等の整理作業が進むことにより，本遺跡の性格も明らかにしたいものである。中世では，青磁等が数点出土したのみである。しかしながら，青磁の中には破片ではあるが，水注などの蓋と思われるものや，三足盤ではないかと思われる獣足部分が出土するなど，他ではみられない貴重な資料がある。獣足をもつ三足盤は，薩摩川内市の大島遺跡で出土しているくらいである[註8]。農業開発総合センター遺跡群内での中世の集落は，吹上小中原遺跡・諏訪牟田遺跡・馬塚松遺跡・宗円堀遺跡・市堀遺跡など少なからず存在するが，整理作業が進む段階で何らかの方向性を見い出したいものである。

参考文献

註１　上杉彰紀，2000年「調整方法から見た縄文早期貝殻文土器」南九州縄文通信№14南九州縄文研究会

註２　大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）「大中原遺跡」2000年３月　鹿児島県肝属郡根占町教育委員会

註３　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)「計志加里遺跡」2002年３月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

註４　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)「大坪遺跡」2005年３月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

註５　中園聡（鹿児島国際大学教授）による教示

註６　中村直子（鹿児島大学助教授）による教示

註７　橋本達也（鹿児島大学助教授）による教示

註８　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）「大島遺跡」2005年３月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

自然科学分析　　株式会社　古環境研究所

1　放射性炭素年代測定

⑴　試料と方法

試料は，№１が２号住居跡の炭化材，№２及び№３が３号住居跡の炭化材である。酸－アルカリ－酸洗浄で前処理を行い，調整は石墨調整である。加速器質量分析（ＡＭＳ）法で測定する。

⑵　測定結果は下表のとおりである。

試料名	^{14}C年代（年BP）	^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代
№１	1510±40	－26.8	1480±40	交点：CalAD　600 １σ：CalAD　550～630 ２σ：CalAD　530～650
№２	1430±40	－25.4	1420±40	交点：CalAD　640 １σ：CalAD　620～660 ２σ：CalAD　570～670
№３	1580±40	－26.5	1560±40	交点：CalAD　530 １σ：CalAD　430～550 ２σ：CalAD　410～600

⑶　考察

今試料の分析の結果，２号住居跡（№１）では，1480±40ｙＢＰ（２σの歴年代でＡＤ530～650年），３号住居跡（№２）では，1420±40ｙＢＰ（同じくＡＤ570～670年）３号住居跡（№３）では1560±40ｙＢＰ（同じくＡＤ410～600年）の年代値が得られた。３号住居跡（№３）では暦年代の年代幅が大きくなっているが，これは該当期の暦年代較正曲線が長期間にわたって停滞しているためである。

文献　Stuiver,M.,et.al.,(1998),INTCAL98 Radiocarb on Age Calibration,Radiocarbon, 40(3)
中村俊夫（1999）放射性炭素法，考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1－36

2　樹種同定

試料は，２号・３号住居跡から出土した３点の炭化材である。試料を割折して新鮮な基本的断面（横断面，放射断面，接線断面）を作製し，落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。その結果，２号住居跡（№１）はヤマツバキ（Camellia Japonica Linn. ツバキ科）。３号住居跡（№２・№３）はクリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科）である。

文献　佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20－48
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49－100
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土製品総覧，雄山閣，296ｐ

3　植物珪酸体分析

試料は２号住居跡と８号住居跡，及び弥生時代の合口壺棺から採取された13点である。

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，①試料を105°Ｃで24時間乾燥　②試料約１ｇに直径40㎛以下のガラスビーズを約0.02ｇ添加　③電気炉灰化法による脱有機物処理　④超音波水中照射による分散　⑤沈定法による20㎛以下の微粒子除去　⑥封入材（オイキット）中に分散してプレパラート作成。

分析結果

⑴　２号住居跡の埋土・床面直上・床面及び埋土中の焼土について分析した。その結果，床面では樹木のクスノキ科が多量検出され，ススキ属型・ウシクサ族Ａ・メダケ節型・ミヤコザサ節型及びブナ科（シイ属）なども検出された。床面直上でも，おおむね同様の結果であるが，ススキ属型が増加しており，ヨシ属・ネザサ節型・マンサク科（イスノキ属）も出現している。埋土では，ススキ属型がさらに増加しており，ブナ科（アカガシ亜属）やアワブキ科も出現している。埋土中の焼土では，ススキ属型・ウシクサ族Ａ・クスノキ科が多量に検出され，キビ族型・ネザサ節型・クマザサ属型・ミヤコザサ節型・ブナ科（シイ属）なども検出された。これは，埋土の分析結果と類似している。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから，少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。なお，すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく，落葉樹では形成されないものも多い。

⑵　８号住居跡の埋土・床面直上・床面について分析を行なった。その結果，床面では樹木のブナ科（シイ属）やクスノキ科が比較的多量に検出され，キビ族型・ススキ属型・ウシクサ族Ａ・メダケ節型・ネザサ節型・クマザサ属型・ミヤコザサ節型及びマンサク科（イスノキ属）なども検出された。

床面直上及び埋土でも，おおむね同様の結果であるが，埋土ではヨシ属やアワブキ科も出現している。

⑶　合口壺棺の上壺内部の土壌・下壺内の土壌・土器外の土壌について分析を行なった。その結果，ほとんどの試料から樹木のブナ科（シイ属）・クスノキ科・マンサク科（イスノキ属）が多量に検出された。また，イネ科ではススキ属型やウシクサ族Ａが比較的多く検出され，キビ族型・メダケ節型・ネザサ節型なども検出された。土器外の土壌でも同様の結果であり，植物珪酸体の組成や密度に特に大きな差異は認められなかった。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境

⑴　２号住居跡の埋没当時はススキ属やチガヤ属を主体としたメダケ属（メダケ節やネザサ節）なども生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ，周辺にはクスノキ科やブナ科（シイ属）など生育する照葉樹林が分布していたと推定される。２号住居跡の床面直上では少量ながらヨシ属が認められた。遺跡の立地から住居付近に湿地性のヨシ属が生育していたことは考えにくいことから，このヨシ属については住居の屋根材や敷物などに利用されていたものに由来する可能性も考えられる。今回の分析では，イネ科栽培植物（イネ・ムギ類・ヒエ・アワ・キビ等）に由来する植物珪酸体の検出が期待されたが，これらの植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。

⑵　８号住居跡の埋没当時も２号住居跡とおおむね同様であったと考えられるが，ススキ属やチガヤ属の分布は比較的少なかったと推定される。なお，ここでも少量ながらヨシ属が認められている。

⑶　合口壺棺の内部土壌の分析結果は，土器外の土壌分析と同様であり，特に特徴は認められなかった。当時の調査区周辺は，ススキ属やチガヤ属・キビ族・メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する比較的乾燥した開かれた環境であったと考えられ，遺跡周辺にはブナ科（シイ属）・クスノキ科・マンサク科（イスノキ科）等が生育する照葉樹林が分布していたことが推定される。

文献　杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体，富士竹類植物園報告第31号
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史第四紀研究38(2)
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）考古学と植物学　同成社
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－考古学と自然科学９
室井綽（1969）竹・笹の話－よみもの植物記－北隆館

４　リン・カルシウム分析

壺棺の上壺および下壺内部の土壌と土器外の土壌について分析を行なった。分析方法はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システムを用いて，元素の同定及びフェンダメンタルパラメータ法による定量分析を行なった。試料の処理法は①試料を絶乾　②メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕　③試料をビニール製リング枠に入れ，圧力15ｔ／㎠でプレスして錠剤試料を作成　④測定時間300秒，照射径20㎜，電圧30KeV，試料室内真空の条件で測定。

一般に，未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度，耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく，目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため，比較試料（遺構・遺物外の試料）との対比を行なう必要がある。

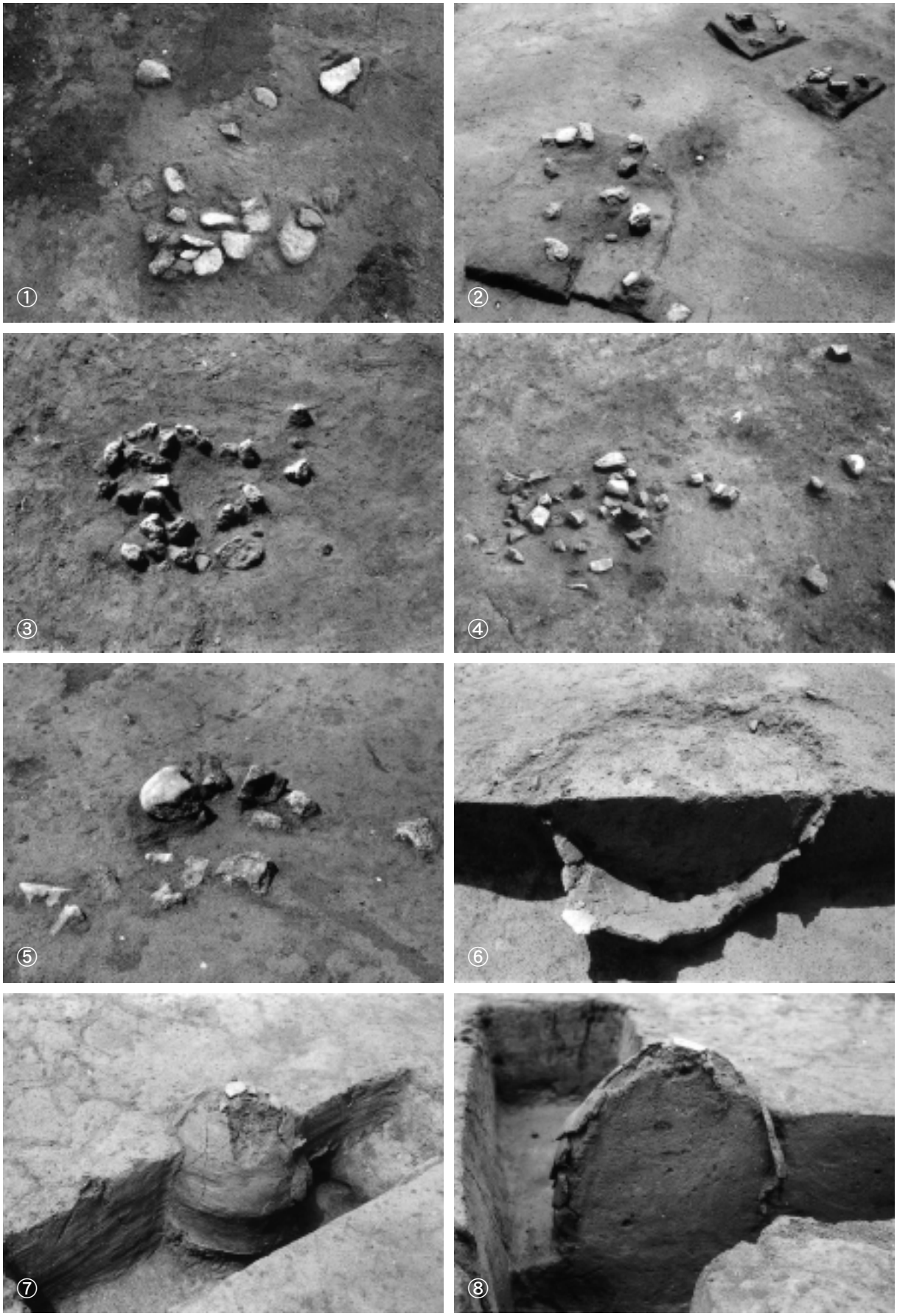
土器内の土壌におけるリン酸含量は，1.11～1.25%（平均1.16%）と高い値である。ただし，土器外の土壌でも1.06～1.16%（平均1.11%）と高い値であり，両者の間に明瞭な差異は認められない。また，カルシウム含量も土器内では2.72～3.11%（平均2.98%）であり，土器外の2.43～3.15（平均2.79%）と比較して明瞭な差異は認められない。

以上のことから合口壺棺の内部には，リン酸やカルシウムを多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられるが，土器外の比較試料との間に明瞭な差異が認められないことや，地表面から比較的浅いことから，後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。

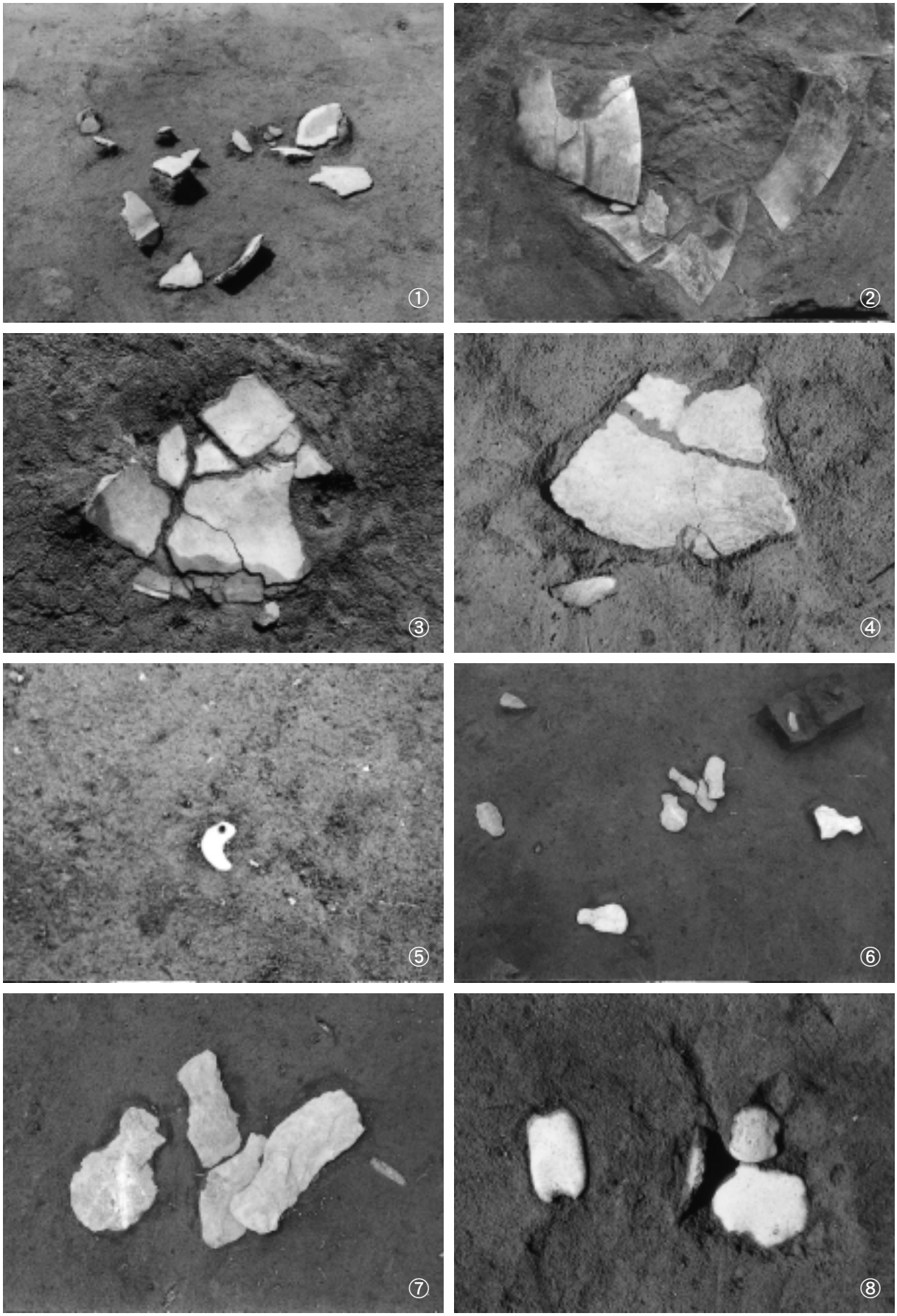
文献　竹迫紘（1993）リン分析法，日本第四紀研究会編，四紀試料科学分析法２，研究対象別分析法，東京大学出版会，ｐ38～45

①遺跡近景（東から）②遺跡近景（南から）③～⑤１～３号集石遺構

図版2

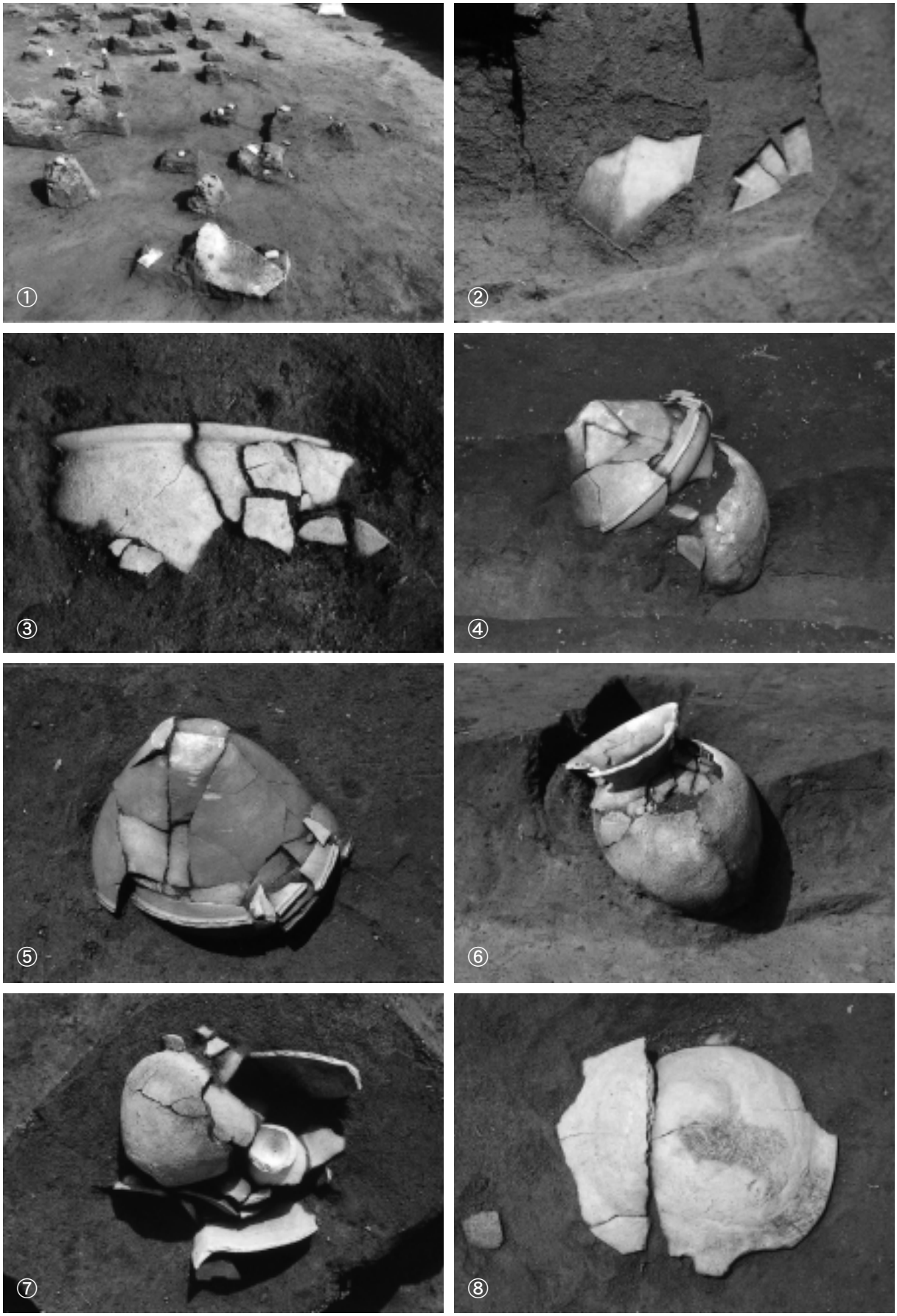


①～④４～７号集石遺構　⑤縄文時代晩期集石遺構　⑥１号埋没土器　⑦・⑧２号埋没土器

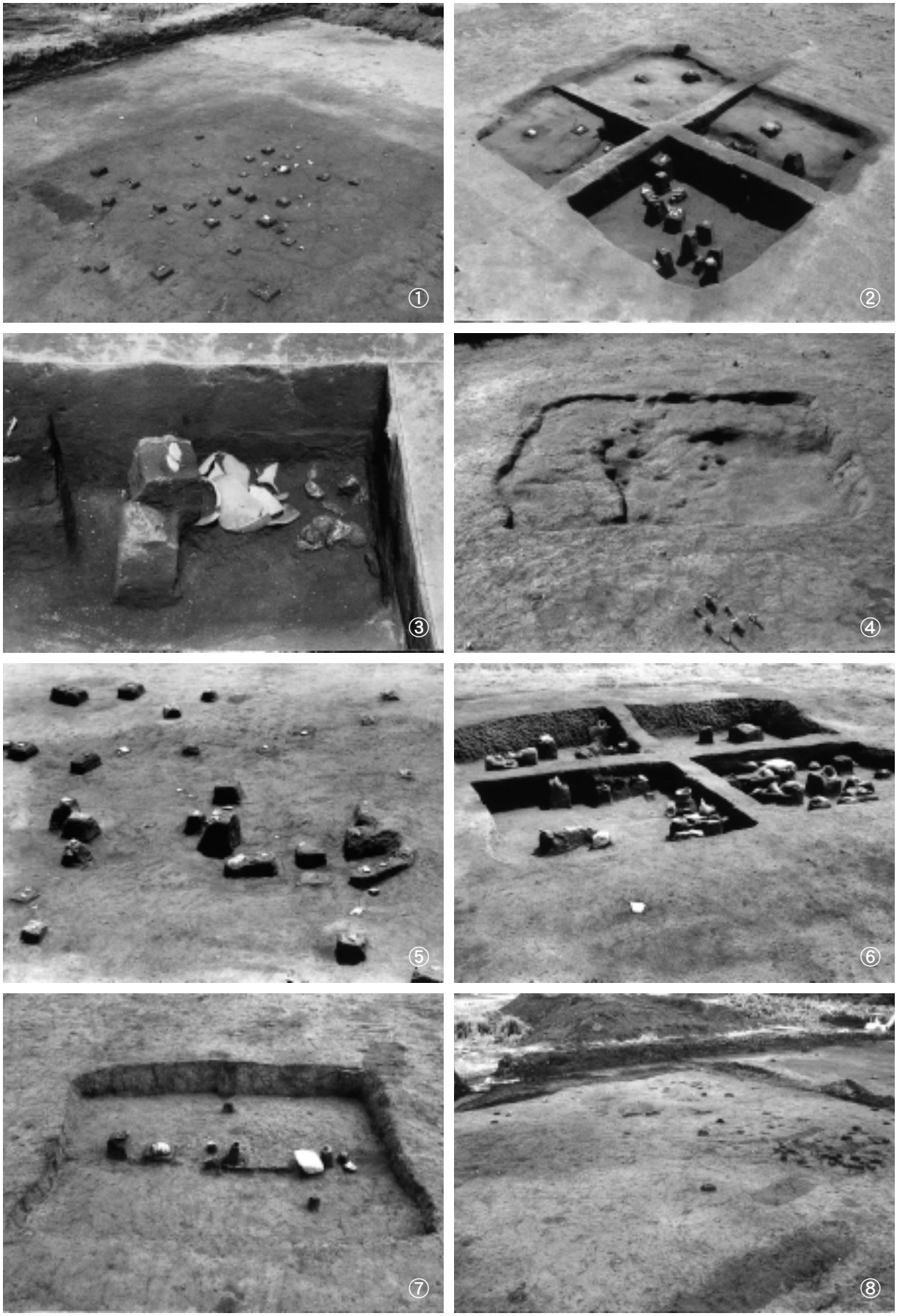


①～④縄文晩期土器出土状況　⑤縄文晩期勾玉出土状況
⑥～⑦縄文晩期石斧出土状況　⑧縄文晩期石錘出土状況

図版4

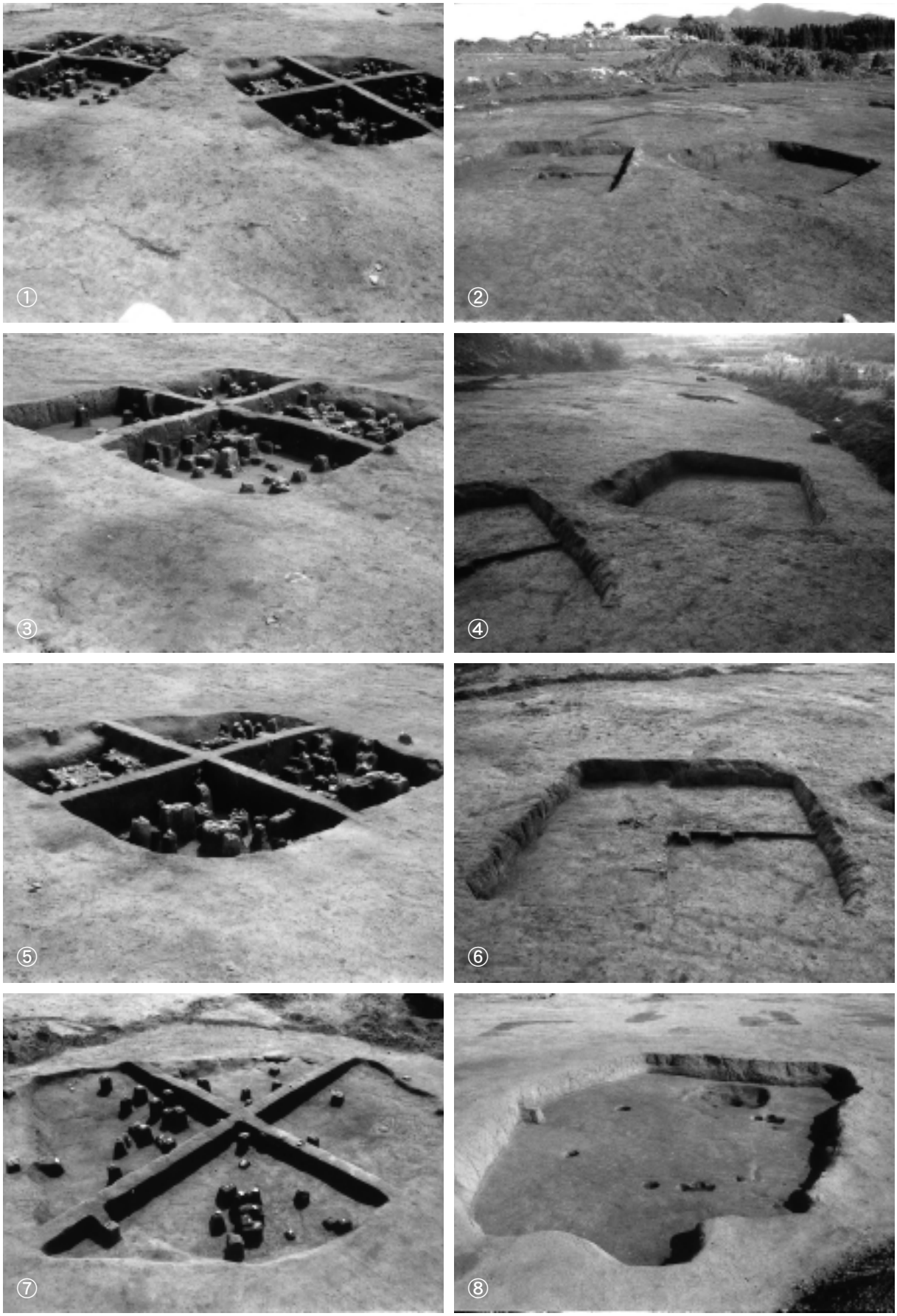


①・②縄文時代晩期遺物出土状況　③弥生土器出土状況　④小児用壺棺検出状況　⑤小児用壺棺検出状況（上壺）
⑥小児用壺棺検出状況（下壺）　⑦弥生土器出土状況　⑧古墳時代蓋形土器出土状況

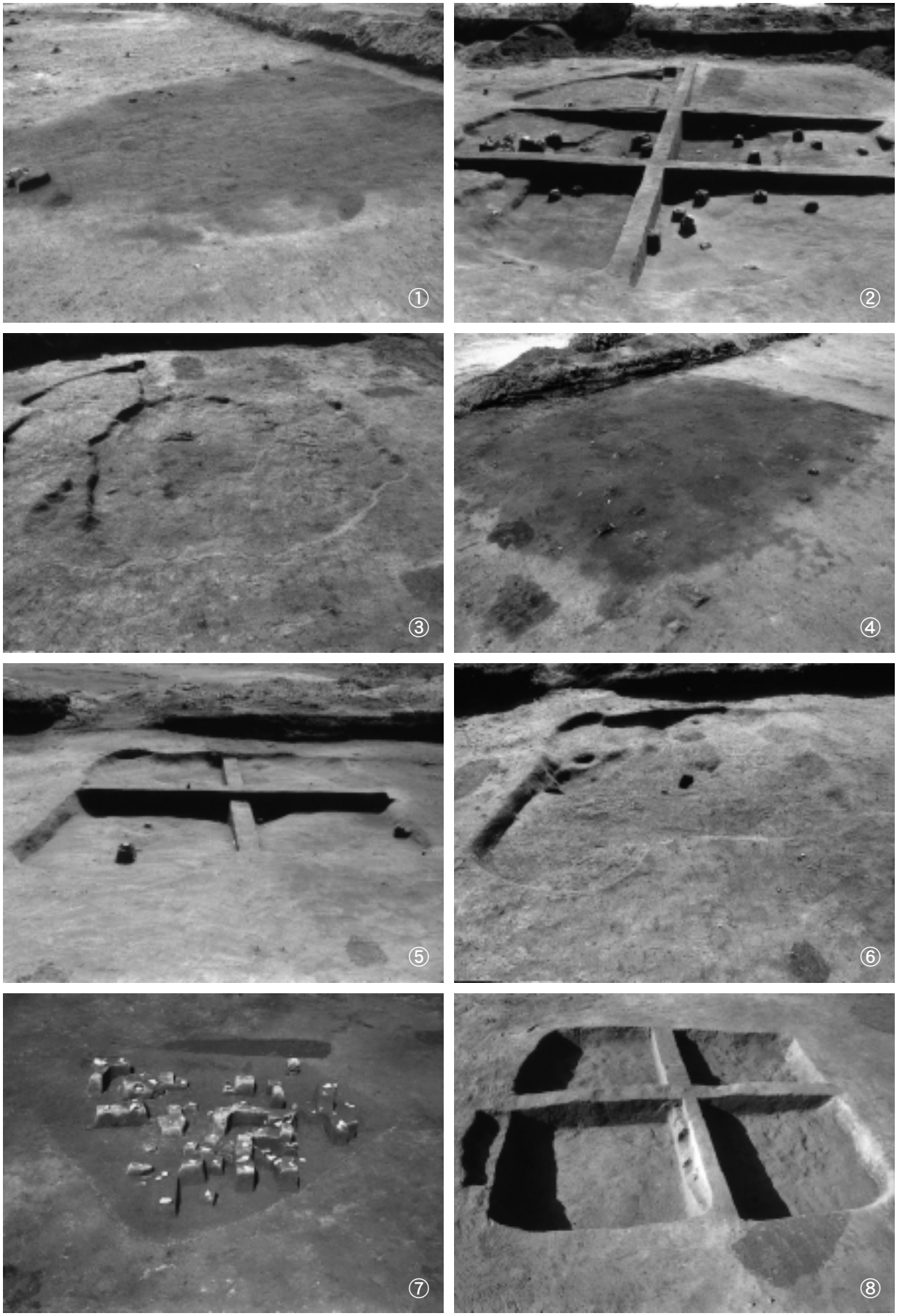


①1号住居跡検出状況　②1号住居跡遺物出土状況　③1号住居跡土器出土状況　④1号住居跡完掘状況
⑤2号住居跡検出状況　⑥2号住居跡遺物出土状況　⑦2号住居跡完掘状況　⑧3号・4号住居跡検出状況

図版6

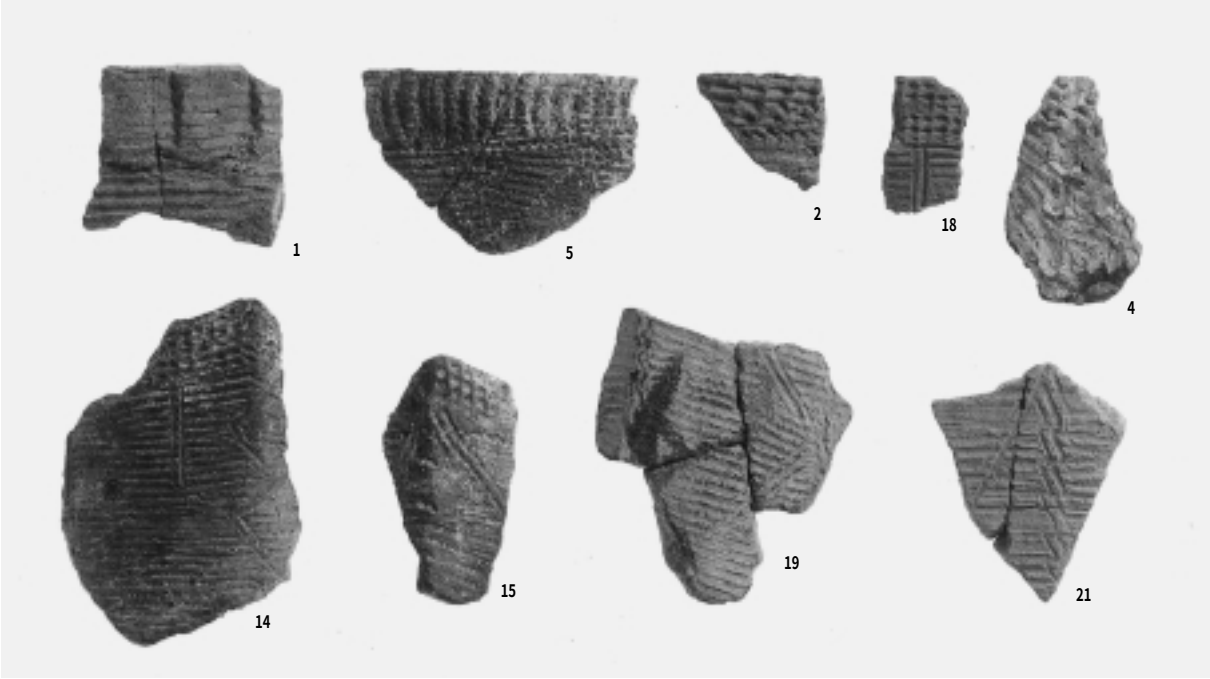


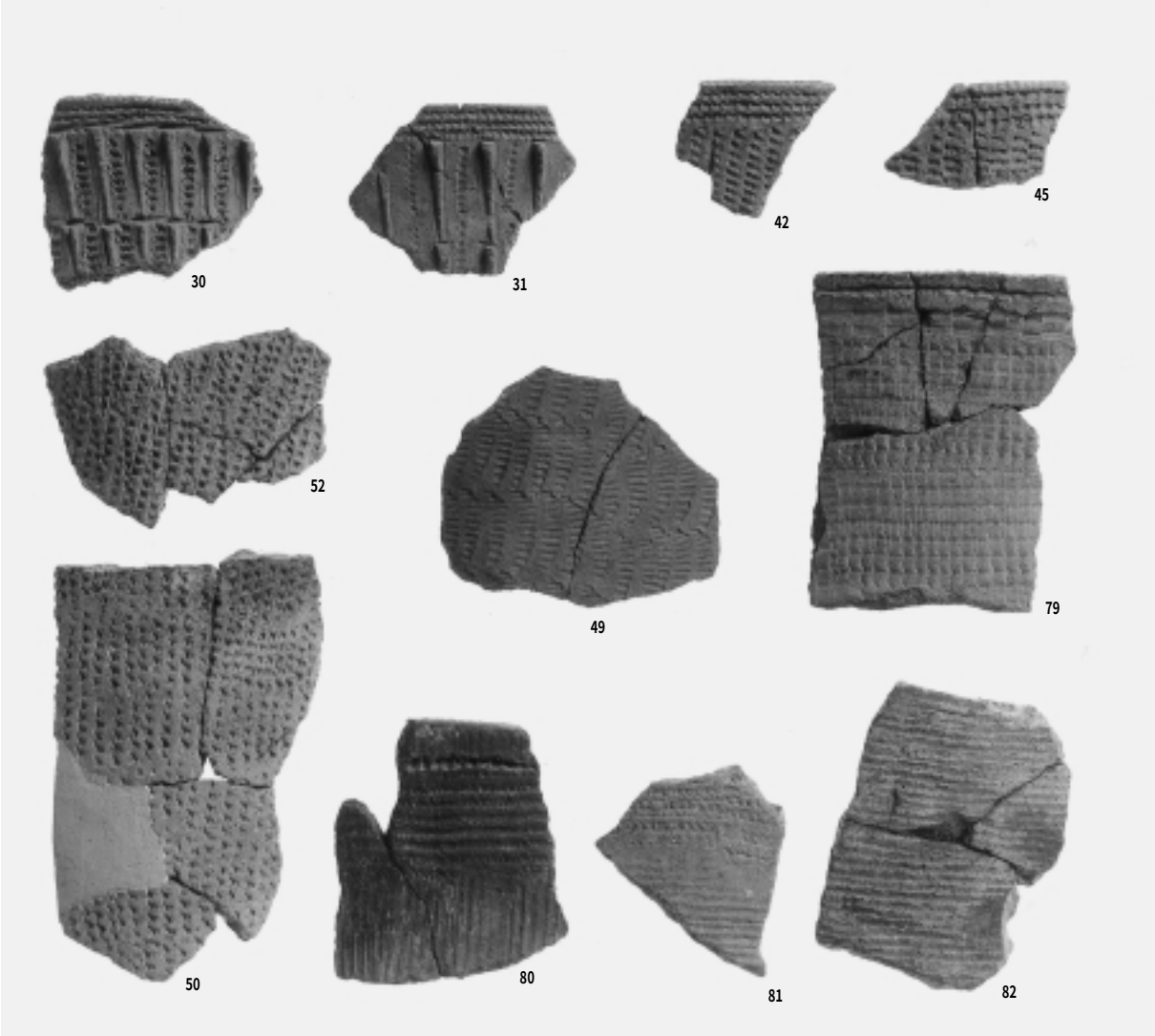
①3号・4号住居跡遺物出土状況　②3号・4号住居跡完掘状況　③3号住居跡土器出土状況　④3号住居跡完掘状況
⑤4号住居跡土器出土状況　⑥4号住居跡完掘状況　⑦5号住居跡土器出土状況　⑧5号住居跡完掘状況



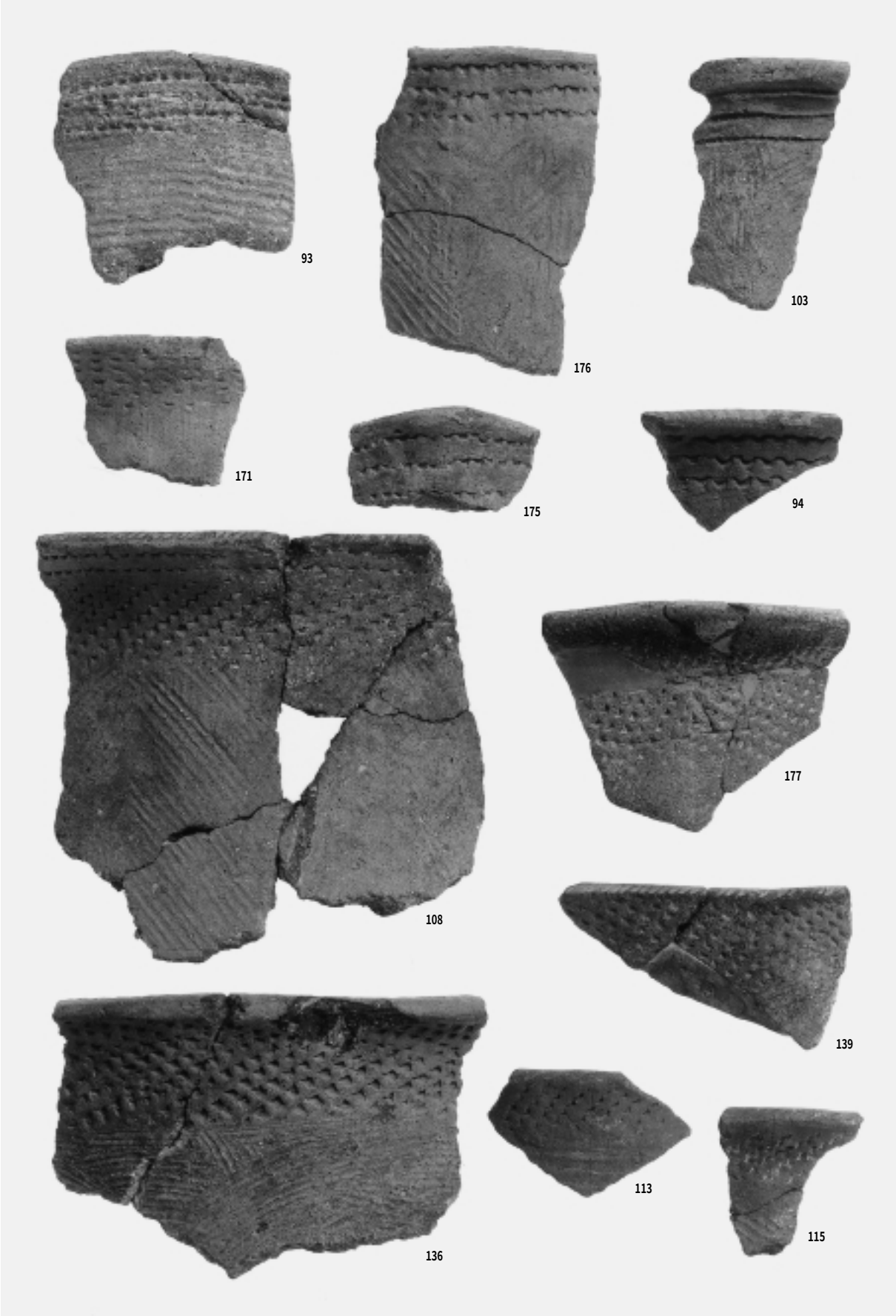
①6号住居跡検出状況　②6号住居跡遺物出土状況　③6号住居跡完掘状況　④7号住居跡検出状況
⑤7号住居跡土器出土状況　⑥7号住居跡完掘状況　⑦8号住居跡土器出土状況　⑧8号住居跡完掘状況

図版8





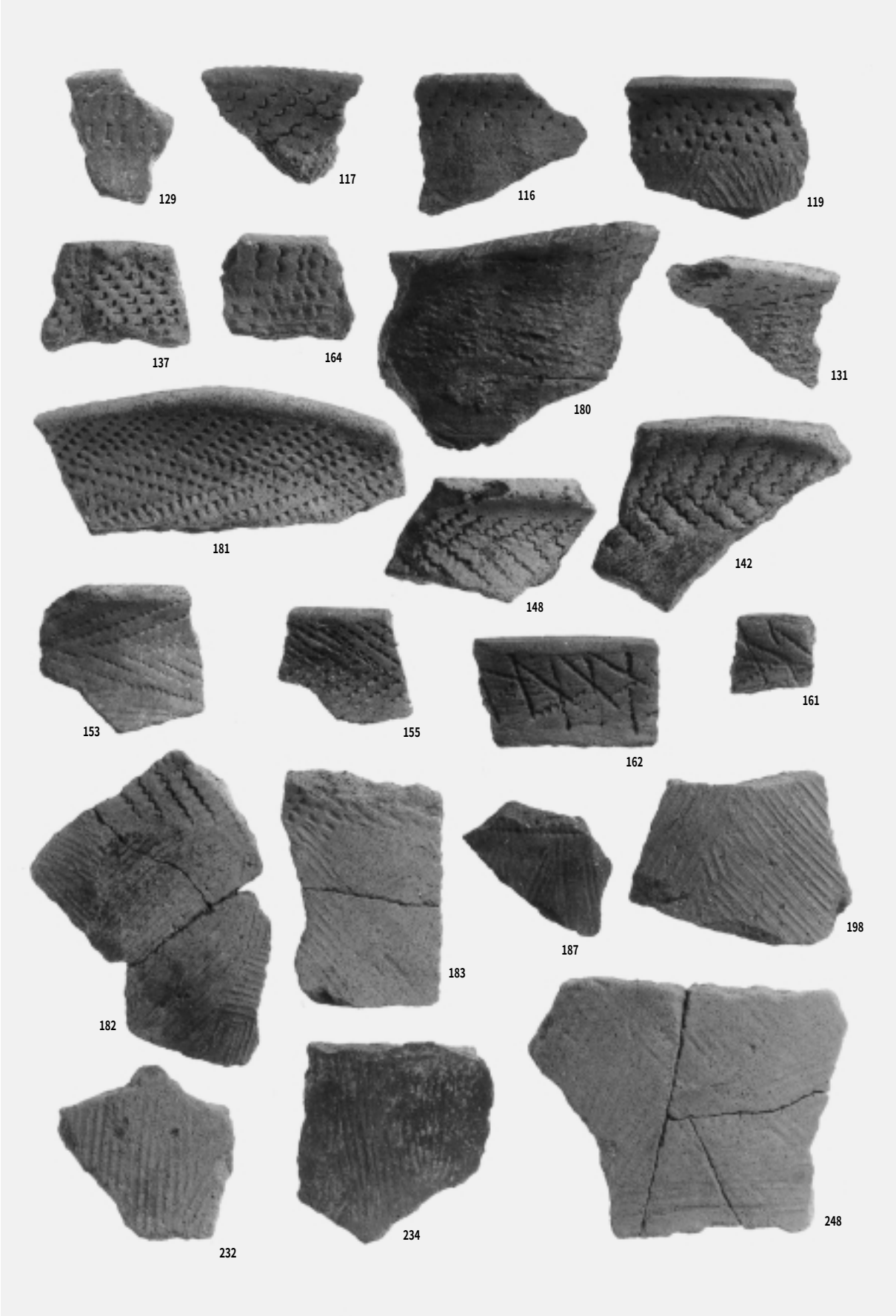
Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類土器



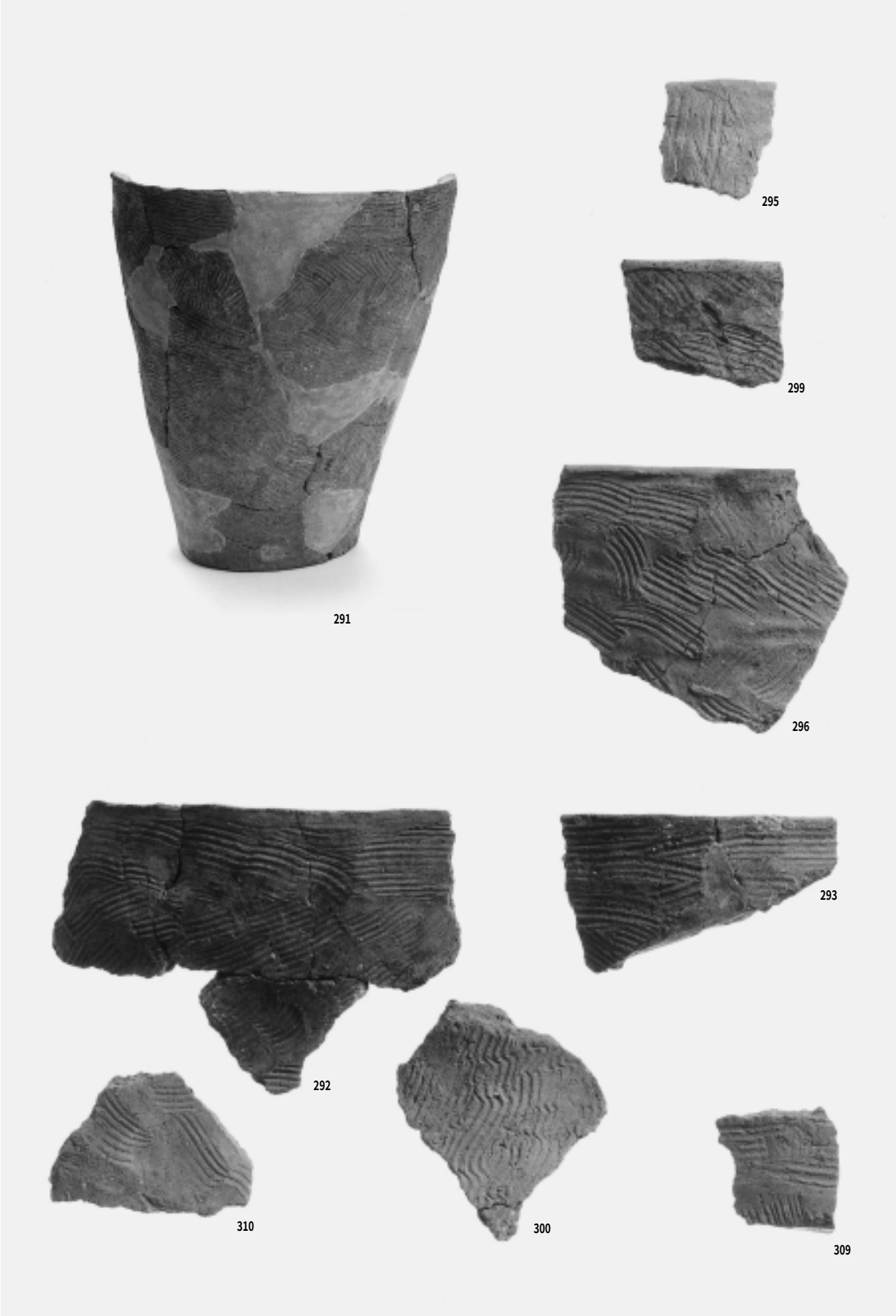
図版９　Ⅳ類土器①

写　真　図　版

図版10

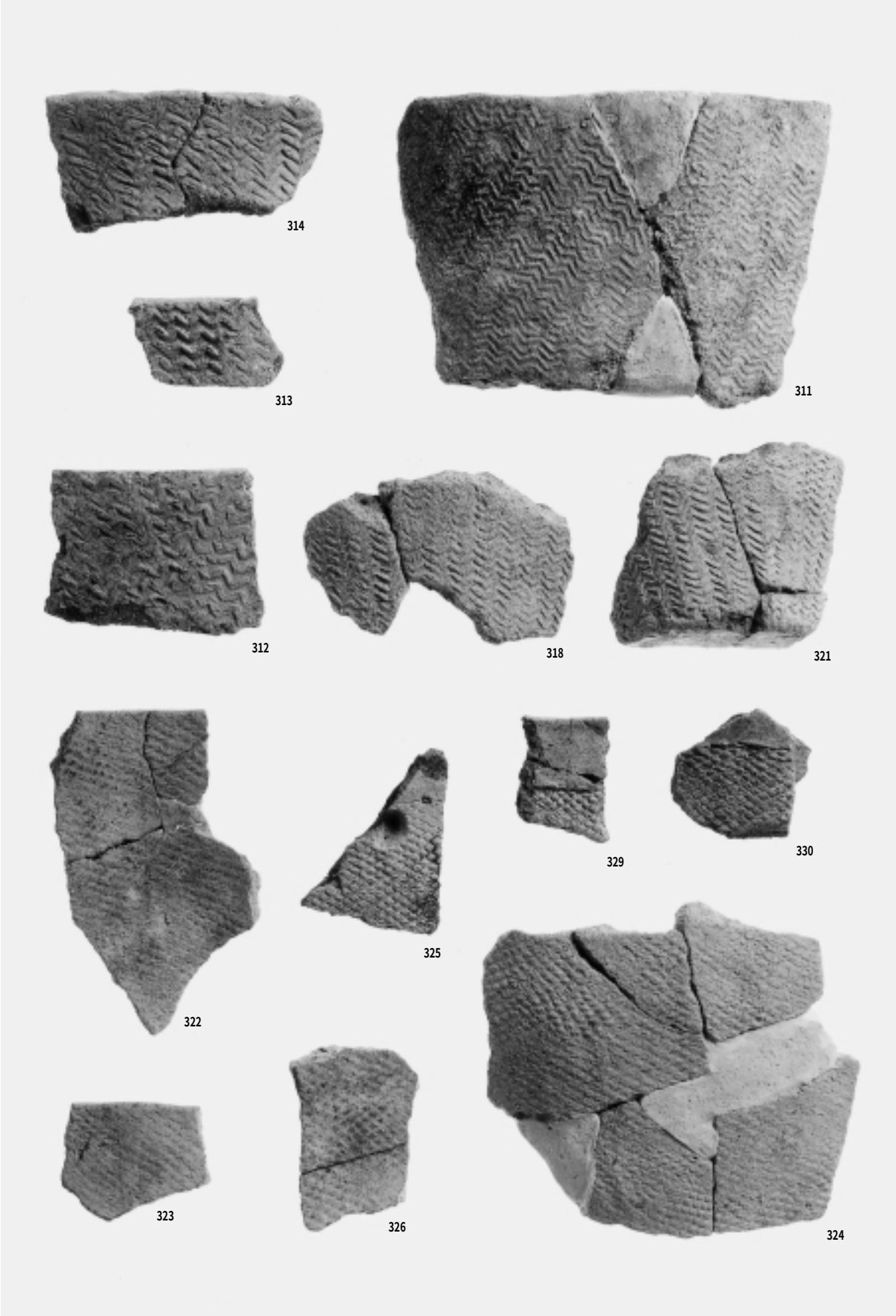

129
117
116
119
137
164
180
131
181
148
142
153
155
162
161
182
183
187
198
232
234
248

Ⅳ類土器②

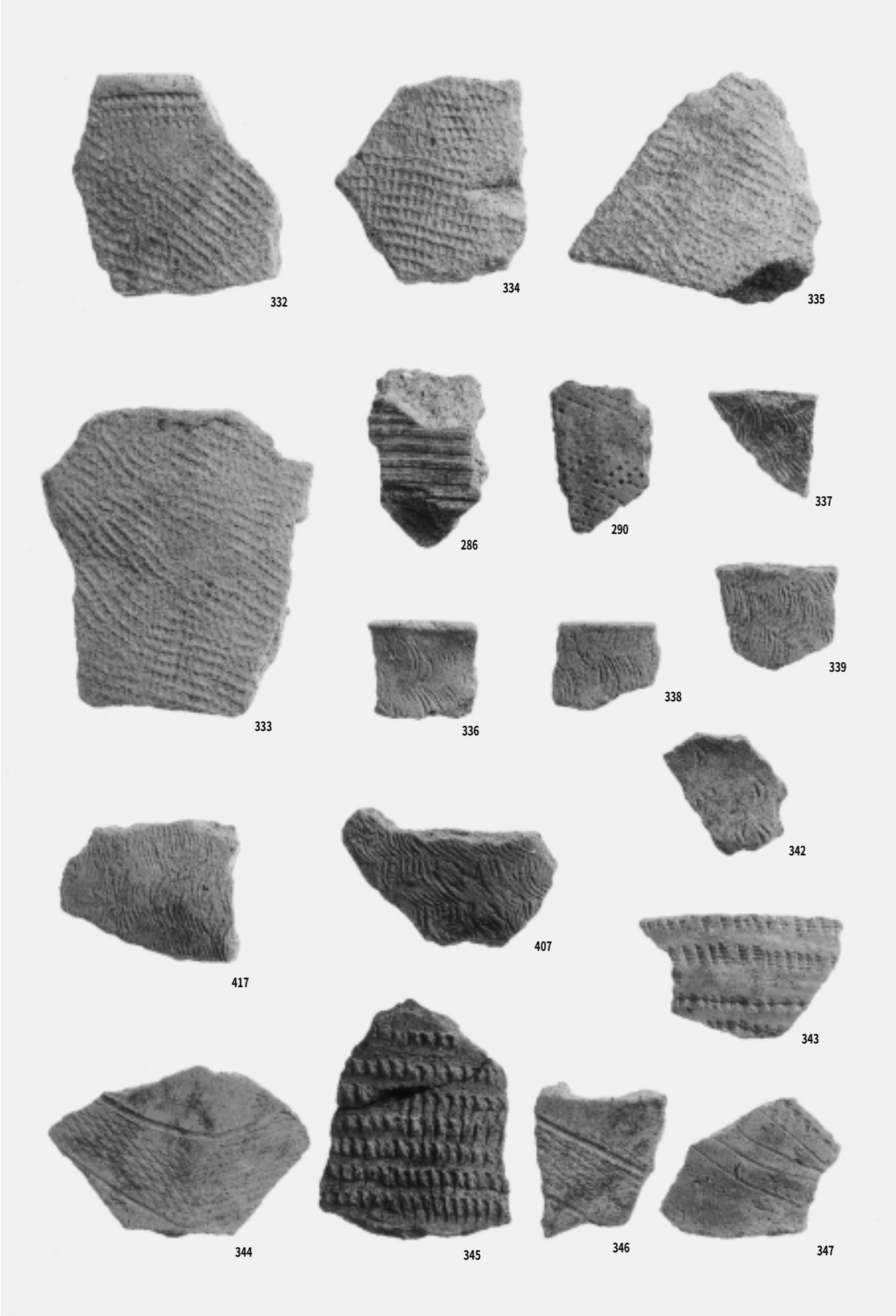


Ⅶ類土器

図版12

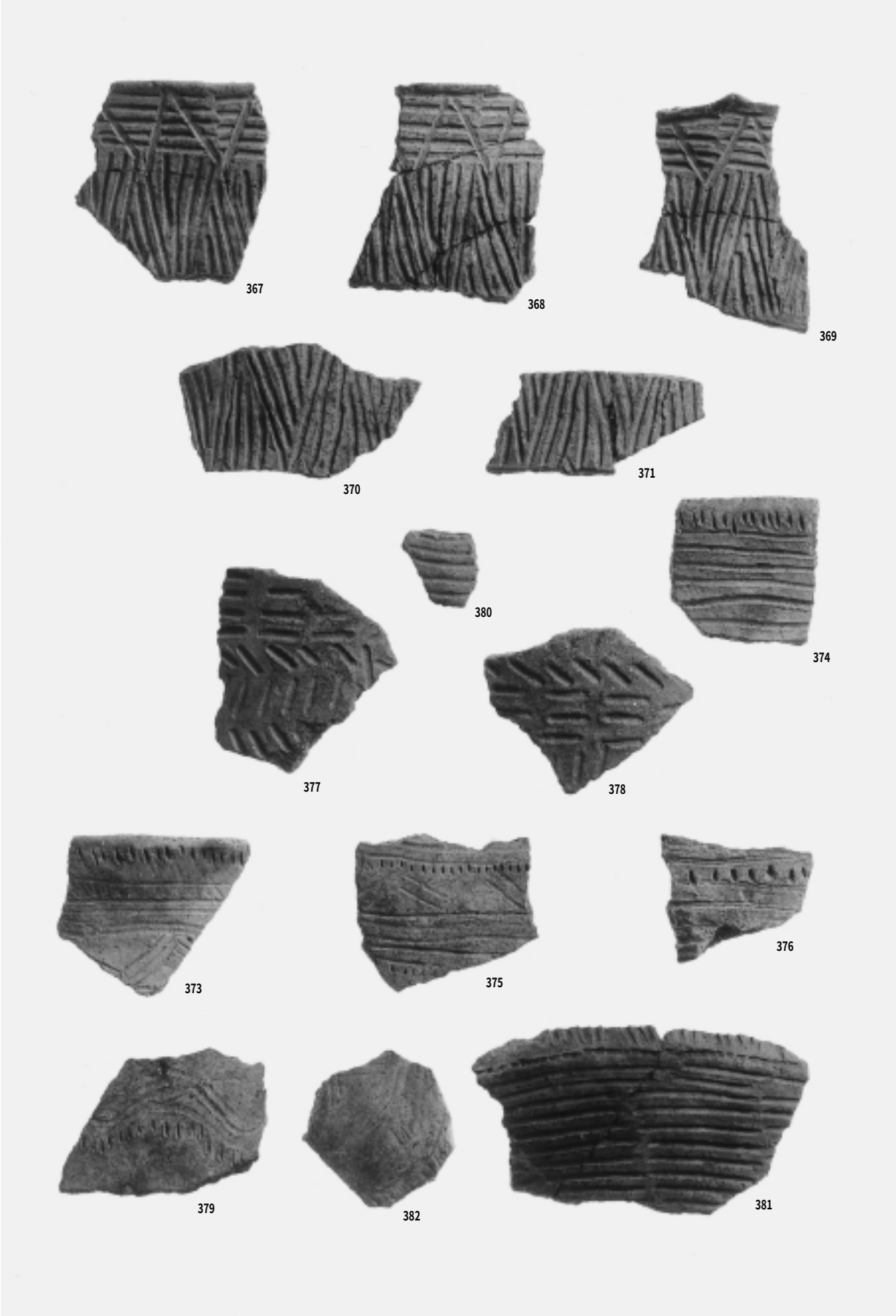


Ⅷ類土器

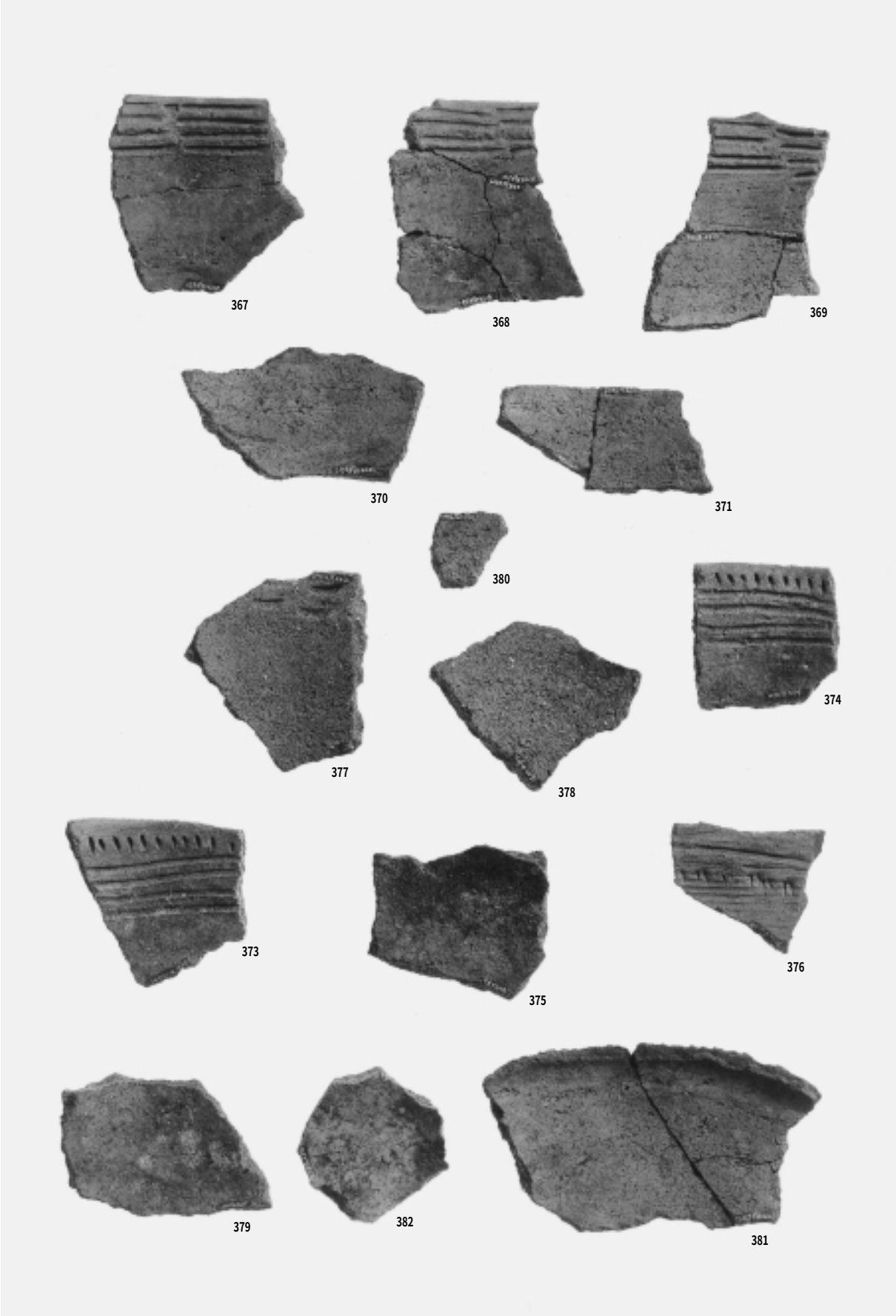


Ⅷ類・Ⅴ類・Ⅵ類・Ⅸ類・Ⅹ類土器

図版14

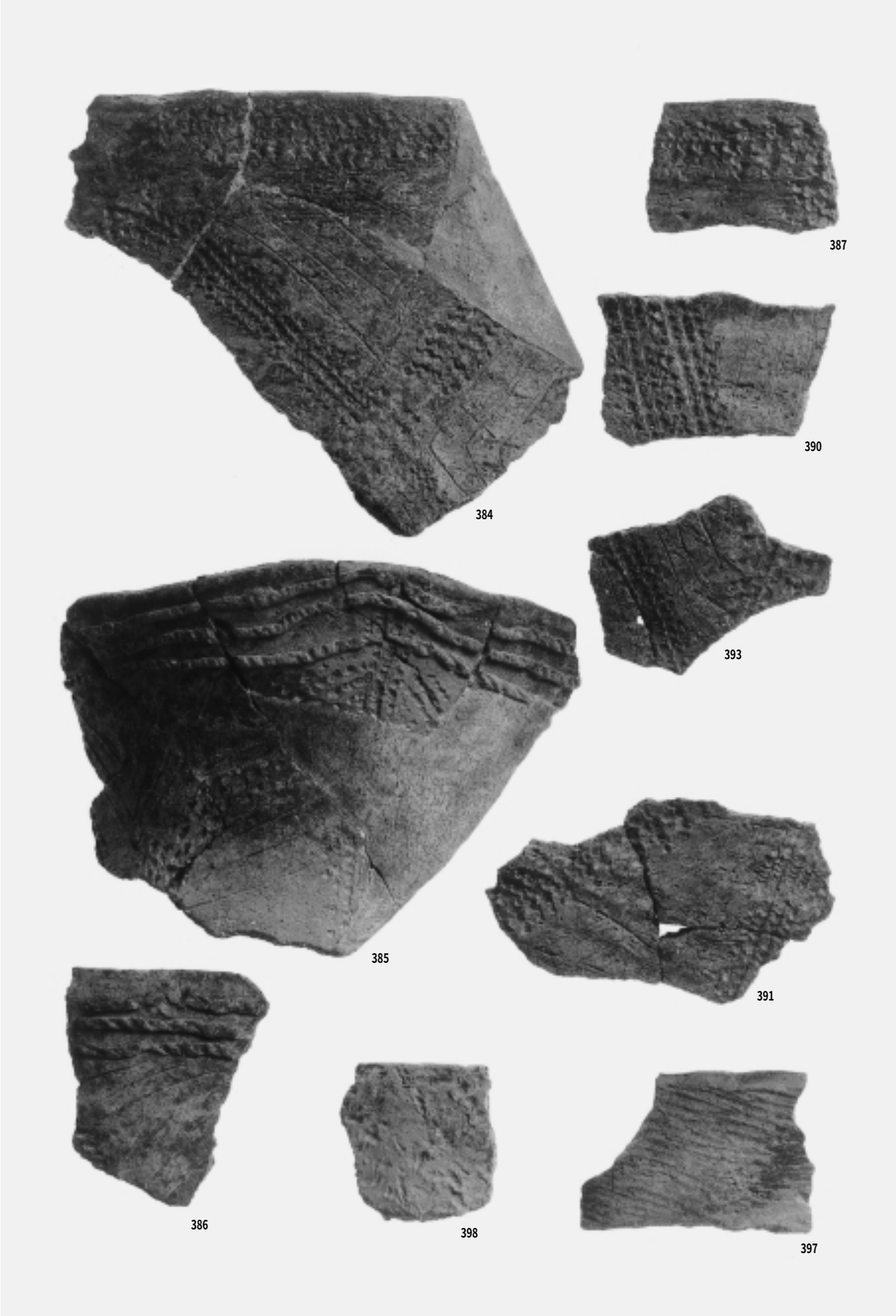


XI 類土器（表）

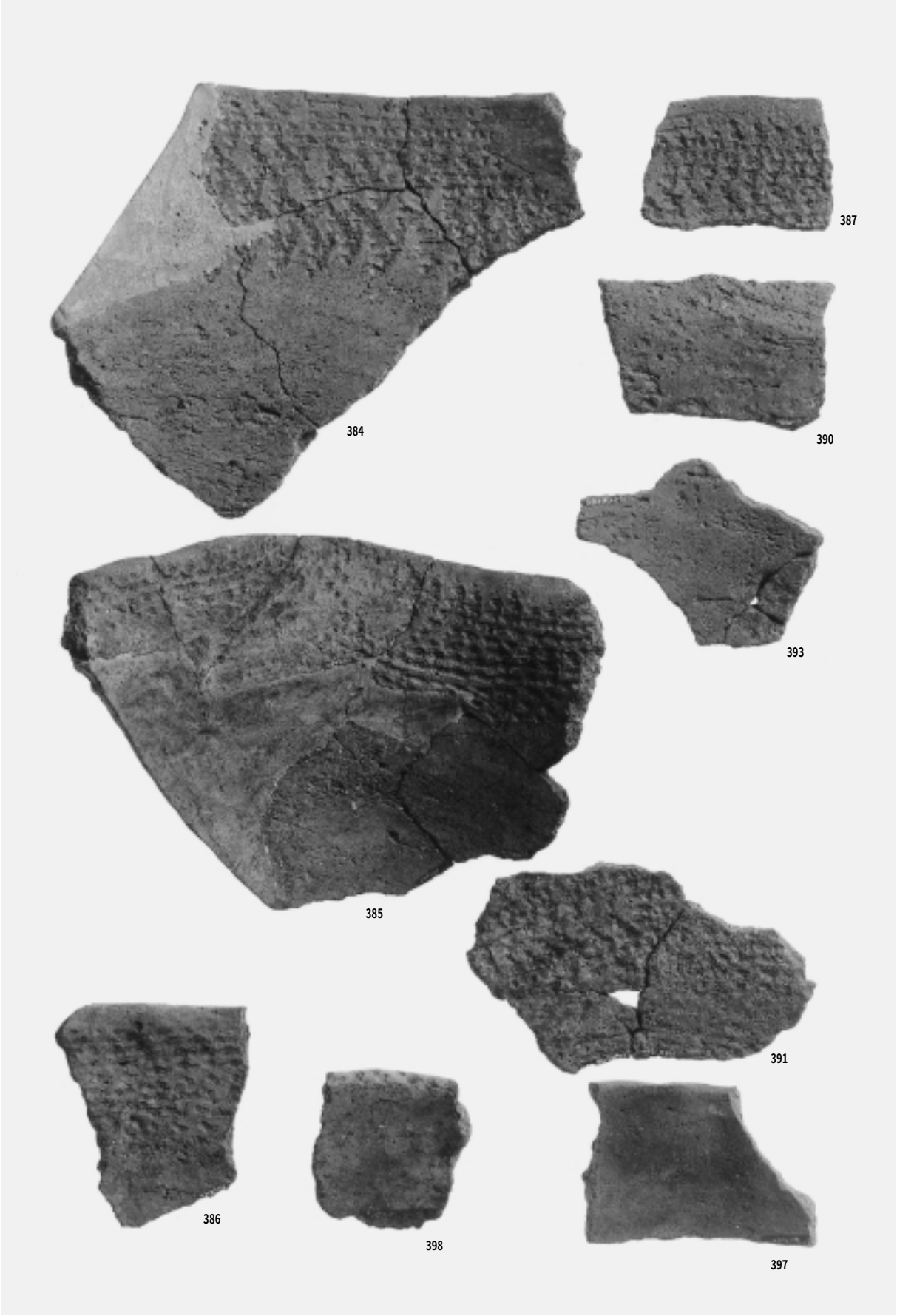


XI 類土器（裏）

図版16

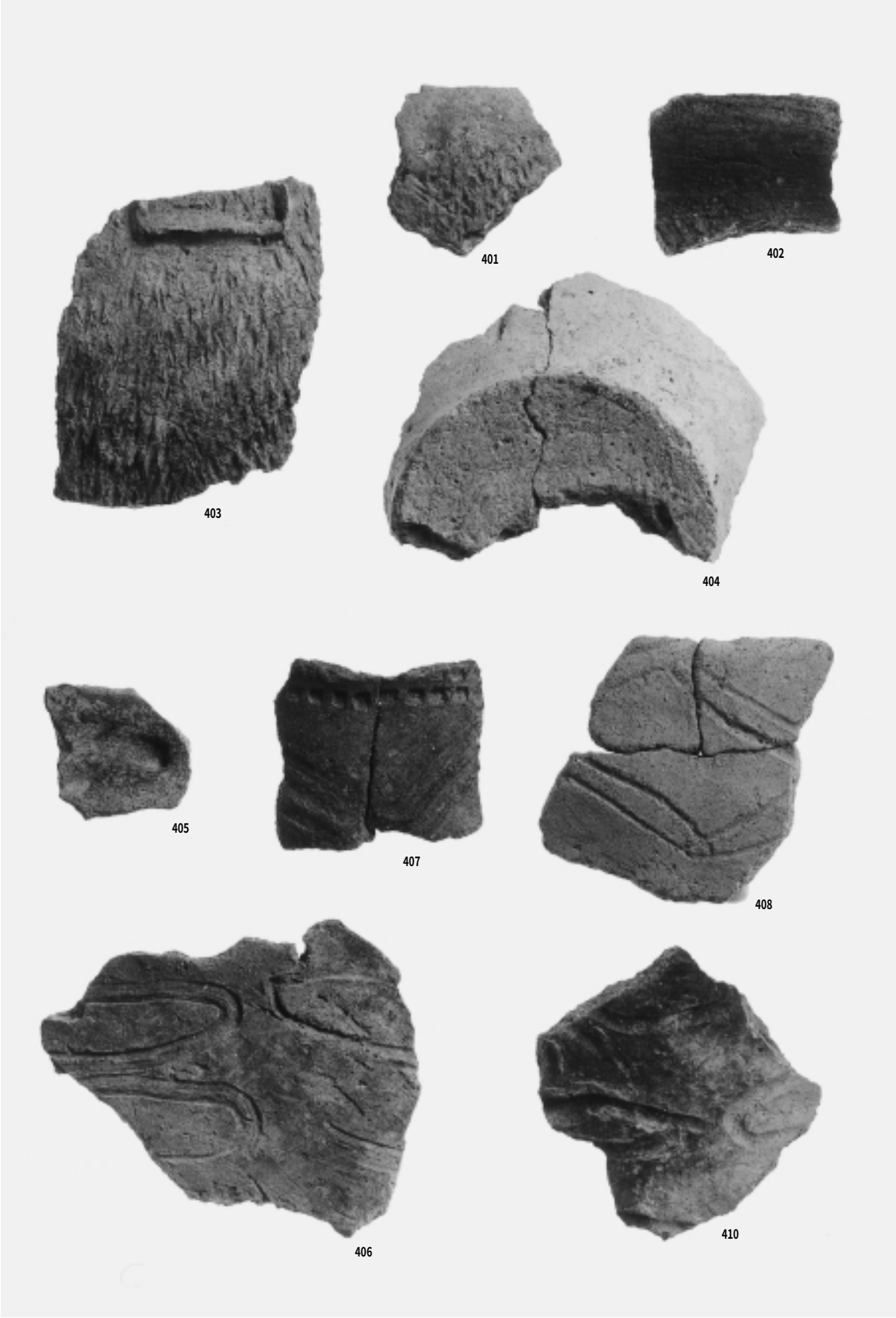


XII類土器（表）

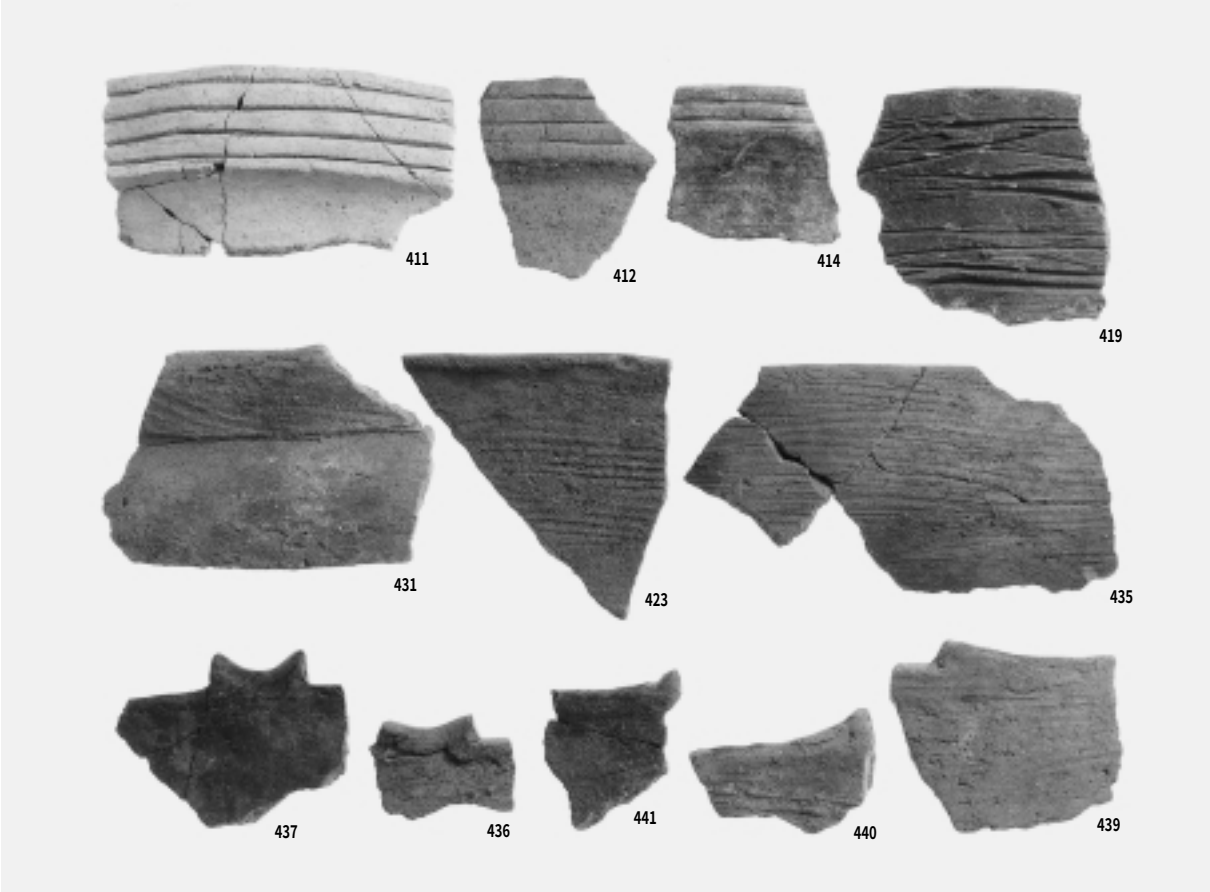


XII類土器（裏）

図版18

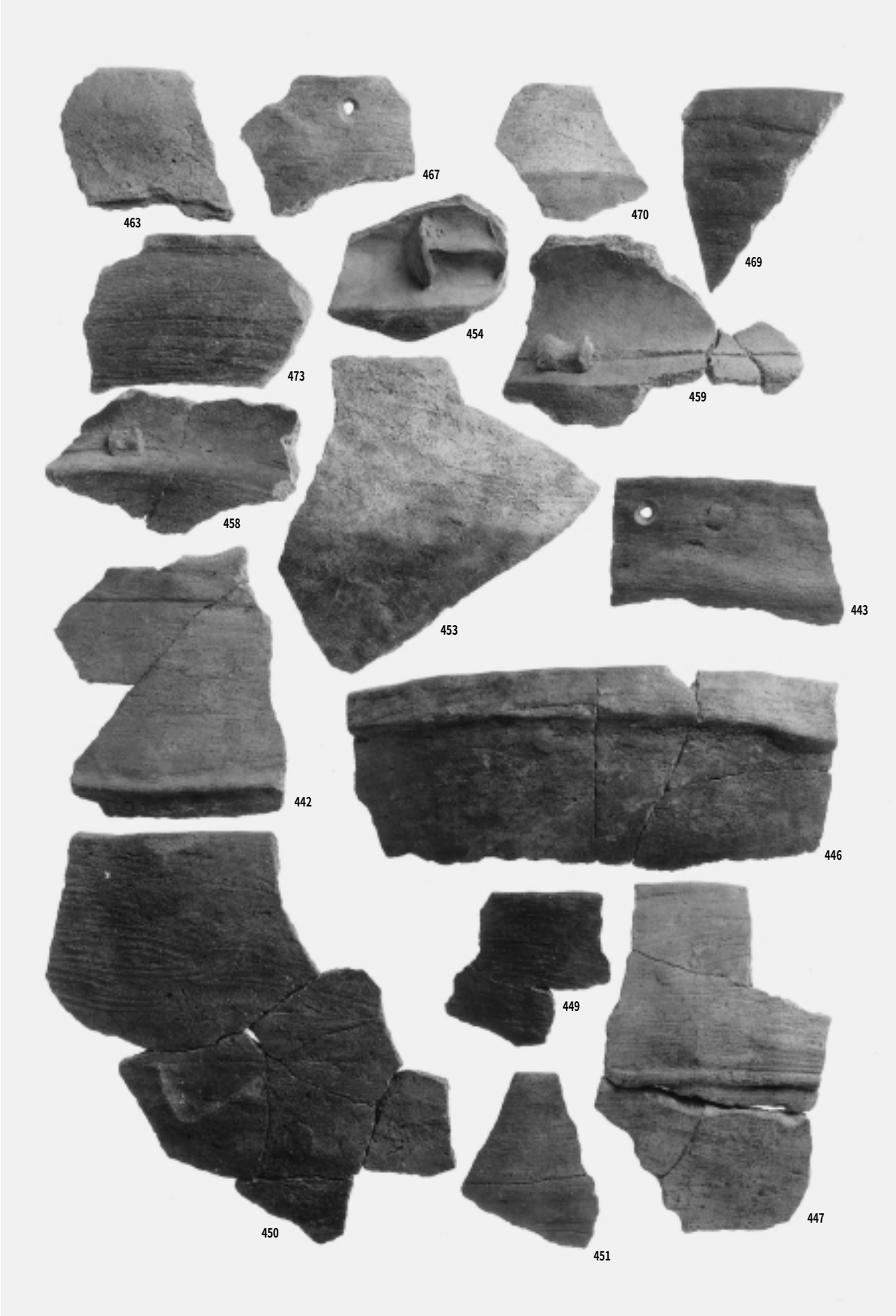


XIII類・XIV類・XV類土器

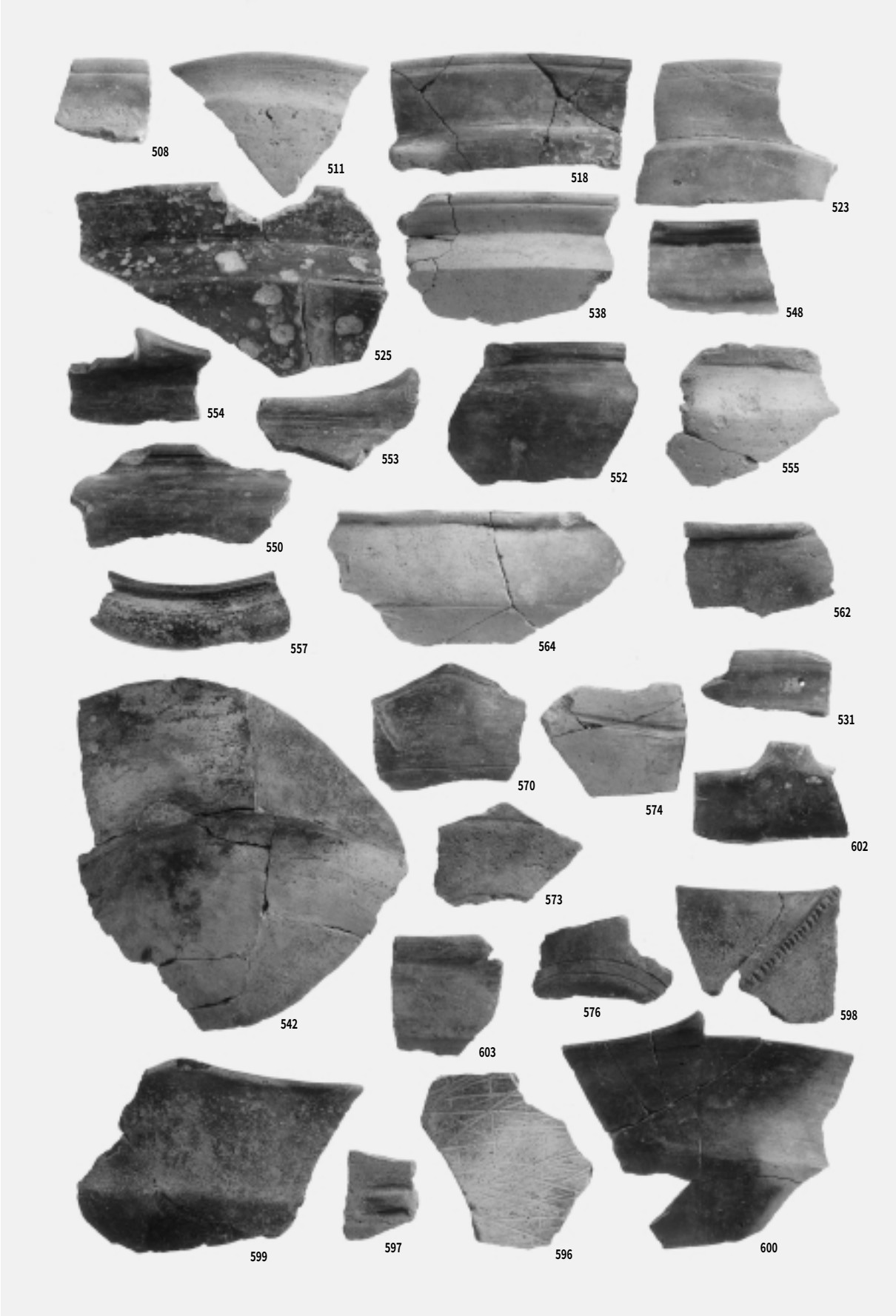


XVI類土器①

図版20

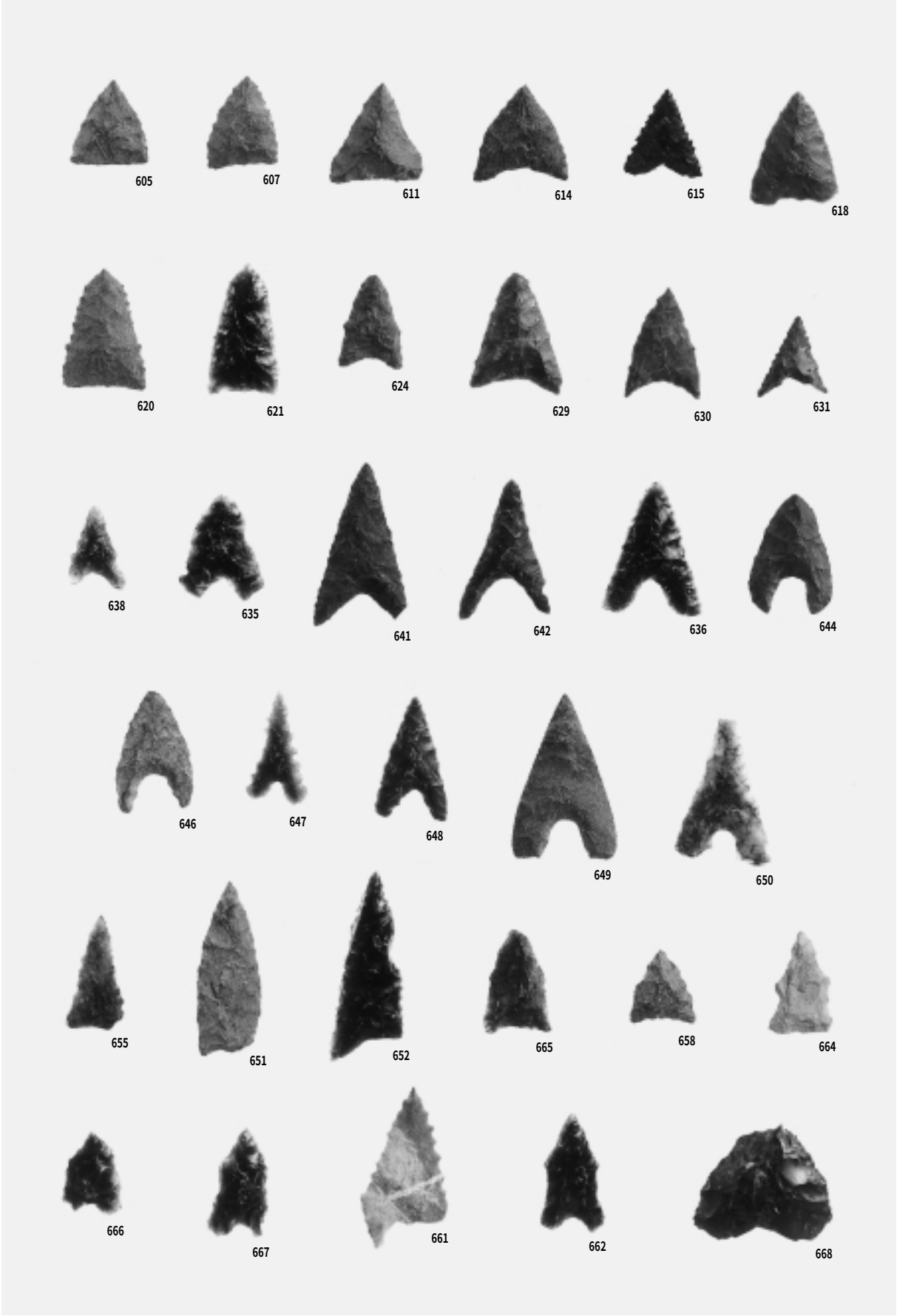


XVI類土器②


508
511
518
523
525
538
548
554
553
552
555
550
564
562
557
531
570
574
602
542
573
576
598
603
599
597
596
600

XVI類土器③

図版22

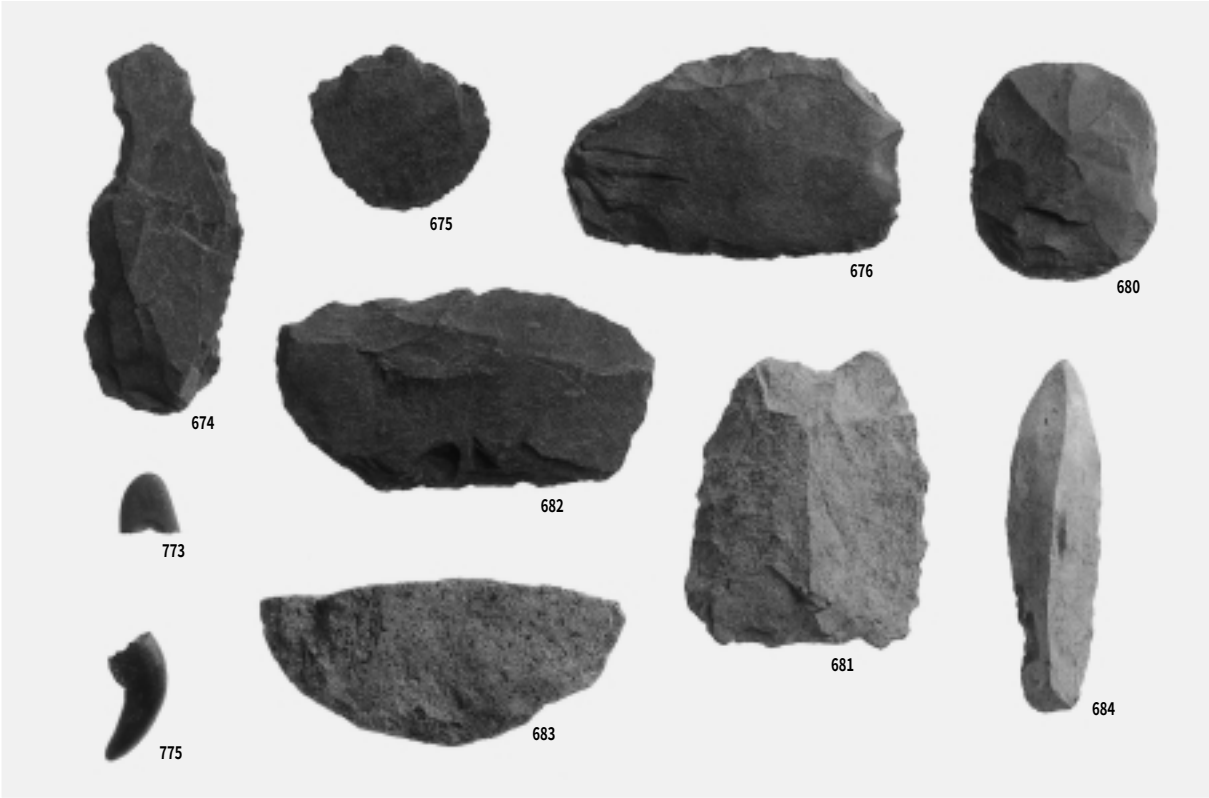


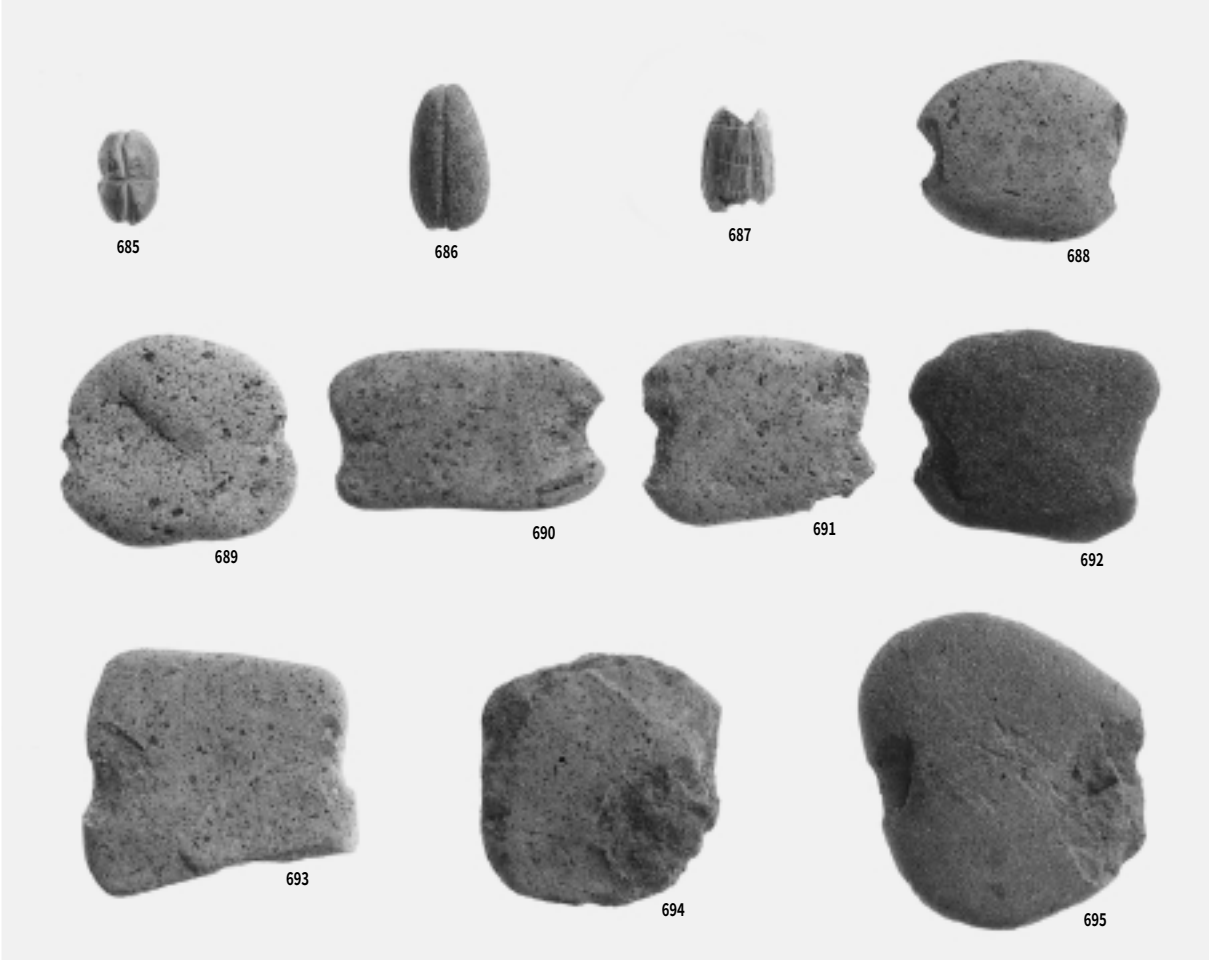
縄文晩期石器①

610
608
609
612
613
617
622
627
637
633
639
640
643
645
656
653
654
657
669
670
671
673
672

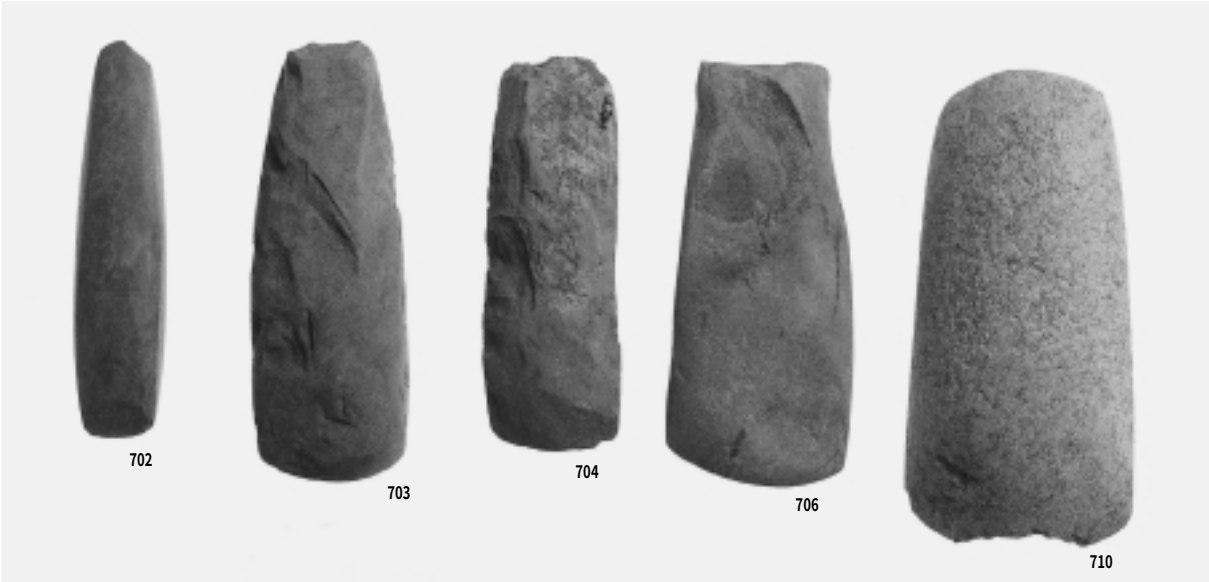
縄文晩期石器②

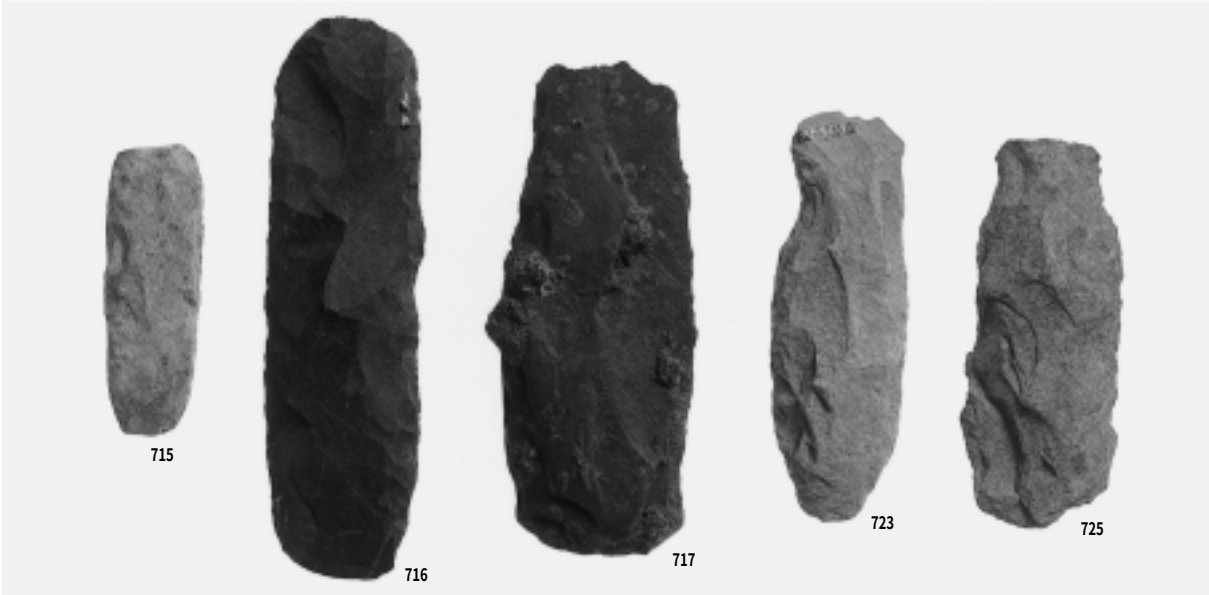
図版24

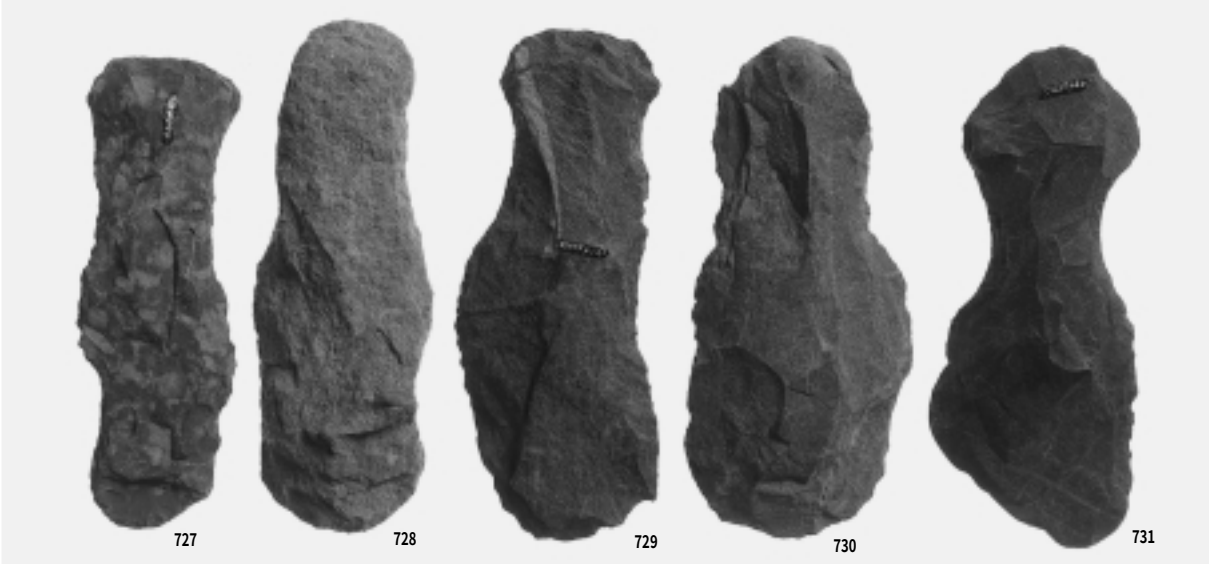




縄文晩期石器③

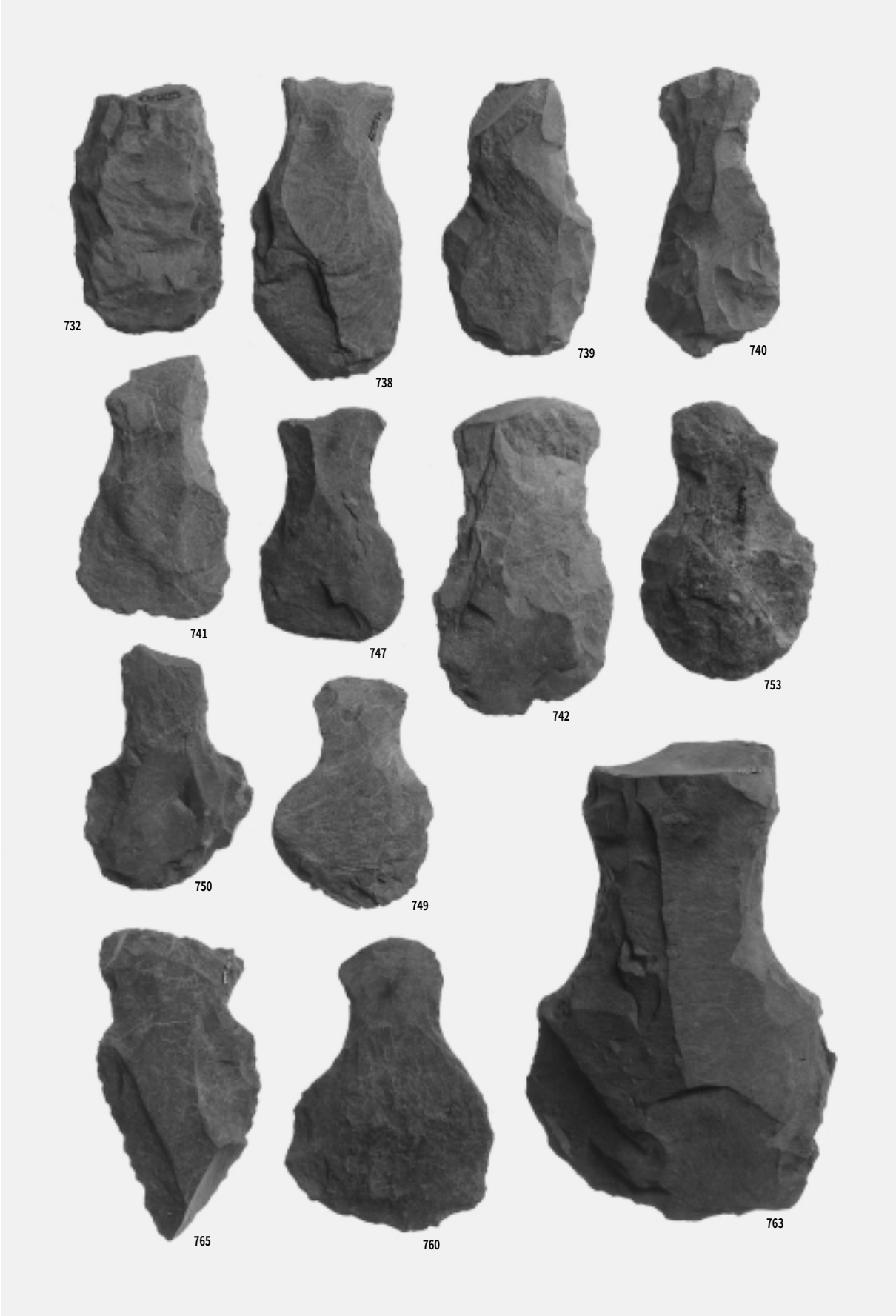




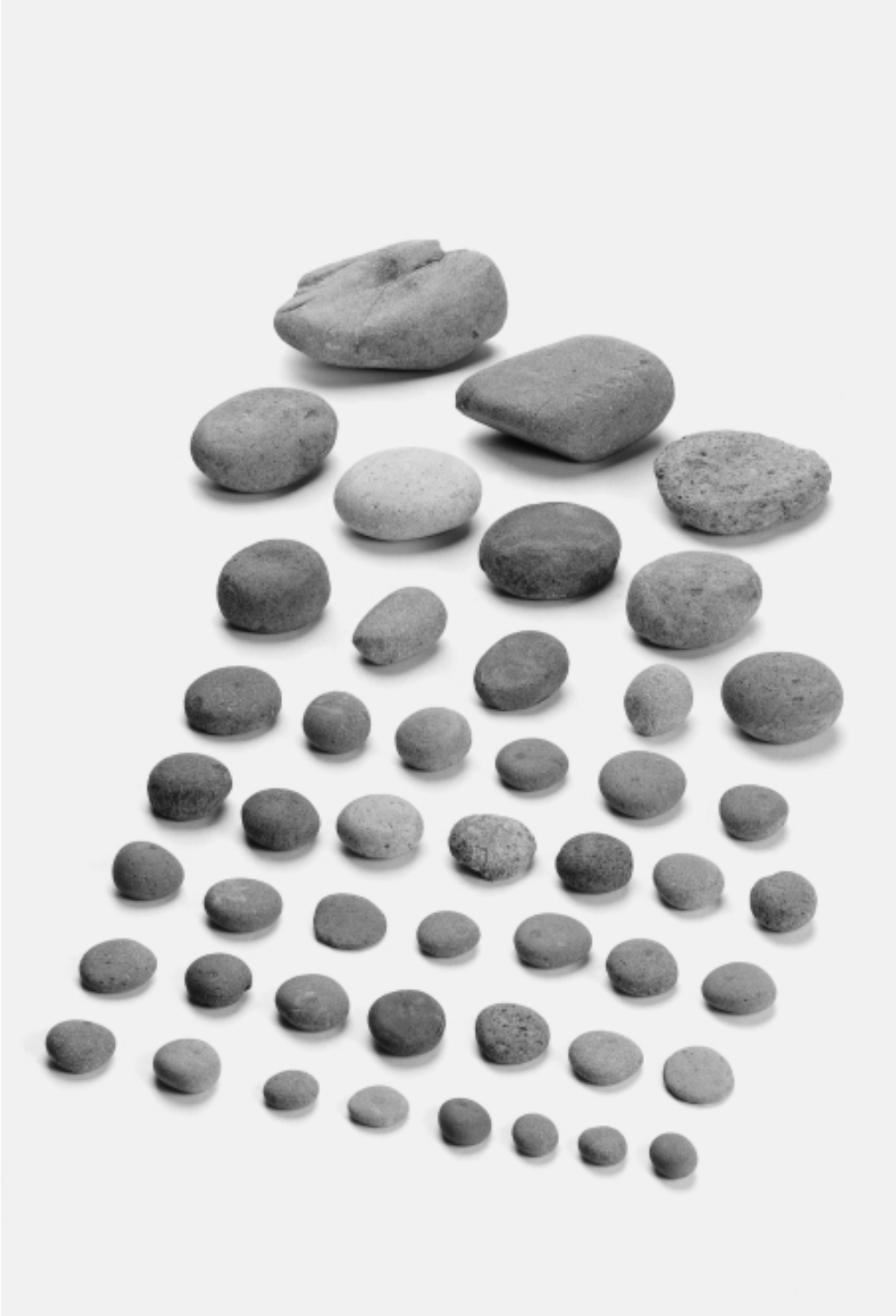


縄文晩期石器④

図版26

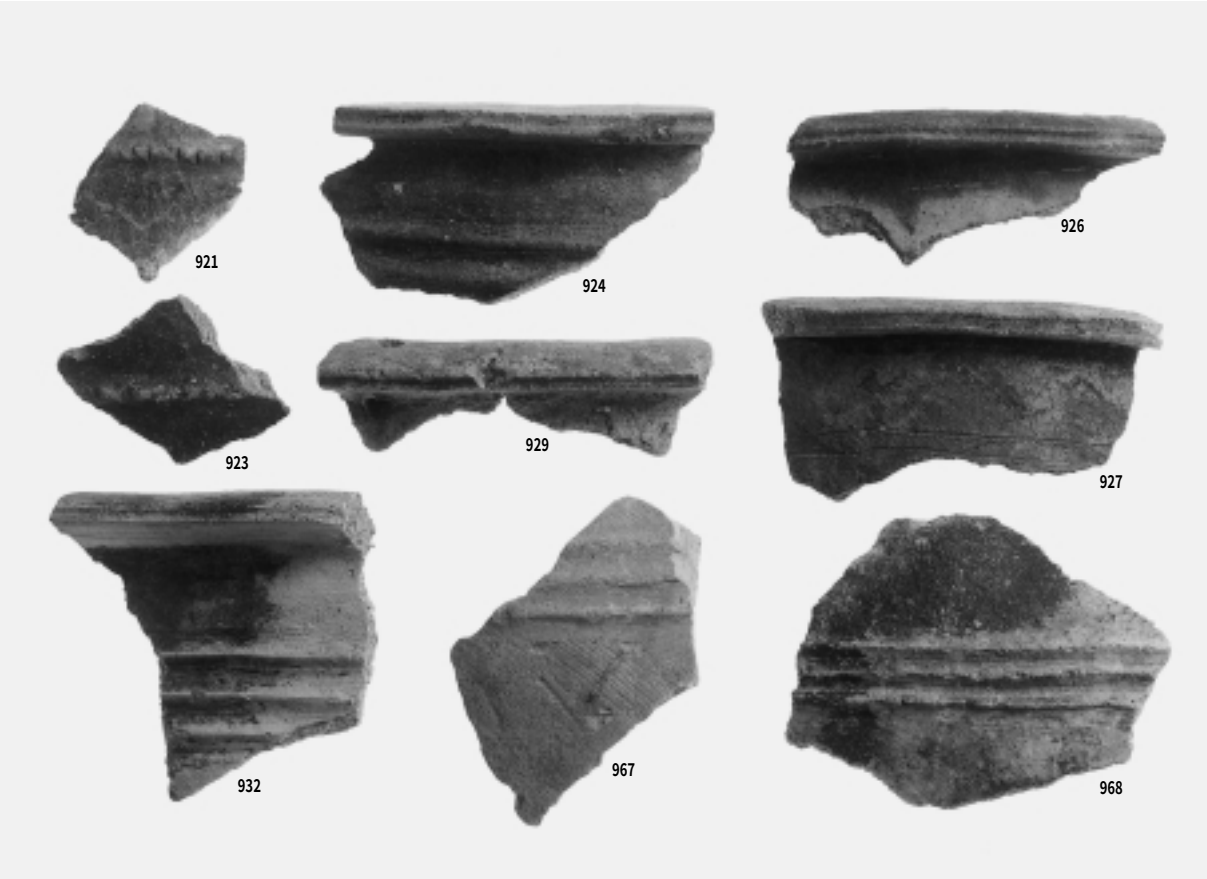


縄文晩期石器⑤



縄文晩期石器⑥

図版28



弥生時代土器①

939

973

971

972

974

弥生時代土器②・石器

図版30

989

990

993

1024

1023

1017

1025

1027

1034

1035

1038

1041

1037

1036

1039

古墳時代住居内出土土器

1045

1054

1044

1057

1062

1063

1064

1065

1068

1066

1067

1071

古墳時代住居内出土土器

1099

1102

1103

1115

1114

1116

1125

1126

1127

1132

1133

1136

1145

1166

古墳時代住居内出土土器

1236

1241

1239

1240

1244

1242

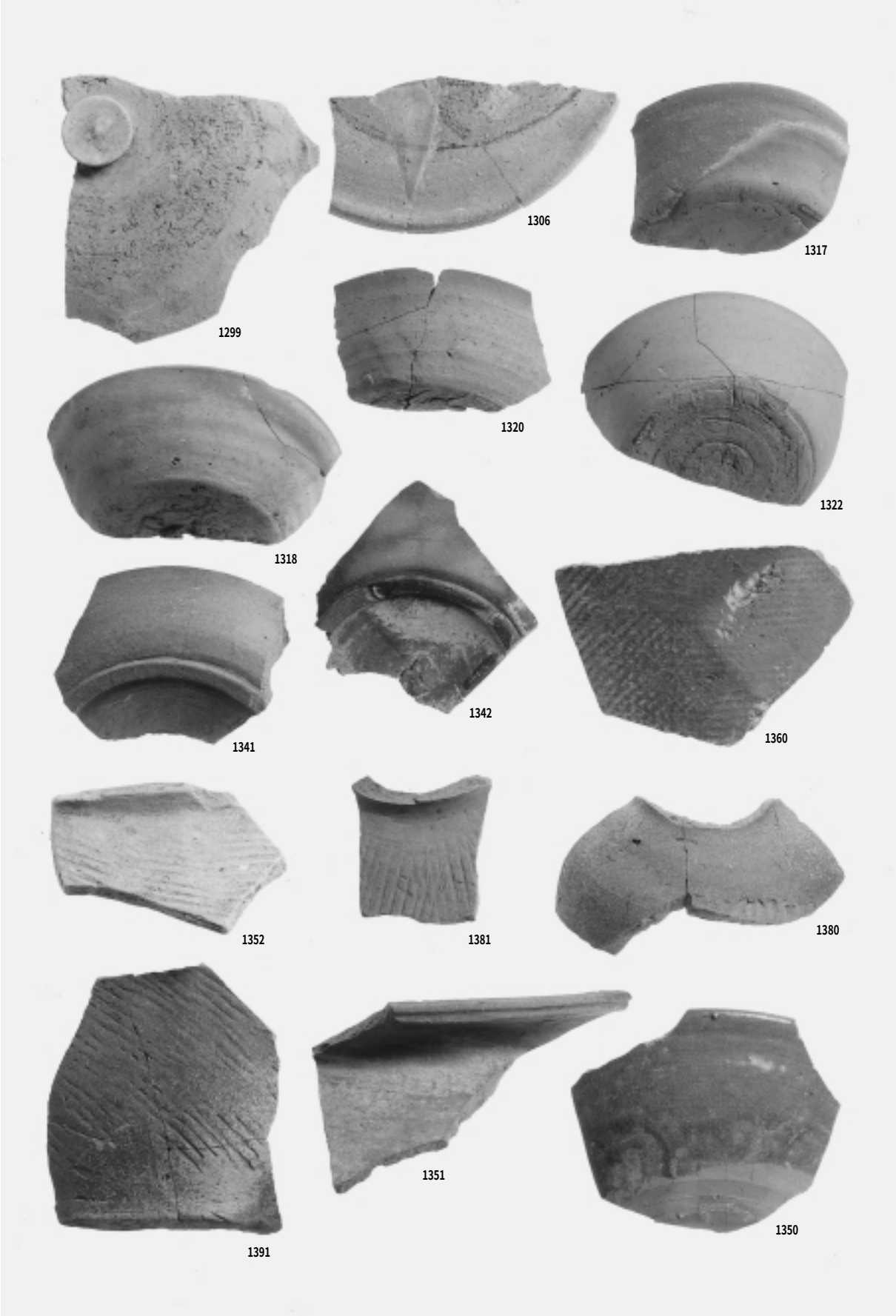
1260

1277

1294
1297
1284
1285

古代土師器

図版34


1299
1306
1317
1320
1322
1318
1341
1342
1360
1352
1381
1380
1391
1351
1350

古代須恵器

あ　と　が　き

農業開発総合センター建設に伴う発掘調査報告書も３冊目となりました。今回は，24遺跡の内，南さつま市金峰町にある遺跡の４遺跡目の刊行となりましたが，小児用合口壺棺の出土など注目すべき報告ができたのではないかと思います。調査の成果を十分に報告できていない部分もあるかとは思いますが，この報告書が郷土の歴史を振り返るきっかけになったり研究の端緒となったりすれば幸いです。

最後に，確認調査，本調査等の発掘調査に携わっていただいた南さつま市金峰町，日置市吹上町の多くの皆様，報告書刊行のために整理作業に携わった皆様，執筆に当たり御指導いただきました方々に，深く感謝し御礼申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）

農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

農業開発総合センター遺跡群Ⅲ

尾ヶ原（おがはら）遺跡

発行日　2006年３月

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033